令和元年度

四天王寺大学ＦＳＤ報告書

編集・発行　ファカルティ・ディベロップメント(ＦＤ)委員会

スタッフ・ディベロップメント委員会

発　行　日　令和２年３月３１日

目　　次

はじめに …… 1

第 1 章

令和元年度 FD 活動及び SD 活動の取り組みと今後の課題 …… 3

第 2 章

新　教育改革プロジェクトにおける取り組み …… 9

第 3 章

令和元年度学生アンケートの実施結果について …… 13

第 4 章

各学科・専攻・コースによる FD 活動の諸相 …… 22

第 5 章

本学における仏教教育について …… 154

第 6 章

学修支援体制について …… 167

第 7 章

SD 活動の取り組み …… 171

規程

・ ファカルティ・ディベロップメント委員会規程 …… 172
・ スタッフ・ディベロップメント委員会規程 …… 173

はじめに

現在では、ファカルティ・ディベロップメント（FD）は、「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催など」とされている。

制度上の位置づけとしては、大学設置基準において、平成 11 年に努力義務化とされ、平成 18 年には大学院で義務化、平成 19 年からは大学と短期大学で義務化となった。

また、平成 29 年 3 月には、学校教育法が改正され「第 37 条⑭　事務職員は、事務をつかさどる。」とされ、「事務に従事する。」から変更された。そして、大学設置基準等でも「第 2 条の 3　大学は、当該大学の教育研究活動等の組織的かつ効果的な運営を図るため、当該大学の教員と事務組織等との適切な役割分担の下で、これらの者の間の連携体制を確保し、これらの者の協働によりその職務が行われるよう留意するものとする。」という内容が新設され、「第 41 条　大学はその事務を遂行する（以前は、処理する）ため、専任の職員を置く適当な事務組織を設けるものとする」に改正され、SD が本格的に導入された。

このような中、平成 29 年 4 月より三つのポリシーの策定と公表が義務化されたことに伴い、本学においても、三つのポリシーを策定するとともに、アセスメントポリシー作成及び、PDCA サイクルによる教育改善に努めている。学生アンケートや教員相互の授業参観の実施は今後、アセスメントポリシーのもとで実施方法を検討しながら進めていくことを想定している。

具体的には、第一に、新任教員への対応・研修のあり方を検討した。令和元年度の看護学部の設置や教職課程の再課程認定に伴い、教育職員が多数採用された。このような中、組織的な教育改善を図るため、新任教員のための研修会の実施や情報交換ができる場の設置等の対応を行い、教育の充実に努めてきた。

第二に、アセスメントポリシーに基づく学生アンケートを実施した。令和元年度以降は、学生が所持するスマートフォンを活用し、IBU.net を通じて全科目の授業評価アンケートを実施することにした。授業評価アンケートの結果をどのように解釈し、教育活動の改善に結びつけるための取り組みのあり方についても、課題として議論を深めているところである。

今後は、FD の取り組みによる成果を、本学の三つのポリシーの達成に結びつけられるように、内容や実施方法を検討することが課題と考えている。

第１章　令和元年度FD活動及びSD活動の取り組みと今後の課題

１.「三つのポリシー」の策定及び改定

学校教育法施行規則の改正がなされ、第百六十五条の二において「大学は、当該大学、学部又は学科若しくは課程（大学院にあつては、当該大学院、研究科又は専攻）ごとに、その教育上の目的を踏まえて、次に掲げる方針（大学院にあつては、第三号に掲げるものに限る。）を定めるものとする。 一　卒業の認定に関する方針　二　教育課程の編成及び実施に関する方針　三　入学者の受入れに関する方針　２　前項第二号に掲げる方針を定めるに当たつては、同項第一号に掲げる方針との一貫性の確保に特に意を用いなければならない。」とされ、平成29年4月1日以降に施行されることとなった。本法の施行に先立ち、平成28年3月31日に中央教育審議会　大学分科会　大学教育部会より「『卒業認定・学位授与の方針』(ディプロマ・ポリシー),『教育課程編成・実施の方針』(カリキュラム・ポリシー）及び『入学者受入れの方針』(アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン」が示された。これは、いわゆる「三つのポリシー」と呼ばれるものである。

本ガイドラインでは、「三つのポリシー」について「その内容については、抽象的で形式的な記述にとどまるもの、相互の関連性が意識されていないものが多い」という指摘がなされている。そして、高大接続、学修成果の可視化、PDCAサイクルによるカリキュラム・マネジメントの確立等にも大きく関与するものである。

以上のような状況の中、本学では、平成29年度に大学全体のディプロマ・ポリシーを策定し、FSD研修会で報告した。平成30年度は、三つのポリシーを策定し、その内容は本学のホームページや履修要覧等に掲載している。加えて、アセスメント・ポリシーの策定を大学全体と学科別に行い、アセスメントすべき内容について学科・専攻・コースごとに検討を行った。

２．令和元年度の取り組み

（1）学修成果の可視化

いわゆる「三つのポリシー」の作成・改善や学士課程プログラムの改訂には、学修成果の評価をもとに進めていく必要がある。そのためには、学修成果の可視化が不可欠である。本学では、これまでにオリエンテーション時の新入生にCASECによる英語テストを実施してきた。英語のテストは2セメスター終了時にも実施しており、入学時からの学修成果の変化について資料を収集している。特に、国際キャリア学科と教育学科中学校英語・小学校コースの学生については、学修成果の経年変化の可視化をねらい、1年生から4年生時までCASECによる英語テストを実施している。

また、令和元年度は、平成29年度に続いて4月に新入生を対象にPROGテストを実施した。このテストにより、ジェネリックスキル（社会人基礎力）を測定して数値化することで、単位認定による成績以外の成果を可視化することができる。さらに、PROGテストの結果をもとにして、１年生の担任教員が個別面談を実施した。なお、短期大学部は2年生時に再度PROGテストを実施し、実施結果を教員間で検討した。今後、大学の3年生時にも実施予定であり、学修成果のエビデンスの一つとして、また学生指導に活用する資料として、さらに活用していきたい。

今後は、アセスメント・ポリシーを明確にし、全学的な学修成果の可視化を進めると共に、PDCAサイクルによる検証作業を組織的に実施し、教学面の改善を進めていくことを目ざしている。

（2）教育評価方法の見直し

平成28年度からルーブリックを使った学修評価の導入に取り組み、全学で取り組んだ。本年度も継続してルーブリックの活用をさらに進めている。9月7日に実施されたFSD全

体研修会においてもシラバスの記載内容について検討するとともに、その中で、ルーブリックを用いることでレポートや実演等のパフォーマンス課題の明確な評価が可能であることを教員間で確認した。

（3）シラバス作成に関する改善

「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」では、学士課程教育の質保証と関連し、学修時間の確保が重視されている。「授業計画（シラバス）を作成している大学は平成 21 年度で 96.4%まで進んでいるが、そのうち『具体的な準備学修内容を示している』大学は 35.8%、『具体的な標準学修時間の目安を示している』大学は 6.8%にとどまっている」ことが指摘されている。

本学では、学生アンケートに授業外学習を行った時間に関する項目を加えると共に、シラバスに具体的な授業外学修の学修内容を明記するように求めてきた。平成 29 年度以降はこれに加えて、学生への学修成果へのフィードバックの有無と内容を記述するように求めた。同じく、学士課程教育の質保障のために、到達目標を測定可能な行動レベルで記述するように求めた。

そして、平成 28 年度以降は、アクティブ・ラーニングを導入しているかどうか、ICT を活用しているかどうか、授業を英語で実施しているかどうかの 3 点を記入する欄を設けた。

令和元年度には新任教員が大幅に増えることから、平成 31 年 3 月 27 日に実施された FSD 全体研修会においては、全教員を対象にシラバスの記載内容や活用意義等について研修を行った。また、令和元年 9 月 5 日に実施された FSD 全体研修会において、全教員を対象にシラバスを踏まえた上で、アセスメント・ポリシーをふまえた成績評価について研修を行った。

（4）学生へのアンケートの活用と検証作業

学生への授業評価に関するアンケートの結果は、第3章で詳しく分析されている。平成30年度までの学生アンケートの結果は、各教員の授業改善の意識を高めるために、夏学期と冬学期の2回、担当する科目の中から1科目だけ選択し実施してきた。なお専任教員については、各楽器で第1期と第2期の2回に分けて実施、非常勤講師については第2期の1 回のみ実施してきた。また教員個人が授業改革に取り組んだ結果として、リフレクション・ペーパーの提出を求めてきた。

本年度からは、名称を「学生アンケート」から「授業評価アンケート」に改め、学生が所持するスマートフォンを活用し、IBU.net を通じて、全科目について授業評価アンケートを実施した。インターネットを介した全科目を対象とするアンケートの結果は、全学的な傾向の把握は容易になる一方、各科目における授業改善については、具体的で効果的な手続きや方法のあり方を検討する必要がある。これらの授業評価アンケートに関わる成果と課題については、ＦＤ委員会において共有しており、次年度以降、継続的に検討したいと考えている。

（5）FSD 全体研修会

令和元年9月3日（火）13時から16時までにFSD合同研修会を実施した。前半は「本学の方針と課題」、後半は「事務局からお知らせ」で構成されている。午前は、宮﨑常務理事、岩尾学長、井川副学長より、私立大学の置かれている現状、情勢を踏まえた本学の方針と課題、ICT活用をめぐる教育改革等について講話が行われた。

午後は、事務局の各部局より、私立大学等改革総合支援事業、アセスメント・ポリシーをふまえた成績評価、高等教育の無償化、情報基盤の整備状況、キャリアセンターの昨年度実績などについて、報告があった。

以下にプログラムを摘記する。

１．宮﨑光映　常務理事	講話「学校法人をめぐる現状と課題について」
２．岩尾　洋　学長	講話「本学の立ち位置と今後について」
３．井川好二　副学長	報告「ＩＣＴの活用について」
４．経理課：橋本課長	
発表「私立大学等改革総合支援事業について」	
５．教務部：八木教務部長	
発表「アセスメント・ポリシーをふまえた成績評価について」	
６．学生支援センター：宮内課長	
発表「高等教育の無償化について」	
７．ＩＲ・戦略統合センター：一居センター長	
発表「情報基盤の整備状況について」	
８．キャリアセンター：岡崎センター長	
発表「キャリアセンターからの報告とお願い」	

令和２年 3 月 27 日（金）には、全学の教職員が参加する FSD 全体研修会を開催する予定であったが、新型コロナウィルス感染拡大の危険性を考慮し、資料のみを全教員で共有することにした。前半は「学部より方針と課題」、後半は「事務局からお知らせ」で構成されている。前半は、教育学部から配属実習・継続実習の実施について、短期大学部から学生獲得等に向けた課題についての報告がった。後半は、事務局からの報告で、2020 年度入試の結果と今後の取り組み、令和 2 年度の授業の運営、令和元年度授業評価アンケート結果報告、和の精神Ⅰ・Ⅱの運営、学生支援方針、性の多様性への対応、インターンシップに関する報告と今後の就職活動の見通し、消防計画、電話の取次ぎの手続き等について、説明があった。

以下にプログラムを摘記する。

１．学部の方針と課題

教育学部　「教育学部の配属実習・継続実習について」

短期大学部　「短期大学の生き残りをかけて」

２．事務局（部・センター）からお知らせ

入試・広報部　「2020 年度入試の結果」「今後の取り組みについて」

教務部　「令和２年度 授業の運営について」

「令和元年度授業評価アンケート結果報告」「和の精神Ⅰ・Ⅱについて」

学生支援センター　「これからの学生支援について、性の多様性について」

「担任教員の役割について」

キャリアセンター　「インターンシップに関する報告と今後の就職活動の見通し」

総務部　「消防計画」

庶務部　「電話の取次ぎについて」「臨時託児所開設について」

「駐車許可証の更新について」「名刺のローマ字表記について」

［引用文献］

中央教育審議会　2012　「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm)

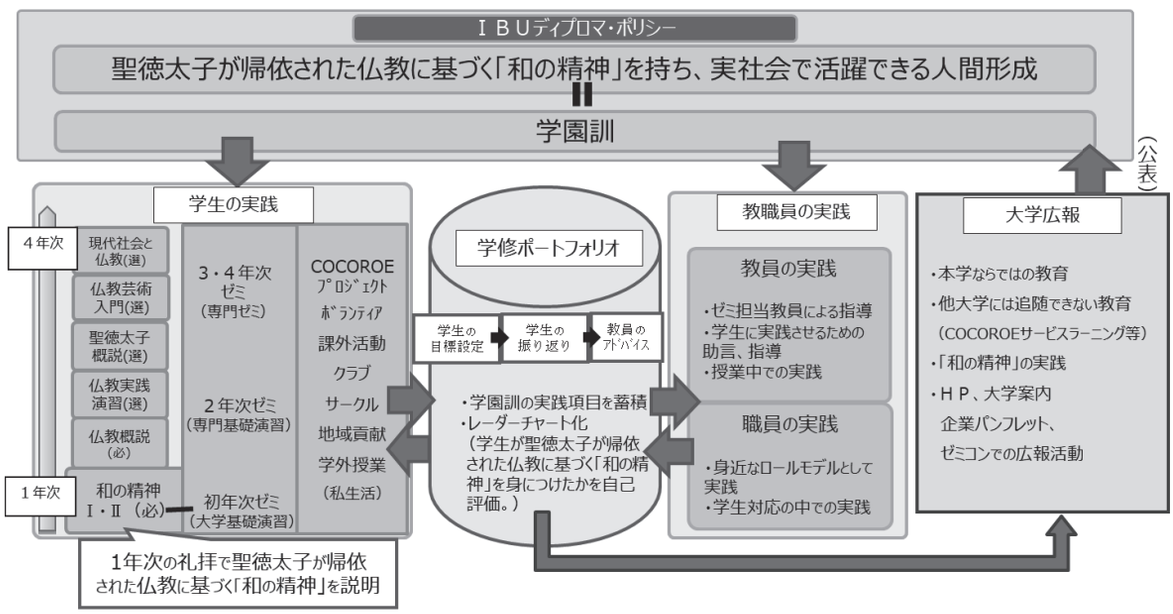
中央教育審議会　2016　「『卒業認定・学位授与の方針』(ディプロマ・ポリシー),『教育課程編成・実施の方針』（カリキュラム・ポリシー）及び『入学者受入れの方針』（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン」

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/__icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369248_01_1.pdf)

第２章　新　教育改革プロジェクトにおける取り組み

和の精神（学園訓の実践）について

＜概念図＞



大学全体ならびに短期大学部全体のディプロマ・ポリシーに基づき、本学の学生が在学中に、『聖徳太子が帰依された仏教に基づく「和の精神」を持ち、実社会で活躍できる人間形成』を図るため、「和の精神（学園訓の実践）」プロジェクトを令和元年度より導入した。

令和元年度においては、推進組織の設置、関連科目の見直し、学修ポートフォリオシステムの構築・活用、範例となるエピソード集の発行による学内周知を実施し、大学全体として「和の精神（学園訓の実践）」の教育システムを構築した。

１．推進組織の設置

「和の精神（学園訓の実践）」による仏教教育の導入・推進のための組織として、令和元年度より和の精神（学園訓の実践）プロジェクト委員会を設置した。委員には、仏教文化研究所を中心として、学長補佐、各学部長、IR・戦略統合センター、教務部、入試・広報部に所属の教員および事務職員が選出され、大学全体として「和の精神」の理解と実践の浸透に取り組むために必要な人員をもって構成している。

令和元年度においては、「和の精神（学園訓の実践）」の導入・推進のため、各学部教授会と連携し、学修ポートフォリオシステムの構築・活用方法の検討、エピソード集の発行・活用方法の検討を行い、「和の精神（学園訓の実践）」の教育方法の開発ならびに本学の学

生が「和の精神（学園訓の実践）」に取り組むことができる環境の開発・整備を行った。

２．基礎教育科目　「仏教Ⅰ・Ⅱ」の見直し

学生が入学初年次から意識して「和の精神」を身につけることができるように、本学仏教教育の柱となる基礎教育科目であった「仏教Ⅰ（瞑想）・Ⅱ（写経）」の授業内容及び科目名称の見直しを図った。

科目名称は、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」と改め、授業内容は、従来行っていた「献灯」「読経」「瞑想」「写経」「聖歌斉唱」を継続しつつ、新たに本学の「建学の精神」や「学園訓」、四天王寺や学園の歴史等についての講話を行うことで、学生がより「和の精神」を学修することができるカリキュラムへと改めた。

３．学修ポートフォリオを活用した教育

学生が、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」で学んだことを基に、和の精神（学園訓の実践）ポートフォリオシステムを活用し、「和の精神」を身につけるために、大学生活や私生活の中での自らの行動を学園訓に結び付け、省察を行うこととなっている。

学生は学修ポートフォリオを活用し、学園訓の実践に関する１年間目標設定、自身の実践を記録・蓄積、省察を行うことができる。また、必要に応じて教員の指導を受けることもできる。

学生の学修プロセスは、以下のとおりである。

①「和の精神Ⅰ」の授業において、学園訓の実践の意義および和の精神（学園訓の実践）ポートフォリオの活用方法について学ぶ。

②学生は学修ポートフォリオ上で１年間の目標を設定し、各目標が学園訓の各項目のうち当てはまるものを選択する。

③学生自身の普段の生活の中で学園訓にあてはまる行動や自身が観察した他者の学園訓にあてはまる行動と、その行動からの気づきや学びを学修ポートフォリオに記録する。

④１年間の実践について学修ポートフォリオ上で自己評価を行う。評価基準は、学園訓の実践の意義を理解できたかと実践できたかを問う３段階としている。

＜評価基準＞

３：実践することの意義を理解し、実践ができた。

２：実践することの意義は理解しているが、実践できなかった。

１：実践することの意義がわからず、全く実践できなかった。

学修ポートフォリオの活用状況は、和の精神（学園訓の実践）プロジェクト委員会が全体の活用状況を掌握し、学部長を通じて各学部・学科の担任教員へ情報共有され、学生個人に指導が行き届くよう指導体制を確立している。担任教員は共有された情報をもってアセスメント・ポリシーで定める面談等において指導を行っている。

担任教員を中心とした指導体制により、導入初年次の令和元年度入学生を対象とした和の精神（学園訓の実践）ポートフォリオの活用状況は以下のとおりとなった。

	今年度の目標	実践エピソード
大学	96%	95%
短期大学部	100%	99%

（対象：令和元年度入学生）

４．範例としてのエピソード集の発行

「和の精神（学園訓の実践）」の取り組みについて、本学の学生、教職員およびステークホルダーが実例によりわかりやすく理解できるように、２年次生から４年次生の実践エピソードを集めたエピソード集「こころに、学びを。STORIES 2019」を８月に発行した。

エピソード収集から掲載エピソードの決定までのプロセスについては、各学部・学科の協力のもと、和の精神（学園訓の実践）プロジェクト委員会が担った。

当該エピソード集は、１年次生が実際の実践例として自身の実践における参考できるようデータで配布し、「和の精神Ⅱ」においても説明を行った。また、オープンキャンパスにおいても来場した高校生にも配布し、本学の建学の精神である聖徳太子の仏教精神に基づく教育についての広報にも活用した。

５．課題と今後

「和の精神（学園訓の実践）」は、今後学年進行に伴い、対象学年が拡大していく。１年次生は「和の精神Ⅰ・Ⅱ」において一斉に指導することが可能であるが、２年次以降は一斉指導できる科目がないため、担任教員による指導が中心となる。

そのため、和の精神（学園訓の実践）プロジェクト委員会と本学の仏教教育推進の中心である宗教委員会が連携し担任教員の支援を行う方法を模索しており、「和の精神（学園訓の実践）」の指導体制をより強固なものとすることを目指している。

エピソード集は、今後も学修ポートフォリオに蓄積されたエピソードを基にエピソード集を定期的に発行し、学内外への配布や本学ホームページでの公開等により、「和の精神」の実践に取り組む環境を更に醸成していくとともに、当該取り組みの学外への広報に

努めていくこととしている。

第３章　令和元年度授業評価アンケートの実施結果について

１．授業評価アンケートの実施方針

中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（答申）（2008（平成 20）年 12 月 24 日）において「学生による授業評価の結果は、業績評価の指標としての信頼性に課題もあるが、教員の自己評価や職能開発の活動に生かすことは重要であると考える」(p.40)と指摘され、授業評価の教育面への活用が求められている。

本学においても 2006（平成 18）年度に学生アンケート委員会を設置し、学生アンケートの計画・実施を行った。その後 2008（平成 20）年度に学生アンケート委員会から FD 委員会に発展的改組を行った。これまでに試行錯誤しながら学生アンケートを実施してきた。

このような試みの中、全学的な授業改善に向けた教育評価を実施する上での枠組みとして、2010（平成 22）年度には、授業を実施する前の診断的評価、途中の形成的評価、最後の総括的評価という評価の活用方法について検討してきた。すなわち、診断的評価として、プレースメント・テストや第 1 期学生アンケート（2 回目の授業時）の実施、シラバスの内容の充実、そのシラバスの内容を受講生に理解させるための試み等を実施した。

また、形成的評価として 7、8 回目の授業時における第 2 期学生アンケートの実施、学習成果に関する中間テストの結果や学習者による自己評価の結果の活用、教員相互の授業参観による同僚評価等を行ってきた。

最後に、総括的評価として、授業に関する情報収集や授業に対する学生の評価や意識の測定のための第 3 期学生アンケート（14，15 回目の授業時）の実施、定期試験やレポート等による学習面の成果の把握を行ってきた。2010（平成 22）年度だけではあるが、3 回の学生アンケートを実施することにより、教員に対する授業概要（シラバス）の重要性と学生への理解促進に向けた取り組みの意識付けを行った。

以上のような考えに基づき、本学では授業改善に向けた様々な対応を取ってきた。特に、診断的評価においては、その後は、1 年生入学時のプレースメント・テストの実施、シラバス内容の充実化、各授業のオリエンテーション時に授業担当者が授業概要（シラバス）の内容を受講生に周知徹底することを進めてきた。特に、平成 29 年度は、学生の学修成果の可視化の一環として、PROG テストをすべての１年生に実施した。そして、これまでと同様に、形成的評価と総括的評価については、本章で述べる学生アンケートを学期中に２度実施してきた。

２回の学生アンケートの利用方法として、本学では、これまでに PDCA サイクルによる改善を目ざしてきた。すなわち、授業を計画［P（Plan)］し、実施［D（Do)］し、確認［C（Check)］し、改善［A（Act)］するという PDCA サイクルによる授業改善を進めてきたのである。大学の授業の場合、シラバスが授業の計画（P）になり、授業を実施（D）し、途中で教員と学生の間で教員は学生から見て授業が適切にわかりやすく実施されているか、学生は授業に積極的に参加しているかを相互に確認（C）しあうことになる。ここで確認した結果をもとに教員と学生の双方で改善（A）し、学生の学習内容の理解がさらに進み、単位の修得へとつながることを目ざしてきた。

また、中央教育審議会 2012（平成 24）年 8 月 28 日「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」では、

学生の学修時間の実質的な増加・確保が、教育課程の体系化、組織的な教育の実施、授業計画（シラバス）の充実、全学的な教学マネジメントの確立の諸方策と連なって進められる必要があることが指摘されている。学生アンケートは、教育職員が学生からの意見を聴取し、学生の学習時間の実質的な増加に向けて、資料を収集する手段になりうるものである。そこで、特に 2012（平成 24）年度からは、授業時間以外の学習時間を測定する項目を新たに加え､本年度も次節に示した学生アンケートの実施目的を遂行すべく改善に努めた。

令和元年度については、授業評価アンケートと名称を改め、平成 30 年度までの学生アンケートの質問項目について、学生が所有するスマートフォンを活用し、IBU.net を通じた全科目の授業アンケートを実施した。全学的な授業改善に向けた取り組みによって明らかになった傾向と課題について報告する。

２．授業評価アンケート実施目的

以上の経緯から、授業評価アンケートを実施することにより、以下の四点の達成を目ざしている。

第一に、授業評価アンケートの活用により授業の改善が進み、シラバスに明示された到達目標に向かって学生の学修が促進され、授業外学習時間の増加も進み、単位の修得につながる。その結果、セメスターごとに決められている履修上限（キャップ制）の制度が機能し、セメスターごとの学生の達成感や知識・技能を身につけることができたという有能感も高まることが期待される。

第二に、全体的に学生の単位修得が進むことで大学全体の GPA は上昇し、大学全体の教育力を示す指標として GPA 制度が機能していくと考えられる。

現在、本学で導入されているセメスター制、キャップ制、GPA 制度は、それぞれ別個の制度ではなく、教員による教育の改善と学生の学習の成果の向上とに関連してそれぞれの制度が関係しながら、機能していくものと考えられる。

以上のことを踏まえ、以下のような目的を設定し、授業評価アンケートを授業改善に活用していくこととした。

第一に、学生の意見に耳を傾けることにより、学生にとって理解しやすい授業の実施に向けた工夫を進める。

第二に、学生の授業に対する態度や学生自身の学びに対する自己認識を深める。

第三に、授業において学生に求められている態度を明確にし、意識させる。

以上のような実施目的を明確にした上で、授業改善を目ざした授業評価アンケートを実施した。そして、この結果により、学生の学習意欲が高まり、学生の学びが深まることを目ざした。

３．授業評価アンケートの実施方法

令和元年度は、専任教員・非常勤講師を問わず、学期の第 14 回または 15 回の講義時に、IBU.net を通じて授業評価アンケートを実施した。各教員は、授業評価アンケートの趣旨等の説明文を共有し、講義内でそれを口頭説明して、学生にアンケートの回答を求めた。またアンケート回答の総計は、IBU.net で集計され、その結果について各科目単位で教員が改善コメントを入力した。授業評価アンケートの設問項目は表 1 の通りである。

表 1. 授業評価アンケートの設問項目

設問内容	回答内容（評価値）				
1 授業時間外に1週間にこの授業の予習や復習を学内・学外を含めてどの程度しましたか。	5：3時間（以上）	4：2時間	3：1時間	2：30分	1：5分（以下）
2 授業の開始時刻は守られていますか。	5：そう思う	4：少しそう思う	3：どちらともいえない	2：あまりそう思わない	1：そう思わない
3 総合的に判断して、この授業を受講して良かったと思いましたか。	5：そう思う	4：少しそう思う	3：どちらともいえない	2：あまりそう思わない	1：そう思わない
4 この授業を意欲的に受けてきたと思いますか。	5：そう思う	4：少しそう思う	3：どちらともいえない	2：あまりそう思わない	1：そう思わない
5 この授業の授業概要（シラバス）をよく読んだ上で受講しましたか。	5：そう思う	4：少しそう思う	3：どちらともいえない	2：あまりそう思わない	1：そう思わない
6 シラバスの到達目標達成のために努力してきたと思いますか。	5：そう思う	4：少しそう思う	3：どちらともいえない	2：あまりそう思わない	1：そう思わない
7 この授業の履修要覧（科目表に示されている「見につけるべき能力」）をよく読んだ上で受講しましたか。	5：そう思う	4：少しそう思う	3：どちらともいえない	2：あまりそう思わない	1：そう思わない
8 先生は学生に、丁寧に対応してくれていますか。	5：そう思う	4：少しそう思う	3：どちらともいえない	2：あまりそう思わない	1：そう思わない
9 授業の方法が工夫されていますか。	5：そう思う	4：少しそう思う	3：どちらともいえない	2：あまりそう思わない	1：そう思わない
10 授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれましたか。	5：そう思う	4：少しそう思う	3：どちらともいえない	2：あまりそう思わない	1：そう思わない
11 授業中、私語等をするなどして他の学生に迷惑をかけていませんか。	5：そう思う	4：少しそう思う	3：どちらともいえない	2：あまりそう思わない	1：そう思わない

（１）夏学期授業評価アンケート

夏学期は、第 14 回または 15 回の講義時にあたる令和元年 7 月 10 日（水）～7 月 24 日（水）を授業評価アンケート期間として設定し、受講している学生に IBU.net を通じて回答を求めた。その後、授業評価アンケートの集計が完了した令和元年 8 月 19 日（月）～9 月 10 日（火）を、改善コメントの入力期間として設定し、各科目を担当する教員に IBU.net を通じて回答を求めた。

（２）冬学期授業評価アンケート

冬学期は、第 14 回または 15 回の講義時にあたる令和２年 1 月 4 日（土）～1 月 20 日（月）を授業評価アンケート期間として設定し、受講している学生に IBU.net を通じて回答を求めた。その後、授業評価アンケートの集計が完了した令和２年 2 月 1 日（土）～2 月 20 日（木）を、改善コメントの入力期間として設定し、各科目を担当する教員に IBU.net を通じて回答を求めた。

４．集計結果と授業評価アンケートの結果に対する対応

（１）夏学期授業評価アンケートの授業数・回答数・回答率等について

夏学期授業評価アンケートの授業数・回答者数・回答率は表 2 の通りである。大学合計 72.60％、大学院合計 59.38％、短大合計 76.77％、総計 73.45％となった。前年度夏学期の同時期に実施した学生アンケートでは、総計 74.1％の回答率であり、ほぼ同様の回答率であった。

表 2. 夏学期アンケートの実施授業数･回答者数･回答率

授業担当教員の所属	授業数	受講者数	回答者数	回答率(%)
和の精神Ⅰ	1	962	826	85.86%
日本学科	71	1,971	1,356	68.80%
国際キャリア学科	73	1,865	1,203	64.50%
社会学科	88	4,557	2,969	65.15%
人間福祉学科健康福祉専攻	60	1,587	1,228	77.38%
教育学科小学校教育コース	112	4,389	3,382	77.06%
教育学科中高英語教育コース	37	1,127	797	70.72%
教育学科保健教育コース	31	1,036	792	76.45%
教育学科幼児教育保育コース	57	1,783	1,483	83.17%
経営学科　公共経営専攻	34	1,296	813	62.73%
経営学科　企業経営専攻	58	2,725	1,891	69.39%
看護学科	5	420	389	92.62%
大学非常勤	457	18,249	13,340	73.10%
大学合計	1,084	41,967	30,469	72.60%
人文社会学研究科　人間福祉学専攻	23	32	19	59.38%
大学院合計	23	32	19	59.38%
和の精神Ⅰ	1	248	223	89.92%
保育科	47	2,264	1,823	80.52%
生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻	36	1,104	903	81.79%
生活ナビゲーション学科ライフケア専攻	21	305	246	80.66%
短大非常勤	39	1,270	975	76.77%
短大合計	144	5,191	4,170	80.33%
総合計	1,228	47,158	34,639	73.45%

（教育学科については旧コースを含む）

学生が個人で所持するスマートフォンを用いて、IBU.net にアクセスし、授業評価アンケートの回答を求めたため、受講生全員が学内 Wi-Fi に接続すると動作が不安定になるなど、アンケート回収に不具合がみられた。特に、「和の精神Ⅰ」においては、アクセスが集中し、授業改善アンケートに回答できない事態もみられた。また、場合によっては、講義後に回答を求めるケースや、学内のパソコンで回答するケースもみられる中で、各科目担当者の働きかけによって、すべての科目を対象にしたアンケートを実施し、昨年と同程度の回答率を得ることができた。

なお、集計された授業評価アンケートの結果を受けて、全科目担当者に対して IBU.net を通じて授業に関する改善コメントの記入を求めた。また、授業改善アンケートの集計結果及び科目担当者の改善コメント内容は、学生が閲覧できるように、印刷した一覧を図書館で公開した。

（２）夏学期授業アンケート結果について

夏学期授業評価アンケートの各設問に対する回答結果の平均値は、表 3 の通りである。

表 3. 夏学期授業改善アンケートの解答結果（平均値）

授業担当教員の所属	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
和の精神Ⅰ	1.21	4.74	3.58	3.78	3.13	3.35	3.22	3.91	3.69	3.86	3.95
日本学科	2.78	4.67	4.37	4.36	4.11	4.19	4.05	4.43	4.29	4.43	4.39
国際キャリア学科	2.25	4.50	4.18	4.26	3.89	4.01	3.89	4.24	4.10	4.17	4.22
社会学科	2.00	4.55	4.24	4.20	3.87	3.91	3.80	4.33	4.18	4.28	4.35
人間福祉学科 健康福祉専攻	1.70	4.47	4.12	4.04	3.36	3.55	3.42	4.30	4.04	4.16	4.31
教育学科 小学校教育コース	1.91	4.60	4.44	4.43	3.68	3.86	3.71	4.48	4.34	4.40	4.38
教育学科 中高英語教育コース	2.04	4.49	4.30	4.34	3.58	3.75	3.63	4.40	4.15	4.20	4.28
教育学科 保健教育コース	2.03	4.43	4.10	4.10	3.36	3.48	3.33	3.93	3.61	3.92	4.33
教育学科 幼児教育保育コース	1.91	4.56	4.23	4.31	3.49	3.64	3.47	4.14	3.99	4.12	4.41
経営学科 公共経営専攻	2.02	4.49	4.15	4.20	4.03	4.07	3.99	4.22	4.09	4.22	4.38
経営学科 企業経営専攻	2.02	4.57	4.28	4.25	3.92	3.97	3.93	4.32	4.23	4.30	4.42
看護学科	2.75	4.75	4.41	4.39	3.74	3.84	3.57	4.36	4.21	4.38	4.07
大学非常勤	1.84	4.51	4.13	4.16	3.66	3.77	3.66	4.21	4.02	4.12	4.24
大学平均	1.93	4.54	4.19	4.21	3.69	3.80	3.68	4.26	4.08	4.19	4.29
人文社会学研究科 人間福祉学専攻	4.94	4.89	5.00	5.00	4.56	5.00	4.50	5.00	5.00	5.00	5.00
大学院合計	4.94	4.89	5.00	5.00	4.56	5.00	4.50	5.00	5.00	5.00	5.00
和の精神Ⅰ	1.09	4.82	3.54	3.74	2.71	3.07	2.94	4.00	3.85	3.87	4.13
保育科	1.79	4.76	4.68	4.65	3.61	3.86	3.71	4.60	4.58	4.63	4.29
生活ナビゲーション学科 ライフデザイン専攻	1.68	4.67	4.23	4.16	3.47	3.63	3.50	4.32	4.09	4.22	4.33
生活ナビゲーション学科 ライフケア専攻	2.20	4.46	4.23	4.13	3.43	3.59	3.41	4.13	3.95	4.09	4.26
短大非常勤	1.73	4.69	4.45	4.35	3.66	3.73	3.65	4.56	4.40	4.51	4.50
短大平均	1.78	4.70	4.49	4.43	3.58	3.76	3.63	4.50	4.38	4.47	4.35
総平均	1.91	4.56	4.23	4.24	3.68	3.80	3.68	4.29	4.12	4.22	4.30

評価平均点が 4.00 ポイント（少しそう思う）未満の項目を抜粋すると「1. 授業時間外に予習や復習をしたか」「5. 授業概要（シラバス）をよく読んだか」「6. シラバスの到達目標達成のために努力してきたか」「7. 履修要覧の“身につけるべき能力”をよく読んだか」が該当する。特に「1. 授業時間外に予習や復習をしたか」については、総平均 1.91 ポイントと「予習・復習時間 30 分」を下回る結果となった。

一方、各学科の評価点をみると、「1. 授業時間外に予習や復習をしたか」が総平均 1.91

ポイントであったのに対して、日本学科の平均点が 2.78 ポイントであった結果など、大学・短期大学部平均得点を上回る得点を得た学科もみられる。それら平均得点を上回る得点を得た学科でどのような取り組みが実施されているのか、学部学科を越えて、情報を共有する取り組みが今後の課題となろう。各学科・各科目に特有の性質があることはもちろんだが、同一の学生集団が受講している点から、指導上の修正点や改善点を検討する余地は十分にある。

なお、上述した通り、授業改善アンケートの集計後には、昨年度のリフレクション・ペーパーに替わるものとして、IBU.net を通じて各教員に対して改善コメントの記入を求めた。本年度については、授業改善アンケート結果の分析のみにとどまっているが、授業改善アンケートの結果と教員の改善コメントの間にある傾向や、本学の授業に特徴的な課題の傾向を把握することも今後の課題となる。

（３）冬学期授業評価アンケートの授業数・回答数・回答率等について

冬学期授業評価アンケートの授業数・回答者数・回答率は表 4 の通りである。回答率については、大学合計 64.19%（夏学期 72.60%）、大学院合計 59.38%（同 59.38%）、短大合計 69.40%（同 76.77%）、総計 64.81%（同 73.45%）となった。同年度夏学期の授業評価アンケート回答率と比較して、総計で 8.61 ポイント下回ったが、同時期に学生動態調査が実施され、学生にとって煩雑さや負担感が生じたものと推測できる。今後、IBU.net を通じて、授業評価アンケートを含む調査を実施する際には、全学的な周知体制を整えることが重要であろう。

なお、集計された授業評価アンケートの結果を受けて、全科目担当者に対して IBU.net を通じて授業に関する改善コメントの記入を求めた。また、授業改善アンケートの集計結果及び科目担当者の改善コメント内容は、学生が閲覧できるように、印刷した一覧を図書館で公開した。

表 4. 冬学期アンケートの実施授業数･回答者数･回答率

授業担当教員の所属	授業数	受講者数	回答者数	回答率(%)
和の精神Ⅱ	1	958	727	75.89%
日本学科	65	1,955	1,271	65.01%
国際キャリア学科	67	1,924	983	51.09%
社会学科	81	4,064	2,352	57.87%
人間福祉学科健康福祉専攻	57	1,135	836	73.66%
教育学科小学校教育コース	107	3,874	2,830	73.05%
教育学科中高英語教育コース	30	737	485	65.81%
教育学科保健教育コース	32	1,201	866	72.11%
教育学科幼児教育保育コース	54	1,544	1,141	73.90%
経営学科　公共経営専攻	37	1,225	578	47.18%
経営学科　企業経営専攻	66	2,794	1,520	54.40%
看護学科	2	134	111	82.84%

大学非常勤	417	14,720	9,578	65.07%
大学合計	1,016	36,265	23,278	64.19%
人文社会学研究科　人間福祉学専攻	23	32	19	59.38%
大学院合計	23	32	19	59.38%
和の精神Ⅱ	1	240	201	83.75%
保育科	40	1,925	1,243	64.57%
生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻	40	1,121	812	72.44%
生活ナビゲーション学科ライフケア専攻	23	372	269	72.31%
短大非常勤	39	1,270	895	70.47%
短大合計	143	4,928	3,420	69.40%
総合計	1,159	41,193	26,698	64.81%

（教育学科については旧コースを含む）

（４）冬学期授業アンケート結果について

冬学期授業評価アンケートの各設問に対する回答結果の平均値は、表 5 の通りである。評価平均点が 4.00 ポイント（少しそう思う）未満の項目を抜粋すると「1.授業時間外に予習や復習をしたか」「5.授業概要（シラバス）をよく読んだか」「6.シラバスの到達目標達成のために努力してきたか」「7. 履修要覧の“身につけるべき能力”をよく読んだか」が該当する。特に「1.授業時間外に予習や復習をしたか」については、総平均 2.17 ポイント（夏学期 1.91 ポイント）と「予習・復習時間 30 分」程度という結果となった。授業に関わる予習復習の程度については、夏学期より 0.26 ポイント微増したものの、本学全体の課題といえる。

一方、各学科の評価点をみると、「1.授業時間外に予習や復習をしたか」が総平均 2.17 ポイントであったのに対して、日本学科の平均点が 2.78 ポイントであった結果など、大学･短期大学部平均得点を上回る得点を得た学科もみられる。平均を上回る学科の傾向も、夏・冬学期で共通していることから、それら平均得点を上回る得点を得た学科でどのような取り組みが実施されているのか、学部学科を越えて、情報を共有する取り組み、さらには学科単位で授業改善の方針を共有するような取り組みが、今後の課題となろう。

なお、上述した通り、授業改善アンケートの集計後には、昨年度のリフレクション・ペーパーに替わるものとして、IBU.net を通じて各教員に対して改善コメントの記入を求めた。本年度については、授業改善アンケート結果の分析のみにとどまっているが、授業改善アンケートの結果と教員の改善コメントの間にある傾向や本学の課題傾向を把握することも今後の課題となる。

なお、授業改善に関する本学の取り組みの 1 つとして、外部団体における本学の活動の紹介を行ってきた。2011（平成 23）年 5 月 21 日（土）に実施された関西地区 FD 連絡協議会第 4 回総会において、平成 22 年度の本学の学生アンケートの取り組みについて「学生アンケートを利用した授業改善の取り組み」というテーマで発表した。ポスター発表の原稿は、関西地区 FD 連絡協議会の活動成果として対外的に発信されている。

本学の活動内容は、京都大学高等教育研究開発センターの MOST と呼ばれる「大学教員の

相互研修の場」をコンセプトとするコミュニティサイト内の KEEP Toolkit を使ったスナップショットとして作成され、現在も公開されている。

(URL:https://most-keep.jp/keep25/toolkit/html/gallery.php?id=31786006811807)

今後も、他大学の取り組みも参考にしながら、本学独自のＦＤ活動を進めていきたい。

表 5. 冬学期授業改善アンケートの解答結果(平均値)

授業担当教員の所属	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
和の精神Ⅱ	1.75	4.67	3.78	3.90	3.41	3.63	3.46	4.03	3.83	4.01	4.05
日本学科	2.78	4.62	4.35	4.38	4.18	4.22	4.17	4.39	4.27	4.40	4.51
国際キャリア学科	2.25	4.51	4.23	4.27	4.04	4.09	4.01	4.28	4.10	4.22	4.29
社会学科	2.07	4.49	4.32	4.29	4.04	4.07	3.99	4.39	4.30	4.36	4.43
人間福祉学科 健康福祉専攻	1.79	4.46	4.09	4.01	3.64	3.71	3.67	4.17	3.86	4.08	4.26
教育学科 小学校教育コース	2.06	4.62	4.43	4.43	3.87	4.02	3.91	4.52	4.38	4.47	4.37
教育学科 中高英語教育コース	2.10	4.55	4.34	4.36	3.56	3.72	3.58	4.42	4.18	4.26	4.27
教育学科 保健教育コース	2.08	4.59	4.38	4.31	3.69	3.83	3.69	4.30	4.10	4.28	4.22
教育学科 幼児教育保育コース	1.94	4.43	4.17	4.23	3.78	3.87	3.78	4.21	4.02	4.19	4.37
経営学科 公共経営専攻	2.31	4.50	4.38	4.37	4.22	4.26	4.22	4.43	4.34	4.41	4.47
経営学科 企業経営専攻	2.17	4.56	4.40	4.41	4.23	4.24	4.19	4.45	4.36	4.41	4.49
看護学科	1.83	4.67	3.80	3.78	3.50	3.36	3.33	3.77	3.80	3.95	4.22
大学非常勤	1.87	4.50	4.18	4.19	3.83	3.89	3.81	4.26	4.09	4.17	4.29
大学平均	2.08	4.55	4.22	4.23	3.85	3.92	3.83	4.28	4.13	4.25	4.33
人文社会学研究科 人間福祉学専攻	4.94	4.89	5.00	5.00	4.56	5.00	4.50	5.00	5.00	5.00	5.00
大学院合計	4.94	4.89	5.00	5.00	4.56	5.00	4.50	5.00	5.00	5.00	5.00
和の精神Ⅱ	1.81	4.80	3.87	4.10	3.24	3.53	3.41	4.14	4.02	4.13	4.40
保育科	1.74	4.67	4.66	4.66	3.72	3.93	3.73	4.58	4.55	4.58	4.57
生活ナビゲーション学科 ライフデザイン専攻	1.93	4.64	4.46	4.42	4.04	4.10	4.04	4.51	4.34	4.45	4.51
生活ナビゲーション学科 ライフケア専攻	1.99	4.43	4.29	4.12	3.62	3.70	3.65	4.26	4.17	4.19	4.20
短大非常勤	1.78	4.65	4.43	4.43	3.74	3.86	3.71	4.41	4.30	4.38	4.48
短大平均	1.85	4.64	4.34	4.35	3.67	3.82	3.71	4.38	4.28	4.35	4.44
総平均	2.17	4.59	4.29	4.30	3.84	3.95	3.84	4.34	4.21	4.31	4.39

５．今後の課題

平成 21 年度以降、今後の課題として、第一に、授業概要（シラバス）の記述内容を見直していくこと、第二に、学生アンケートの結果とリフレクション・ペーパーの活用の２点

を掲げて取り組みを行ってきた。

今年度は、全科目について授業改善アンケートの実施し、全学的な課題等は把握できたものの、各授業の改善についての考察や検討は不十分である。上述したように、各科目単位での授業改善だけでなく、学科単位での授業改善等、組織的な授業改善の取り組みが重要であり、今後、FD 委員会を中心とした組織的な検討が重要になる。その中で、従来から取り組んできた授業概要（シラバス）のあり方やリフレクション・ペーパーの活用等による学生とのコミュニケーションの改善を図っていきたい。また全教員に対しては、本年度の取り組みを踏まえ、次年度以降もシラバスに関する FD の研修会を通して、シラバスの記述内容と記述方法についての共通理解、授業改善に向けた課題意識の共有を図っていきたい。

なお、授業改善アンケートの設問の内容についても、今後の検討課題となる。組織的な授業改善の取り組みの中で、授業に関して明らかにすべき点を整理し、設問の内容についても検討していきたい。

［引用文献］

文部科学省　2008 年　中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（答申）
（http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf）

文部科学省　2012 年　中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」
（http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf）

第４章　各学科・専攻・コースによるＦＤ活動の諸相

本学ではいわゆる 1 年生時の初年次教育科目として、現在以下のような科目を設置している。大学では、3 つの学部のすべての学科に「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ（共通教育科目・卒業必修科目各 2 単位）」を設置している。そして、短期大学部では、保育科に「保育実践演習Ⅰ・Ⅱ（専門教育科目・卒業必修科目各 1 単位）」、生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻に「ライフデザインゼミナールⅠ・Ⅱ（専門教育科目・卒業必修科目各 1 単位）」および「キャリアの基礎Ⅰ・Ⅱ（専門教育科目・卒業必修科目各 2 単位）」、生活ナビゲーション学科ライフケア専攻に「ライフケア演習Ⅰ・Ⅱ（専門教育科目・卒業必修科目各 1 単位）」をそれぞれ設置している。これらの授業内容と運営は、学科・専攻・コース（以下、学科等と略記）それぞれにおける FD 活動の中核として位置づけられてきた。平成 20 年度以降については、特に、初年次教育を全学的な重点課題として位置づけ、新入生の大学生活への適応に取り組んできた。

本学では、初年次教育を学科等の所属教員が分担して担当し、担任教員としての役割を果たしている。その結果、担任教員の負担は少なくないが、学生支援やピアサポートの充実、教育効果の確認、専門教育の基礎作り等の点で、いくつもの利点をもたらしてきた。本学は、学生の基礎学力や進路志望の傾向が学部や学科ごとに大きく異なる。初年次教育の実践を通じて、教員が学生の学力やコミュニケーション能力等を身近に実感することができるため、結果として教育的な配慮や合理的配慮のあり方を共通理解することができてきた。

なお本学では、オープンキャンパスや入学前教育でも学科ごとに独自のプログラムを用意している。オープンキャンパス等は、本学における初年次教育のシステムの延長線上に位置づけられ、個々の教員が志望者や入学予定者に接する機会を多く設定することで、スムーズに初年次教育に移行する機能を果たしてきた。本章の各記述にも見られるように、それぞれの学科等で、入学前後から卒業後までを想定した連続性のある授業内容が設定されており、これらは PDCA サイクルの中で常に工夫・改善されている。

平成 29 年度からは、PROG テストを 1 年生全員に実施し、その結果をもとに担任教員が面接を行っている。短期大学部については、2 年生時に PROG テストを再度実施し、学生の変容についてデータをもとに教員間で検討してきた。令和元年度では、大学の 3 年生に対しても PROG テストを実施し、学生の変容について教員間で共通理解を図った。また学生の変容に関するエビデンスに基づいて、学生に対して個別面談も実施した。

学科等の取り組みとしては、授業相互参観も行われている。学科等で行うことにより、個々の学科の教育内容やカリキュラムの改善という点で問題意識を共有できる。参観対象科目は、教務課を通して全教員にネット上に告知されており、学部・学科を越えて参観される授業も少なくない。

今後、授業評価アンケートの結果の活用と共に、学科等の授業内容及びシラバスの見直

しを進めていく。また、アセスメントポリシーの観点からの検討も、継続的に実施する予定である。

日本学科

はじめに

日本学科の今年度報告書においては、以下の項目について報告する。

1．「日本学表現演習Ⅰ」
2．「日本学表現演習Ⅱ」
3．「日本学基礎演習Ⅰ」
4．「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」
5．相互授業参観について
6．プレエントランスガイダンスにおける教育的取り組み
7．「パフォーマンス実践演習」
8．欠席過多学生への指導、共有ファイルの運用

授業改善という枠組みからは外れる報告も含むが、いずれも学科においては重要課題として取り組んでいるものであるので、当報告書に盛り込むこととした。

基礎的必修科目

1「日本学表現演習Ⅰ」

H31 年度より、カリキュラム改変に伴い、新たな 1 セメスター生対象の必修専門科目としてこの科目が設けられた。本科目の内容は、前年度までの「大学基礎演習Ⅰ」内容を、学科のポリシーにより適合させるためさらに改善したものである。ここでは、こうした改変や刷新のあった事柄について報告する。

P（計画）

〈今年度の改変／刷新部分〉

① H30 年度、小テストの内容に、従来の漢字検定の問題に加え、語彙テストを導入したが、語彙・読解力検定自体が廃止されてしまったため新たに日本語検定の問題を取り入れる。このことにより学習習慣をよりしっかりつけてもらうとともに、これらの検定合格につながる効果を期待する。
② 授業内の主要プレゼンテーション課題「私の薦める一冊」の準備時間が短いという学生アンケートの結果等を鑑み、準備の時間を増やす。
③ e-ポートフォリオの導入を進める。

D（実施）

①について…従来の漢字テスト（漢字検定 2 級程度を想定）に加え、日本語テスト（日本語検定を想定）を取り入れた問題を作成し、試験を実施した。

②について…授業計画を修正し、教員講義の回数を減らし、その分プレゼンテーション準備の回を 1 回増やした。

③について…担当教員間で協議し、「私の薦める一冊」プレゼンテーション準備回において、授業開始時に e-ポートフォリオに目標を書き込み、終了時に達成度を自己評価するとともに成果物をアップロードし、教員が進行状況を確認しつつ適宜アドバイスできるようにした。プレゼンテーション本番後も、学生が自己評価するとともに、教員がコメントした。

C（評価）⇒A（改善）

①について…授業アンケートより、「学習習慣がついた」という回答を一定数見ることができた。実際の検定や資格取得とのつながりについては、次年度以上の学生の状況と合わせて見る必要があろう。

②について…授業アンケートにおいて H29 より「発表の準備時間が短かった」という意見が減少しており、準備時間延長のかわりに教員の講義の回が減少したことについて特段学生の評判が悪かったということもなく、学生の取り組みを改善しつつ授業目標の到達度を高められたと考える。

③について…授業アンケートにおいて、学修上効果があったという意見がほとんど見られなかった。本学科においては、本科目における e-ポートフォリオの活用について、4 年間の大学での学修全体を通じた過程を記録するためと位置づけており、1 セメスター時点で記録の意義を感じにくいというのは今後に向けての課題の一つであるといえる。

（文責：森嶋　俊行）

２「日本学表現演習Ⅱ」

目的

「大学基礎演習Ⅱ」の内容を引き継ぐ当授業は開講８年目となった。授業計画は昨年度に設定した目標を踏襲しつつ、実施方法については改善を施して計画を策定した。従来どおり、【口頭発表原稿とレジュメを作成した上で口頭発表に取り組む】という流れを経験し、それに習熟することを目的として、「ブックトーク」・「四天王寺ツアー」という二つのプレゼンテーションの機会を設定した。

「四天王寺ツアー」は「ブックトーク」に比べて、例年、学生の満足度が低いことから、当初の「ツアー企画立案」から「魅力的なガイドブック編集」へ、さらに 28 年度からは簡便な「ツアーパンフレット制作」へと目標設定を改めてきた。また、「資料集」の改善、準備授業時間数の確保といった改善を講じた結果、学生の目標意識が向上し、満足度としても一定の評価が得られるようになってきた。さらなる改善について、教員間で事前に検討した。

また、昨年度、日本学科として初めて当授業に導入した学修ポートフォリオについて、より安定的に運用し、学生自身の学びに活かせるよう実質化することも目的の一つである。

毎回授業冒頭、夏学期「日本学表現演習Ⅰ」で実施した漢字検定・日本語検定対策小テストに、当授業でも学生に取り組ませる。「日本語検定」対策の導入により、学生に主体的な学びの姿勢を定着させ、検定受検、資格取得を促したい。

実施の状況

中心となる二つの取り組みについて報告する。

①「ブックトーク」は、「自分が気になったテーマ」に関する書籍を数冊選んで、それらを関連付けながら、全体として「自分が伝えたいこと」がしっかりと伝わり、「その本の魅力を納得してもらう」ということを目的として、口頭発表原稿、レジュメの作成について各クラスで指導を行った。全体発表会の前に、まずはクラス単位で紹介し合い、その中から、各クラスの代表となる 2 名の学生を選び、6 クラス合わせて 12 名の学生が作成したブックトーク・シナリオの中から、学年最優秀作品を選抜するコンテストを実施した。全体発表会における優秀者の選抜は、参観した学生・教員全員による評価シートにルーブリ

ック評価を導入し、評価の可視化に留意しつつ決定した。コンテストにおいては一昨年度改定した評価シートを用い、第１位・第２位各１名、第３位同率２名の表彰対象を明確に決めることができた。

②「四天王寺ツアー」は、四天王寺の魅力や歴史について、正確な関連情報を理解した上で、自前のツアーパンフレットを通じて、楽しくわかりやすくプレゼンテーションすることを目的とする。「ブックトーク」は個人単位の発表だが、当取り組みは５名１組のグループワークであることが特徴である。口頭発表能力の向上とともに、グループ内で協調・協働するためのコミュニケーション能力の向上をも目的としている。

各クラスでの作業過程は、段階的に取り組みが進むよう予め詳細に指示しているが、担当者間で取り組みに対するスタンスに違いがあり、各クラス、必ずしも均等に準備が進んでいるわけではない点、クラス指定の必修授業としては問題が残る。これを改善するために、今年度、学修ポートフォリオを導入した。選抜代表チームが発表する全体発表会では、各クラスの担当エリアが異なるため、すべての発表を聞くことで、四天王寺境内、および周辺エリアの代表的スポットを網羅できることになる。参加学生は、教員と共に評価シート記入によって評価者となる。昨年度より最終評価にルーブリックを導入し、評価を可視化し、最優秀グループを決定した。

見出された課題

今年度の学科独自の授業アンケートの結果を摘記する。アンケート回答者 97 名。自由記述欄と設問４・５は省略。

１「大学基礎演習Ⅱ」について、どのように感じましたか。

A ブックトーク・コンテスト について

1. 大変有意義であった（29）　2. それなりに有意義であった（50）

3. なんともいえない（10）　4. なくてもよかった（2）

○（肯定的意見）：△（否定的意見）＝86％：14％

（30 年 85:15　29 年 88:12　28 年 91:9　27 年 76:24　26 年 84:16　25 年 77:23）

B 四天王寺ツアー発表会について

1. 大変有意義であった（23）　2. それなりに有意義であった（36）

3. なんともいえない（22）　4. なくてもよかった（12）

○：△＝63％：37％

（30 年 72:28　29 年 71:29　28 年 86:14　27 年 60:40　26 年 71:29　25 年 63:37）

３「大学基礎演習Ⅱ」での学習は、他の科目の学習を行う上で役に立ちましたか。

1. 大変役立った（28）　2. それなりに役立った（36）　3. なんともいえない（24）

4. あまり役立たなかった（9）　5. まったく役立たなかった（0）

○（1～2）：△（3～5）＝66％：34％

（30 年 72:28　29 年 74:26　28 年 75:25　27 年 66:34　26 年 68:32　25 年 61:39）

今後の改善策

① ブックトークは 28 年度以降の数値とほぼ同程度の授業満足度であり、取り組みとしては安定しているといえよう。しかし、四天王寺ツアーについては、27 年度以前のレベルにまで満足度が低下しており、次年度に向けて改善を検討しなければならない。

② ブックトークについては、アンケート自由記述欄に「本に触れる機会となった」「読みたかった本が読めた」「自分の好きな本を他人に薦めるのは、なんだか嬉しい気持ちになった」などとあるように、読書の意義を捉えなおす機会として有意義であると言える。一方で、「複数の本を読んで関連付け、スピーチする難しさを知る機会になった」「聞き手に伝えるための工夫は今後にも役立つ」などとあるように、プレゼン技術向上の機会としても実感があったようである。ただし、否定的意見・改善意見の中には「やることがとても多いのに、時間が短かった」「ほかの授業など、やることもたくさんあるので大変」といったものがあり、小テストや各種連絡なども当授業ではおこなうのだが、それらを担当者が効率的に運用し、学生自身が集中して取り組める環境を授業内に確保する工夫が必要であろう。

③ 四天王寺ツアーは、一定程度、取り組みが安定化してきたように自己評価していただけに、今年度の学生の満足度の低下は深刻に受け止めねばならない。この取り組みは、授戒会後に実施する新入生四天王寺ツアー、てんしばゲストハウスで実施する外国人観光客向け四天王寺ツアーにも接続し、新カリキュラムで重視した地域連携関係の授業にも繋がるものである。まずは改めて、担当教員間でそうした位置づけや意義について再確認し、学生たちにも有効に実感されるような指導を心がけることが肝要と思われる。また、今年度については、取り組み途中に四天王寺本坊より、学生の実地調査時のマナーについて苦情があり、途中でインタビューの実施などを自粛するよう学生に要請した。四天王寺本坊と学科教員の間の、このような連携不足が、学生たちの意欲を削ぐことになった面もあったように思われる。次年度に向けて、四天王寺本坊との事前の連絡・連携について確実に取り組み、情報共有と協力の依頼をしておくことが課題となる。

④ 当授業において学修ポートフォリオを運用することは２年目となったが、授業アンケートには学修ポートフォリオに関係する既述がまったく見られない。学生からすれば、教員から指示をされて義務的に取り組んでいるに過ぎず、その意義を実感できていない可能性がある。学修ポートフォリオを学生の主体的な学びに繋げ、どう実質化していくかが課題である。（文責：源健一郎）

３「日本学基礎演習Ⅰ」

この科目には、クラス（6 分割クラス）全てに共通の内容・取り組みと、各担当者がそれぞれに行う内容・取り組みが存在するが、以下では全クラス共通の事柄について記述する。

<u>P（計画）</u>

・昨年度刷新して奏功した事柄（初回授業グループワークのスリム化）は踏襲した。

・前年度検討課題であった、発表相互評価ルーブリックの是非（「発表を聴きながらこれを用いて評価するのは負担では」との意見（教員）あり→学期末アンケートの項目に挙げて学生に問うことになった）について。学生アンケート結果は、「a ルーブリック使用により、他の学生のプレゼンをより真剣に聴くことができたか」「b ルーブリック使用により、他の学生のプレゼンをより客観的に評価することができたか」に関して、総じて高評価であった（＝「非常によくできた」・「よくできた」を回答した学生が、a は複数のクラスの平均で 94%、b は 95%）。このことから、現行ルーブリック使用の意義

を認め、今年度もルーブリック使用を続けることとした。

・その他、特に刷新・改変はなかった。

D（実施）

昨年度に同じく、共通取り組みとしては次のことを各クラスで実施した。

・初回グループワーク（オープンキャンパスの来訪者に日本学科の学びを紹介する企画を考え、発表する）

・プレゼンテーション（グループでのプレゼン・個人のプレゼン、どちらか、もしくは両方）

・メディアリテラシー教育（文献検索の仕方、ネットで得た資料の扱い、正しい引用法　など）

・敬語についての学び（Ｉコマで敬語解説、敬語ロールプレイを行い、翌週小テストを実施）

・学期末アンケート（大学共通アンケートではなく、この授業独自のもの）の実施

C（評価）⇒A（改善）

この授業についてはかなり詳細な学期末アンケートを実施しているが、そこで得られた結果としては、内容（全クラス共通内容、担当者独自内容ともに）に関して総じて「（学科での学修の上で）有意義である」との評価が高いと言ってよい。2年次夏学期の必修授業として、冬学期のプレゼミ、3年次のゼミの前段階役割を果たすことができていると思われる。一方で、この授業に関して学生からの具体的な要望（取り上げてほしい事柄からロールプレイで扱ってほしい状況など細かい事まで）、学修に関して困っていることについての回答もあるので、クラスを越えて担当者に周知して、授業に活かしていきたい。

（文責：高橋美奈子）

４「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」

目標および計画

「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」は、３年前に「日本語表現演習Ⅰ・Ⅱ」を改称した、日本学科１年次の必修科目である。科目名の変更にともない、その授業内容も、より実践的なものへと大幅に改訂した。本科目は、日本語（表現）についての幅広い知識を体系的に修得し、基本的な事項を理解するにとどまらず、そうした知識・事項にもとづいた精確かつ適切な日本語表現力を身に付けて、これを的確に運用できるようになるための授業である。その到達目標は、①日本語（表現）についての幅広い知識を体系的に身に付け、②文章の書き方の基礎を確実なものとして実践的に運用できるようになるとともに、③レベルのより高い話し方・聞き方ができるようになることがポイントであるが、可能な限りアクティブ・ラーニングを行うことによって、これらのより豊かで高度な日本語表現能力を着実に涵養できるように授業を工夫する。こうした到達目標・授業の工夫は、３年前の授業内容改訂時から変更していない。ただし、本年度からは、初年次教育の役割も担うことになったので、授業時には常に学園訓の「和の精神」を学生に意識させることとした。なお、授業担当は、１年生全員を学籍番号順に４分割し、「大学基礎演習Ⅰ」は、①坂田、②田島、③麻生、④中村が、「大学基礎演習Ⅱ」は、①田島、②中村、③坂田、④麻生が、というように、ⅠとⅡとでクラスを入れ替えて担当した。このように４名の教員で分担するので、教員間で密に連携し、綿密に打ち合わせて、授業内容と評価の統一・公平性を図った。

実践

上記⑴の授業計画に即して授業を進めたが、概ね計画通りに授業を進めることができた。

この他に夏学期 10 回、冬学期 10 回の合計 20 回、敬語についての小テストを行い、３点満点で連続３回１点以下の者については、ピアタでの再テストを義務づけた。また、小論文、スピーチ、プレゼンテーションでは、それぞれルーブリックを用いて、学生が相互に採点することにより、どのような小論文、スピーチ、プレゼンテーションが高評価になるのか、学生自身が自覚的かつ自発的に学べるよう工夫した。提出された課題については、可能な限り教員がコメントを付して返却した。さらに、アクティブ・ラーニングの実効性を高めるため、ピアタとの連携を緊密にして、小論文、スピーチ原稿、プレゼンテーション原稿の作成時にピアタにて助言を求めた者については加点する等の措置も講じた。加えて、学生同士で相談する時間を設け他の学生とのコミュニケーションの場も与えるようにした。これらは、３年前の授業内容改訂時から変わっていないが、上記⑴でも述べた通り、本年度は小論文、スピーチ、プレゼンテーションの内容を考える際には、常に「和の精神」を学生に意識させることとした。

問題点

これまでもそうであったが、各セメスターの終わりには、授業担当者４人が集まり反省会を行った。その際、新たな取り組みとして、反省点と改善点を絞り込むための重要な参考資料にする目的で、Ⅰ・Ⅱとも最終授業において、独自に授業アンケートを学生に書かせることにした。アンケート集計結果は、次の通りである。（４クラス合計、自由記述欄は割愛）

大学基礎演習Ⅰ　履修登録者１０７名　アンケート回答者９４名

①　概論（１回目　言葉とは何かを考え、その重要性を学ぶ　２クラス合同授業）

5	とても勉強になった	（　３３　）名	（　３５　）％
4	勉強になった	（　４５　）名	（　４８　）％
3	どちらとも言えない	（　１４　）名	（　１５　）％
2	勉強にならなかった	（　　２　）名	（　　２　）％
1	まったく勉強にならなかった	（　　　）名	（　　　）％

②　叙述・構成の方法（２～５回目　叙述のルール、文末の工夫、句読法、語順、文章構成法、接続法）

5	とても勉強になった	（　６１　）名	（　６５　）％
4	勉強になった	（　２７　）名	（　２９　）％
3	どちらとも言えない	（　　５　）名	（　　５　）％
2	勉強にならなかった	（　　　）名	（　　　）％
1	まったく勉強にならなかった	（　　１　）名	（　　１　）％

③　小論文を書いて発表し、良い小論文を選ぶ（６～８回目　課題「言葉と私」）

5	とても勉強になった	（　５８　）名	（　６２　）％
4	勉強になった	（　３１　）名	（　３３　）％
3	どちらとも言えない	（　　４　）名	（　　４　）％
2	勉強にならなかった	（　　　）名	（　　　）％
1	まったく勉強にならなかった	（　　１　）名	（　　１　）％

④　敬語の学習（９～11 回目　敬語についての説明と練習）

5	とても勉強になった	（　５１　）名	（　５４　）％
4	勉強になった	（　３０　）名	（　３２　）％
3	どちらとも言えない	（　１２　）名	（　１３　）％
2	勉強にならなかった	（　　１　）名	（　　１　）％
1	まったく勉強にならなかった	（　　　）名	（　　　）％

⑤　スピーチ原稿の作成・発表、良いスピーチを選ぶ（12～14 回目　課題「心に残る表現」）

5	とても勉強になった	（　５１　）名	（　５４　）％
4	勉強になった	（　３７　）名	（　３９　）％
3	どちらとも言えない	（　　６　）名	（　　７　）％
2	勉強にならなかった	（　　　）名	（　　　）％
1	まったく勉強にならなかった	（　　　）名	（　　　）％

⑥　毎時の敬語テスト（３点満点　計 10 回）

5	とても勉強になった	（　３９　）名	（　４１　）％
4	勉強になった	（　３８　）名	（　４１　）％
3	どちらとも言えない	（　１６　）名	（　１７　）％
2	勉強にならなかった	（　　１　）名	（　　１　）％

1　まったく勉強にならなかった　（　　）名　（　　）％

⑦　この授業全体を通してあなたはどのような感想を持ちましたか

5　とても勉強になった　（　５７　）名　（　６１　）％
4　勉強になった　（　３３　）名　（　３５　）％
3　どちらとも言えない　（　４　）名　（　４　）％
2　勉強にならなかった　（　　）名　（　　）％
1　まったく勉強にならなかった　（　　）名　（　　）％

⑧　あなたはこの授業を受けるに際して図書館やピアタを利用しましたか

5　利用した　（　２７　）名　（　２９　）％
1　利用しなかった　（　６３　）名　（　６７　）％　※４名が未記入

大学基礎演習Ⅱ　履修登録者（１０４）名　アンケート回答者（８７名）

①　表現の工夫と修辞法（ １～２回目　流行語・キャッチコピー・レトリック等 ）

5　とても勉強になった　（　３５　）名　（　４０　）％
4　勉強になった　（　４２　）名　（　４８　）％
3　どちらとも言えない　（　１０　）名　（　１２　）％
2　勉強にならなかった　（　　）名　（　　）％
1　まったく勉強にならなかった　（　　）名　（　　）％

②　自己アピール（ ３～７回目　履歴書の書き方、１分間スピーチ、２クラス合同授業等 ）

5　とても勉強になった　（　５５　）名　（　６３　）％
4　勉強になった　（　３０　）名　（　３４　）％
3　どちらとも言えない　（　２　）名　（　３　）％
2　勉強にならなかった　（　　）名　（　　）％
1　まったく勉強にならなかった　（　　）名　（　　）％

③　文章の要約（ ８～９回目　要約の方法と実践練習 ）

5　とても勉強になった　（　４３　）名　（　５０　）％
4　勉強になった　（　３６　）名　（　４１　）％
3　どちらとも言えない　（　７　）名　（　８　）％
2　勉強にならなかった　（　１　）名　（　１　）％
1　まったく勉強にならなかった　（　　）名　（　　）％

④　プレゼン（ 10～13 回目　IBU の紹介、学園訓を考慮したグループワーク、２クラス合同授業等 ）

5　とても勉強になった　（　４９　）名　（　５６　）％
4　勉強になった　（　３１　）名　（　３６　）％
3　どちらとも言えない　（　５　）名　（　６　）％
2　勉強にならなかった　（　２　）名　（　２　）％
1　まったく勉強にならなかった　（　　）名　（　　）％

⑤　手紙を書く（ 14～15 回目　正式な手紙の書き方と実践練習 ）

5　とても勉強になった　（　５４　）名　（　６２　）％
4　勉強になった　（　２７　）名　（　３１　）％
3　どちらとも言えない　（　６　）名　（　７　）％
2　勉強にならなかった　（　　）名　（　　）％
1　まったく勉強にならなかった　（　　）名　（　　）％

⑥　毎時の敬語テスト（ ３点満点　計 10 回 ）

5　とても勉強になった　（　４２　）名　（　４８　）％
4　勉強になった　（　３１　）名　（　３６　）％
3　どちらとも言えない　（　１３　）名　（　１５　）％
2　勉強にならなかった　（　１　）名　（　１　）％
1　まったく勉強にならなかった　（　　）名　（　　）％

⑦　この授業全体を通してあなたはどのような感想を持ちましたか

5　とても勉強になった　（　５５　）名　（　６３　）％
4　勉強になった　（　２８　）名　（　３２　）％
3　どちらとも言えない　（　４　）名　（　５　）％
2　勉強にならなかった　（　　）名　（　　）％
1　まったく勉強にならなかった　（　　）名　（　　）％

⑧　あなたはこの授業を受けるに際して図書館やピアタを利用しましたか

5　利用した　（　４５　）名　（　５２　）％
1　利用しなかった　（　３７　）名　（　４３　）％　※５名が未記入

以上のアンケート集計結果のうち、「３」～「１」の回答があった項目、とりわけ「２」「１」の否定的回答があった項目が問題点となることは言うまでもない。具体的にどのように改善すべきかについては⑷に記述する。

今後の課題および展望

上記⑶のアンケート集計結果は、Ⅰ・Ⅱの⑧を除いて、「５」と「４」とを加えた肯定的回答がすべて８０％を上回っている、という意味において、満足のいく結果であった。しかし、全質問項目で「３」と回答した者が一定数おり、中には「２」や「１」と回答した者が少数とはいえ、いることも事実である。今後は、こうした学生を「５」ないし「４」へと引き上げることが最大の課題となる。そのためには、まず、時間の不足による学生の消化不良を無くすことである。欲張ってあれもこれもと詰め込み過ぎないように、授業内容のポイントをより絞ることが重要である。また、上記⑶では割愛したが、担当者による評価の差異が少なからず見られたので、担当者間の連携をより緊密に図るべきであろう。さらにまた、Ⅰ・Ⅱの⑧の結果から分かるように、図書館やピアタの活用が不十分であるので、これらの学内施設との連携をより強める必要もあるだろう。全ての質問項目において、「３」以下と回答した者は、欠席しがちで無気力な学生が多いと推測される。単位を落としたり退学したりする学生を未然に防ぐ意味でも、ピアタとの連携はきわめて重要である。その一方で、自由記述欄に「楽しかった」「役に立った」「もっと勉強したい」との感想を寄せてくれた学生も多くいた。我々担当教員は、こうした感想を励みに、授業内容と教え方とをより一層工夫・改善していかなければならない。　（文責：坂田達紀）

FD 活動

５　相互授業参観について

Plan（計画）

（１）　ＦＤ委員会で示された方針

令和元年度第１回教務・ＦＤ・教職養成カリキュラム合同委員会（4 月 18 日）において、今年度の相互授業参観について下記の方針が示された。

実施期間：冬学期

注意その１：各教員は、最低１科目を公開する。

注意その２：各教員は、最低１科目を参観する。

注意その３：教職科目を必ず入れる

Do（実施）

（１）　趣旨：互いの授業改善ためにヒントとなるような授業を公開。今後の質的向上をめざす。とくに、教職関連の科目を担当する教員は、教職科目を提供することが望ましい。

（２）　実施期間：11 月 5 日（火）～12 月 6 日(金)

（３）　実施方法

①　ＦＤ委員が学科教員から申し出があった公開科目をまとめる。

②　ＦＤ委員が公開科目一覧を学科教員に連絡。学科教員は参観科目を選択。参観者は授業担当者に個別に参観する旨を連絡。

③　公開日に参観する。

〈公開受容一覧及び参観状況〉【冬学期】

担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	備考	参観者
矢羽野隆男	11 月 20 日	水	4	古典Ⅱ（中国）	国語書道免許・教科必修	

矢羽野隆男	11 月 20 日	水	5	古典Ⅱ（中国）	国語書道免許・教科必修	
矢羽野隆男	11 月 25 日	月	1	教科教育法(国語) Ⅱ	国語免許・教科必修	
源健一郎	11 月 11,18 日	月	5	教職実践演習	国語書道免許・教職必修	矢羽野・松山
坂田達紀	11 月 13 日	水	4	大学基礎演習Ⅱ	卒業必修	
田島智子	11 月 20 日	水	4	日本語文法Ⅱ（古典）	国語免許・教科必修	
戸田文明	11 月 11 日	月	1	日本史概説Ⅱ		
松山雅子	11 月 27 日	水	2	教科教育法(国語) Ⅳ	国語免許・教科必修	坂田・森嶋・麻生
南谷美保	11 月 13 日	水	2	日本文化史Ⅱ		
高橋美奈子	11 月 14 日	木	4	日本語文法Ⅰ(現代)	国語免許・教科必修	
高橋美奈子	11 月 20 日	水	1	講読Ⅰ（日本語学）	国語免許・教科選択	
高橋美奈子	11 月 28 日	木	1	日本語学Ⅱ	国語免許・教科必修	
麻生迪子	12 月 6 日	金	3	日本語教育学概論Ⅱ	日本語教員プログラム	今田・高橋・田島
今田健太郎	11 月 13,20,27 日	水	2	サブカルチャー論		
森嶋俊行	11 月 13,20,27 日	水	5	人文地理学		

Check（評価）

（1） 参観者による参観シートの記入・送付

参観後、参観者は参観シートに感想・問題点を記入。授業担当者に送付する。

（2） 授業担当者による参観シートの分析

授業担当者は参観シートの内容を把握。「評価できる点」「改善すべき点」「検討を要する点」「今後への展望」を分析して、合評会に備える。

Act（改善）

12 月 26 日（木）5 時間目に合評会を実施。参観があった科目について、意見を交換。指摘された問題点について、他の科目にも共通する事例を上げながら改善案を出し合った。

なお、参観授業は 3 科目に集中したが、その原因は、日本学科の柱である国語教員養成授業と、新たに日本学科の柱となる日本語教員養成プログラムの授業に対する関心が高かったためと考えられる。

合評会の詳細は下記の通り。

① 源健一郎「教職実践演習」参観者：矢羽野・松山

合評会：模擬授業で、学生にコメントシートを書かせているが、学生はコメントシートを書くのに集中しがち。模擬授業を聞くことが疎かになっているとの問題が提起された。コメントを書く時間を長めに与える、という解決策が提案された。

② 松山雅子「教科教育法（国語）Ⅳ」参観者：坂田・森嶋・麻生

合評会：プリント配布などの授業準備にかかる時間を減らせないかという指摘があったと、報告された。

③ 麻生迪子「日本語教育学概論Ⅱ」参観者：今田・高橋・田島

合評会：応用実践が流れ作業になっているという指摘があり、学生からもゆとりが欲しいという意見があった、との報告があった。解決策として、教える内容を少し減らして応用に時間をかけるという提案が、授業担当者からなされた。

（文責：田島智子）

学科独自の取り組み

６　プレエントランスガイダンスにおける教育的取り組み

【第１回】

Plan（計画）

前年度の振り返りにて、担当した複数の教員から内容リニューアルに関する意見が出ていたため、学科会議で検討した。

〈前年度までの内容〉

(1)出席教員自己紹介

(2)教員によるブックトーク

(3)在学生２名のスピーチ（入学までにしておくべきこと、大学生活について等）

(4)友達作りのためのコミュニケーション活動を数種（在学生が説明・指示）

(5)茶話会（在学生も交えて）

リニューアルの主眼は「これまでプレエンを友達作りの機会としていたが、より学修的内容にしては」ということである。検討の結果、次のように計画した。

〈今年度の内容〉

(1)出席教員自己紹介

(2)在学生（「日本学表現演習Ⅱ」ブックトーク優秀賞者）によるブックトーク

(3)在学生のスピーチ（入学までにしておくべきこと、大学生活について等）

(4)日本学科１年次基礎的必修科目での学びと同様の活動（内容：日本語表現に関して　形態：グループワークによる課題実践）

(5)茶話会（在学生も交えて）

Do（実施）

・日時：R 元年 11 月 16 日（土）14:30－16:30

・参加教員：坂田、高橋、松山、源、矢羽野

・協力学生：１年生６名

プログラムは上記計画の通り。(2)(3)(4)の具体的内容を補足する。

(2)谷崎潤一郎作品３冊の紹介（レジュメ併用）

(3)自身の経験を踏まえた大学生活における注意点、助言、入学までにすべきこと（スライド併用）

(4)「日本学科的課題に取り組むグループワーク：日常の言語表現を見直す・読み手のことを考えて書く」…「書くトレーニング」の一環として、日常的な日本語表現を題材とする実践的な課題（素材を元に問題点を発見し、改善点を案出→話し合いを経てよりよいものに書き直す→成果を発表）にグループで取り組むもの。

Check（評価）

大きい改変をした(2)(4)については、それぞれ次のようなプラス点があったと評価できよう。

(2)ブックトーク担当者を在学生にしたことで、参加者に必修授業での学びについて知らしめ、また学生のうちに身に付けるべきプレゼン技能の目標（モデル）を示せた

(4)メインの活動の変更で、学修的内容を扱いつつ、グループワークという形ゆえに友達作りの一助にもなった。参加者に、今後の学科での学修方法について知ってもらう機会になった。

Act（改善）

次のようなことが次年度への検討課題として挙げられる。

・(4)を学修的内容にしたことで、説明・指示などを教員が出すことになり、在学生の活躍の機会が例年より減じた（グループワーク時のサポートに限定されていた)。プレエントランスガイダンスにおける在学生の活躍は、在学生の能力向上のほか、新入学生に日本学科生の一種のお手本を示す意義もあるので、活躍の機会はできるだけ多いほうが望ましい。次年度以降も学修的内容をメインに実施するならば、在学生の活躍機会をより増やす方法を考える必要があると思われる。　（文責：高橋美奈子）

７　「パフォーマンス実践演習」

P（計画）

１．授業の概要

この科目は、ヴォイストレーニング、口頭表現、身体表現などの諸要素を実習し、それらを踏まえながら、「他者への理解」あるいは「コミュニケーション」について取り扱ったパフォーマンスを、グループごとに創作し、発表する演習として設計した。受講者として想定するのは、教壇に立つ教職を目指す者や、企業においてよりよい協働を目指す者である。到達目標は「声をしっかり出してパフォーマンスを行い、他者にそれを見せることを通じて、他者とのコミュニケーションについて理解を深めるとともに、そうして得られたものを主体的かつ実践的に表現しながら行動できる」ことである。

２．R1 年度についての計画

大枠は前年度を踏襲したが、次の点に改変があった。

・従来の「朗読」（文学的文章の朗読が中心）をやめ、「発話・口頭表現」として、文章ジャンルを広く取り、扱われる題材に幅を持たせ、「話す」技能の幅も広くなるようにした。日本学科生の多様化が進んでいることを考慮してのことである。

・講師の交代

〈ヴォイストレーニング〉例年依頼していた講師が本務校での職務と日程重複のため出講できなくなり、紹介された方にお願いした。

〈発話・口頭表現は〉上述の内容改変に伴い、新しい方に依頼した。

D（実施）

１．授業開始前の準備

・1 年生に向け、授業紹介を行った（前年度受講者に、1 年生必修授業に来てもらい、受講の感想などを述べてもらった）

・要件として、6 月末の「志望理由書」提出を課した（この必要性は、シラバスや学期前オリエンテーションなどで周知)。これは従来から行っていたが、今年度は特に履修登録者多数（38 名）につき、これまでより本格的なもの（400 字の作文で自分のパフォーマンス力の現状認識や目標について記す）にしてハードルを上げた。→28 名が提出。作文内容に問題

（書くことや、授業内容を誤解している）のある者もあったが、作文内容での選別はせず、提出者全員の受講を認めることにした。（ただし、実際には出席しなかった者 3 名）

２．授業実施

・2019 年 8 月 19 日～22 日、各日 4 コマ実施。

・受講者：7 セメ 1 名、5 セメ 2 名、１セメ 22 名

・ヴォイストレーニング、身体表現、口頭表現のレッスンを重ねつつ、グループで一つのパフォーマンスの創作に取り組んだ。各日、ポートフォリオを用いて振り返りを行い、活動の成果や自分の到達段階を確認した。最終日の 3 コマ目に各グループのパフォーマンスを発表し、最後の時間に授業全体についての振り返り、その報告会を行った。

授業スケジュール

	8/19（月）	8/20（火）	8/21（水）	8/22（木）
1 限	・日本学科教員より授業説明、各自の目標の確認 ・ヴォイストレーニング	身体表現のエクササイズ	身体表現のエクササイズ	ヴォイストレーニング
2 限	ヴォイストレーニング	身体表現のエクササイズ	身体表現のエクササイズ	創作パフォーマンスリハーサル
3 限	身体表現のエクササイズ	発話・口頭表現のエクササイズ	発話・口頭表現のエクササイズ	創作パフォーマンス発表会
4 限	・身体表現のエクササイズ ・グループワーク	グループワーク	グループワーク	振り返り

C（評価）

【教員・講師の側から】

・授業の特性上、適性人数として 10 数名程度が望ましく、これまではその人数に収まってきたのだが、今年度は受講者が 25 名（1 名は途中で脱落し最終的に 24 名）という多さになった。そのことで、教える側からするとやや困難を感じる部分があった（教室（リズム室）の大きさ、受講者一人当たりに使える時間などの面）。

・P（計画）に記したように、「話す」に関する内容を「朗読」から「発話・口頭表現」に改変（拡大）した。これにより実践課題も、従来のような既存の文章を読むものだけでなく、「自分の好きなものを宣伝する CM スクリプトの創作とプレゼンテーション」など、受講者の創作力やプレゼン技能を磨くものにも取り組み、幅広い「話す能力、技術」の向上につながっていたと思う。

【受講生の側から】

授業アンケートより、以下の項目の結果を示す。（回答者 24 名）

Ⅰ　３つの領域の授業内容についての評価（５～１）

｛５＝とてもよかった　４＝よかった　３＝ふつう　２＝あまりよくなかった　１＝よくなかった｝

	5	4	3	2	1	平均点
ヴォイストレーニング	4	9	7	3	1	3.5
発話・口頭表現	12	11	1	0	0	4.46
身体表現	22	2	0	0	0	4.75

Ⅱ　授業内容、カリキュラムが自分の目標にとって適切であったと思うか（５～１）

｛５＝非常に適切だった　４＝かなり適切だった　３＝何とも言えない

２＝あまり適切でなかった　１＝全く不適切だった｝

5	4	3	2	1	平均
11	11	2	0	0	4.38

Ⅲ　「パフォーマンス実践演習」の授業全体についてどのように感じたか（５～１）

｛５＝大変有意義だった　４＝それなりに有意義だった　３＝何とも言えない

２＝どちらかと言うとなくてもよかった　１＝その他（　　）｝

5	4	3	2	1	平均
15	9	0	0	0	4.63

Ⅳ　この授業は日本学科の他の学生にも薦めたい授業だと思うか（５～１）

｛５＝大いに薦めたい　４＝薦めていいと思う　３＝何とも言えない

２＝あまり薦めようと思わない　　１＝全く薦めようと思わない｝

5	4	3	2	1	平均
8	14	2※	0	0	4.25

※「２」回答者の理由…「人による」

概ね高い評価を得たと思われる。また、ポートフォリオに記した振り返りでも、「この科目を受けて自分に変化を｛感じた／特に感じない｝」、「この授業で得た力を他でも応用できると｛思う／思わない｝」といった項目で、ほとんどの受講生が「感じた」・「思う」と回答していた。

A（改善）

改善すべき課題としては、次のようなことが挙げられる。

・ヴォイストレーニングの授業評価があまり高くなかった件について

今年度については、急に講師が交代したという事情もあり、引き継いだ新講師が、前講師の内容や方法を十分に消化できていない面があったのは否めない。授業評価にもそれが反映したように思われる。次年度も同じ講師が出講予定だが（従来の講師の本務校職務の都合による）、次年度については前任者の内容や方法にこだわらず、必要な内容を、講師自身のやりよいようにしてもらえばよい旨伝えているので、この点は改善されるのではないかと思われる。

・「評価」の所でも記したが、授業の適性人数（十数名）を受講希望者が上回った場合にどうするかという問題がある。志望理由書提出が一種のハードルとして働いているが、それでも今年度の提出者は 28 名に上り適性人数を越えた（実際に受講したのは 24 名だったが、それでも適性人数以上）。今年度は志望書の内容による「選別」は行わなかったが、今後はどうするのがよいか、検討が必要である。

・上とも関係するが、登録はしたものの受講できないことになった者（理由書未提出者（これは自己責任であるが）、提出したが内容で選別に漏れた者（今後そのような人が出る可能性がないとは言えない）など）の履修を後から取り消すことが、現在の教務制度上ではできず、そういう学生が不利益を蒙る（GPA が下がる）ことになってしまうという懸念がある。この点をいかに解決すべきか。制度を変えずに実行できる案としては、志望理由書提出の時

期を早めて履修訂正期間以前に設定することが挙げられるが、これにはあまり意味がないと思われる（例年受講者が多いのは１年生だが、１年生は大学生活を数か月送ってみなければ、自分のパフォーマンス力の現状認識や目標を立てることが十分できないであろうから）。この問題の解決も今後の課題である。　（文責：高橋美奈子）

８　問題を抱えた学生への指導、及び学科内での情報共有について

Plan（計画）

（１）　問題学生の指導

目的は、問題を抱えた学生、とくに欠席過多の学生を指導して、ドロップアウトを防ぐことである。

方法としては、ポータルサイトに掲示している**「日本学科の学生指導ガイドライン」**に従って、各担任が問題のある学生を指導する。

ガイドラインの主たる内容は下記のとおり。

・３科目３回以上欠席した学生は、本人を呼び出して面談する。 ・５科目３回以上（「３科目５回以上」を改定した）欠席した学生は、保護者と電話や手紙で連携する。

＊**「日本学科の学生指導ガイドライン」**：平成 29 年度に学科長と学生支援委員が相談の上作成し、学科会議で承認を得た。その以来、改定を経て現在に至る

（２）　学科内での（１）の情報共有

教員は担任として、また科目担当者として、ポータルサイトに設置している**「日本学科共有の学生支援ファイル」**に、指導内容を書き込む。ファイルには「担任教員による書き込み」と「科目担当者による書き込み」の欄を設けている。

＊**「日本学科共有の学生支援ファイル」**：平成 29 年度に学科長と学生支援委員が相談の上作成し、学科会議で承認を得た。それ以来発展的に活用し、現在に至る。

（３）　配慮申請学生の見守り

授業配慮申請をした学生のその後を見守る。

Do（実施）

（１）　問題学生の指導

ポータルサイトに掲示している「日本学科の学生指導ガイドライン」に従って、各担任が問題のある学生を指導した。

（２）学科内での（１）の情報共有

ポータルサイトに設置している「日本学科共有の学生支援ファイル」に、随時、担任が問題のある学生の状況・指導内容を書き込んだ。また、科目担当者も単位取得不可につながりそうな情報を書き込んだ。

さらに、毎月開催している学科会議において、担任が「日本学科共有の学生支援ファイル」を参照しながら口頭で説明。共有ファイルに書き込んだ情報を補完し

た。

（３）配慮申請学生の見守り

配慮申請にも拘わらず、授業に適応していない学生を見守った。対応方法は下記のとおり。

① 関係教職員による話し合い（出席者は、学生支援副センター長田原先生、学生支援センター職員裏野さん、日本学科学科長源先生、担任戸田先生、学生支援委員田島。）

② 学生相談室カウンセラーとの連携。

③ 保護者との連携。

Check（評価）

（１）問題学生の指導

①量的評価（下記表を参照のこと）：平成 30 年度と比較すると、令和元年度は「担任教員による書き込み」「科目担当者による書き込み」の双方とも、約４０％増となった。指導がより遺漏なく丁寧に行われるようになってきていると言える。

②質的評価：具体例は割愛するが、内容を検討してみると、担任による指導がきめ細やかになっていることが伺える。

〈令和元年度　問題学生の指導数―平成３０年度と比較して―〉

	平成 30 年度		**令和元年度**	
	担任教員による書き込み	科目担当者による書き込み	**担任教員による書き込み**	**科目担当者による書き込み**
１年生	24 名	13 名	**20 名**	**10 名**
２年生	28 名	３名	**48 名**	**17 名**
３年生	32 名	５名	**33 率**	**２名**
４年生	14 名	４名	**32 名**	**３名**
過年度生	７名	なし	**15 名**	**２名**
計	109 名	25 名	**148 名**	**34 名**

（２）学科内での（１）の情報共有

昨年度からの書き込みの蓄積により、問題のある学生について、これまでの経緯を詳しく把握することができるようになった。また、科目担当者が単位取得不可の恐れが生じていることを逐次知らせてくれるため、担任が適切に指導できるようにもなってきている。

（３）配慮申請学生の見守り

配慮学生に必要な対応を相談し実行してきたが、結果的には該当学生の成績は振るわず、対応がうまくいったとは言えない。

Act（改善）

（１） 問題学生の指導

担任による指導がきめ細かくなってはいるが、退学者防止という観点からは必

ずしも効果を上げていない。保護者との連携をいっそう強めたい。

（２） 学科内での（１）の情報共有

科目担当者の書き込みが増えてきてはいるが、もう少し伸ばす余地があると考える。科目担当者の情報は学生を指導する上で重要である。さらなる書き込みを呼び掛けたい。

（３） 配慮申請学生の見守り

配慮申請だけでは対応しきれない部分については、引き続き見守っていく必要がある。

（文責：田島智子）

国際キャリア学科

1．はじめに

国際キャリア学科では、教育課程編成・実施の基本的な考え方として、グローバル化した社会、より複雑になりつつある国際問題に対処できる能力・知識・スキルを体系的、実践的に学ぶことを目的として教育課程を編成している。1、2 年次では語学力の向上に重点を置き、さらに 3 年次からは各自の進路・適性に応じて、①英語・英語教育コース、②国際理解・協力コース、③国際ビジネスコースの 3 領域からそれぞれ指定の科目を選択履修します。3、4 年次では「専門演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ(ゼミ)」を受講し、希望者は「卒業研究」に取り組む。

1）1 年次においては、「英文法Ⅰ・Ⅱ」「Extensive Reading 初級Ⅰ・Ⅱ」「ベーシックコミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」「キャリア英語入門Ⅰ・Ⅱ」を必修とする。加えて、マクロ経済学、英語圏文化概説の授業が選択し、世界の文化や経済についての基礎的知識を学んでいる。

2) 2 年次においては、中級レベル以上の英語力や国際的な感覚を身に付けるために、「Extensive Reading 中級Ⅰ・Ⅱ」・「ベーシックコミュニケーションⅤ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ」を必修として受講する。また、それら学科共通領域に加え、3 年次からのコース制のコアであるゼミ(専門演習)での教育に向けて、①英語・英語教育コースでは、「Reading(Culture)」「Reading(Society)」「Reading(Literature)」「英語学概説」「英語学」、②国際理解・協力コースでは、「国際理解教育」「異文化共生論」、③国際ビジネスコースでは、「国際ビジネス論」「国際経済学」「グローバル・ファイナンス」、の 3 つの領域を土台として科目を選択し、次年度への知識固めに取り組む。

3) 3 年次からは、各自の所属する専門演習(ゼミ)を中心に、学生は各自、コース領域や進路・適性に応じて科目を選択し、履修していく。①英語・英語教育コースでは、「Reading(Language)」「Extensive Reading 上級Ⅰ・Ⅱ」「アドバンストコミュニケーションⅠ～Ⅷ」等、②国際理解・協力コースでは、「国際政治学」「国際問題論」「英国史」「社会情報論」等、③国際ビジネスコースでは、「貿易実務Ⅰ・Ⅱ」「金融システム論」「貿易理論」等の授業が選択できる。また、学科共通領域として、「英米文化論」、「異文化理解」、「国際コミュニケーション論」等も履修することができ、ゆるやかなコース制として学生の卒業要件を満たすようにしている。

近年、社会において、英語の能力がより一層問われるようになってきている。本学科としては、学生の英語の能力向上のため、TOEIC や英検などの資格取得を学生に促していくとともに、異文化に対応できる柔軟な考えを持った学生を育成したいと考えている。し

たがって後述するが、このような授業を通した指導に加えて学生の自主的学習をサポートする e-learning を希望者に無償で提供し、さらに自主勉強会を応援することで学生の学びの質的保証を確保するように取り組んでいる。加えて、観光領域の拡充に取り組むことで、使うための英語を実践的に学ぶ取り組みに参入している。

2．大学基礎演習について

（1）大学基礎演習Ⅰ

全学共通の初年次教育の一環として、建学の精神を基に、大学における専門能力の滋養と大学生活を有意義に送るために必要な情報や技能を提供する。大学生として求められる基礎的な知識・技能・態度を修得し、大学および学部・学科・専攻コースへの所属意識を持ち、4 年間の大学生活を見通して、学科の特色が身に着くような講義を展開する。

大学基礎演習Ⅰを通じて、国際キャリア学科に所属している学生は、自ら学ぶ意義と課題を把握することになる。まず、本学の建学の精神について理解させ、卒業後の進路について話し合い、キャリア形成のための大学生活について教員が学生に説明し、毎回の講義ではビジネスで必要な英語の単語を暗記する演習を行っている。大学基礎演習Ⅰで学ぶビジネス英単語は 300 語あり、これらを 1 年生から暗記することで、TOEIC の点数向上とビジネスやキャリア教育についての基本的な知識を習得させることが目的である。

（2）大学基礎演習Ⅱ

大学基礎演習Ⅰで学んだ学習の意義を踏まえながら、より主体的に大学の学修に取り組むことができるよう、アカデミックスキルを向上させることを目標とした。初年次の学びをより確実にし、2 年次以降の高度な学びへスムーズに移行できるように講義を展開した。大学基礎演習Ⅰでも行われたプレゼンテーションをより発展させ、充実した内容となるよう、プレゼンテーション大会の指導が行われたほか、アカデミックスキルなどの授業については 3 人の本科目担当者が分担して授業を行った。

授業の内容は、図書館の活用方法や文章の読み方、発表の聞き方・質問の仕方、調査・分析結果のまとめ方、プレゼンテーションの構成・引用の規則・参考文献の提示方法などであった。また、大学在学中と卒業後に必要とされるリテラシー能力として、情報収集力や情報分析力、課題発見や問題解決のための考察力、プレゼンテーション準備における協働力や発信力について取り上げ、こうした能力の向上を目指すにはどういう方法があるのかについて理解できるように授業を展開した。

3．授業相互参観について

11/6	水 2	アドバンスト コミュニケーションIII	ケリガン	4-216
11/7	木 3	Extensive Reading 中級II	Enbody	4-216
11/8	金 2	中国語II	李	4-212
11/11	月 3	英語学(合評会は、授業後教室ないし講師室にて)	山崎	4-259
11/13	水 4	貿易実務II(合評会も 4-312 にて)	深見	4-312
11/13	水 5	英語科教育法IV	奥羽	4-307
11/13, 11/20	水 2	ビジネス英語II(合評会は授業終了後)	中井	6-354
期間内いつでも可	月 3	キャリア英語入門II	柴田	4-207
期間内いつでも可	金 1	米国史	四方	6-353
期間内いつでも可	金 2	キャリア英語V(アドバンスト)	神野	4-309

「キャリア英語入門II」　担当　柴田　　月曜 3

＜授業の流れ・指導スタイル＞

教材は TOEIC 指導教材で、主に TOEIC をこれから学ぶ学生用の入門教材である。授業の前半に単語テスト、Listening 活動を実施し、残った時間で Reading 活動（本日は Part7 の single passage）の解説を行うといった流れであった。学生が予習をしているのが前提の授業であるので、基本的に学生に当てながら問題を解答していくが、それと同時に学生の理解を確認しながら TOEIC の語彙や文法、文脈の情報を付け加えていく授業スタイルである。

＜総評・コメント＞

習熟度別クラスの一番上、A クラスであるため、英語ができ且つモチベーションが高い学生がそろっていることもあり、授業の進行はスムーズだった。教員の質問に対し、各生徒がきちんと答えている場合が多く、普段の授業規律もきちんとされていることがわかる。また、授業目的も明確で、教師主体の授業展開ながら学生が退屈することのないように、授業展開がテキパキしており、極めて充実した授業であったと思われる。あとは、いかに学生主体の学びの時間を盛り込むかといったところが 1 つの課題として挙げられるが、演習系の授業であることや TOEIC の学びとして input 情報をある程度叩き込むことを授業者が目的としている点から、タイミングを図って実施する予定なのであろうと推測される。学生の成長がとても期待できるよい授業であった。

奥羽

単語テスト、リスニング、文法、そして長文読解と総合的に教授している点に感銘を受けた。しかも、その一つ一つを丁寧に説明している。本講座はTOIEC講座であるが、実際に試験に出るポイントがあれば、頻出単語や設問パターンなど漏らさずに指導が行われている。

受講学生は毎回予習を行った上で授業に参加しており、未知の単語等は事前に調べた上で、授業では担当教員から解答の「理由」を尋ねられるなど、効率的に、かつ学生自らに考えさせ必然と能力がつくように構成されている。

担当教員は学生を指名する時にはそれぞれの名前を呼ぶようにしており、指名された学生の発言も声の通った感じで聞きやすい。また、日本語発音とネイティブの発音の差異などに注意しており、学生はよりネイティブに近い発音法が身につくとともに、リスニング能力の向上にもつながっていると推察できる。

もちろん、授業中の私語等は一切なく、学生の絶大な信頼の下、授業が滞りなく進んでいた。

以上、参観者自らも今後英語を指導していく上で大変感銘を受けたとともに、参考になった。

恵木

「ビジネス英語II」　担当　中井　　水曜2

（1）授業に関して

授業は主に、教員によるパワーポイントでの話や解説と、学生が埋める形でのプリント作業により構成されていた(プリント作業にはCD音源を聞くことに基づくものも含まれている)。教材テキストは今回主に米の雇用における男女の差を扱うものであり担当教員による前振りとして日本の雇用に関する法律や状況が説明され、イメージなく英文を読むのではなく、日米比較的に理解を深められるよう工夫されていた。

本文で使われる表現に関しても、辞書にある定訳ではイメージしにくいような、本文内の文脈における意味や、日本語でピンとくる、近いイメージの紹介等されており、よりイメージしやすいようにされていた。

単にビジネス現場で必要とされるであろう英文を扱うのではなく、状況の違い(こん回のテーマで言えば男女の違いから日米の違いも踏まえている)に意識を向けさせるのは学生にとって有益であろう。

（2）学生の授業態度や施設・設備などに関して

英語の授業であるがレベル別でないことと履修生が多いためか、「内職」にふける学生が目に付いた。授業内容の有益性からおしまれる。

暖房が効きすぎ、暑すぎるのも上記の一因かもしれない。教室で調整が効かないのは改修を求めたい点である。

山崎

「貿易実務Ⅱ」　担当　深見　　水曜４

（１）授業に関して

貿易実務に関する授業で、参観した日はプリントで授業が行われていた。実務に関する略語や英語名を日本語名に直す作業が主であった。教員が学生にプリント面に解答を記入するように指示し、その後、学生をあてて黒板に解答を書かせていた。単調にならないように工夫をされていた。ほとんどの学生が正解答であった。用語の内容が難しいものについては答え合わせをした後で、教員が黒板で説明をされており、分かり易かった。

大人数の学生が出席している授業であるが、学生に問いかけをし、黒板に解答を書かすなどして、注意喚起等を心掛けて授業をされていることがわかった。

（２）学生の授業態度や施設・設備などに関して

大人数の学生が授業を受けていたが、全体的に静かに授業が行われていた。ただ、どこの大人数の授業でもよくあることだが、後側に座っている一部の学生がコソコソと話をしていた。空調設備について、その日は暖かかったが、暖房が入っていたために、やや暑く感じられ、学生も少し不快に思っているようだった。各教室で調節ができれば理想的である。

柴田

「英語科教育法Ⅳ」　担当　奥羽　　水曜５

授業の流れは、学生の英語のプレゼンテーションののち、担当教員からの指導、アドバイスが行われていた。中学校などの授業の本題に入る前の導入部分で、いかに英語を使って生徒とのコミュニケーションを図っていくべきか考えさせ、そのための実践と振り返りなどが行われていた。受講生は少人数ではあるが、どの学生も、教員を目指すものとして意欲をもってプレゼンテーションに取り組んでおり、担当教員の日頃からの指導がとても行き届いているものと感じられた。学生のプレゼンテーションは学生同士でも評価させていた。ルーブリックを用いて評価を行い、評価結果を互いに渡しあい、自分の良い点、悪い点など確認させていた。また、その後の学生の出来栄えについての担当教員からのコメントは、各学生に対し的確かつきめ細やかになされており、英語教育者の育成に大変役立つ内容と思われた。そのほか担当教員による効果的な英語プレゼンテーションも披露され、全体的に見て、学生の成長に非常に役立つ構成であったと評価できる内容であった。

深見

「Extensive Reading 中級 II」　担当　エンボディ　　木曜 3

（1）授業に関して

•He gives individualized feedback on student's performance.

•Group work—book reports. Conducted in Japanese. Students seem to be engaged in the activity and doing it properly. He goes around to check the students are doing the activity. However, after students finish the activity, they talk about other things or give their group members more information than they should. This could encourage students to use these for their own reports.
Vocabulary activity: students use a worksheet to complete the vocabulary activities by themselves. It becomes a form of assessment. Students self-assess. They could cheat.

•Silent reading time: students read for the remainder of the class. Some students talking or forgot their book. He warns students for not reading. Some students not doing the activity, but most are.

（2）学生の授業態度や施設・設備などに関して

•More students doing the activities than I thought they would.

•It's difficult to get all students doing the activities in Extensive Reading.

•XReading will be a good way to check if students are reading, give them easy access to books, and it's user-friendly.

ケリガン

The main purpose of the class was to develop a habit of reading something in English every day without being afraid. This class should be enjoyable and help students become confident in reading in English on a regular basis.

Students read books or magazines that were of interest to them and easy to understand in English. Then they wrote a summary of what they read each week which could be in Japanese or English. They had to keep a record of every book they read.

During the class, students were working hard. The last 30 minutes of the class was used for silent reading, which seemed to be a time to relax and enjoy reading the book they brought to class.

The class was so well-organized that I learned a lot through the observation. The conductor explained that words learned in the context of something they were reading for fun

went into their long-term memory.

I also hope they will be able to remember the words and phrases for a long time.

神野

「米国史」　担当　四方　　金曜 1

（1）授業に関して

①プリント資料は A3 用紙で 4 枚、19 世紀末のアメリカ産業革命の到来につて、進む都市化、取り残される農村、両者の矛盾、社会運動を紹介。資料は豊富で、また学生が講義を聴きながらメモを取るように資料を学習者目線から作成しているので、良かったと思う。そして、当時のアメリカ状況がすぐわかるように、都市化、移民、鉄道建設などの地図も学生に提供、きわめてわかりやすい資料を作成していました。

②パワーポイント：当時の風刺漫画を見せながらアメリカでの社会問題をわかりやすく説明し、学習者に興味を持たせるような授業でした。特に風刺漫画の内容について学生に質問しながら進めていましたので、学生には印象に残る授業ではないかと思います。習うところであろうと思います。

（2）学生に関して

①一限目の授業でしたので、遅刻する学生が 3 名いました。

②教師が授業中によく学生に質問を投げていましたので、学生は授業に集中していました。きちんと回答する学生も、できない学生もいました。授業の秩序は良かったですが、寝ている学生も 2，3 人いました。

（3）改善したい点

①内容が多すぎて、中心的内容がはっきりしませんでした。学生が教師の講義内容についていけないのではと感じました。

②資料作成がすごく詳細ながらも学生の目線で作成しているところ、学生が授業を聞きながらメモができるところを私の今後の授業に取り入れたいと思いました。

③授業中に常にささやかの問題でも質問を行い、学生が授業に集中できるように工夫しているところが私の今後の授業に取り入れたい点だと思います。

（4）学生の授業態度や施設・設備などに関して

全体的に授業の秩序もきちんと整えていましたが、2 人ぐらい学生の質問に対する答えが真剣ではなかったように見えました。授業中に寝ている学生も 2、3 人ぐらいいました。施設・設備に関しては特にありません。

李

「中国語Ⅱ」　担当　李　　金曜２

当該授業には私が担当するクラスの学生中心であったためか、後ろに教員として私が出席していることに、はじめは少し緊張しているようであった。そのため、初めの CD を使ったテキストの文章についての発音練習はやや静かな様子であった。5 分程度の教員との練習の後、学生同士のペアによる会話練習が行われていた。教員が一組ずつ発音チェックしていたが、それができるのはネイティブ教員ならではの強みであるように思われる。また、各学生も発音練習しながら、スマホ等を使い、発音の確認を行っていた。ただし、一部の学生の間では、スマホでネットに接続して遊ぶなどの不適切な行為も確認した。

頻出単度の練習、文法解説があり、口頭で復習問題の説明を行ったあと、配布プリントにて練習問題を学生に解かせていた。配布プリントは、テキストには記載されていないやや高度な内容を含んでいたようであるが、簡潔にわかりやすくまとめられて工夫されていた。

文章例題の練習や書き取り練習がその後続き、学生一人一人に丁寧に指導していたのは高く評価できる。全体としてスムーズな授業運びであったと思われるが、その分、学生にとってややメリハリがつきにくいのかもしれない。

四方

「キャリア英語Ⅴ(アドバンスト)」　担当　神野　　金曜２

テキストとして、「中郷慶他著『Boost your skills for the TOEIC Test with the Third Man』、㈱英宝社」を使用し、授業は、映画「The Third Man（第三の男）」に出てくる台詞を基に、実際の TOEIC テストの質問を想定して進められている。まず、学生には、毎週、英単語を事前に予習させた上で、テキストに掲載されている英単語の意味と使い方を説明することから授業が始まる。11 月 15 日の授業では、映画のシーン Act5 の紹介であった。英単語の修得度の確認と Dictation が実施され、その後、英語を聞いて適切な語句を空所に入れる作業を学生にさせることで、学生自らが問題に取り組み解答するように授業が工夫されていた。

TOEIC で出題される問題に良く似た問題を通じて、学生に問題を解かせ、学生がある程度内容を把握できたら、実際の映画（英語の字幕付き）を観ることで、理解をさらに深めるという形式で、講義が進められていた。

受講している学生の中には、あまり真面目ではない学生も交じっており、授業中に居眠りをしている者、板書された解答をメモしない者も散見された。

映画は少し古い時代（1940 年代の映画）のもので、学生にとっては、退屈で理解しにくい面があるものの、授業は、英単語の説明から、英文及び英語の構文の説明がなされ、その後、TOEIC 試験で出題される選択問題に取り組ませ、解答を板書して説明するという順で

進められており、真面目に学習する学生にとっては、非常に有益な授業であると感じた。

中井

・学生の授業態度や施設・設備などに関して

受講していた学生は、それなりに英語ができるという意識があるためか、教員がテキストの解説を行う時に幾らか私語する行為が見られた。おそらく、聞き逃した部分を学生同士で補足している場面であろうが、教員も全体を見渡して対応できたと思われる。（ただしこの状況は、担当する教員が、参観する他の教員の前で授業の単元を進めなければと少し緊張していたためであると思われる。）

４．学科独自の取り組みについて

（1）『てんしば」プロジェクト

「てんしば」プロジェクトとは、天王寺の「てんしば」エリアにあるゲストハウスで国際キャリア学科の学生たちが研修も含むインターンシップ業務に参加するというプロジェクトである。学生は、国際キャリアインターンシップという科目を履修登録すれば、卒業の際の単位としても認められる。

国際キャリア学科の学生たちは、様々な国からの観光客の方々に、いかにおもてなしできるかを考え、日々行動している。毎年、ゲストハウスでの接遇やイベントプロデュースをより良いものに仕上げるためイベントチームごとの中間発表会が行われている。令和元年度も、学生たちがゲストハウスでお茶（茶道）の指導をしたり、習字を教えたりと海外からの旅行者がこれまでに経験したことがないイベントを企画した。年度末には、反省会も込めて、近鉄グループの人たち及び教員に向けた最終報告会を実施した。

（2）Jump Start English (JSE)

Jump Start English (JSE)は、国際キャリア学科の学生達が、AO 或いは推薦入試に比較的早い時期に合格し、本学科に入学するまで時間のある高校生に向けて、土曜日の夕方に実施している英語教育プログラムである。学生が中心となって高校生に英文法とコミュニケーションを基礎から教えるというもので、毎年実施されている。令和元年度においても 1 回（10 レッスン）実施された。ただし、コロナウィルスの蔓延のため、2 月 29 日からは実施を中止したので、実際に実施できた回数は 6 回であった。教える学生も教わる高校生も毎年メンバーが変わるため、講義の方法や話し方などについては、国際キャリア学科の全教員が、交代で毎回本プログラムに参加し、学生に指導している。本プログラムを通じて、入学前に英語の基礎力が身につくことに加えて、新入生同志が友好を深めることも可能で、毎年好評を得ている。

(3) TOEIC ゼミ

TOEIC ゼミとは、柴田講師が中心となってボランティアで毎週木曜日のお昼休みに、学習意欲のある数名の学生向けに実施している TOEIC や英検受験のための講座である。この講義を受講した学生の中には、TOEIC で 800 点以上を獲得した学生や英検準 1 級に合格した学生もいて、令和元年度においては、高得点を獲得した学生が、これから高得点の獲得を目指す学生に個別指導することで、学生同士の協力支援体制が確立されてきている。

(4) 海外研修プログラム（スタディ・ツアー）

国際キャリア学科の教員が中心となって取り組んでいるスタディ・ツアーである。カンボジアやラオスなどアジアの貧困国を訪問し、現地の小学生と友好を深め、現地でボランティア活動などを行う。国際キャリア学科の教員が、学生を引率し、事前・事後の研修も含め、参加する学生の指導を行っている。学生たちは、現地で様々な体験をすることで、異文化を理解するための能力を養うことが可能となる。令和元年度においては、ラオスのサービスラーニング・プログラムは実施することが出来なかったが、カンボジア・スタディ・ツアーは募集をかけたものの、参加希望者が少なく（今年は 10 名集まったがぎりぎりだった)、どちらのプログラムも実施出来なかった。今年度はどのようなプログラムを開催していくのかは、コロナウィルスの終息状況をもとに判断したい。

(5) ニュージーランド留学 100 万円奨学金プログラム

国際キャリア学科が実施している 100 万円奨学金プログラムとは、国際キャリア学科の学生が毎年ニュージーランドに 6 名～10 名（最大）の学生が留学し、オークランド大学の付属の英会話スクール（ELA）で 4 月から 8 月までの 4 か月間の語学研修に加えて、ニュージーランドにおいて、インターンシップ（1 か月）を経験させるというプログラムである。

本プログラムは、参加を希望する学生の中から筆記試験と面接を行って学生を選抜し、選抜された学生達は自己負担 50 万円で本プログラムに参加できる。本プログラムは総額で 150 万円～170 万円程度（為替レートの変動による）の費用がかかるものの、大学がその差額（100 万円～120 万円）を奨学金として負担している。

本プログラムを終えて帰国した後、TOEIC の勉強に励み、卒業するまでに 730 点突破を目指すことになっている。令和元年度においは、令和元年 9 月に本プログラムを終えて帰国した学生 7 名のうち、2 名が帰国後まもなく TOEIC で 800 点を突破した。残り 5 名も TOEIC が 650 点～730 点で、すでに目標点である 730 点を突破している学生も半数近く出ている。また、10 月には本プログラムの新たな募集を行い、選考の結果、7 名が参加することになり、令和 2 年 3 月にニュージーランドに向けて旅立っている。ただし、周知のようにコロナウィルスの全世界的パンデミックにより 3 月末に

は帰国している。来年の２月～3 月に彼らにすでに現地に支払った授業料で授業を受ける資格を与えられないか交渉しており、また同時に彼らに国内で参加できる代替プログラムを検討している。

（６）英語による**観光ガイド研修会**

全国通訳案内士を外部講師として 3，4 回生の学生を対象として藤井寺を英語で観光ガイドしていただき、その活動に生で触れることを体験した。回数としては 2 回実施。学生には、日本文化に触れること、ガイドすること、英語を使い楽しんでもらい、喜んでもらう活動に直に触れ、様々な学びと気づきを得られる機会を与えた。現状、**多くの学生**が観光業界に興味関心を持っており、次年度に地域共創プログラムの授業を開始するための取り組みである。**→現 2 回生の観光業界への就職希望者は 20 名強存在している。**

（７）**キャリアコミュニケーションセミナー**実施

学生の大学生活でのやりがいを高める仕組みとして、より目標を明確にするために早期（1 年生時分）からコミュニケーションセミナーや、就職準備ガイダンスなどを外部講師を招いて実施し、学生の大学生活における動機付けや、目標設定への援助を行った。特にコミュニケーションセミナーでは「コミュニケーション」の取り方についてレクチャーと実践を織り交ぜることで、次年度以降の就職準備ガイダンスへの足場作りとした。

（８）TOEIC　e-learning プログラムの導入

1 回生の冬学期、2 回生以上には夏学期より Really English の TOEIC 講座を、条件を満たした学生に無償でアカウントを提供し、自律的に学ぶ学生への動機付けを行った。そういった取り組みの結果、今年度は TOEIC のスコアで 800 点以上をクリアした学生が 15 名程度でており、学生の意識に大きな変化をもたらした。

（９）ブドウ狩り観光 PR

国際キャリア学科の地域共創の取り組みとして、ユタ大学の学生と一緒に羽曳野市のブドウ園にブドウ狩りに行き、その様子をもとに PR 動画を作成した。結果として、その動画は関西国際空港で放映されることが決まっており、今年の 3 月に感謝状を羽曳野市の観光協会よりいただいた。

５．その他

国際キャリア学科は、実践的な外国語能力とコミュニケーション能力を習得し、変動する国際問題に関する基盤となる知識を身につけ、さらに、卒業後のキャリア形成に必要な知識とスキルを獲得し、グローバル化社会で活躍できる人材の養成を目的としている。

そのため、学生は、①外国語能力として、「読む・聞く・話す・書く」の各言語能力に

おいて実践的な教育を受け、②高い外国語能力に基づき、グローバル化した社会に即応したコミュニケーション能力を習得し、③環境・民族紛争・宗教・経済・金融等の国際的な問題を認識し、国際社会における日本の役割を実践的に把握する能力を身につける。④言語の背景にある歴史･文化･政治･経済等に関心を持ち、異文化理解への関心と意欲を身につける。⑤自ら課題を設定し他者と協同しながら問題解決にあたり、グローバル化社会で有為の人材となるために必要な知識とスキルを獲得することになる。

FSD 活動を通じて、グローバル社会で活躍できる人材を育成するため、今後も様々なイベントや企画を学生に提供するとともに、授業の進め方を工夫し、学生が積極的に授業に参加できるような環境を提供できればと考えている。

以上

社会学科

１．はじめに

平成 30 年度の「三つのポリシー」の改定に伴って、カリキュラム・ポリシーが改定され、社会学科の学びは、「人間・社会コース」「地域・メディアコース」「心理コース」「歴史コース」の 4 コースに再編された。令和元年度からスタートした新カリキュラムでは、「歴史」コースが新設され、従来の 3 コースと合わせて、さらに幅広い学びを、カリキュラム・ポリシーで示した「段階的かつ横断的に授業科目を配置」することにより、ディプロマ・ポリシーに示した「客観的かつ多角的にものごとをとらえ、さまざまな課題の発見と理解、そして解決にむけて横断的に思考することができる」人材の育成を目指している。

令和元年度の入学生アンケートの結果を見ると、入学を決めた理由の第１と第２を合計すると、「人間・社会」16.6%、「地域・メディア」11.4%、「心理」40.0%、「歴史」16.4%、「4 コース学べる」35.4%、「教員志望」20.6%、「公務員」15.4%、「いろいろな進路」32.6%であった。コミュニケーション能力を過剰に要求される現代社会において、その能力を補完してくれるように見える「心理」の学びは訴求力がある。一方、今年度から新設された「歴史」コースが 16.4%と健闘しており、「人間・社会」「地域・メディア」よりも多く、本学科の新たな魅力となったと考えられる。また、「4 コース学べる」が 35.4%となった点も注目に値する。大学で学ぶことのイメージで、「将来社会で活躍するために必要な力を身につけることができる」に対して、「非常に当てはまる」「ある程度当てはまる」が 97.8%であり、社会学科の場合、「将来社会で活躍するために必要な力」を、将来の仕事に直結する資格というより、一般的に社会で役立つ汎用的能力として考えている学生が多いと考えられる。それが 4 コースを自由に学ぶことで自らの能力を高めたいという指向にあらわれているのではないだろうか。そうした関連から、「自分なりの意見や視点を持つことができる」の項目が「非常に当てはまる」と「ある程度当てはまる」を合わせて 97.2%、同様に「物事を様々な角度から考えられる」96.6%、「様々な考え方の人と交流することができる」96%という高い数字を理解することができる。上記ともかかわるが、「いろいろな進路」32.6%、「教員志望」20.6%、「公務員」15.4%という結果は、固定的な進路をめざすカリキュラムにはない社会学科独自の魅力に対するニーズをあらわしている。

こうした学生のニーズを踏まえて、新カリキュラムを実際に運用しながら、その問題点と改善点を検討することが今後の課題となるであろう。

２．「大学基礎演習」について

「大学基礎演習Ｉ」の概要は次のとおりである。「この科目は、全学共通の初年次教育として、建学の精神をもとに、大学における学修と生活の意義を自覚し、大学での学修に必要な技能を獲得することを目標としています。初年次における課題を自覚し、求められる基礎的知識・技能・態度を修得し、四天王寺大学社会学科の学生としての所属意識をもち、大学生活全般および卒業後の進路についての見通しを持てるようになりましょう。大学では、高校までとは違ったアクティヴ（能動的）な学びを身につける必要があります。レポートやディスカッションなどの方法で自分の考えを表現できるようになることを目指すとともに、

将来の「生き方」を考えるための機会とします」。

また、「大学基礎演習Ⅱ」の概要は次のとおりである。「この科目は、大学における学修と生活の課題を自覚し、必要な技能を獲得することを目標しています。具体的には、夏学期の演習をふまえて、レポートの書き方、ディスカッションやプレゼンテーションのスキルなどをさらに向上させることを狙いとします。大学では、高校までとは異なったアクティヴな学び方を身につける必要があります。この科目では、さまざまな社会問題をとりあげ、テーマについてのグループ学習をすすめるなかで、「生きた学び」を体験します。そこから得たものをもとにいろいろな角度からディスカッションし、自分なりに表現できるようになることを目指すとともに、将来の「生き方」を考えるための機会とします」。

以上の授業概要に見るように、「大学基礎演習Ⅰ」では、大学での学びが高校とは異なる点を学生自身がアクティヴに学ぶ必要があることに置き、この視点から社会学科の学生として求められる基礎的知識・技能・態度の修得を目指している。また、これを通して、社会学科の学生としての所属意識を形成し、将来の「生き方」を考えていく契機としている。これに続く「大学基礎演習Ⅱ」では、学生自身のアクティヴな学びを具体的な社会問題に即して、レポートの書き方、ディスカッションやプレゼンテーションのスキルなどをさらに向上させることを狙いとしている。

これらを踏まえた「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」の到達目標は、①四天王寺大学社会学科に所属して主体的に学ぶ意義と課題を把握する、②大学生としての学びに必要な基礎的知識・技能・態度を身につける、③大学卒業後の進路など、自分の将来を社会との関係で考える、④教員や友人との適切な人間関係をつくる、である。

これらの到達目標を実現するための「大学基礎演習Ⅰ」の授業内容であるが、合同授業を基本にして、それを展開していく形式を採っている。第1回から第15回までの流れを示すと次のようになる。

第1回：履修指導
第2回：本学での学び①　建学の精神
第3回：本学での学び②　図書館の使い方
第4回：本学での学び③　パソコンの使い方
第5回：【学科合同】　先輩の話
第6回：レポート①　レポートの書き方
第7回：レポート②　ミニレポート作成
第8回：レポート③　ミニレポート講評
第9回：【学科合同】　映画『ザ・コーヴ』鑑賞
第10回：【学科合同】　ドキュメンタリー『ETV特集　鯨の町に生きる』鑑賞
第11回：ディスカッションの準備①　資料の収集
第12回：ディスカッションの準備②　資料の作成
第13回：ディスカッションとレポート
第14回：【学科合同】　大学卒業後のキャリア
第15回：レポート講評とまとめ

第 5 回に行われた合同授業（テーマ：先輩の話）は、社会学科に所属する 6 名の在学生から大学生活の様々な領域における活動を話してもらい、新入生に大学生活を自らが充実させるためのヒントを考えてもらうという企画である。登壇したのは、学生運営委員会（3 改正）、ピアサポーター（3 回生）、認定心理士資格取得（３回生）、教職志望(4 回生)、インターンシップ（3 回生）、クラブ活動（バレー部・4 回生）である。

第 9 回と第 10 回は、同じテーマを異なる視点から描いた作品を観て、そこから文化、社会に対する学生の視野を広げていこうという企画である。この合同授業を踏まえて、第 11 回～第 13 回の授業が展開される。第 14 回の授業（テーマ：先輩の話を聞こう--未来の自分を考える）では、学生が将来イメージを形成し、これからの大学生活を充実させることを目的として、社会学科卒業生３名による講演である。それぞれの所属は、大阪市立東中学校勤務（常勤講師）、司法書士事務所勤務、少林流伝統空手道文武館師範代である。

次に「大学基礎演習Ⅱ」の授業内容は次のとおりである。社会学科内での話し合いを通じて、この形がほぼ定着したといってよい。

第１回：オリエンテーション（夏学期の振り返りと冬学期の学修計画）
第２回：社会問題について考えるために（１）（社会問題へのまなざし）
第３回：社会問題について考えるために（２）（関心のある社会問題について調べる）
第４回：社会問題について考えるために（３）（関心のある社会問題についてディスカッション）
第５回：社会問題について考える（１）（ゲストスピーカーによる講演）
第６回：社会問題について考える（２）（意見発表とレポート作成）
第７回：社会問題について考える（３）（ゲストスピーカーによる講演）
第８回：社会問題について考える（４）（意見発表とレポート作成）
第９回：社会問題について考える（５）（ゲストスピーカーによる講演）
第 10 回：プレゼンテーションの基本と準備（１）（振り返りとディスカッション）
第 11 回：プレゼンテーションの基本と準備（２）（テーマ設定と個別・グループ作業）
第 12 回：プレゼンテーションの基本と準備（３）（資料整理と情報収集）
第 13 回：プレゼンテーションの実際と演習（１）（プレゼンテーションに向けた役割分担とリハーサル）
第 14 回：プレゼンテーションの実際と演習（２）（プレゼンテーションの実施と相互評価）
第 15 回：まとめ

「大学基礎演習Ⅱ」においては、まず社会問題について学生がある程度学んだことを前提にして、ゲストスピーカーに講演してもらい、それを踏まえてプレゼンテーションの基本をおさえ、実際に演習を行う。その際に、ＩＣＴを活用した、主体的・対話的な学び（アクティブ・ラーニング）を実践している。なお、ゲストスピーカーとして登壇していただいた方々は次のとおりである。第 5 回は、外部講師から「今、なぜ子ども食堂は必要なのか？～子どもを取りまく環境を考える」というテーマで、認可外保育施設、子ども食堂、語る場の提供

などについて話を伺った。受講した学生は、その講演をふまえてノートとレポートを作成した。第 7 回は、外部講師（視覚障害当事者であり、障碍者支援の実務家）による講演を実施し、視覚障害の多様性や、社会からの支援の在り方について、学生との質問等にも応えつつ講演が進められた。第 10 回は、２名の外部講師による依存症当事者の講演であった。

３．授業相互参観について

（１） 授業相互参観の実施

令和元年度の授業相互参観は、社会学科の専任教員全員が担当科目のいずれかを公開し、各自ひとつ以上の公開科目を参観する、という形式で実施した。参観者は、①授業内容および②授業方法に関して、参観カードにコメントを記入し、授業担当者はそれに対する応答を記入した。公開科目とその担当教員、参観した教員は以下のとおりである。

担当教員と公開授業科目、参観教員一覧（敬称略）

担当教員	月日	公開授業科目名	見学者
太田　健二	11/7, 21 11/11, 18	文化研究概論	大関　藤谷　茂木
大関　雅弘	11 月 25 日	社会意識論	五十川　太田
須原　祥二	11 月 11 日	日本史概説	
曽野　洋	11 月 12 日	教職論	
田原　範子	11 月 13 日	演習Ⅱ	
藤谷　厚生	11 月 21 日	フィールドワーク入門	
茂木　洋	11 月 12 日	心理学概論	
山本　誠	11 月 26 日	文化人類学	
上野　淳子	11 月 21 日 11 月 27 日	人格心理学 幼児児童心理学	平井 田中　三宅
田中　晶子	11 月 22 日	心理学実験法	
平井　秀幸	11 月 29 日	社会病理学	上野
三宅　麻希	11 月 22 日	職場メンタルヘルス	
五十川　飛暁	11 月 8 日	環境問題論	中村　山本
津崎　克彦	11 月 11 日	社会階層論	
中村　洋樹	11 月 27 日	地理歴史教科教育法	須原　曽野　田原　津崎

（２） 合評会の開催

令和元年 12 月 6 日（木）に事務局棟 6 階ラウンジにて合評会を行った。出席者は、五十川、上野、大関、太田、須原、田中、津崎、中村、茂木、山本である。今年度も社会学科の全教員が授業を公開し、全員がいずれか一つの授業を参観した。参観者は、授業内容と授業方法に関してそれぞれ授業参観シートにコメントを記入し、授業担当者がそれに対する返答等を記入した。合評会ではそれら授業参観シートを資料として用いた。

参観者によるコメントのうち、授業方法では例えば、授業で映写するスライドを撮影する学生への対応について話し合った。一案として、試験時の持ち込みを手書きのノート（プリントは不可）とすることにより、写真を撮った学生も最終的にはノートに書き写すことになり、一定の教育的効果が見込めるという対応策が紹介された。その他にも、授業手法として知っていたことでも、具体的な実践状況を参観することで参観者にさまざまな気づきが生まれたことを全員で共有した。

合評会ではさらに今後の授業相互参観のあり方についても話し合った。今年度は複数の教員が参観した授業もあれば、今回は全く参観者がいなかった教員の授業もあり、相互的な授業参観を実現することの難しさが指摘された。また、参観時期が毎年同じ時期に固定されているため、同一教員による同一科目を繰り返し参観する以外の選択肢がない状況も生じていることについて、現在のように参観時期を限定せずにより緩やかな期間設定とし、参観者と授業担当者が参観する日程や授業を相互交渉して決めていくようにしてはどうかという案が示された。

さらにこれまでは、各教員が工夫し一定の成果をもたらしている授業を参観対象科目として選択することが多く、これは他教員の授業実施上の参考とする目的にはかなっているが、授業担当者としては迷いや限界を感じている授業に関して他教員による助言や示唆を求めたいと考えている場合もあることが取り上げられた。担当者が困難を感じている授業をあえて対象授業とするような取り組みは、学生による授業評価アンケートへの対応を考えることにもつながり、今後必要性が増すだろう。

４．学科独自の取り組み

これまで、夏学期と冬学期に各教員１科目で授業アンケートが実施されてきたが、今年度から全科目に対して行われることになった。冬学期に実施された授業参観をふまえた合評会において、「令和元年度 夏学期授業評価アンケートの結果」について意見交換を行った。なお以下に示すのは、このアンケートの授業別回答結果（設問３「総合的に判断して、この授業を受講して良かったと思いましたか。」、設問８「先生は学生に、丁寧に対応してくれていますか。」、設問９「授業の方法が工夫されていますか。」、設問 10「授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれましたか。」）に対する担当教員のコメントである。

・講義科目受講者の７割以上が「受講して良かった」と回答する一方で、「そう思う」ポジティブな回答者数は高くはない。冬学期必修科目のデータも参照し、リアクションペーパーを書かせて評価する仕組みがどのように受け止められているのか検討していきたい。

・ひとつの学期を超えた長期的な働きかけを念頭におく科目について、それが学期ごとの「受講して良かった」とうまく結びついていないところがあるかもしれない。それらが結びつくよう、今後も内容改善を心掛けたい。

・講義科目、演習科目ともに、必修科目において授業を受講してよかったと思う学生の割合が相対的に低く、背景要因を検討したい。また、学生からのコメントで相反する複数のコメントが寄せられた場合（例えば「授業内課題を増やしてほしい」と「授業内課題を減らしてほしい」が同時に寄せられるなど）、また、事実に基づかない匿名ゆえの誹謗中傷的コメントが寄せられた場合、にどう対応するかを検討する必要があろう。

・「受講して良かった」「授業の工夫」「丁寧な対応」「十分な説明」の四つの項目について、演習科目においては肯定的な学生が大半をしめるが、講義科目においては否定的な学生が少数ながら存在している。履修人数との関係もあるだろうが、その背景要因を検討し、来年度の授業準備のために役立てたい。また、事実誤認によるコメントが寄せられる可能性についても、対応方法を検討する必要があるだろう。
・全て授業スタイルが異なるが、いずれも高評価であった。冬学期のアンケート結果も参照し、授業内容と授業スタイルの組み合わせと評価の関連を見ることで、それぞれの授業におけるさらに効果的な授業スタイルを検討したい。
・「演習Ⅰ」の項目のうち、「丁寧な対応」という点に課題があることが明らかとなった。とはいえ、各学生が期待する「丁寧な対応」が具体的に何を指すのかわからないため、個々の学生とよりコミュニケーションをとり、各自の特性やニーズを把握しながら授業改善に努めたい。
・演習の方は、回答率もよく「受講してよかった」など評価が高いといえるが、講義科目の方は、回答率は低い。これは回答率が低いと言うより、最後の方に学生の欠席が多く、回答率が下がったためである。今後は、できるだけ出席を勧奨するように何らかの手立てを考えたい。
・授業科目の専門領域について興味・関心が強い学生と、他学科履修を含めてあまりこの領域になじみがない学生では、アンケート結果の評価がおおきく変わってくる。これを踏まえて、とくに選択科目では、受講生全体の評価をあげることよりも、興味・関心が強い学生の満足度を高めることのできる授業に取り組んでいきたい。
・少人数の授業での評価は高く、受講者数が多い授業では、学生によって評価が分かれる傾向にあると思う。特に、「丁寧な対応」の評価で受講者数の影響が大きいように思う。受講者数が多い授業の進め方について工夫をするとともに、適正なクラスサイズについての検討が必要と思う。
・(1)授業内容は最新の事象をより深く捉えるべく常にアップデートしていきたい。(2)考える時間を長くするよう、話す内容を厳選、整理していきたい。(3)講義する側の技量は上昇している気がするが、学生評価は年々下がっている感がある。自分は間違っているのではないかという不安を抱えながら、日々誠意授業に取り組みたい。
・全般に自分の専門領域から離れた担当科目ほど、評価が高くなっている傾向がある。単純に分野ごとの人気度の違いが反映されているだけなのかもしれないが、来年度はこの結果を意識してより丁寧な授業を心がけたい。
・4科目中3科目で7割超が受講して良かったと回答。否定的評価の多い「演習Ⅰ」では授業の趣旨を学生が理解できなかった様子で、教員の対応には肯定的。探索的に進める科目ではあるが、都度丁寧な説明を心がけたい。
・必修の講義科目は、評価にばらつきがでたが、高校までの暗記科目ではなく考えさせることを目指したものの、意図が充分に伝わらなかったことが理由と考えている。100名前後の授業でなかなか「考えさせる」授業にすることは難しいが、一年目だということもあって準備が充分ではない点もあったので、そのあたりを改善しながら進め方を工夫していきたいと思う。

５．そのほか：今後の課題と展望

１つは、来年度は、新カリキュラムが実施され２年目を迎える。新カリキュラムを実際に運用しながら、その問題点と改善点を検討することが課題となる。

第２に、これまで授業評価アンケートは教員個人の自己点検・自己評価に用いられてきたが、全科目実施に伴い、いわゆる「学修の質向上」のために活用することが求められている。とはいえ、「４．学科独自の取り組み」の教員からもコメントにみるように、授業評価アンケートの持つ意義を認めつつも、多くの課題がそこに見いだされる。今後、社会学科として授業評価アンケートをどのように活用すべきか検討していかなくてはならないであろう。

第３に、全世界を巻き込んだコロナウィルスの影響は、大学教育においても大きいといわざるを得ない。対面授業に替わる遠隔授業がどのような教育効果をもたらすのか、今後のコロナウィルスによる社会状況を見守りつつ検討する必要があろう。

人間福祉学科健康福祉専攻

１．はじめに

本報告書は、平成 31 年度（令和元年度）に行った人間福祉学科健康福祉専攻のＦＤ活動をまとめたものである。

本専攻のＦＤ活動は、ディプロマポリシーとカリキュラムポリシーに則って、次の 2 つを柱にしている。

Ⅰ　講義・演習との緊密な協働を通して実習教育を充実させる。

Ⅱ　受験対策講座を充実させることを通して国家試験（社会福祉士・精神保健福祉士）合格率を向上させる。

・Ⅰに関しては以下の活動を行った。

Ａ．大学基礎演習　Ｂ．授業相互参観　Ｃ．社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会　Ｄ．社会福祉士実習懇談会　Ｅ．精神保健福祉士実習懇談会　Ｆ．社会福祉士実習報告会

・Ⅱに関しては以下の活動を行った。

Ｇ．社会福祉士国家試験対策講座　　Ｈ．精神保健福祉士国家試験対策講座

Ｉ．福祉系公務員受験対策講座

以上のＡ～Ｉについて、ＦＤ活動としての概略を説明する。

Ａ．大学基礎演習

1 年生にこれからの学習、進路、関係づくりの基礎を提供するという、この科目の目的は昨年度と同様に果たせたと思われる。教員の提示する課題設定に対し、学生が主体的に取り組み発表をし、ベストスキルの学生を選定するなど、アクティブラーニングにつながる手法で取り組んでおり、ルーブリック評価（レポートの評価、プレゼンの評価）と併せて、学生主体、教員補助といった形が「学びのスキル」の習得で一定程度実践できている。さらに、広い分野での「学生が主体的に学ぶ」の展開を目指している。

Ｂ．授業相互参観

今年度も、実習報告会を授業参観科目とせず、「社会福祉士」「精神保健福祉士」養成の指定科目を中心とした科目を参観科目として公開した。また、参観者があった科目は必ず事後の合評会を実施し、報告は授業担当者からの「合評会の報告」という形式をとった。、参観者があった科目においては、有意義な相互参観であり、合評会からも多くの示唆を得られたと報告を受けている。課題としては、公開授業のうち参観者があった科目となかった科目がある中で参観者の調整が困難であったことや、合評会での十分な時間の確保が難しかった科目もあり、これらが次年度に向けての検討課題となっている。今年度は学科会議内での合同合評会を実施できたのは評価できる。

Ｃ．社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会

講義科目と並んで実習を支える基礎となる演習科目に関して、原則年度末に年１回、新旧の科目担当者が一堂に会して、授業方法の実際を相互に開示し、課題等について議論している。この「打ち合わせ会」の機能は、第１に教員のファカルティの中核である教授力

（とりわけ演習及び実習指導）を高める場、第２に実習生としての態度形成にかかわる個別指導上の課題を共有する機会、第３に社会福祉士養成カリキュラムの課題や改善点を見出す場、であることを再確認するとともに、演習はあくまでも「社会福祉士」を目指す学びであることを学生が理解できるような方策について話し合われているものである。

ただし今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を理由に、会議形式からメール形式の打ち合わせに変更した。

Ｄ．社会福祉士実習懇談会　Ｅ．精神保健福祉士実習懇談会

実習先の実習指導者と教員とで、実習指導のあり方を振り返る「実習懇談会（社会福祉士実習懇談会・精神保健福祉士実習懇談会）」は、例年２月に行われ、その年度の実習の振り返りとともに、取り上げるべき実習教育に関するテーマについて議論する重要な機会である。今年度は、新型コロナウィルスの影響により例年に比べ参加者は少数であったが、カリキュラム改正を踏まえた実習教育についての有意義な意見交換の場となった。

Ｆ．実習報告会

Ａ～Ｅの活動の集大成として学生主体による実習報告会がある。学生（主に 3 年生）が大教室での全体発表とブースに分かれてのポスター発表をおこない、それを 2 年生が聴講するという形で１日かけて行われる。今年度も学生の主体性を高めるべく学生による実行委員会を作り、プログラムの精査などを行った。以前に比べて実習学生の人数が少なくなっている傾向にあるが、今年度も学生は主体的に会議に臨み議論していた。プログラムや準備の手順や役割分担について、変更や修正等に参画することで学生の報告会運営に対する理解が高まったと感じられた。当日も実行委員が中心となり準備等を進めていた。片づけには聴講学生も加わり円滑に進めることができた。また、今年度も、実習の履修を希望する１年生には､｢社会福祉士に向けての実習｣のイメージを早くより持ってもらう目的で、前半の全体報告会を聴講することを義務付けた。１年生の段階から実習報告会に参加することで、自分の目指すべきキャリアとしての「社会福祉士」をイメージし、意欲を持って学ぶ姿勢にもつながってくる重要なものであると考える。

Ｇ．社会福祉士国家試験対策講座

1年生から3年生までは､夏期と春期の休暇中に集中講義として対策講座を実施している。教えるのは東京アカデミーの講師であり、本専攻の担当教員は「国家試験受験支援委員会」のメンバーとして、主として授業の円滑な運営にかかわる業務を担当する体制として取り組んだ。1～3 年の対策講座は概ね順調であった。4 年生の対策講座(夏学期・冬学期ともに土２・３限)に関しては、ゼミ担当教員との連携の方策として受験支援委員会合同会議を開催し、また、学生の勉強に取り組み姿勢に関しては複数回個別面談を実施した。合格率は 56.0％（14/25）であり、昨年度の 68.4％（13/19）に比べると数字は下がったが、目標とした合格率(5 割)を超える好成績を残すことができた｡来年度もさらに丁寧な指導を行い、飛躍を目指したい。一方、既卒者全体の合格率が 5.4％（5/93）であり、昨年度より低調であり、卒業生の合格率向上は毎年度大きな課題である。

Ｈ．精神保健福祉士国家試験対策講座

昨年度までと同じく、本専攻の石田が引き続いて講座を担当している。合格率は 75％（4 名中 3 名合格）であった。なお既卒者は 2 名受験し 1 名合格した。

Ⅰ．福祉系公務員受験対策講座

福祉系公務員に求められる資格（必須ではないが）として、社会福祉士や精神保健福祉士が位置付けられる。福祉系公務員受験対策として集中講義で開講しており、本講座修了者から、今年度は 2 名の公務員合格者を出すことができた。公務員試験を視野に入れた就職活動をする学生増加に貢献し、進路選択を広げる重要な講座である。

２．大学基礎演習について

（1）行ったこと

「大学基礎演習Ⅰ」「大学基礎演習Ⅱ」ともに３クラス合同で行った。担当教員は平川、坂本、石田であった。平川が主担当となり、毎回の授業内容を考案し坂本と石田の考えを加味しながら、3 人で協力して授業を行った。進行は主に平川が担当した。

「大学基礎演習Ⅰ」では、①仲間づくり、②コミュニケーション力の向上、③学業面の基本的なスキル（ノートテイキング、レポートライティング）を身に着けることを目標にした。また④キャリアデザイニングに関する講義（卒業生による特別講義）を実施した。さらに⑤オレンジリボン運動も、その準備を「大学基礎演習Ⅰ」から始めて、「大学基礎演習Ⅱ」での啓発活動を無理なく行えるようにした。

①と②のために、グループワークを 3 回行った。まず学年全体の雰囲気やそれぞれの学生の様子をお互いに知るために「自己紹介・他者紹介」を実施した。他者紹介では、二人でペアになりお互いのことを全員に紹介した。次に、グループの結束力を高めるために「正解のあるコミュニケーションワーク」―具体的にはクイズを解く作業を行った。さらに「正解のないコミュニケーションワーク」では、互いの価値観の違いを知ったうえで、妥協点を見出して、上手くグループの意見としてまとめるトレーニングを行った。

ノートテイキング・スキルについては、以下のように行った。

5 回目の授業の最後に「各自が今使っているスキルを次回までにまとめてくる」という課題を提示した。６回目の授業では、各人が各グループで自分が今使っているスキルを紹介し合ったうえで、各グループで最善と思われるノートテイキング・スキルを決定して、それをグループごとに発表してもらって、ベスト・ノートテイキング・スキルを決定した。授業の最後に「ベスト・ノートテイキング・スキルを使って、次回までに実際の授業についてノートを取ってくること」を課題とした。７回目の授業では、まず各グループで各個人のノートを見比べて、グループのベストを決めてもらったうえで、それを黒板に貼り出して、全員の投票でベスト３を決めてもらった。

レポートライティング・スキルについては、以下のように行った。

７回目の授業の最後に「各自が今使っているスキルを次回までにまとめてくる」という課題を提示した。８回目の授業では、各人が各グループで自分が今使っているスキルを紹介し合ったうえで、各グループで最善と思われるレポートライティングスキルを決めてもらい、それをグループごとに発表してもらって、ベスト・レポートライティング・スキルを決定した。授業の最後に「ベスト・レポートライティング・スキルを使って、児童虐待の新聞記事を読んで考えたことを 2000 字程度にまとめる」課題を提示した。９回目の授業で回収したレポートを 3 人の教員が読んで、優秀レポート（3 名）を決定し、それを 10 回

目の授業で発表して、講評した。

④のキャリアデザイニングについては、学生に対して学習に対するモチベーションを高めると同時に、卒業後の進路も意識させるために、例年、本専攻の卒業生に特別講師として「大学での勉強の仕方」、「大学生活の過ごし方」、「進路についての考え方」を話してもらっている。今年度も、社会福祉士と精神保健福祉士の 2 つの資格を取得して卒業し、現在、病院の精神科で働いている卒業生（苺谷友樹氏）に来ていただいた。講義終了後には、学生に「講義の感想」を書いてもらった。

また４年生の園田桃子さんには、昨年のハワイでの社会福祉研修に参加しての経験を話してもらった。他大学の学生に交じって、さまざまな異文化経験をすることの重要性を話してもらい、1 年生にとってはかなり刺激になったのではないかと思われた。

⑤のオレンジリボン運動の準備については、まず、オレンジリボン運動とは何か、なぜそれをやるのか、についてそれぞれ坂本と平川が話した。その後、昨年、オレンジリボン運動を行った 2 年生に昨年の活動内容の報告をしてもらった。その後は、毎回、リボン作り、メッセージカード作り、パネル作り、健康福祉専攻のホームページ作成などをグループ単位で行った。学生は、楽しい雰囲気のなかで、意欲的に取り組んでくれた。

PROG テストの結果が返って来てから、授業の残り 15 分くらいを使って、クラス担任がそれぞれの担当クラスの学生 3 人ずつと面談を行った。内容は、PROG テスト、勉強、クラブ、友達関係、経済面、悩みなどである。

本年度の新しい取り組みとして、A. 和の精神学修ポートフォリオ作成と B. 図書館利用促進を行った。

A. に関しては、パソコン教室を使って、石田が中心になって、学生に「本年度の目標」、「自身の和の精神エピソード」・「他者の和の精神エピソード」の作成を行ってもらった。何回かの督促の結果、冬学期の初めまでには全員が作成することができた。

B. に関して、各自夏季休暇前に図書館で本を借りて、冬学期最初の授業に「図書館で借りたことを証明するもの」を持参する課題を課した。ほとんど学生がこの課題をこなしていた。

「大学基礎演習Ⅱ」では⑤オレンジリボン運動と⑥見学実習に取り組んだ。

⑤のオレンジリボン運動については「大学基礎演習Ⅰ」に引き続いて準備を行った。そして大学祭当日は、あらかじめ設定した担当時間に集合して、大学祭来場者に対してオレンジリボン（メッセージカード付き）やチラシを配布したり、メッセージボードにメッセージを書いてほしい旨のお願いなどを行った。

これに先立って、10 月 31 日（木）の「和の精神Ⅱ」では、広報担当の学生 3 名が、全学の 1 年生に対して大学祭でのオレンジリボン運動の紹介を行った。

⑥の見学実習は 12 月 5 日（木）に行った。7 つの施設（高齢 3、児童 2、障害 2）に分かれて、半日（13：00〜17：00）施設見学と利用者との関わりを持った。

見学実習の準備は、10 月から始め、オレンジリボン運動終了後から本格的に行った。実習が近くなった 11 月 21 日（木）の授業では、現在、四天王寺福祉事業団でコミュニティ・ソーシャルワーカーとして働いておられる卒業生（西田宏太郎氏）に来ていただいて、実習の意義と注意点などを話してもらった。

見学実習当日、1名は服装が指定のものではなかったのと、1名は遅刻したので、欠席扱いとした。

この2名に対しては後日（1月23日）改めて、石田の指導の下で実習の機会を設けた。実習態度に問題がなかったので、見学実習の欠席扱いを取り消し、実習に参加したことを認めた。最終的に1年生全員69名が実習に参加したことになった。

見学実習が終わった後、実習先ごとに分かれて、実習の報告の準備を行った。1月9日（木）の見学実習の報告会では、各グループともパワーポイント等を使って発表した。聴講する学生は、あらかじめ配布された評価表に基づいて、それぞれの発表の評価を行った。昨年度から、12月初めに行われる「実習報告会」への参加を強く勧めるようにしたこともあって、見学実習の報告のレベルもかなり上がってきたように思われる。

「大学基礎演習Ⅰ」と「大学基礎演習Ⅱ」では、レポートとプレゼンテーションの評価のためにそれぞれルーブリックを作って、学生に示した。

（2）評価

「大学基礎演習Ⅰ」

グループワークについては、大部分の学生が積極的にワークに参加して、毎回のレポートも丁寧に書いていた。

ノートテイキング、レポートライティングなどの学びのスキルについては、これまでのように、教員が模範的なスキルをレクチャーして、それを学生に体得させるというやり方をやめて、学生が、今自分たちが持っているスキルを開示したうえで、話し合いのなかでベストのスキルを作っていくようなやり方を取った。これによって、学生は、ある程度「やらされ感」から抜け出せたのではないか。ただ、そのようにして作ったスキルを使って、実際にノートを取ったり、レポートを書いたりした結果を見ると、これまでよりはよく書けているものが多かったとはいえ、それでもよく書けている者とそうでない者の差は大きかった。スキルが未熟な学生の場合、その改善には、レポートの添削が必要だというのはわかっているが、その時間がとれないままであった。今後の課題である。

時間不足から、今年度も図書館ガイダンスの受講ができなかった。代わりに、先に述べたB.「図書館で本を借りること」を行った。また「リーディング・スキル」について平川が、簡単に触れた。

「大学基礎演習Ⅱ」

オレンジリボン運動：昨年度と同じく「大学基礎演習Ⅰ」から準備を始めたことで、「大学基礎演習Ⅱ」のもう一つの柱である「見学実習」とのバランスもうまく取れたと思っている。学生は積極的に参加しおおむね好評であった。児童虐待についても問題を考えるきっかけやそれについて学習する機会となっている。ただ、この活動もすでに6年目になり、何となく、「行事化」してしまって、最初のころにはある程度あった「真剣に取り組む態度」が少し薄れてきているように思われた。そこには、こういう運動をやっても、児童虐待が一向に減る気配がないことに対する無力感が関係しているようにも思われた。また、もともと児童虐待にあまり関心がない学生もいて、そうした学生が醸し出す「やらされ感」が他の学生にも影響して、全体として「真剣に取り組む態度」が感じられなくなってきてい

ると思われる。どうしたら、もっと一人ひとりの学生にとって意味のある活動にしていけるか考える時期に来ている気がする。今年度もこうしたマンネリ感を打破することはできなかった。

見学実習では服装違反 1 名、遅刻 1 名を出してしまった。来年度はこうしたことにならないように事前準備に一層力を入れたい。

「和の精神」ポートフォリオに関しては、全員、作成することができたが、全体としてみれば、何のために作成するのかについて考える時間が取れなくなってしまい、結果的に作成すること自体が目的となったきらいがある。

・全体を通して

1 年生に、これからの学習、進路、関係づくりの基礎を提供するという、この科目の目的は果たせたと思われる。ただ、これまで同様、本年度も、やるべきことが多く、しかもつねに 3 クラス合同であることもあって、何かしら、きめ細かな指導に欠ける傾向が見られた。来年度は、合同授業を基本としながらも、クラス別の授業も織り込みながら、きめ細かな指導ができるようにしたいと考えている。

３. 授業相互参観について

（１）実施計画

本専攻の授業相互参観は、「社会福祉士」「精神保健福祉士」国家試験受験資格取得のための指定科目および「教科に関する科目」を中心に、所属教員全員が公開授業を計画し、その後予定された日程等をふまえて授業相互参観を実施した。

以前は 12 月に実施する「実習報告会」（科目名は「社会福祉相談援助演習Ｖ」「社会福祉相談援助実習指導Ｃ」）を公開授業としていたため、多数の教員の参観が集中した。それを避けるために、現在は「実習報告会」を公開授業科目とはせず、基本的には教員からの公開授業科目と公開日時の申告により、学科内教員全員が授業相互参観を実施できるように計画した。その詳細は以下の通りである。

（２）授業相互参観の実施

授業相互参観・合評会の実施と参観者は下記の表の通りである。

担当教員	日　時	時限	公開授業科目名	教　室	合評会	参観者
石田（晋）	12 月 3 日	火 5	精神保健福祉援助技術総論	6－319	授業終了後	原、笠原
上續	11 月 12 日	火 1	教科教育法Ⅱ(福祉)	4－408	授業終了後	なし
笠原（幸）	12 月 11 日	水 3.4	キャリアゼミ実践演習	5－211	授業終了後	坂本、和田
川下	11 月 20 日	水 4	精神保健福祉論Ⅲ	7－116	授業終了後	石田、上續

坂本（光）	11 月 18 日	月 4	社会福祉相談援助演習Ⅰ	6－213	授業終了後	平川
鳥海	11 月 21 日	木 1	相談援助の基盤と専門職Ⅱ（特別講義）	6－254	授業終了後	なし
原（順）	11 月 18 日	月 4	社会福祉相談援助演習Ⅰ	6－304	授業終了後	なし
平川	11 月 13 日	水 3	社会学概論	6－254	授業終了後	川下、鳥海
和田	12 月 3 日	火 1	権利擁護と成年後見制度	4－308	授業終了後	なし

（３）合評会の内容

授業参観者がいた科目については予定通りに合評会が実施され、授業実施教員から合評会の内容について報告があった。合評会の内容は主に【①授業の進め方、学生の受講姿勢などについて】【②今後に向けて】であり、授業参観者からの意見も含め、その内容を以下に示す。なお授業実施者の報告に基づいて転記したため、書式は不統一である。

科目名：精神保健福祉援助技術総論

【①授業の進め方、学生の受講姿勢などについて】

＜授業の進め方＞

①前回視聴した“The Times of HARVEY MILK”のドキュメント DVD を取り上げ、その内容について学生が説明し、感想を述べた。②DVD はセクシャルマイノリティに関する運動の内容であるため、前回、今回の授業までの課題として学生が提出していた「LGBT はどのような人のことをいうのか」「困っていること」「支援の方法」等の学生の意見を教員が取り上げ、それぞれの内容について議論し、セクシャルマイノリティやその周辺状況について、必要に応じて教員が説明した。③「母よ！殺すな」の記事と新聞記事を学生と教員が読み、段落や重要項目ごとに言葉の意味や内容について教員が質問し、議論した。

＜学生の受講姿勢＞

課題について、学生同士それぞれテーマに沿って発言していたが、少人数であるのである程度発言できているが、学生の言葉を引き出すのは難しい。場をつくる配慮が必要である。また、ある程度トレーニングも必要ではないかという意見もいただいた。

＜その他＞

教員も記事等を読んでいたが、学生に読ませる方がよいのではないか、という意見をいただいた。

【②今後に向けて】

取り上げた課題は、さまざな事象をソーシャルワーカーとしてどのように深めるのかを考えるものである。問題は異なっていてもソーシャルワーカーとしての視点には共通点があり、それが専門性に結びつくものであることを学生に伝えたい。今後は、議論が活発に

なるよう題材を工夫し、学生全員で考える授業にしていきたい。

科目名：キャリアゼミ実践演習

【①授業の進め方、学生の受講姿勢などについて】

＜授業の進め方＞

本日の授業は、キャリア支援会社の「キャリアラボ」より派遣された西座先生による講義が実施された。履歴書作成の最終日であったため、受講している学生全員が、学生時代に最も力を注いで取り組んだことについて発表した。和田先生、坂本先生は、ＩＢＵが使用している履歴書を見ていただいた。学生は、講師の指導にもとづき、学生時代のエピソードをＰＤＣＡサイクルに従って、記述していた。また、12 月から学内で実施している業界研究会についても説明した。

＜学生の受講姿勢＞

学生たちは、他の学生の発表を熱心に聞いていた。また、講師のコメントを聞いて、自分の文書を修正していた。

＜その他＞

授業アンケートの回答を和田先生と坂本先生に依頼した。

【②今後に向けて】

健康福祉専攻において、進路変更して、一般企業就職を希望する学生のキャリア支援の参考になればと考え、授業参観を設定した。今後は、学科会議等で、両名の先生をうかがいながら、専攻内で議論していきたい。

科目名：精神保健福祉論Ⅲ

【①授業の進め方、学生の受講姿勢などについて】

＜授業の進め方＞

先週に実施した相談支援センター見学の振り返りの後、相談支援の事例をもとに、精神障害者の地域生活支援の実際について講義した。

この内容について、１）相談支援専門員資格の内容など将来の身近なテーマをとりあげており、専門職としてのキャリア意識の形成にもつながっている。２）現場を見せてから事例でさらに具体化することで、授業に連続性が出せている。３）学生の関心に基づく授業が提供できている。４）少人数のメリットを生かしたアクティブラーニングができている。といった評価をいただいた。逆に改善点として、１）事例に取り上げたピアサポーターの存在や位置付けについてもう少し深めたほうが良い。２）見学後に課題を課してもいいのではないか。３）学生の目的意識がはっきりしているので、多様な学生が履修している場合の対応を考える必要がある。といったご指摘をいただいた。

＜学生の受講姿勢＞

少人数ということもあり、良好な受講態度であることを評価していただいた。

【②今後に向けて】

精神保健福祉士資格取得に特化した科目であり、学生が実践的な知識を身につけられるように授業内容を工夫しているが、指摘にもあるように、学生の意識の高さに支えられて

いるところがかなり大きい。同様の授業を多人数の受講者を対象に展開するには経験が不足しており、今後、さらに研鑽を図っていきたい。

科目名：社会学概論

【①授業の進め方、学生の受講姿勢などについて】

＜授業の進め方＞

・授業には、以下のようなさまざまな工夫が見られて内容も充実していた。授業の進め方：前回のまとめ⇒前回の疑問・質問に答える⇒今回の授業⇒今回のまとめ、国試問題（1 問）、考えてみよう（1 問）となっていた。

・説明を図示する試みがなされていて、学生にとっては内容が理解しやすいものになっていると思われた。

＜学生の受講態度＞

・ただ、学生の受講態度はといえば、上に見たような工夫に見合ったものにはなっていなかった。私語はなかったが、スマホや居眠りなども散見されたとのことだった。

＜その他＞

一言でいえば「授業に工夫を凝らしている割には、学生の授業態度はよくない」という評価であった。こうした評価がなされるのは、授業が説明に終始しているからであって、授業のなかで学生に問いかけるような、双方向の試みがないからであると思われる。

【②今後に向けて】

今後は、何らかの形で授業の中に双方向性を取り入れていこうと思っている。さしあたり、授業の冒頭の「前回のまとめ」の問題（一問一答式の問題 4～5 問）の答えを、学生を指名して答えてもらうようにしたいと思っている。

（４）授業相互参観実施の今後に向けて

参観者がいた科目の各合評会の他に、今年度は合同合評会を 12 月 12 日に開催された学科会議で実施した。参観者がいた授業（石田、笠原、川下、坂本、平川）について、授業毎の合評会内容を発表いただき、合評会の内容を共有した。また、今後の公開授業参観の実施方法について話し合った結果、現状のやり方で良いということとなった。

公開した授業のうち、参観者が集中する科目もあれば参観者がいなかった科目もあった。来年度の公開授業の参観者の調整をおこなう必要性を感じるが、実際はその調整は困難であると予想され、今後の課題と考える。

４．学科独自の取り組みについて

（１）社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会

毎年３月下旬に「社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会」を開催し、「社会福祉相談援助演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の担当者 8 名（非常勤講師２名を含む）と学科長が参加したうえで、各担当者による今年度の授業の振り返りと次年度の演習指導にかかわる改善点及び留意点の確認を行った。昨年度は日程調整の都合上、年度を超えて平成 31 年 4 月 1 日（月）の開催となった。

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を理由に、会議形式からメール形式の打ち合わせに変更した。議題は、①シラバスおよび評価方法，②感染拡大防止の観点から演習の展開方法の変更点，③感染拡大防止の観点からグループワークの留意点，④授業で用いる個別ワークの課題の内容，⑤休講に代替する課題の内容である。現時点で協議中であるが、対面授業が始まるまでに方向性を見出し、クラスの学生への説明事項を共有することが求められている。

演習科目では、講義科目で習得した相談援助の知識と技術を、相談援助実習において試行的に実践する判断力を培うことを目指して、アクティブラーニングが毎回取り入れられている。具体的には、ペアワーク、グループワーク、ロールプレイなどである。とくに、【演習Ⅳ】における羽曳野市社会福祉協議会との連携による「羽曳野市の困りごと解決プロジェクト」の取り組みは、社会福祉協議会の実践者から提示された地域福祉の課題に対して、学生が解決方法を検討してプレゼンテーションを行うものであり、実践者を交えたアクティブラーニングのみならず、地域連携という観点からも有効に機能しているといえる。令和元年５月 18 日（土）２～５限に４クラスの合同授業として実施した。

演習科目において、対話や討議などの受講生間のコミュニケーションは、授業の大きな構成要素である。感染拡大防止を理由にそのコミュニケーション機会が制限されることは、授業の成立の可否にもかかわることとして認識される。本学が加盟しているソーシャルワーカー養成教育学校連携からの実習自粛要請に伴って、実習に代替する「学内演習」や「学内実習」のあり方が検討され始めたところである。その情報を収集・活用しながら、演習・実習担当教員間との連絡を緊密にとり、非常事態にありながらもソーシャルワーカー養成課程の役割を遂行したい。

なお、「打ち合わせ会」および「社会福祉援助技術演習」全体の主担当は鳥海、副担当は坂本である。

（２）社会福祉士実習懇談会

令和 2 年 2 月 29 日（土）に社会福祉士実習懇談会が実施された。当初は実習先から 22 名の参加申し込みがあった。しかし新型コロナウィルスの影響により直前から当日までキャンセルが相次ぎ、結果 10 名の参加であった。以下のようなプログラムで実施した。

１．令和元年度　ソーシャルワーク実習の成果について
　① 体験実習（10 日間）
　② 相談援助実習（23 日間）
２．令和２年度　実習について
　・令和 2 年度予定について
３．カリキュラム改正をふまえた実習の変更点について
　① 社会福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて
　② 実習の変更点
４．意見交換会
　・意見交換のグループワーク

意見交換会では、まず自己紹介を交えながら、新型コロナウィルスの各施設での対応状

況について情報共有した。入所施設では家族も含めた外部の人間の立ち入り禁止など、通所施設では利用者そのものの減少など厳しい状況ながらも、着実に対応している様子が窺えた。

検討テーマとして、新たな実習に向けて想定される教育内容・困りごとを設定した。新カリキュラムにおいてより重視されるようになる地域福祉について、どのような実習教育ができるか、各施設での現状や悩み事などについて情報交換を行った。地域との関わりが少ない施設でどのような工夫ができるのか、現在の活動にどこまで実習生が取り組めるのか、個人情報の面もあり難しい部分も多いことを確認できた。

大学側からのカリキュラムや指導上の困りごと、学生の傾向などの情報提供はもとより、他施設との意見交換は、施設の実習指導者にとっても実習内容を見直す参考になり、参加者から有意義な時間であったとのアンケート意見が多かった。また討議テーマについては事前に知らせて欲しいとの意見もあり、案内時に知らせるなど運営の改善に努め、更なる充実した懇談会となるように努めたい。

大学教員側も、通常の実習期間中にはなかなか聞けない施設での取り組み、困りごとなどを聞く機会であり、連携の仕方の改善や教育内容を見直す機会となっている。

（３）精神保健福祉士実習懇談会

実習懇談会に関する報告・説明事項は次のとおりである。

①懇談会と概要説明、②本学精神保健福祉援助実習等の状況説明、②本学国家試験合格者数の説明、③精神保健福祉士養成課程に関する状況の紹介を行った。その後、来年度精神保健福祉援助実習を行う学生が参加、精神保健福祉士習得科目に関する学習状況などの説明をした。教員からは精神保健福祉援助実習指導 A についてのプログラムを中心に、実習前教育について紹介した。各実習施設の担当者からは、それぞれの実習の状況についてのお話をいただき、学生に対しては「実際の業務は、強制入院もあるなど机上で学ぶことばかりではないので、その意味では現場をよく見てほしい」「地域では、ある程度症状が安定している人が多いので、主体的に生活できる環境づくりが大切で、それをどのように行っているのかに留意してほしい」「対人関係支援においては、自分自身を知ることが重要であることを心にとめておいてほしい」など実習に対する心構えを教えていただいた。

実習担当者、参加学生のアンケートの回答は以下のとおりである。

〈実習担当者〉

・今後の養成の在り方について教えていただけるのはありがたい。さらに今度の実習に、どのように影響するのか実習先に何を求めるのかを教えていただければ嬉しい。
・実習前に学生の考えや気持ちを聴く機会をいただけるのは、受け入れの参考になる。
・実習前には、精神疾患の特徴、法制度、支援機関の名称等を知っておくことで、実習先・での理解が得やすくなると思うので、学生に準備として勧めていただきたい。
・入院（者）支援と地域（生活者）支援を実施したいと思っているので、学生がどちらを選びたいのか教えていただきたい。また、実習において学びたいことなどをこの機会に伝えていただければ参考になると思う。
・学生には、今後も学びの場をできるだけ提供できるように協力したい。

・他の指導者や学生の意見が聴けるので、勉強になる。実習生参加の企画は良いと思う。
・精神保健福祉を志す学生が増えてほしいと思う。
〈学生〉
・自らを理解することと、その中での自分の中になる偏見の理解、誰のために支援なのかをよく考える必要性を感じた。
・実習における自分の気づきについて、なぜそう思うのかを深く考えることが求められると感じた。
・懇談会に参加して、支援者からの支援とはどういうものなのかを学ぶことができて、少しだけ実習のイメージがついた。
・依存症のことなどを他人事として考えるのではなく、自分の中にもあることとして、精神障害者を支援していくことが大切であると理解できた。

（4）社会福祉士実習報告会

令和元年 12 月 7 日（土）に「実習報告会」を実施した。約 5 週間の「相談援助実習」を終えた 3 年生が発表学生として、2 年生の聴講学生に対してその経験とそこから得られた知見を毎年報告している。

実習の履修を希望する 1 年生にも前半の全体発表会に聴講することを義務づけている。実習での経験と知見を報告する発表学生と実習を半年後に控えている聴講学生及び 1 年生が一堂に会して、午前 11 時から熱心に交流した。

「実習報告会」は、当日の準備や司会進行など、すべて学生主体で行われている。プログラムや役割分担の企画などについて従来は教員が主に担当していたが、平成 28 年度から学生の主体性を高めるべく学生による実行委員会を作り、プログラムの変更などを企画している。

実行委員会については、前年度の委員会で議論した事案を議題として提示したところ、学生は主体的に会議に臨み議論していた。プログラムや準備の手順や役割分担についても、変更や修正等に参画することで実行委員の報告会運営に対する理解が高まったと感じられた。実行委員が中心となり準備や運営等を円滑に進めていた。また片づけには聴講学生も加わることで例年通りの時間で終えることができた。

1 年生も学年の 9 割程度 64 名の参加があり、感想も概ね好評であった。発表内容については難しい部分もあったようだが、PPT や説明の進み方など発表方法について参考にしたいとの意見が多かった。見学実習のプレゼンテーションの準備を進めようとしている時期のため、上級生から学ぼうとする姿勢が見られた。

またポスター発表においては、発表者と聴講者の人数にあまり差もなかったため、特に混乱もなく質疑応答の際は、ほぼ個別対応のような形になり、お互いに充実した学びに繋がった。

学生の発表は、全体発表会およびポスター発表会ともにすぐれたプレゼンテーションとなっていた。実習担当以外の教員も参加しており、教員と学生で意見交換する場も設けることで、より良いアクティブラーニングとなり、同時に教員の能力を高める機会にもなっている。

実行委員会と 1 年生の聴講は来年度も継続して行う。学生の主体性を高める場、学年を越えた学びの交流の場として展開していきたい。

（５）社会福祉士国家試験対策講座

今年度は、これまで本専攻の教員が教授面も含めて主に担当してきた４年生対象の社会福祉士国家試験対策講座が、正規授業として土曜日 2 限・3 限に行うことになって４年目にあたる。

同じく１年生・２年生・３年生に対しても、夏期と春期の休暇期間に正規授業（集中講義形態）として対策講座を実施することになってからも４年経った。

なお、これまで、畑と平川が担当してきたが、畑の退職にともなって、今年度から人健教員全員が担当することになった。

社会福祉士国家試験対策講座

学年	セメスター	科目名	開講期間	責任者
1 年	2	社会福祉探究Ⅰ	2/6, 7, 10, 12（計 15 回＋定期試験）	原
2 年	3	社会福祉探究Ⅱ	8/27, 28, 29, 30（計 15 回＋定期試験）	坂本
	4	社会福祉探究Ⅲ	2/20, 21, 25, 26（計 15 回＋定期試験）	坂本
3 年	5	社会福祉探究Ⅳ	8/27, 28, 29, 30（計 15 回＋定期試験）	石田
	6	社会福祉探究Ⅴ	2/3, 4, 5, 6（計 15 回＋定期試験）	石田
4 年	7	社会福祉研究Ⅰ	夏学期・土曜 2 限	全員
		社会福祉総合研究Ⅰ	夏学期・土曜 3 限	全員
	8	社会福祉研究Ⅱ	冬学期・土曜 2 限	全員
		社会福祉総合研究Ⅱ	冬学期・土曜 3 限	全員

（注）これまで、１～３年生の「社会福祉探求」は、すべて１限～４限であったが、これまでの受講学生からの、２限～５限にしてほしいという要望に応えて、２限～５限に行うことにした。

これらの対策講座を円滑に運営し、効果的なもの、つまり社会福祉士国家試験合格率を向上させるために、国家試験受験支援委員会を作った。話し合いは、定例の学科会議において行った。

また、東京アカデミーとの会議は２月に１回持っただけだったが、必要に応じてメールや電話を用いて緊密な連携を心がけた。

さらには、これらの対策講座を東京アカデミー任せにしないために、責任者の教員は以下のように積極的に関わった。

＊１年２セメ：最終日３・４限の総合試験（問題作成・解答）、担当講師との連携

＊２年３セメ：最初の３日間いずれも４限目及び最終日１～３限の問題演習（問題作成・解答）と最終日 4 限の総合試験（問題作成と解答）、担当講師との連携

＊２年４セメ：最初の３日間いずれも４限目の問題演習（問題作成・解答）と最終日４限の総合試験（問題作成・解答）、担当講師との連携

＊３年５セメ：最初の３日間いずれも４限目及び最終日１～３限の問題演習（問題作成・

解答）と最終日４限の総合試験（問題作成と解答）、担当講師との連携

＊３年６セメ：初日１～２限の履修済科目確認試験（問題作成・解答）と最終日１～３限の問題演習（問題作成・解答）と４限の総合試験（問題作成・解答）、担当講師との連携

＊４年生夏学期：初回のプレ試験（問題作成・解答）と定期試験（問題作成・解答）、担当講師との連携

＊４年生冬学期：初回プレ試験（問題作成・解答）と最終回総合試験（問題作成・解答）、有料模擬テスト学内開催、学内最終模擬試験（問題作成・解答）、担当講師との連携

１～３年生に関しては、おおむね順調に実施された。すべて座席指定したうえで、この授業の趣旨をくりかえし説いたこと、さらには授業時間を１限繰り下げて２限からとしたこともあって、学生の授業態度、および出席率もよかった。また東京アカデミーの講師にも事前にこの授業が４年生向けではないので、そのことを踏まえて授業を組み立ててほしい旨を伝えていたこともあって、授業アンケートで見る限り、学生の評価は高かった。

4 年生については、昨年度と同様以下のことを行った。

① 夏学期の授業を４・５月と８月の２期に分けたうえで、授業科目も「共通科目」を重点的に配置した。

② 模擬試験を利用した勉強の奨励：10～１月に行われる４回の模擬試験に関して、各試験の目標点と実績を記入できるようにしたＡ４版のプリントを模擬試験ごとに配布・回収する方法を取って、学生が４回の模擬試験を利用して成績を伸ばしていけるようにした。

③ ゼミ担当教員は受講学生に対して、受験関連教材の提供や受験勉強向教室の確保、８月～９月初旬および１月における教室開放に関する管理などを行った。また定例の学科会議で話し合いの機会を持った。

その結果、第３２回社会福祉士国家試験合格率は 56.0%（14/25）であった。しかしながら、昨年度が 68.4%（13/19）であったので、今年度は 12.4%下がったことになる。なお合格点は昨年度 89 点､今年度 88 点だった｡また合格者数は昨年度 13 名だったのに対して、今年度は 14 名と 1 名増えた。それにもかかわらず合格率が下がったのは、模擬試験の成績から見て合格可能と思われた学生（3 名）が不合格となったことが関係している。

来年度は、こうしたことがないように、とくに 12 月から 1 月のラストスパートの時期の指導に力を入れたい。

なお卒業後５年以内の学生にも受講（昨年度から冬学期の対策授業のみ）の呼びかけを行って、既卒生の合格率向上を図った。呼びかけに応えて受講の意思を表明した人は昨年と同じく２名と少なかった。しかも、その２名も最初の２回しか授業に出て来なかった。なお今年度の既卒者の合格率は 5.4%（5/93）であった。昨年度が 9.2%（8/87）であったので、さらに悪化した。

今年度から、東京アカデミーが本試験直前に実施している「直前集中講座」受講の呼びかけも行ったのだが、その効果もなかった。来年度はさらに工夫する必要がある。

（６）精神保健福祉士国家試験対策講座

毎週、水曜日４限・５限に開講している。教員が環境を整え学生が主体的に学習する形態をとっているが、11 月～12 月には、特別講師を招き専門科目の集中講座を行っている。今年度は、11 月 20 日（水）、11 月 27 日（水）、12 月 4 日（水）に開講した。

第 22 回精神保健福祉士国家試験新卒合格率は 75%（4 名中 3 名合格）であった。なお既卒者は２名受験し 1 名合格した。現役合格率に関する限り、精神保健福祉士国家試験対策講座は、これまでの学習を整理し、その後の受験勉強の促進に有効に機能しているといえる。

（７）福祉系公務員受験対策講座（社会福祉特別講義Ⅰ・Ⅱ）

社会福祉特別講義は、公務員採用試験受験支援講座として、東京アカデミーと協働し平成 29 年度より、集中講義で開講している。

社会福祉特別講義Ⅰは、公務員試験の１次試験対策として位置づけられており、一般教養採用試験の国語・算数が授業内容となっている。

本講座は、短期大学部保育科との合同開講となっている。受講対象学生は保育科１年生（1 セメスター）と人間福祉学科健康福祉専攻２年生（３セメスター）である。平成 30 年度の履修人数は、60 名（短大保育科 24 名・人間福祉学科健康福祉専攻 36 名）であった。

社会福祉特別講義Ⅱは、社会福祉専門職採用試験にかかわる社会福祉の専門知識を確実なものにするための講座である。授業内容は、社会福祉全般・社会学概論・心理学を中心に社会福祉の専門用語の理解、社会福祉に関するテーマの論文対策となっている。

また、対応できる採用試験は、社会福祉専門職公務員採用試験だけでない。社会福祉協議会採用試験、独立行政法人病院機構（国立、公立）などにも有効で、社会福祉士国家試験、精神保健福祉士国家試験の学習にも役立てることが充分可能である。

今年は、本講座修得者から、２名の公務員合格者を出した。１名は大阪府（社会福祉専門職）と岸和田市立岸和田市民病院の内定通知を頂いた。もう１名は大阪市（社会福祉専門職）に採用が決まった。

公務員試験を視野に入れた就職活動をする学生増加に貢献し、進路選択を広げる重要な科目であると考えている。

（８）その他

（１）～（７）に示した学科独自の演習、実習指導、受験支援は、授業時間内だけでは成立しない科目である。常に学生一人ひとりと向き合い、その学びの質と成果を学生と共に確認していく取り組みが求められている。学科のすべての教員がこの視点を共有し、チームとして学生を育てていく体制を実施しており、今後はそれらをさらにブラッシュアップして取り組んでいくことが求められている。

なお、この報告書作成者は以下の通りである。

１．はじめに：原　順子

２．大学基礎演習：平川茂

３．授業相互参観：原順子

４．学科独自の取り組み

（１）社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会：鳥海直美

（２）社会福祉士実習懇談会：坂本光徳

（３）精神保健福祉士実習懇談会：石田晋司

（４）社会福祉士実習報告会：坂本光徳

（５）社会福祉士国家試験対策講座：平川茂

（６）精神保健福祉士国家試験対策講座：石田晋司

（７）福祉系公務員受験対策講座：石田晋司

（８）その他：原　順子

＊本原稿は、ＦＤ委員（原）と学科長（石田）が回覧した上で承認を受けたものである。

教育学科小学校教育コース

1.　はじめに

1.1　小学校教育コースの現状

本コースは2019年度から、新カリキュラムとして設定されたコースで、小学校教諭一種免許状の取得に加え、各プログラムの選択によって、学生は特別支援学校教諭一種免許状、幼稚園教諭一種免許状、中学校教諭一種免許状（英語）（数学）、高等学校一種免許状（英語）（数学）が取得可能となっている。本コースの入学定員は110名であるが、今年度は114名の入学者を受け入れ、新着任教員10名を（うち2名は教職教育推進センター）を迎え、教員28名体制でスタートした。

今年度は1年生のみが在籍しているが、新しいカリキュラムとして「学びなおし・学びほぐし」をめざす科目である「扉シリーズ」（「数理探究の扉」「英語探究の扉」）や、教員として子どもと向き合うからだをつくり豊かにする卒業必修科目「パフォーマンス演習」（集中講義）、プログラム選択を判断するいわゆる「お試し科目」（「多様な子ども理解入門」「子育て支援論」「ベーシックコミュニケーションⅠ」「問い直す数学」など）などが開講され、1年生は「多様な子どもや社会に対応できる「いい先生」を問い続ける先生」をめざして学修している。また、1クラス50名程度の少人数制で授業を実施し、きめ細やかな学生指導を図っている。

2.2　今後の課題

新カリキュラム1期生が2年生となる今後は、教育実習において必修化となった小学校でのインターンシップや、出身校ではなく配属先で行う教育実習（協育実習）の新体制の構築が課題となる。特に、教育実習中における実習生支援体制としての訪問指導や、各種教育実習における実習日誌の統一化などを今後の課題として着手している。

また、学生によるプログラム選択が本格化していくなかで、各プログラム選択者が必修すべきプログラム科目を漏れなく履修しているか、プログラム別の卒業必修単位数を理解しているか、各プログラムで行われる各種教育実習がどのように実現されていくか、プログラムを何も選択しないという選択も尊重する体制のなかで、プログラム非選択者への学修充実をどのように図るかなどが課題である。

2.　「大学基礎演習」について

「いい先生になる」という一貫した理念に基づき4年間のカリキュラムを設定しているが、「大学基礎演習I・II」は、そのもっとも基礎的部分をなすものと言える。大学ディプロマポリシーを受け、大学基礎演習の学修内容をマネジメントした。

1）　大学ディプロマポリシー

1）教員としての自己分析・自己研鑽の力

学びや実践を通して多様なニーズのある社会、学校、子どもに応えることができる専門的知識及び実践力、指導力を身に付け、「いい先生」とは何かを常に問い続け、自己の実践を振り返り、自己を高めていくことができる。

2）教員としてふさわしい豊かな人間性

多様な立場、考え方の存在を認め、「いい先生」になるという強い意志と情熱および教員としての使命感や責任感を持ち、子どもの多様なニーズを共感的に理解し、課題の解決に他者と協働して取り組むことができる。

3）変化する社会、学校で活躍できる力

学びや実践を通して多様なニーズのある社会、学校、子どもを的確に理解し、専門的知識および実践力、指導力を基に協働して課題の解決や改革に取り組み、実現することができる。

2)　2019 年度「大学基礎演習」のめざすもの

①　これからの大学生活の基盤となる様々な学修や学修ポートフォリオ活用のスキル、および、学習環境の活用のスキル等を身に付けることができる。 ②　和の精神に基づき、学友たちとともに学び合い高め合うことのできる人間関係を構築しようとし、真理や本質の探究を目指し、積極的に討議等の協働的な活動に参加することができる。 ③　学修履歴を蓄積、整理し、自分の学びについて振り返り、自己の成長や改善点に気付き、今後の学びのデザインを描くことができる。

＜大学基礎演習の内容作成にあたって考えたこと＞

・ディプロマポリシーと内容を関連付ける
　①を　A 主に「教員・保育者としての自己分析・自己研鑽の力」　②を B 主に「教育・保育者としてふさわしい豊かな人間性を培う内容　③を　主に「変化する社会、学校、保育施設等で活躍できる力」を培う内容　として示した。
・学習履歴を蓄積し、それを評価につなげられないか。
・実際に大学生活を送る上で、重要な事柄として考えられる、「多様な子ども理解」の問題を早期に取り扱う。
・司会等を学生に行わせ、主体的に学ぶ場としての大学基礎演習を構築していることをめざす。

令和元年度の大学基礎演習I・IIは、本学科小学校コースのカリキュラムにおいて 1 年次の 1）基礎教育科目・共通教育科目と 2）専門教育科目の両者における学びをつなぎ、関連づけながらも、大学基礎演習I・IIで習得した知識やスキルをベースとして 2 年次、3 年次、4 年次の専門教育科目へと学びをつなげ、発展させていく科目として位置づけられている。具体的には、大学ディプロマポリシーを受け、①本学での学びと生活のための基本的なスキルの習得、②専門教育への橋渡し、③キャリアデザインの 3 点を目標として全 30 回の授業計画を設計した。これは従来の大学基礎演習のカリキュラム上の位置づけと基本的に同様である。

以下、大学基礎演習I・IIのそれぞれの取り組み内容とともにその成果と課題についてまとめる。

2.1　「大学基礎演習I」の内容

全 15 回の内容は下記のとおりである。「大学での学びと生活」、「多様な子ども理解」、「スタディスキ「キャリアデザイン」の 4 つに主として取り組んだ。

回	授　業　内　容	形態
1	大学基礎演習　受講するにあたっての基本ルール 履修説明・時間割づくり	全体
2	履修確認・学内巡りの方法とグループ分け	全体
3	グループごとに学内探検（図書館・保健センター・ラーニングコモンズ等）	各場所
4	各グループで探検についてのまとめ・報告準備・報告（クラスごと）	各教室
5	「多様な子ども理解」学修計画・オムニバス講義 ABC（各担任講話各 10 分） 私の考える「多様な子ども」討議 1（学生による意見交換）	全体
6	「多様な子ども理解」オムニバス講義 DEF（各担任講話 10 分） 私の考える「多様な子ども」討議 2（学生による意見交換）	全体
7	レポート作成のためのスキルワーク 1（本の探し方、調べ方）2（レポートのまとめ方）	全体
8	スキルワーク 3（評価の観点）・「多様な子ども」探究計画シートの作成	全体
9	自分のテーマに応じて、関連図書についての読書	各自
10	レポート作成	各自

11	レポートについての相互評価・修正	各教室
12	レポートの最終まとめ・相互読み合わせ会　　（数日後・提出締め切り）	各教室
13	履修カルテ・教育実習・PROG 等の説明	全体
14	協育実習について（4 年間の見通し）・4 プログラム選択について	全体
15	4 プロアンケート・夏セメ大学基礎演習のまとめ	全体

まず、「大学での学びと生活」については、4 年間の学修を見通すことのできる情報を提供したり、学内めぐりを行い（各自 1 か所のみ訪問）、それを各クラスで報告し合ったりする活動を行った。すべての場所を全員で回ったのではないので、それぞれの場所について理解をするのに若干弱さがあったが、自分が訪問したところをクラスの仲間に報告するといった形をとったので、プレゼンテーションの仕方やまだなじみの薄い同じクラスの仲間たちとつながっていくという点で効果があった。

「多様な子ども理解」は、これからいろいろな子どもと接していくための基礎を形成している学修である。6 人の担任が各 10 分「私の考える多様な子ども」をテーマに話をするという方法をとった。このオムニバス講義を行うに当たっては、その司会や運営をクラス委員に任せ、学生が運営する講義という形をとった。この形をとることによって、一つひとつの講義に対して、多くの質問や意見・感想等が出された。また、自分たちも参画して授業をつくっていくのだという主体的な意識を高めることができた。

「スタディスキル」では、「多様な子ども理解」の講義を受けた上で自分のテーマを決め、レポートを書くという流れをとった。レポートを書くにあたっては、3 つのスキルワークを位置づけ、これから多く書くことになるレポート作成の方法を身に付けた。3 回目のスキルワークでは、相互に書いたレポートを読み合い、ルーブリックを活用して相互評価した。

「キャリアデザイン」では、主に今年度から始まる 4 つのプログラム選択の説明とその選択決定をていねいに行った。はじめての取り組みであるので、学生が迷ったり不利益を被ったりしないように、ていねいかつ慎重な指導を繰り返した。そのこともあり、運営方法や学生への情報提供方法等の形が整理され、2 年目の取り組みへと継承していくことができた。同様に、協育実習もこの学年の学生たちから形が変わるので、これからのことを見通すことができるよう、ていねいに情報提供を行った。

2.2「大学基礎演習II」の内容

全 15 回の内容は下記のとおりである。「ハロースクール」、「クラス活動（プレゼンテーション発表会に向けた活動／夏休み読書課題発表）」、「先輩の話を聞こう」などを実施した。

回		ハロースクール関係	形態
1	履修指導・冬セメの予定		全体
2		ハロースクールについてのお話	全体
3	①　ハロースクール	3 組ハロースクール	クラス
4	②　体験交流会（クラス）	5 組 HS　／　3 組 HS のまとめ	クラス
5	③　課題提示・ｸﾞﾙｰﾌﾟ分け	2 組 HS　／　5 組 HS のまとめ	クラス
6	④　探究・発表計画	4 組 HS　／　2 組 HS のまとめ	クラス
7	⑤　探究 1	6 組 HS　／　4 組 HS のまとめ	クラス
8	⑥　探究 2	1 組 HS　／　6 組 HS のまとめ	クラス
9	⑦　発表練習	1 組 HS のまとめ	クラス
10	探究課題クラス発表会		クラス
11	探究課題代表者発表会		全体

12	学校実地演習経験談（2 回生）		全体
13	プログラム選択・協育実習について		全体
14	履修カルテ・動態調査等		全体
15	1 年間のまとめ		全体

まず「ハロースクール」については、例年と同様の形式で四天王寺小学校にて実施した。第 1 回目の授業で四天王寺小学校 土井衛先生よりハロースクールの説明と当日の注意事項、そして教員を目指す学生としての心構え、教師という職業の魅力とやりがいについて学生に語っていただいた。各クラスのハロースクール当日では、1 年生から 6 年生までの 12 学級に学生が 1 名または 2 名入り、授業観察や個々の児童への支援、授業補助、プリントの添削業務、体育での球技活動や理科での実験に参加した。学生にとっては、初めて現場の小学校の子どもたちに接し、また、指導の様子を観察する機会であり、大変有意義なものであるので、今後も継続していくことが望ましい。

2.3　成果と課題

（1）成果

・学年会をこまめに開催できたことで、教員間の連携、学生の様子の共有がしやすかった。
・学年担当のメンバーで顔を合わせて、方針や学修展開を共有することは非常に重要である。ただ、その場合もできる限り時間を区切って行う。今年度は、1 時間以内で度の打ち合わせもできた。会議は基本長くても 1 時間が目安となる。
・全体の方針について、担当教員間で相談しながら考えられたことで、当事者意識をもつことができた。
・夏学期の「多様な子ども」のリレートークは、学生だけでなく教員も大変刺激を受けた。
・課題も残されたが、小グループによる「大学生の主張」も有意義な時間となった。
・基本的には学生に進行を行わせた。クラス委員を決める限り、その活躍の場を用意しようと考え、そのような場として機能した。来年度のはじめにクラス委員を決める際には、その旨を学生たちに伝えた上でクラス委員を選出させたい。

＜大学基礎演習の改善点＞

・冬学期の「探究活動」の期間に、学生への個人面談を行うほうがよかった
（夏学期に比べて、学生の変化を丁寧に把握することができなかった。和の精神のレポートの状況などから、何かしら学生なりの思いが発せられていたようにも思えたが、直接確認することができなかった）
・冬学期も文献講読とレポート作成を行い、評価を加える必要があった。

3.　授業相互参観について

今年度の授業相互参観を実施するにあたり、小学校教育コースで公開授業を申し出た科目と担当教員および授業日は以下のとおりである。

教育学科　小学校教育コース　相互授業参観　公開授業一覧

(敬称略)

整理番号	所属	担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	合評会
1	教初	山本　博資	11 月 6 日	水	3	教職教養研究I	4-.316	授業後すぐ
2	教初	杉中　康平	期間中いつでも	土	1	道徳教育の理論と方法	2-305	研究室で
3	教初	佐藤　美子	11 月 12 日	火	2	理科教育法	5-204	同日 4 限
4	教初	浅田　昇平	11 月 13 日	水	3	教職論	4-316	授業後すぐ
5	教初	生駒　英晃	11 月 11 日	月	2	算数	5-210	授業後すぐ
6	教初	今井　真理	11 月 7 日	木	3	図画工作科教育法II	2-405	授業後すぐ
7	教初	奥野　喜之	11 月 11・18・25 日 12 月 2・9 日	月	1	教職教養研究II	11/11 迄 4-307 以降 4-306	授業後すぐ
8	教初	木村　雅則	11 月 8 日	金	4	生徒指導論	4-416	授業後すぐ
9	教初	小柴　和香	11 月 6 日	水	4	初等英語科教育法	5-210	授業後すぐ
10	教初	坂井　啓祐	11 月 18 日	月	1	教職教養研究II	4-307	授業後すぐ
11	教初	坂本　暁美	11 月 20 日	水	3	音楽科教育法	8-210	授業後すぐ
12	教初	鈴木　浩太	11 月 6 日	水	5	発達障害の理論と指導	6-301	授業後すぐ
13	教初	千田　直	2019/11/8 11/11	金 月	4 3・4	数理探究の扉	2-205	同日 5 限
14	教初	檀上　慎二	11 月 18 日・25 日	月	5	教職実践演習（教諭）	4-213	授業後すぐ
15	教初	千葉　一夫	12 月 2 日	月	1	教職教養研究II	4-307	授業後すぐ
16	教初	長澤　洋信	11 月 13 日	水	5	特別支援教育	4-262	授業後すぐ
17	教初	永田　麻詠	11 月 8 日	金	3	初等国語科教育法	4-416	授業後すぐ
18	教初	西岡　智	11 月 11 日	月	1	教職教養研究II	4-306	授業後すぐ
19	教初	早川　透	11 月 21 日	木	1	大学基礎演習II	4-408	同日 4 限
20	教初	原田　三朗	11 月 7 日	木	4	教科内容論算数	4-209	授業後すぐ

21	教初	福本　義久	11 月 25 日	月	3	生徒指導論	2-311	同日 6 限
22	教初	福若　眞人	11 月 20 日	水	1	多様な子どもとメディア	4-412	同日 3 限
23	教初	船所　武志	11 月 29 日	金	4	国語科教育法II	4-414	授業後すぐ
24	教初	牧野　浩二	期間中いつでも	火	4	生徒指導論	2-209	授業後すぐ
25	教初	八木　成和	11 月 9 日	土	2,3	保育内容の理論と方法（言葉）	2-205	授業後すぐ
26	教初	山口　仁久	いつでも可	水	4	社会科教育法II	2-311	授業後すぐ

今年度は、新着任教員対象のメンター研修制度において、授業相互参観への参加が推奨されていたため、新着任教員 10 名は授業相互参観に関する報告書が提出された。そのうち、3 名の先生からの報告書を以下に示す。

参観した授業科目名	教科内容論（算数）
授業担当教員名	原田　三朗　　先　生
令和元年　11　月　7　日（　水　）	教室：　2-209

参観した授業に関して、お気付きの点などを（1）に、また、学生の授業態度や施設・設備などに関して、お気付きの点を（2）にご記入ください。

（1）授業に関して

本時では小学校 2 年生児童対象の教科書についてその扱われている内容、手法などを読み取ることが課せられた。前週の授業で一通りの活動を経験していたようで学生はグループ活動にスムーズに取り組む様子が見られ活発な意見交換がなされている様子、さらに発表時には積極的に挙手する姿が観察された。

主に学年主体の活動が授業の大半であったがどこかのタイミングで教員からの交通整理があってもよいのでは？と感じた。(ただ今回の授業をみただけでのこのコメントは的外れかもしれない。)

シラバスには「求められる算数の授業を研究する」とあるので今回のような活動を繰り返し、授業の終盤で授業研究、教材研究などにつなげられるのだろうと想像しながら学生の活動を観察させてもら

った。個人的に私自身の授業は外国語であるため、全く違う学生の様子が見られほかの先生の授業を参観させていただいたことは大変貴重な時間となった。参観を許可してくださった原田先生に感謝と敬意を表す。

（2）学生の授業態度や施設・設備などに関して

グループワークに適した1台ずつ可動式机が設置された教室で授業内容に適している。学生は落ち着いた様子で課題に取り組んでいた。教科書に関する気づきをリスト化する課題はそれほどハードルの高いものではないはずだが時間内に求められた量を書けていない学生もいたのはなぜなのか、それはそのままで良いのか少し気になった。

参観者所属	参観者氏名
教育学部教育学科	小柴和香

参観した授業科目名	生徒指導論
授業担当教員名	福本　義久　　先　生
令和元年　11　月　25日（　月　）	教室：　2-311

参観した授業に関して、お気付きの点などを（1）に、また、学生の授業態度や施設・設備などに関して、お気付きの点を（2）にご記入ください。

（1）授業に関して

「いじめ」「少年非行」「不登校」の3種類の事象について、学生たちが現状を調べ、討論をするという授業であった。全体を3つのグループに分け、さらに1つのグループをA～Fの6つの班に分けてA班がいじめ、B班が少年非行などという風に話題を分担し、1週間かけて調べたこと、思ったことをグループ内で発表し、討論するという形式（ジグソー型）の授業であった。

発表と討論がうまく進むよう、あらかじめ福本先生が調べるべき項目をわかりやすく指示し、発表用の冊子も準備されていたので、学生たちは戸惑うことなく、スムーズに議論ができていた。また、グループによっては、これは違うのではないかという方向に議論が進むこともあったが、福本先生が後日の授業でフォローされるとのことであった。
主体的で対話的な学びの方法として、ジグソー法を見学したのは初めてであり、私自身大変勉強になった。ありがとうございました。
（2）学生の授業態度や施設・設備などに関して
福本先生がわかりやすく指示を出していたので、学生たちは混乱なく討論を進めていた。討論に関係ない私語等はまったくなく、与えられた課題に真剣に向け合う態度であった。
設備等については問題なく、パワーポイント等を効果的に使っての授業であった。
み、グループワークも意欲的に取り組んでいたように窺えました。

参観者所属	参観者氏名
教育学部	檀上慎二

参観した授業科目名	初 等 国 語 科 教 育 法
授業担当教員名	永　田　麻　詠　　先　生
令和元年　11　月　8　日（　金　）	教室：　4-416

参観した授業に関して、お気付きの点などを（1）に、また、学生の授業態度や施設・設備などに関して、お気付きの点を（2）にご記入ください。
（1）授業に関して
参観日は、小学校国語科の教科書教材と原典の比較（例：『スイミー』『モチモチの木』など）を

2名ペアないし複数のグループで行い、ワークシートにまとめて学生どうしで発表を行うという活動であったため、学生が主体的なやりとりをしていた姿が印象的でした。60人規模の授業においてマイクを使わずとも通じる声量や、説明の要所では声のトーンを小さくされたり、間を置かれたりと、教員の話し方について学ぶところが多くありました。また、発表後に改めて、今回の活動のねらい（学習指導案や模擬授業へとつなげる）の確認が行われた点も、授業の流れが理解しやすかったです。なお、授業の指示スライドがセンテンスで構成されていたため、活動の流れがスッとイメージしづらい学生がいたのではないかと思われました（より端的な指示文章や、図式化された指示内容があれば、分かりやすかったかもしれません)。原典との比較はどのグループも力が入っていましたが、授業化する際の原典の活用に関する考察がもう一歩深まるための説明があれば、学びがより深まるのではないかと感じました。
（2）学生の授業態度や施設・設備などに関して お昼休み明け、3限の授業ということもあったうえ、当日、外はかなり強い日差しがあったため、教室内（特に後方＝窓側）はかなり暑かったです。 関心度の違いによって、受講態度に差はありましたが、開始時の瞑想にも真摯に臨み、グループグループワークも意欲的に取り組んでいたように窺えました。

参観者所属	参観者氏名
教　育　学　科	福　若　　眞　人

ここには3名の先生からの報告書を挙げるにとどめたが、今年度は新着任教員による授業相互参観が活発になされ、研鑽として成果があったと思われる。ただし、新着任教員以外の教員による授業相互参観は例年通り低調傾向にある。原因としては、参観を希望する授業時に自らも授業を行っていることが多いことが考えられる。特に教育学部教員は、教員免許取得のための必修科目が多く、教員一人ひとりの担当科目数も多くなることから、教員の空き時間と公開授業日がなかなか合わない要因となっている。教員が相互に参観するうえでは日程的な課題があるため、今後は授業相互参観の実施方法の検討が必要となる。

4.　学科独自の取り組み

新カリキュラム 1 年目である小学校教育コース独自の取り組みとして、次の 2 点を挙げる。

(1)「扉シリーズ」科目の設定

本コースの入学生は、特に理数科目への苦手意識があり、苦手科目についてどのように学べばよいのか戸惑う学生が少なくない。また、高校から大学へと進学するなかで、本来ならば高校までの偏差値的な狭い学力観だけでなく、高等教育の場や「学問」を修めるということから、学力観を拡げていかなければならないものの、本コースの学生は 1 年生のみということもあってか、狭い学力観にとらわれたままの傾向が見られる。こうした課題に対応すべく、学力観を転換し、「学ぶとはどういうことなのか」「学ぶことはおもしろい」と実感できるような、「学び直し」「学びほぐし」の科目として「扉シリーズ」を設定している。

今年度の「扉シリーズ」は、学生が苦手とすることの多い「数理探究の扉」と「英語探究の扉」が 1 年生対象に開講された。学生たちはそれぞれの授業において、楽しみながら主体的に学び、各学問の本質に迫る内容を学修している。学修の成果として、今後学年が上がるにつれて学力観を自ら拡げ豊かにしていくことが望まれる。

(2) プログラム選択

小学校教育コースでは、小学校教諭免許の取得を基本としながら、多様な子どもや社会に対応できる「いい先生」を問い続けるために、「特別支援教育プログラム」「幼稚園プログラム」「英語教育プログラム」「数学教育プログラム」の 4 プログラムが設定されている。新カリキュラム 1 年目である今年度は、各プログラムにおいていわゆる「お試し科目」が開講され、自分がどのプログラムを選択することで「いい先生」をめざし問い続けるのかについて学生が考え、年度末に各プログラム選択者が決定した。

プログラム選択の特徴としては、「プログラムで学ぶ＝各プログラムでの教員免許取得」ではないこと、プログラムを選択しないという選択も尊重することが挙げられる。

各プログラムでの学修により、各種教員免許取得をめざすことは基本であるが、かりに教員免許取得を希望しなくても、各プログラムで学びたいという学生の思いを尊重している。そのため、新カリキュラム 1 期生が 2 年生となる来年度に、プログラムを選択しなおすという意志があれば自由に行うことができる。ただし、4 年間で各種教員免許の取得もめざしている学生に対しては、プログラムの選び直しについて慎重に行うよう注意喚起を行っている。

また初等教育を深く学びたい者や、進路変更によって教職以外の将来を考える者が「プログラムを何も選択しない」という選択も尊重している。プログラムを選択しないことにより、プログラム科目が開講されている時間に初等教育に関する科目や、教員採用試験対策科目を受講することができる。また、教職以外の進路を希望する学生に対しては、「子ども理解領域」として「子ども支援ボランティア論」「子ども企業研究」などといった選択科目を設定し、小学校教育コースでの学修が、学生一人ひとりにとって充実したものとなるよう、カリキュラム上の工夫を行っている。

（附記）本報告書は、FD 委員 2 名が確認のうえまとめたものである。
本報告書における「2. 大学基礎演習について」部分は、原田三朗先生にデータや草稿をご提供いただいた。ここに附記し、御礼申し上げます。

（文責　永田 麻詠）

教育学科小学校・幼児保育コース

1. はじめに

1.1　小学校・幼児保育コースの現状

本コースは、これまで、小学校教員養成を主目的とし、小学校教諭一種に加え、幼稚園教諭一種、中学校・高等学校教諭一種免許（英語）が取得可能なカリキュラムを組んできた。

その後、平成 26 年度より、幼稚園教諭一種免許に加えて保育士資格が取得できる「幼保クラス」（当初は定員 40 名でスタートしたが、平成 28 年度より定員 60 名）を設けた。「幼保クラス」は保育者養成に主眼を置いているが、小学校までの子どもの発達を見据えた保育ができる保育者養成をめざし小学校教諭一種免許も取得できるようにしている。「幼保クラス」を設けたため、本コースの入学定員は 180 名となったが、平成 30 年度は 203 名の入学者を受け入れ、また、新任教員 5 名（うち 3 名は教職教育推進センター）を迎え教員 32 名体制となった。　なお、「幼保クラス」への選抜試験は 1 年次の冬学期に実施し、2 年次から「幼保クラス」を編制している。

平成３１年度（令和元年度）入学生から、これまでの、小学校・幼児保育コースを、小学校教育コース、幼児教育保育コースの二つに分けて入学時から別々に募集し、編制するようになったため、今年度の小学校・幼児保育コースは、2 年次以上の学生が在籍するコースとなった。

本コースは、教員を志望し本コースに入学してきた学生についての出口保障を第一義としてカリキュラムを整え教員採用試験対策にも注力してきている。

今年度の教員採用試験結果（令和２年４月 15 日現在）であるが、教員採用試験合格者（小学校教諭）は 36 名であった。その他、公立学校講師 42 名（小学校教諭 40 名、中学校教諭 1 名、特別支援学校 1 名）、私立小学校教諭（講師）1 名、公立幼稚園教諭 2 名、公立幼稚園教諭（講師）2 名、私立幼稚園教諭 7 名、公立保育所（園）・こども園 6 名、公立保育所（園）・こども園講師 1 名、私立保育所（園）9 名、公務員（羽曳野市職員・自衛隊）2 名、福祉職 5 名、また、33 名が一般企業に就職している。

また、上記のうち「幼保クラス」40 名は、公立幼稚園教諭 2 名、公立幼稚園教諭（講師）3 名、公立保育所（園）・こども園 6 名、公立保育所（園）・こども園（講師）1 名、私立保育所（園）5 名。また、教員採用試験合格者（小学校教諭）5 名、その他公立小学校教諭（講師）2 名、一般企業 8 名および福祉職には 4 名が就く結果となった。

今年度は、大阪府など複数の自治体で昨年度に比して教員採用人数が減少したため、合格者は昨年よりも減少したが、逆に合格率は上がっており、かなり健闘したと言えるのではないだろうか。

1.2　今後の課題

今年度の卒業生の進路をみれば明らかなように、卒業生全体のうち一般企業への就職者が 30%を超えている。2，3 年前から、一般企業への就職を希望する学生が増加傾向にあるのは、好景気を反映して企業からの求人が増え、売り手市場であることも要因の一つであろうと考えられる。しかし、各都道府県の採用人数が減少傾向にあることや教育実地演習（インターンシップ）や教育実習経験後、自分の教員としての適性に疑問を感じて、教職より一般就職を希望する学生が増える傾向にあるのも事実であり、しかも、割合に早いうちに教員の夢を諦めてしまう学生が増えているのも否定できない。

そうした学生に対して教職に就くことを強制することはできないが、モチベーションの低下や教員としての適性の有無に迷う学生に対しては、自己肯定感を高め自信を持たせるために、個々の学生の事情

に即した一層きめ細かい指導が求められている。今後は、学生が抱える不安や悩みについて、担任だけでなく本コース教員全員が情報共有し学生の心に寄り添いつつ時宜を得た適切な指導により、学生自らが能動的かつ自主的にキャリアデザインを描くことのできる環境を整えることが必要である。

2.「大学基礎演習」について

今年度より、小学校教育コースと幼児教育保育コースの２コースで、それぞれ別々に「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」を実施することになったため、それぞれのコースの報告のページ詳細を記すこととする。

ここでは、小学校幼児保育コースとして取り組んでいる、２年次の「教育基礎演習Ⅰ・Ⅱ」の取り組みについて述べていくものとする。

2-1「教育基礎演習Ⅰ・Ⅱ」の取組み

本学において１年次の「大学基礎演習」、２年次の「教育基礎演習」の基礎演習科目は、①初年次教育、②キャリアデザインの構想、③大学生活の“中だるみ”防止の３点で必要とされ実施されてきた。また、この授業は本学の特長である“少人数で丁寧な指導”の制度的態勢の最前線に位置づくものであり、各クラス担任はその役割と責任を担って取り組んでいる。

しかし一方で学年の担任団は人事の関係でメンバーが入れ替わり、２年間を見通して内容を企画・運営しているとは言い難い。また“少人数で丁寧な指導”や大学でのキャリアデザイン面からすれば３年次からのゼミとの関係も考慮したうえで基礎演習科目の形態・内容を検討する必要がある。そこで学部改革を機に、平成 30 年度に基礎演習からゼミを、一連の流れとして捉える意義やねらい、育成する力についてプロジェクトで検討し、今後の基礎演習を構想する際に次の２点の観点が必要であるとされた。

①大学全体の学修の中での基礎演習の果たすべき役割や他の教育活動との関連を踏まえた位置づけ・意味づけ、そして両基礎演習を通して育成する力を明確にして実施する(学生、教員の両方)

→　カリキュラムポリシーに位置づいた体系化　ディプロマポリシーとの整合性

②大学基礎演習から教育基礎演習へという基礎演習どうしの内容の系統性を保持することを考えて、「積み上げ」や「広がり」を見据えてテーマの配列を決める。

→ 指導の継続性　一貫性

2-2 令和元(2019)年度の「教育基礎演習」の構想

学生のキャリアデザイン①を**広い視野②**から**長期的③**にとらえるカリキュラムとして考える。そのカリキュラムは**系統性④**も意識してマネジメントする。また、実施に当たっては内容だけでなく、その形態や方法において**履修学生が意欲をもって主体的に取り組もうとする工夫⑤**を考え、評価の仕方についても**学修の成果を出来るだけ可視化⑥**するように努める。

①　学生のキャリアデザインについて

本学科・コースの学生のキャリアを、［進路目標は幼稚園・小学校の教員、その実現のための教員免許取得に必要な教科の学習と教員採用試験で問われる資質や態度の育成］と狭く、限定的に捉えず、そのための土台づくりや職業人として社会で長く貢献していける人物になるために必要な、広く長いキャリアデザインを考えて内容や方法を設定する。何よりもキャリアデザインをするために基盤となる「活動の自主性」と、「学びに向かう主体性」を育成するきっかけを与える学修とし、学修意欲の向上につながることを期待する。

②広い視野　④系統性について

○存在の多様性(とくに子ども)の理解に繋がるような内容を取り上げる。
通常の履修科目では扱わないような内容や教育関係現場の問題も取り上げ、その現実か　ら考える機会を提供する

○教員の仕事を関係機関等との連携の視点から捉える
教育問題の解決や学校運営を学校という場や教員という職業だけの視点で捉えるのではなく、教育に取り組んでいる学校外の企業や専門家や関係機関・団体などを系統的に取り上げ、それぞれがどのような意図や専門的立場から子どもや教育に関わろうとしているかを理解する。そのうえで改めて学校や教師の役割を認識する機会とする。

○教育の営みを、学校教育や教員という職業以外からも考える機会を設け、それに応じた　情報を提供し、将来の適切な進路選択につなげる。

○この学年までは旧カリキュラムで小学校と幼保の希望者が一緒に学ぶクラス編成が可能　なので、学校・園の区別を取り払ったクラス編成とし、学修活動でそれぞれの知見を活かし色々な見方が出てくる機会も必要に応じて設ける。

③長期的　⑥学修成果の可視化について

○キャリアデザインを見通す期間を在学中だけに限定せず、職業人としてのキャリアまでも見通して考える機会とする
ex.教員としてのキャリアステージまでを見通し、大学在学中に付けるべき技能や内容を入れる

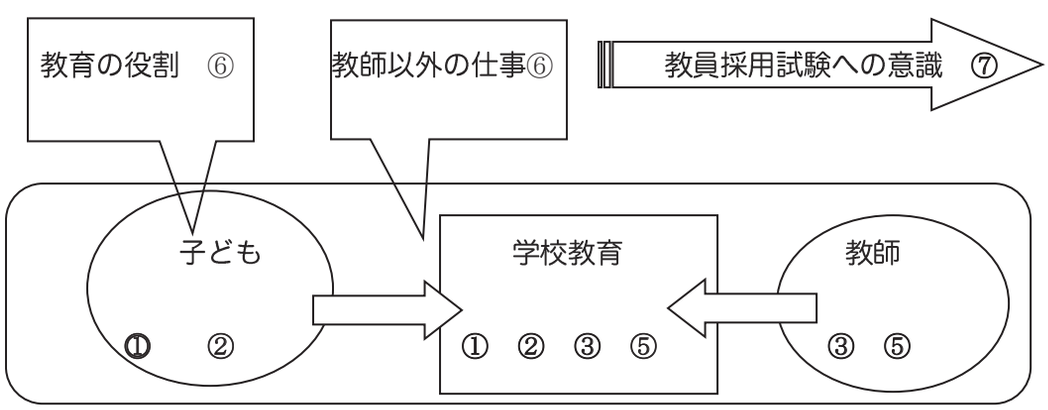
○毎時間の取組内容についての満足度を漠然と訊ねるアンケートではなく、毎時間の取組で育成したい資質・能力の目標を明確に示し、その達成具合を学期末に「自己評価シート」にまとめる

2-3. 具体的な実施内容

①　クラス分けについて

従来の小・幼保別ではなく、小・幼混合の８クラスとした。その方がテーマについて多角的な見方が出てくることが期待できる。またクラスメイトの多様なキャリアデザインについての考え方も知ることができると考えた。

②　内容について　　【　構造イメージ図　】



テーマ	内　容	集団で取り組む楽しさを知るしかけ
①社会の変化に伴う学校教育の在り方を考える	○多文化共生時代の学校づくり 講師:.外国籍児童が多い学校での指導経験が豊富な校長先生	○討論する機会 ex. ディベート
②子どもの多様性を理解し人権を考える	○性の多様性を理解し、自分らしく生きることを考える 講師: 児童指導員で自身がLGBTの方	
③子ども支援の在り方を考える	○学校・家庭以外で子どもの交流の場や遊び場を提供する活動 ワークショップ:NPOと学生の連携	○内容を企画し、実行する ex. ・運動会 ・二十歳の私から ○○へのメッセージの発表
	○学校と連携し子どもの育ちを見守る専門職や機関との連携の在り方 .講師:大学教員でｽｸｰﾙｿｰｼｬﾙｶｳﾝｾﾗｰ経験者	
④教育に関わる教師以外の仕事を知り、教育の意義や役割を広く考える	○子どもの成長を援助する企業、いわゆる「子ども産業」の経営理念や具体的取組 講師:キッザニア甲子園社員	
⑤教師の仕事を進めるうえで自覚することを考える	○学校や教師を巡る法律問題 講師:スクールロイヤー ○教育・学校・教師について学生と先生によるパネルディスカッション	
⑥専門的に研究する内容を決める	○ゼミ選択	各ゼミ生によるブース形式での説明
⑦教員採用試験も意識する	○冬学期:「めざましテスト」	

2-4 評価について

○毎時間の活動の評価

内容をワークシートに記入し、ファイリングする→ポートフォリオ評価に生かす

○期末評価

「大阪府教員等育成指標」のⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ項目に関係する内容を横軸に、各回の内容を縦軸に配置したシートを作成。それを利用して自己評価し、育成できた資質・能力を確認し取り組んで学んだ内容を振り返る。

2-5 その他

学生が授業により主体性をもって臨むためには、授業内容を学生も関わって決めるという方策がある。特にこの基礎演習科目ではそのような取り組みが実現しやすい。授業運営委員的なことをする学生を募り、学年団の教員と協議しながら扱う内容や活動を検討することを探ってもいいと考える。

３．授業相互参加について

今年度において公開授業を行った教員と科目、授業日時、合評会開催の方法については次の表 3－1、3－2 に示す通りである。公開授業の科目数は 34 授業であった。

表 3－1；教育学科小学校教育コース　相互授業参観　公開授業一覧

No.	教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	合評会
1	山本　博資	11 月 6 日	水	3	教職教養研究Ⅰ	授業後すぐ
2	杉中　康平	期間中いつでも	土	1	道徳教育の理論と方法	研究室で
3	佐藤　美子	11 月 12 日	火	2	理科教育法	同日４限
4	浅田　昇平	11 月 13 日	水	3	教職論	授業後すぐ
5	生駒　英晃	11 月 11 日	月	2	算数	授業後すぐ
6	今井　真理	11 月 7 日	木	3	図画工作科教育法Ⅱ	授業後すぐ
7	奥野　喜之	11 月 11・18・25 日、12 月 2・9 日	月	1	教職教養研究Ⅱ	授業後すぐ
8	木村　雅則	11 月 8 日	金	4	生徒指導論	授業後すぐ
9	小柴　和香	11 月 6 日	水	4	初等英語科教育法	授業後すぐ
10	坂井　啓祐	11 月 18 日	月	1	教職教養研究Ⅱ	授業後すぐ
11	坂本　暁美	11 月 20 日	水	3	音楽科教育法	授業後すぐ
12	鈴木　浩太	11 月 6 日	水	5	発達障害の理論と指導	授業後すぐ
13	千田　直	2019/11/8 11/11	金 月	4 3・4	数理探究の扉	同日 5 限
14	檀上　慎二	11 月 18 日･25 日	月	5	教職実践演習（教諭）	授業後すぐ

15	千葉　一夫	12 月 2 日	月	1	教職教養研究Ⅱ	授業後すぐ
16	長澤　洋信	11 月 13 日	水	5	特別支援教育	授業後すぐ
17	永田　麻詠	11 月 8 日	金	3	初等国語科教育法	授業後すぐ
18	西岡　智	11 月 11 日	月	1	教職教養研究Ⅱ	授業後すぐ
19	早川　透	11 月 21 日	木	1	大学基礎演習Ⅱ	同日 4 限
20	原田　三朗	11 月 7 日	木	4	教科内容論算数	授業後すぐ
21	福本　義久	11 月 25 日	月	3	生徒指導論	同日 6 限
22	福若　眞人	11 月 20 日	水	1	多様な子どもとメディア	同日 3 限
23	船所　武志	11 月 29 日	金	4	国語科教育法Ⅱ	授業後すぐ
24	牧野　浩二	期間中いつでも	火	4	生徒指導論	授業後すぐ
25	八木　成和	11 月 9 日	土	2, 3	保育内容の理論と方法（言葉）	授業後すぐ
26	山口　仁久	いつでも可	水	4	社会科教育法Ⅱ	授業後すぐ

表 3－2；教育学科幼児教育保育コース　相互授業参観　公開授業一覧

No.	教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	合評会
1	田辺　昌吾	11 月 26 日	火	4	保育方法論	後日日程調整
2	石田　陽子	11 月 27 日	水	5	保育内容の理論と方法	授業終了後
3	小川　圭子	11 月 26 日	火	4	保育者論	授業終了後
4	丹羽　智美	11 月 27 日	水	4	教育心理学	授業終了後
5	橋本　智也	11 月 26 日	火	5	メディア教育演習	授業終了後
6	吉田　康成	11 月 21 日	木	4	体育科教育法Ⅱ	授業終了後
7	山田　綾	11 月 26 日	火	4	子育て支援	授業終了後
8	吉田　祐一郎	11 月 11 日	月	3	社会的養護	同日 4 時限

授業参観後に参観シートを提出することとなっているが、提出は 2 件であった（この他に他学部の公開授業への参加が 1 件あった）。この 2 件の参観シートの記述内容からは、参観した授業から学んだ点や授業をさらに良くするための「提言」などが記述されており、参観した教員本人だけでなく当該授業担当教員にとっても授業改善に向けての「良い気づき」の機会となっていることが見て取れる。

しかしながら、実際に授業参観をした教員数が、参観シート提出件数の限りでわずか 2 名にとどまっているのはやはり課題であると言わざるを得ない。だが、これには自身の授業と日時が重なっていることや、授業とは別に種々の学内業務や学生対応があり、参観したくてもできないという切実な事情があ

ることも確かである。

公開授業は前記の参観シートの記述内容からも推察されるように、教員各自が自身の授業の内容や方法を工夫する手立てを考えるなどの授業改善を図っていくための絶好の機会である。したがって、たとえば、各教員の公開授業科目を現行の 1 科目から 2 科目に増やす、あるいは授業動画を活用するなど、公開授業の実施方法について改めて検討することが今後必要である。

４．　学科独自の取組み

4-1　教育学部 FD の開催

本年度は FD 活動を 3 回実施した。「パフォーマンス演習」「リリサーチ・リテラシーの獲得」「学修成果の評価方法」、それぞれの専門家を講師として招聘し講演会を実施した。

第 1 回　2019 年 7 月 11 日（木）　講師：武田富美子 氏

新しく小学校コースの必修科目として設けられた「パフォーマンス演習」について、授業担当者のお一人の武田富美子先生をお招きし、授業に関する共通理解を図るとともに、身体や即興性を活用する授業に関しての教育的な意味を考える機会とした。

教員が実際に授業の一部を体験したことで、授業に関する課題なども感じられ、より良いカリキュラム作りという点で、教員間での共有が出来たことは非常に良かった。

第 2 回　2019 年 10 月 10 日（木）講師：林 創 氏

学生の課題解決能力を高めるために必要な力とは何か、論理的で批判的な思考力と判断力を身につけることを大きな課題と捉え、解決に向けて必要な力の育成について学ぶ機会とした。児童期の具体例を取りあげ、研究の進め方の紹介など、学生の卒業研究の指導にも有効な講話であった。学生の参加も数名あり、教員と学生が学びを共有したという点で非常に有益であったと考える。

第 3 回　2020 年 1 月 28 日（火）　講師：近田　政博 氏

学生の学修成果を把握し、可視化することは、学生の成長を促すという第一の目的と同時に、大学教育の質保証を図り、信頼性確保という社会に求められている大学の説明責任としての重大な課題でもある。学生自身が自己の成長を意識しながら主体的に学んでいくために、個々の教員が継続して実施可能な学修成果の可視化の意義、その手法について学ぶ機会とした。他学部の先生方の参加もあり、終了後もしばらく質問が続いた。

3 回の FD 活動を様々な形態で実施した。今後もどのように進めるか検討していきたい。

4-2　3 つポリシーに基づく平成 31 年度実施の AO 入試方法および入試問題の検討と作成

入試改革プロジェクトチームが中心となり、平成 31 年度（令和元年）8 月実施の AO 入試を新しい形で、実施した。これは、これまで行ってきた基礎学力テストができなくなったため、他大学の AO 入試方法等も参考にして検討を重ねた結果、アドミッション・ポリシーに基づき、思考力、判断力、表現力を問う入試（セミナーと資料解読を含む論文）を実施することとしたものである。

4-3　教採対策

教職教育推進センターと協力し、学生が受験地ごとに勉強会を立ち上げているが、それぞれの会に教員 1，2 名が参加し、主として面接指導や集団討論、場面指導、模擬授業等の指導を行なっている。

4-4　教育学科サロン

教育学科サロンは、教育学科全体の企画として、平成 26 年度より毎年、大学祭開催期間中の 11 月 3 日に開催されてきた。教育学科の卒業生や在学生が先輩の話を聴く機会を持つという主旨で実施されている。今年度も 11 月 3 日（祝：13:00〜15:00）に開かれた。小学校教育コース、幼児教育保育コースだけでなく、中高英語教育コースと保健教育コースの教職員や卒業生にも呼びかけ協力をお願いした。

当日は、約 10 名の教育学部卒業生の参加があり、和やかな雰囲気で教職員と交流することができた。しかし、教育学科の卒業生数からすれば、参加者はごく一部に限られていると言わざるを得ない。この企画が始まった時から、卒業生への周知方法については検討課題であったが、今のところ、大学の HP や大学祭パンフレット等での案内にとどまっている。今後、教育学科サロンをどのような形で運営するか将来的ビジョンを明確にしたうえで、卒業生への周知方法を考えていく必要があろう。

今年度は、学部改編後の調整作業が膨大にあり、非常に慌ただしく忙しい一年間であった。そのような状況で、教員採用試験において、合格者数そのものは減少してしまったが、本学の教員志望の学生が、健闘してくれたことは喜ばしいことであり、それは学生の頑張りと教職教育推進センターを中心とした教育学科教員の指導の結果であろうと考える。

しかし、小学校の採用人数の減少傾向が顕著になってきており、教育学科をとりまく環境は非常に厳しいものがある。また、この 2，3 年で、教免は取得するものの教員にならない学生がほぼ半数を占めるようになっている。今年度からスタートした新カリキュラムをより一層効果的に運用するため、また、時代や社会の急激な変化に対応するためには、学科、コースとして、数年先の変化を的確に予測するとともに、新たな改革を模索し続けていかねばならないだろう。

（文責　杉中康平）

教育学科中高英語教育コース

1. はじめに

本コースは，中学校・高等学校の英語教員免許状（基本免許状）を主とし、小学校の教員免許状（併修免許状）も取得できることを特色として設置されている。しかしながら、本コースへ入学してくる学生は、卒業後、英語を得意とする小学校教員になることを目指すものが多い。また 2020 年より小学校の 5 、6 年生における英語の教科化され、これに伴って一部自治体が中学校・高等学校の英語科教員免許状所持者に採用試験時の加点を行っているため併修免許状として、中学校・高等学校の英語科教員免許状を取得する本学小学校・幼児保育コース所属の学生が急増している。

また入学時には、ほとんどの学生が教員志望だが最終的に一般企業への就職を目指すようになる学生もいる。

教育学部の 4 コースへの改編で本年度より中学校英語・小学校コースから中高英語教育コースへの名称変更により、中学校・高等学校の英語科教員を志望するものが大きく増加した。また理由は定かではないがコース教員の一致した印象としては学生の英語レベルと教職への動機づけにおけるばらつきが大きくなっている。

中学校・高等学校の英語教員志望、小学校の教員志望、一般企業への就職志望の３つのグループの学生に対しての教育を担うという状況は続くが、このように中学校・高等学校の英語教員志望の学生が増加し、学生のレベルと意欲にばらつきが大きくなっていることから、さらにきめ細かい指導が必要になると思われる。

2. 大学基礎演習について

概要：本学の建学の精神の理解を基本に、大学における学修と大学生活の意義と目的全般にわたり初歩的な自己課題を自覚するとともに、それを支える基礎的知識・技能・態度を修得することで、ＩＢＵ及び所属する学部学科への所属感を確かなものとし、以降の学生生活への見通しを持つ。

到達目標

①本学に所属し、学ぶことの意義を理解し、以降の学生生活に対する自己課題を自覚できる。

②「大学生」としての学修に必要な基本的知識・技能・態度を修得できる。

③「教える」とは何かを理解し、自らの目的意識として具体化できる。

④教員や友人との適切な人間関係を築くことができる。

一年時は、ほぼ全員が教員志望であることを踏まえ約 40 名の学生に対し夏学期・冬学期とも 2 名の教員を配置し、主に教職に就く意欲を高めることと英語の運用力を高める指導を行った。また面談も実施し大学生活に慣れるサポートを行うとともに、「よい先生」になるために英語力をはじめとしてどのような能力を在学中に身につけるべきか理解させ努力

させるように授業を行った。

両学期とも日本人教員とネイティブ・スピーカー教員を組み合わせて配置し、夏学期はティームティーチングで、冬学期は学生を 20 名ずつのグループに分けて授業途中でグループを取り替えるという形で授業を行った。

夏学期はレッスンごとに異なるコミュニケーション方略を主に取り扱った。冬学期はネイティブ・スピーカー教員が英語を使って与えられた目的を達する活動を行い、日本人教員は論理的にスピーチを構成して発表する活動を主に行なった。また学習ポートフォリオの入力作業なども行った。

FSD の観点からはこのような形で教員二人が話し合いながら授業を行うことにより日本人教員とネイティブ・スピーカー教員それぞれの強みを活かし、相互に学び合う環境となっている。

また本年度の本コース新しい取り組みとして、小学校コースなどと同様にハロースクール（1 年生全員が四天王寺東中学校の教育現場を見学し授業観察を行う）を実施し、教職へ意識づけを行った。

3. 授業相互参観について

コースとして互いの授業は常に開かれた状態でありできるだけ相互に参観することを合意しているが、授業の重なりや人員不足による多忙のため、コース教員同士の定期的な総授業参観は実施が難しい状態である。

また授業外で行った英検対策や教員採用試験対策はしばしば複数の教員が同時にかかわり、互いに学びあうことができた。

4. コース独自の取り組みについて

中高英語教育コースの学生には中学校・高等学校の英語教員志望、小学校の教員志望、一般企業への就職志望の３つのグループが存在するが、共通するのは英語力の重要性である。そのために平成 30 年度は以下のような取り組みを行った。

この取り組みを行いリアクションペーパーなどで学生の反応を確認する中で教員が自身の教え方を振り返り、授業の質の向上に資することができた。

また国内外の研修を企画し付添も行うことでコース教員の英語使用の機会が増え、学生の理解が深まり、教員としての資質と能力の向上に寄与した。

（１） 英語力の向上

① 資格試験受験の奨励と指導 : 英検などの資格試験受験を折に触れて奨励し、英語面接対策指導を行った。

② 留学生との交流 : マレーシア国民大学、ソルトレークコミュニティカレッジおよびユタ大学の学生との交流を行った。

③　iTalk 訪問の奨励：授業中折に触れ訪問を奨励した。

（２）　授業の質向上に向けた取り組み

①　全学的に年 2 回行われる授業評価「学生アンケート」を参考に授業改善に努めた他、授業改善について意見交換を行った。

②　教職関連授業あるいはゼミ等で、その一部あるいは全部を英語で行い、学生への英語のインプットの機会を増やすと共に、英語による授業の実践例を共有した。

③　リアルタイムウェブアンケートシステム「イマキク」を一部授業で導入し、学生の反応をリアルタイムで把握する、期限を決めてレポートをテキスト形式で入力させるなどの取り組みを行い、一定の成果を得た。大学全体への導入への道筋をつけた。

④　ゼミの授業の質担保のために、ゼミクラスでの日本語英語両言語での論文形式のレポート提出とゼミ内英語プレゼンテーションを本年度は全ゼミで実施した。また冬学期には全ゼミ生の前で各ゼミ優秀者が英語プレゼンテーションの発表を行った。ゲストスピーカにカンボジアの大学生二人を招き、英語によるプレゼンテーションを発表してもらった。

（３）　★教員採用試験対策（授業外）

①　3 回生対象各種セミナー面接対策：5～6 月、週 1 回

②　4 回生対象和文英訳・英語エッセイ・英語面接およびディスカッション対策：4 月～9 月、週 1～2 回

③　3 回生および 4 回生対象各種エントリーシート添削：随時

（４）　海外および国内研修

①　グローバルユースカンファレンス（六甲 YMCA　平成 30 年 8 月 6 日～8 月 9 日）に学長奨励金を得て 4 名の学生が参加した。成果を教英全 1 年生の前で英語で発表した。

②　アメリカ英語研修参加者(平成 31 年 2 月 10 日～3 月 9 日)に１１名(小幼 2 名，中英 9 名)参加した。

③　グローバル教育研修参加者（アメリカユタ州　平成 31 年 2 月 16 日～2 月 23 日）に後援会からの支援を得て 10 名（うち中英 7 名　昨年度は 4 名）参加した。

④　グローバル教育研修中にユタ大学およびソルトレークコミュニティカレッジの交流担当者と打ち合わせをし、両大学学生が訪日の際のより実りの多い交流方法について合意を得た。（共同での授業案作成、タンデムティーチングなど）

（5） コミュニケーションの英語化

昨年同様コース会議・相互連絡などを可能な限り英語で行い、日本人教員の英語使用の機会を増やすと同時に、ネイティブ・スピーカー教員の大学運営や学生に対する理解を深め、コース教員の資質向上に資することができた。

5. その他（今後について）

基本的に来年度以降も同様の取り組みを質の向上を意識しつつしっかり取り組んでいくが、授業の相互訪問が課題である。来年度は夏学期・冬学期 1 回は相互訪問できるようにしたい。またゼミにおける卒業研究の扱いについても検討していく。

令和１年度 FSD 報告書　教育学部教育学科保健教育コース

1. はじめに

教育学部教育学科保健教育コースは、児童生徒の健全な発育発達と心身の健康の保持増進に関する専門的な知識・技能および教育現場に求められる実践力・指導力を有し、高い人格と倫理観、豊かな教養を備え、時代の要請に応える優れた養護教諭の養成教育を目的としている。本コースでは、養護教諭養成を主軸とした教育プログラムを展開しており、併せて、小学校教諭１種免許状が取得できる。

本コースの 4 年間の概要は下記の通りである。なお、科目名については、令和 1 年度から始まった新カリキュラムでの名称も併記した。開講学年が変わる科目もある。

1 年次は、教育実践理解期にあたり、教育者として必要なコミュニケーション能力や表現力及び幅広い教養を身につけ、教職への関心を深め、意欲の向上を図る。主な専門科目として、「養護概説」、「学校保健」、「解剖生理学」、「看護学／学校看護学」、「栄養学」等を開講し、養護教諭の職務遂行に必要な知識と技術を習得する。

2 年次は、基礎的教育実践力養成期にあたり、「救急処置／学校救急処置」、「公衆衛生学」などの専門科目を通じて医科学的知識の更なる充実を図り、「精神保健」、「小学校専門科目・教科教育法」を通じて、子どもの学習能力・心身の発育発達と小児期・学童期・思春期特有の心身症及び心のケアについて学びを深める。また「臨床看護学演習」及び「臨床実習」では、医療機関における機能と役割を理解し、医療・看護の最新の知識を習得するとともに、学校と医療機関との連携を理解し、生命と健康の尊さを学ぶ。さらに、「学校実地演習／インターンシップ・スクールサポーター」とその後の「学校・保健室ボランティア活動」を通じて、教員の職務や学校の仕組み等について理解し、教職への適性も確かめ、次年度以降の「養護実習・教育実習（初等教育）」に備える。

3 年次は、発展的教育実践力養成期にあたり、「健康相談活動（3 年次）／健康相談（2 年次）」、「微生物学」、「保健統計学」などを受講し、学校における保健指導や健康教育に必要な知識と技術を養う。また、「養護実習」では、教育現場での養護教諭の職務と役割、保健室経営および児童生徒の健康課題、保健組織のあり方等を理解するとともに、健康診断や健康相談、保健教育について学習し、養護教諭としての総合的な教育力・使命感・責任感を身につける。さらに、「保健科教育演習Ⅰ・Ⅱ／教育専門演習Ⅰ・Ⅱ」では、養護教諭が行う調査・研究方法の基礎を学び、自ら研究課題を見つけ、意義を見出し、積極的に研究心を高めることにより、次年度の卒業研究に繋げる。

4 年次は、研究・研修期にあたり、「保健科教育演習Ⅲ・Ⅳ／教育専門研究Ⅲ・Ⅳ」で、大学生活の集大成として、卒業研究に取り組み、自らが立てた仮説を検証するため、収集したデータを多角的に分析し、成果をまとめ、結論を見出し、卒業研究としてまとめる。また、小学校教諭の免許取得希望者は、小学校での 4 週間の「教育実習（初等教育）」に参加する〔新カリキュラムでは、教育実習（初等教育）は 3 年次に行う〕。「教職実践演習（養護教諭）」では、大学 4 年間で学んだ知識と理論および養護実習等で修得した教科指導力や保健指導力並びに健康相談や救急処置法の技能と方法を統合し、使命感や責任感に裏打ちされた学識と技能、実践的な指導力を有する養護教諭としての資質の構築とその確認を行う。

学生にとっては 4 年間を通じて、多忙な学習スケジュールとなるが、大学での学びの質をより向上させるため、後述する保健教育コース独自の教育活動も実践しながら、充実した魅力ある「養護教諭・小学校教諭養成課程」の構築に努めている。また、定期的にコース会議を行い、講義の進行状況、情報通信技術（Information and Communication Technology : ICT）教材を用いた講義方法の有効性、学生による授業評価、教員の教育・研究活動状況等について討議を重ね、教員の資質の維持向上も図っている。養護教諭は一人配置の学校が多いにも関わらず、多様な健康課題と複雑な家庭・社会環境を背景に持つ児童生徒が増加し、養護教諭の専門性がより求められている。一方、採用面に関しては、加速する少子化に伴う学校の統廃合とも相俟って、学校数は減少の一途であり、教員採用試験への合格は狭き門である。このような厳しい社会状況ではあるが、一人でも多くの学生が夢を叶え、養護教諭として学校現場で活躍できるよう、現存のカリキュラムに加え、教員採用対策講座の年間課外時間数の増加と本コース独自作成の養護教諭採用模擬試験を実施している。養護教諭採用模擬試験実施に当たっては、試験内容に関連した最近の学校保健の動向について解説を行うとともに、学生たちの意見交換を通して思考力と判断力の育成を図り、時代のニーズに応じた教育プログラムの構築・充実・改善に努めている。

(1) 保健教育コースの沿革

1957 年（昭和 32 年）四天王寺学園女子短期大学（保健科）
1967 年（昭和 42 年）四天王寺女子大学（文学部 教育学科 etc.）・短期大学部（保健科）
1981 年（昭和 56 年）四天王寺国際仏教大学・短期大学部（保健科）
2008 年（平成 20 年 4 月）四天王寺大学教育学部教育学科保健教育コース

(2) 取得可能な免許・資格

主免許状：**養護教諭第一種免許状**、中学校・高等学校教諭第一種免許状（保健）*
併修免許状：**小学校教諭第一種免許状**
資格：第一種衛生管理者*、学校図書館司書教諭、ピアヘルパー受験資格*、
　　社会福祉主事任用資格、児童指導員任用資格
〔備考：* 平成 31（令和 1）年度入学生からは取得できない。〕

2. 大学基礎演習について

1 年次に開講する大学基礎演習Ⅰ・Ⅱの目標と主な内容は下記の通りである。

(1) 目標

大学基礎演習Ⅰ

① 本学に所属し、学ぶことの意義を理解するとともに、今後の学生生活に対する自己課題を自覚する。
② 大学生として、また教育学科保健教育コースに所属する学生として、教職を目指すための学びに必要な基礎的知識・技能・態度を身につける。
③ 自分の将来を社会との関係で考え、教職への、社会人への問題意識を持つ。
④ 社会に生きる人間として、教員や友人との信頼関係を築く。

大学基礎演習Ⅱ

① 本学・本学科に所属して自ら学ぶ意義と課題を把握する。

② 社会人および教員の準備段階として位置づけ、大学生および教育学科保健教育コース所属の学生としての学びに必要な基礎的知識･技能･態度を身につける。

③ 自分の将来を社会との関係で考え、教職への、社会人への問題意識を持つ。

④ 自分の考えを発表し、お互いに討論する中で教員や友人との信頼関係をつくる。

(2) 内容

① 本学・本学科コースでの学びに必要な基礎的知識･技能･態度の習得

授業のテーマ	授業内容
大学での学修と生活	小グループに分かれて自己紹介、他者紹介を行う。自己紹介シートには、出身地、趣味、将来の夢、大学生活における抱負等を書き、グループ内で交換する。
大学における授業の受け方とノートのとり方	ノートテイキングの講義と演習
図書館の利用	図書館ツアーと図書検索 a) OPAC を用いて、キーワード検索をし、本学蔵書の中から興味関心のある本を探し、数冊借りて読む。 b) CiNii、Medical Online、EBSCO host、医学中央雑誌等、学術雑誌検索法について学ぶ。
リーディング・ライティングの基礎	a) 毎回の授業終了後に、小レポートを作成する。 b) 資料を基に、自分の考えを論理的に表現する文章の書き方とレポート作成方法について学ぶ。
発表の技法	Powerpoint を用いた発表方法の留意点を学ばせ、表現能力を高める。また相手の立場に立ったわかりやすい発表の技法も学ばせる。
理想とする教師像（履修カルテの指導）	学科全体で「教職実践演習」の説明と履修カルテの作成等の説明を行う。

② 『協育』実習

授業のテーマ	授業内容
学校現場の実際を学ぶ	四天王寺小学校にて半日体験実習を行う。

③ 発表演習

授業のテーマ	授業内容
自己紹介	Powerpoint を用いて自己紹介用スライドを作成し、発表する。

ブックトーク	自身が感銘した図書の魅力とストーリーを発表する技法を習得する。また、ブックトーク後、相互評価を行い、評価点が高かった上位3名が本学で行われるブックトークに参加し、全国大会への出場を目指す。
模擬授業	小学校 3・4 年生の保健科授業の学習指導案を作成し、グループでの模擬授業を実践する。その後、相互評価と討論を行い、養護教諭が行う保健科教育のあり方について、実践を通して学ぶ。

④ キャリア教育：先輩から学ぶ

授業のテーマ	授業内容
大学生活の実際	保健教育コース 2～4 年生から大学生活の過ごし方、免許・資格の種類、学外実習、ボランティア活動、クラブ活動などの話をしてもらう。その後、4 年生を交えての質疑応答及び討論会を行う。
大学での学び	学長賞授賞式を行い、その後、2～4 年生の受賞者が、1 年生へ激励のメッセージを兼ねた講演を行う。
教員採用試験合格体験記	今年度の教員採用試験に現役合格した本コース 4 年生から大学での学び、受験対策等、語ってもらう。
保健教育コース学生の就職活動の実際	4 年生の進路先（公務員、医療機関、公立学校園及び私立学校の養護教諭・一般企業総合職及び事務職等）、その進路を決定するための大学での学び、就職活動・進学対策等、４年生に講話してもらう。
憧れの養護教諭の仕事とは	キャリア教育の一環であり、卒業生の現職養護教諭からの現況報告と養護教諭になるための心構え等、講話してもらう。

⑤ 歴史・文化遺産の学びと良好な人間関係の形成

授業のテーマ	授業内容
環境教育と人間教育	世界遺産に認定された「百舌鳥・古市古墳群」を訪れ、実地調査により、歴史と文化遺産を継承する力を養う。

今年度の大学基礎演習Ⅰ・Ⅱは、「本学・本学科・本コースでの学びに必要な基礎的知識・技能・態度の習得」に特化した講義内容を充実するとともに、発表・演習のための十分な時間数を確保した。

パワーポイントを用いた発表スライド作成演習では、「自己紹介」をしてもらった。本演習は、平成 24 年度より始めたが、どの入学年度生も、短期間で、パワーポイント作成技術を習得し、平成 31 年度入学生においても、独創的且つ完成度の高い作品が数多く作られた。また、回を重ねるごとに、学生は人前で話すことに慣れ、さらに聴衆をひきつける発表技法についても探求した上で発表に臨んでおり、その発表内容に、毎回、学生も指導教員も魅了され、感動した。

また、「努力論」についてのレポート課題を課し、加えて「自分の薦める本」について紹

介するブックトークを行った。学生間での相互評価を行い、評価点が高かった上位3名が本学図書館主催のブックトークに参加した。3名の学生は、学内での決勝戦まで勝ち進んだが、残念ながら、優勝することはできず、全国大会には出場することはできなかった。

保健教育コース内の学生間の縦の繋がりを強化し、キャリア教育の一環にもなるように、3・4 年生有志による講演会、本コースの卒業生で現職養護教諭による講演会等も積極的に実施した。「キャリア教育（先輩からの学び）」は、毎年実施しているが、学生からの人気はとりわけ高い。今年度は保健教育コース全学年の合同授業として、上田有希菜氏（平成 28 年度卒　京都府立洛水高等学校勤務　養護教諭）、川西さくら氏（平成 29 年度卒　泉南市立泉南中学校勤務　養護教諭）、嶋田こころ氏（平成 29 年度卒　新温泉町立浜坂東小学校勤務養護教諭）を招き、教員採用試験に向けての対策だけでなく、本学で4年間をどのように過ごしたか、現在の勤務先での仕事の様子、児童生徒の心身の健康状況、各教育現場での学習カリキュラム等について詳しくご講演頂いた。保健教育コース生は、保健室経営の実際と児童生徒の対応法、現代の児童生徒の健康事情や取り巻く社会・家庭環境、不登校の原因など、先輩方との質疑応答を交えながら、「学校の中の保健室と養護教諭の役割」「小中高等学校における養護教諭の職務の相違」等について、多岐に亘って学ぶことができ、養護教諭になるという目標が明確化され、学習意欲が更に高まったと思われた。また、これらの卒業生による講演を通して、伝統ある本学の保健教育コースで学ぶ在学生と卒業生、教員を、再び強く「つなぐ」ことができ、本コースの更なる発展の一助になるであろうと実感した。

今年度の本コース教員採用試験現役合格者数は、養護教諭3名（大阪市1名、和歌山県1名、高知県1名）、小学校教諭1名（大阪府1名）であり、「教員採用試験現役合格体験記」と題した1・2年生対象の講演会を実施した。

大学基礎演習Ⅱ（学外編）では、歴史と文化遺産を継承する力を養うため、世界遺産に認定された「百舌鳥・古市古墳群」を巡る学外演習を行った。また、コース内の親睦を深めるため、1・2年生合同の演習とし、3・4年生がガイド役を務める等の工夫をした。

1年間を通じての本演習の出席率、満足度は高く、学生間のみならず、学生と教員間の繋がりも強化でき、本演習の実践状況は良好であった。

3. 授業相互参観について

令和 1 年度冬学期に実施した公開授業の実施日時、担当者と担当科目は下記の通りであった。授業参観終了後、合評会を実施した。

＜岡本啓子＞

日時：令和1年11月11日（月）5限　6号館301教室

科目：学校看護学Ⅰ

対象：教育学部保健教育コース　履修登録者1年、3年（編入生）1人の計32人、1人欠席

教員の参観者：土居悟先生

内容：学校看護学Ⅰ　第7回「学校看護の対象理解について」

各自作成した「一日24時間の生活行動を基に、ヘンダーソンの基本的看護の構成要素の視点に沿って分析する内容」の発表会を行った。そのなかで、人間の基本的欲求に基づいた

生活を維持していくうえで必要な支援についての意見集約を行い、自身の生活行動を振り返ることで、生活習慣の側面を含む「生活統合体」として児童生徒等を理解する、「子供をまるごと理解する」という発言を確認した。今回、事例（自らの生活行動）を通して、学校看護を行うプロセスにつながる、教育の場で対象を理解するための基礎的知識の習得が進み、次回以降予定の学校における児童生徒等のヘルスアセスメントに活用できる。本授業の目標が達成された。

＜楠本久美子＞
日時：令和 1 年 11 月 22 日(金)3 限
科目：健康相談活動
対象：教育学科保健教育コース 3 年　40 名
教員の参観者：なし
内容：ロールプレイングの活用方法を知るために、2 例のロールプレイングを観賞した。1 例は、「薬物乱用の断り方の練習」であり、2 例目が「健康相談の実例」である。2 例を観賞して、役割演技の意義を知り、各班のロールプレイングの参考になった。各班は、与えられた事例を場面設定と支援方針、役割とを決め、ロールプレイングをした。ロールプレイング後、見ていた他の班からの意見や批評を聞いた。各班ともに当事者になることの難しさや保護者に支援方針を理解してもらう難しさが発表されていた。ロールプレイングの意義とカウセリング的相談の必要性がよく理解され、授業の目標が達成された。

＜土居悟＞
日時：令和 1 年 11 月 7 日（木）4 限　4 号館 312 教室
科目：子どもの保健
対象：教育学科幼児教育保育コース 1 年　受講登録者数 69 人　出席 66 人　欠席 3 人
教員の参観者：なし
内容：子どもの保健　第 7 講　循環器疾患
　「子どもの疾病の予防及び適切な対応」のシリーズの 5 回目として循環器疾患をとりあげた。まず、胎児期の循環がどのように出生後の循環に切り替えられるかをタッチパネルディスプレイ上で、パワーポイントのグラフィックイメージを使用して説明した。タッチパネル上では、デジタルペンの筆先の色、太さが任意に設定できるので、妊娠中の母体からの血液がどのように胎児において循環するのか、デジタルペンを使用し、学生の理解を深める解説を行った。次に、先天性心疾患の説明を行ったが、心房中隔欠損、動脈管開存は胎児循環と関連付けると興味深く理解させることができた。さらに、主だった循環器疾患を講義した。その上で、幼稚園教諭・保育士を目指す学生にとって必須である心臓検診の意義と、学校生活管理指導票の具体的な利用法について、具体例を示しながら学生に考えさせる授業を行った。授業で使用したパワーポイントのデータはすべて学生に印刷物として配布した。学生

の受講態度は良好で、熱心にノートをとっており、学校・園で必要な医学知識についての学びを深めることができ、授業の目標が達成された。

＜仲谷和記＞
日時：令和 1 年 11 月 6 日（水：月曜授業）4 限　4 号館 309 教室
科目：学校看護学 II（疾病 I）
対象：教育学科保健教育コース 1 年　受講登録者数 33 人　出席 32 人　欠席 1 人
教員の参観者：なし
内容：「健康診断時に注意すべき疾病および異常：耳鼻咽喉科関連①」
　本授業では、「児童生徒等の健康診断マニュアル（平成 27 年度改訂版、日本学校保健会）」をテキストとして、その第 2 章「健康診断時に注意すべき疾病及び異常」第 3 項「耳鼻咽喉科関連」のうち、「慢性中耳炎」「滲出性中耳炎」「副鼻腔炎」「アデノイド・扁桃肥大・扁桃炎」「難聴」「めまい」の各項目とそれに関連する疾患について取り上げた。適宜、解剖生理学的事項について復習を行い、また、学生の理解が深まるよう、各種の医学書・文献に基づく図版を用いて視覚的で分かりやすい講義となるよう腐心した。「難聴」の項目では、テキストには触れられていないが学校現場で注意すべき疾患として「ムンプス（流行性耳下腺炎、おたふくかぜ）難聴」を取り上げ、解説を行った。学生の受講態度は良好で、熱心にノートをとり、学校・園で必要な医学知識についての学びを深めることができ、授業の目標が達成された。

＜松本珠希＞
日時：令和 1 年 12 月 3 日（火）4 限　6 号館 309 教室
科目：公衆衛生学 I
対象：教育学科保健教育コース 2 年　受講登録者数 40 人　出席 38 人　欠席 2 人
教員の参観者：仲谷和記
内容：　「子どもの心身の健康を育む生活習慣について考える」
　本授業では、生活習慣が子どもの心身の健康に及ぼす影響について、取り上げた。生活習慣のなかでも、まず、朝食摂取の有無と学力、体力、集中力との関連について解説した。その際、東北大学 川島隆太氏の研究室から発表されたデータを紹介するとともに、実際に小学生から大学生を対象に行った心理テスト（ストループテスト・数的処理課題等）を受講生がチャレンジするという演習も取り入れた。また、受験に勝つ朝食メニューや良質の睡眠を促す栄養素についても紹介するとともに、睡眠不足が肥満に繋がるという研究仮説を、レプチン、グレリン、オレキシンの作用とともに解説した。加えて、養護教諭として児童生徒に行う保健教育の重要性についても指導した。学生の受講態度は良好で、熱心にノートをとり、また、発問に対しても積極的に意見を述べることにより、公衆衛生学的な観点から、心身の健康管理の重要性について学びを深めていた。

4. 学科独自の取り組みについて

(1)「教育基礎演習Ⅰ・Ⅱ」

2年次に開講する教育基礎演習Ⅰ・Ⅱ〔授業題目：教育基礎（学校保健基礎）演習Ⅰ・Ⅱ〕は、学校保健基礎教育の学習により、養護教諭の職責と力量形成に必要な基礎的知識･技能･態度の習得に繋げるものである。演習の概要と到達目標は下記の通りである。

教育基礎演習Ⅰ

＜概要＞

最近の子どもたちの健康を調査結果や事例から学び、社会が求める養護教諭の役割を認識し、保健室経営の在り方及び医療と教育との連携を実地学習する。

＜到達目標＞

a) 養護教諭として社会が求める能力を理解できる。
b) 最近の児童生徒の生活習慣と健康との関係について理解できる。
c) 人間性の基本となる倫理観、人に寄り添う姿勢態度に共感できる。
d) 状況を正確に把握し、科学的に判断する大切さを理解できる。
e) 他種間との連携、協働、対人関係能力を理解できる。

教育基礎演習Ⅱ

＜概要＞

国内外の学校保健行政や教育行政の動向を理解し、教員として求められる責務を認識し、児童生徒の健康教育の在り方及び方法について学ぶ。

＜到達目標＞

a) 自ら考える力(学習力・思考力・探究力)を身につける。
b) 教師として必要な能力について、自分なりの回答ができる。
c) 社会や教育委員会が求める教師の能力及び事柄について説明できる。

(2)「保健科教育演習Ⅰ～Ⅳ」

① 目的：保健教育コースの「保健科教育演習Ⅰ～Ⅳ」（専門ゼミ）では、3年次に下記5つの領域のいずれかを選択し、2 年間に亘り、各領域の専門知識を習得するとともに、調査研究能力を養うことを目的としている。

a) 学校保健看護研究（担当者：岡本啓子）子どもたちが、安全・安楽に学校生活を送るための支援について考える。「子どもの健康ニーズに対応できる専門性」、「学校と地域の連携やチーム学校による支援のあり方」等を中心に学習する。

b) 学校保健研究（担当者：楠本久美子）：養護教諭の専門領域である「学校精神保健」「学校安全」「保健教育」「保健管理」等について学習する。現在「こころの研究班」「環境保健研究班」「食育保健指導研究班」「フラワーライフ研究班」があり、班独自の計画をたてているが、活動はゼミ生全員で分担している。「保健科教育演習Ⅰ～Ⅳ」以外に学

外活動も行う。

c) 小児保健研究（担当者：土居悟）:「小児喘息や食物アレルギーをもつ子どもの学校での健康管理」、「障がいをもつ子どもを対象とした音楽療法」、「児童文学『秘密の花園』における子どもと病気と教育について」など、学校と医療の協力関係や地域の人々と連携することを重視しながら、“子どもは未来である”ことを基調に、小児保健を多面的かつ学際的に学習する。

d) 健康科学・社会医学研究（仲谷担当）：我が国の青少年を取り巻く社会環境、生活環境などの変化に伴い、家庭や学校、地域社会における健康課題は多様化、深刻化していると言われている。本演習では、そういった健康課題の中で、特にアルコール問題に対して様々な角度から学習する。

e) 健康科学・女性心身医学研究（松本担当）:「心身相関（心と体のつながり）・心身症（心のからくりが関与して起きる体の病）のメカニズム」、「女性特有の健康問題」、「女性のキャリアとライフプラン」「性差と健康」、「美容とアンチエイジング」、「生活習慣（運動・食事・休養）と健康」、「癒しと健康」、「人生 100 年時代の健康管理と生き甲斐」等、心と体の健康について様々な角度から学習する。

② 主な内容

a) 各専門ゼミの卒業研究作成マニュアルを作成し、そのマニュアルを基に、卒業研究への心構え、卒業論文の作成方法、年間調査研究計画の立て方、教員採用試験及び就職活動との両立の仕方、過去の卒業研究の事例等の内容を含めたオリエンテーションを行う。

b) 各研究領域の学術論文（原著論文・総説論文・症例研究報告）を読み、研究内容を理解するだけでなく、方法論、結果の解釈の仕方を学び、また、ゼミ内で討論を重ねることにより、各研究領域への理解を深める。

c) 学術論文及び過去の卒業研究を事例として取り上げ、各種研究方法（質問紙調査、インタビュー調査、フィールド調査、行動観察、実験、実践研究、資料分析、文献研究、教材研究・教材制作）の実際について学ぶ。

d) 文献検索ツールの使用、図書館利用のコツ、公的資料の使い方等、文献収集方法について学ぶ。

e) 収集したデータの分析及び解釈の仕方、統計処理、図表の作成等、情報メディア教室にて、演習を行う。

f) 学術論文及び過去の卒業研究を事例として取り上げ、卒業論文の構成（要約・諸言・方法・結果・考察・結論・謝辞・引用文献）を学ぶ。論文作成開始後は、文章の点検及び推敲の仕方についても、各専門ゼミで指導する。

g) 定期的に研究発表（卒業研究構想発表と現況報告）を行い、4 年次の最後のゼミにて、卒業研究発表会を行う。

h) 学術研究の実際を学ぶため、学会や研究会等に積極的に参加する。

③ 教育効果

保健教育コースの専門ゼミでは、3・4 年次生合同で実施している。2 学年間の交流も深ま

り、また各専門ゼミでの研究テーマについて、毎回、興味深い発表と活発な討論が繰り広げられており、各自の卒業研究に意欲的に取り組んでいる。しかし、本コースの大半が教員を志望しており、教員採用試験対策講座や学外実習、学校ボランティア活動を含む過密な学習スケジュールと並行して卒業研究を進めなければならないのが現状である。週1回（月曜2限）の専門ゼミの時間だけでは各自の調査研究を行う十分な時間が確保できないため、指導教員と担当学生のスケジュールを調整しながら個別に対応をしている。

上述した卒業研究への取り組みに加え、学術研究の実際を学び、研究力を有する教員を養成するためにも、学生には、学会や研究会への積極的な参加を促している。保健教育コースの専門ゼミが開始してからは、学生は、日本養護教諭教育学会、日本心身医学会、日本女性心身医学会、日本思春期学会等に教員とともに参加し、また地域保健研究の一環であるHIV予防啓発活動、禁煙教育指導者講習会、薬物乱用防止教育指導者講習会等に関する各種研究会や講習会に参加し、養護教諭としての更なる知識と技術の習得に努めている。

さらに、日頃のゼミでの活動成果を発表するため、松本ゼミ 3 年生有志グループ（Beautiful Life）が、ゼミコンテストに出場、「命の尊さを考える―しんどい君へのメッセージ―」に関する調査研究成果を発表し、第2位を受賞した。全学ゼミコンテストに参加することにより、学生自身が興味を持ったテーマについて主体的に学ぶとともに、チーム内でのコミュニケーションを図りながらプロジェクトを進めるという共同研究の醍醐味も味わうことができ、ゼミでの学習意欲が一層高まったようである。

その他の主な取組は下記の通りであった。

a) 岡本ゼミ生が、オープンキャンパスでのミニ授業「子どもの育ちを支える『からだをみる』を体験しよう」を企画・実践した。

b) 楠本ゼミ生が下記のプロジェクトに参加した。

i. エクステンションセンター主催の「百舌鳥・古市古墳群研究プロジェクト」に取り組み、文献や現地調査による古墳調査を行い、1・2年生の「百舌鳥・古市古墳群」巡りの引率、ガイドを行った。それらの取り組みの成果を発表し、参加賞を授与された。

ii. 環境と健康を考えるプロジェクトを実施。居住地区の河川敷や公園の清掃奉仕を行った。

iii. 藤井寺保健所との共同企画による学食を利用する学生たちの野菜の摂取推進プロジェクトに参加した。また、100円朝食メニューとCocodiningメニュー、夕食、間食を組み合わせた一日の献立例を作成・掲示し、弁当を持参しない学生の食育支援活動を行った。

c) 土居が顧問を務める和太鼓サークルが、各種イベントに参加。地域活性化に貢献した。

d) 仲谷（校医）ゼミの学生が、教職員対象のAED講習会にて、運営スタッフとして参加した。

e) 松本ゼミ生が下記のプロジェクトに参加した。

i. 藤井寺市立藤井寺小学校にて、＜生きる力をはぐくむ歯・口の健康づくり推進事業＞「健康な歯と口をめざして：今日も魅せよう！ワッ歯ッ歯」に参加、健康教育を担当した。

ii.　JA 大阪南共催 第 2 回「食べて応援・作って応援」レシピコンテストに参加。野菜をふんだんに使い、素材の味を活かしたレシピ「焼き野菜 洋風スープ仕立て」を提案、実演し、第 1 位「組合長賞」を受賞した。

保健教育コースにおける専門ゼミでの教育研究活動は、概ね良好に進行しているものと思われる。しかし、現状に満足することなく、児童生徒の生活習慣の乱れ、SNS を使用した劣悪ないじめ問題、うつ・不安障害の増加、摂食障害の低年齢化、家庭内暴力と児童虐待、薬物依存等、心身の健康を左右する昨今の家庭環境や社会情勢を鑑み、より有益な専門ゼミが展開できるよう、コース内で討議を重ねる予定である。

(3) 教員採用試験対策

① 養護教諭採用試験対策講座

3 年生を対象に、希望受験地をもとに、都道府県別のグループを編成し、受験地の出題傾向を考慮しながら、教採対策講座を実施している。筆答試験対策の主な内容は、「学校保健の構造・学校保健計画」、「からだのしくみと働き」、「学校環境衛生」、「学校給食」「健康診断」、「健康観察・健康相談」、「こころの健康」「学校安全・応急手当（救急処置）」、「感染症・疾病予防対策」、「保健室の役割・養護教諭の職務」、「保健教育・学習指導要領」、「事例・対応」、「法規・法令」、「答申・時事問題」等である。本講座では、過去に出題された問題や実践問題を活用し、詳細な解説を加えることで、各領域の知識の定着を図っている。また、各ゼミ単位でも、空き時間を利用し、対策講座を実施している。二次試験対策では、希望する実技予想試験について解説と実技訓練指導を行い、併せて、模擬（集団）保健指導と授業、面接指導も行っている。

加えて、新卒の養護教諭として勤務する 4 年次生を対象に学校で即戦力となるために保健管理（救急処置、健康診断、健康相談、保健指導、健康観察など）及び保健教育（保健学習、保健指導）、保健組織運営、学校安全に関する業務の確認と復習、新たな健康課題に向けての学習も集中講義で行っている。

その結果、本年度の養護教諭教員採用試験現役験合格者は 3 名（大阪市 1 名、和歌山県 1 名、高知県 1 名）となった。伝統ある養護教諭養成機関として、有能な養護教諭を育て教育現場に確実に送ることこそ、本コースの使命ともいえる。大阪府を始め、看護師・保健師免許を有する受験生には加点を施す都道府県が増えていることから、今後、本コースの授業カリキュラムを検討する際、救急処置に関する実例や判例についての学習を強化し、学校看護技術や保健指導などの実践力をさらに積む時間も確保するなど、より一層の教育プログラムの改善と発展を図りたいと考える。

② 教員採用試験現役合格者数の経年変化

教育学部教育学科保健教育コースは、2008 年（平成 20 年）に開設された。前身は 1957 年（昭和 32 年）に開学した四天王寺学園女子短期大学保健科である。すなわち、本コースは、2019 年現在、62 年間継続する伝統ある養護教諭養成機関であり、これまでに、数多くの卒業生が、幼小中高の教育現場で養護教諭として活躍している。

保健教育コース第１期生は 2012 年（平成 24 年）３月に卒業した。以後９年間の学生動態は、下記の表に示す通りである。入学した学生総数は 429 名だったが、卒業生数は 401 名、除籍・退学者数は 28 名となった。卒業生 401 名中、養護教諭免許を取得したものは 375 名（93.5%）、養護教諭と小学校教諭のダブル免許を取得したものは 181 名（45.1%）であった。養護教諭免許を取得した学生 375 名中、養護教諭教員採用試験を受験したもの（延べ数）は 264 名（70.4%）、最終選考の合格者は 23 名（8.7%）となり、教採現役合格の厳しさを反映している。一方、小学校教諭採用試験を受験したものは 63 名で、現役合格者は 21 名（33.3%）であり、合格率は養護教諭と比較すると、約 3.8 倍高くなった。

期生		第1期生	第2期生	第3期生	第4期生	第5期生	第6期生	第7期生	第8期生	第9期生	
入学		H20年4月	H21年4月	H22年4月	H23年4月	H24年4月	H25年4月	H26年4月	H27年4月	H28年4月	
卒業		H24年3月	H25年3月	H26年3月	H27年3月	H28年3月	H29年3月	H30年3月	H31年3月	R2年3月	総数
卒業生数（人）		50	46	44	44	46	40	42	41	48	401
除籍・退学者数（人）		0	4	3	3	0	7	3	4	4	28
養護教諭免許取得者（人）		46	45	41	43	43	39	37	37	44	375
小学校教諭免許取得者（人）		20	21	19	15	23	20	19	17	27	181
養護教諭	教採受験者	29	38	21	34	30	25	30	29	28	264
	現役合格者	4	2	1	0	2	2	5	4	3	23
小学校教諭	教採受験者	10	4	11	10	8	6	2	7	5	63
	現役合格者	5	1	3	1	5	1	1	3	1	21

※受験者数・合格者数は延べ数

養護教諭教員採用試験現役合格者 23 名が採用された都道府県は、大阪府（9 名）、高知県（5 名）、和歌山県（3 名）、大阪市、（1 名）、堺市（1 名）、奈良県（1 名）、滋賀県（1 名）、香川県（1 名）、山口県（1 名）であった。

また、養護教諭教員採用試験現役合格者 23 名が取得した教員免許は下記の通りであった。

取得教員免許の種類	人数
養護教諭	1 名
養護教諭＋小学校	5 名
養護教諭＋小学校＋中高保健	5 名
養護教諭＋中高保健	12 名

小学校教諭教員採用試験現役合格者 21 名が採用された都道府県は、大阪府（10 名）、大阪市、（3 名）、堺市（5 名）、奈良県（2 名）、千葉県県（1 名）であった。

また、小学校教員採用試験現役合格者 21 名が取得した教員免許は下記の通りであった。

取得教員免許の種類	人数
養護教諭＋小学校	11 名
養護教諭＋小学校＋中高保健	9 名
養護教諭＋小学校＋高校保健	1 名

(4) 本コース有志学生による健康啓発活動

① 研修会への参加

近畿学校保健学会にて開催された「学校不適応をおこす子どもたちの理解とその関わり方」研修会に有志学生が受講した。本研修会は、学校生活になじめず、教師も親も対応に困っているこどもや学校現場では見逃せない虐待等様々な問題を抱える子どもたちのかかわり方について学んだ。

②「健康支援し隊」による活動

本学の学園祭にて、「断煙のすすめ」、「薬物勧誘の断り方教育」、「一気飲みをしない、させない」をテーマに、有志学生グループ「健康支援し隊」が健康教育プログラムを企画、運営、実施した。学生はミニ講義及び見学者の敏捷性・血圧・呼気検査、喫煙クイズ等を行い、見学者の健康増進意識を高めた。

③ 高校保健委員向けの「薬物勧誘の断り方」教室

平成 28 年度から「薬物乱用防止教育」の集団保健指導を学園祭や高大連携高校にて実施している。啓発活動 4 年目であるが、学園祭に高大連携高校の保健委員を招待して、「薬物勧誘の断り方」のロールプレーを行い、勧誘されるような場所やきっかけを作らないように、若者に認識を深め、薬物汚染のない社会を目指す。

④学生食堂の「昼食メニュー」作成

その日の「100 円朝食」と学生食堂の「昼食メニュー」を組み合わせ、一日の栄養バランスの過不足がないように夕食と間食メニューを作成し、食堂を利用する学生たちに「一日三食・間食参考メニュー」として利用されている。

(5) 高大連携事業

①高大連携校 3 校における定期健康診断の補助実習

本実習は、本学での演習（学校看護学演習・臨床看護学演習）、臨床実習、養護実習を経験した 4 年次生を対象に、エクステンションセンター事業と教職実践演習（養護教諭）の一環として行われるものであり、健康診断の内容及び手順、検査方法を実地で学ぶことにより、養護教諭に必要な知識・技能の習得に役立てることを目的としている。この高大連携事業は、大阪府立富田林高校と大阪府立懐風館高等学校、大阪府立長吉高等学校の計 3 校にて実施している。本コース 4 回生の「積極的且つ意欲的な健診補助への取り組み」、「養護教諭と現場の教員から多くを学ぼうとする真摯な態度」、「生徒への丁寧な対応」等が、非常に高く評価され、有意義な学外実習となっている。

②高大連携校以外の 3 校における定期健康診断の補助実習

奈良県橿原高等学校および大阪府立長野北高等学校より定期健康診断補助に関する学生派遣依頼を受けた。有志学生が本プロジェクトに参加したところ、積極的且つ意欲的に健診補助に取り組み、自ら課題を見つけて学ぼうとする学習態度が非常に高く評価された。上記

2 校からは、令和 2 年度も引き続き、学生派遣の依頼を受けている。

③高大連携校におけるピア活動プログラム

高大連携高校懐風館高校との「性教育の進め方」研究、長吉高校との「薬物乱用防止教育と効果的な断り方」研究活動を行った。

④高大連携事業（大学授業体験出張講義）

平成 25 年度より、大阪府立河南高等学校の e（エスペランサ）コースで高大連携事業の一環として、教育学部を目指す生徒を対象に授業を行っている。本授業（担当者：松本珠希）では、我が国における養護教諭（保健室の先生）の歴史、諸外国の養護教諭、養護教諭の存在と役割、保健室の機能、子ども達を取り巻く現代的健康課題など、多岐に亘り、詳しく解説した。保健室は、けがをしたり気分が悪くなったりした時に処置をしてもらうところだが、心身の健康について学ぶ学習室でもあり、最新健康情報の発信基地でもある。朝食欠食や夜更かし、運動不足、喫煙や過剰な飲酒等、不健康な生活習慣が心身の健康にどのような悪影響を及ぼすのか解説するとともに、児童生徒の心に響く健康教育（保健の授業づくり）についても紹介した。

(6) 地域連携事業

学校保健研究教室（楠本ゼミ）は、ヤクルト東部株式会社との産学共同研究として子どもを対象とした健康づくりに協力している。平成 26 年度 4 年次のゼミ生 2 名が、ヤクルト社の「おなか元気教室」の出前授業で歌われる「ウンチ」の歌に合わせ「ウンチ体操」を創作した。現在、この「ウンチ体操」は、DVD に「四天王寺大学作成」と明記され、東大阪市や八尾市、柏原市等の幼稚園、小学校で流され、教員や保護者から楽しめる体操として好評を博している。

5. その他

(1) 花の効用と伝統文化教育

本コースでは、教養と専門知識豊かな養護教諭の養成を目指している。教養として、また癒しと疲労回復効果を活かす目的で、生け花を課外活動として行っている。生け花は、癒しと疲労回復効果以外に集中力や記憶力が増すとする研究論文もあり、保健室に来室する児童生徒の癒しや疲労回復効果を期待して本コースの学生が「花の効用と伝統文化」に挑戦している。水無月祭では、親子による生け花体験教室を開き、家族による共同制作体験を 3 年生が支援した。参加者が昨年度の 2 倍に増え、学生が幼児とかかわる時間も倍増した。

(2) ピアヘルパー

養護教諭は、教育現場において児童生徒から相談を受けることが多く、将来養護教諭になってさらに公認心理士資格取得を目指す学生向けに、最初の学習の第一歩としてピアヘルパー（日本教育カウンセラー協会からカウセリングの知識と技術を学習した証明書が発行される）を受験し卒業時に資格を得る。今年度は 9 名受験し、全員合格した。

経営学部経営学科

1. はじめに

経営学部は、平成 28 年度に専攻分離を行い、完成年度を迎えた令和元年度において、公共経営専攻から公務員として 14 名輩出し、企業経営専攻から多くの学生が優良企業に就職を決めることができた。これは、学生が卒業後に目標とするキャリアを明確に意識できるように公共経営専攻、企業経営専攻の専攻別のカリキュラムとし、社会に貢献できる人材を養成するカリキュラムの構築をめざした結果である。

経営学科では、共通科目を基礎として専攻ごとの特色を活かし、基礎教育科目から無理なく専門教育科目の修得が進められるように科目を配置している。さらに、関連している科目を担当する教員は連携するとともに、授業内容に応じてアクティブラーニングを積極的に導入するなど多様なアプローチで学生の学びを支援する体制を整え、必要な知識やスキルを修得することができ、能力の向上を促進する学習内容となるよう、下記にあげた科目を効果的に配置したり、特待生制度（奨学金制度）を設けたりしている。

特に公務員や組織のリーダーとして活躍できる人材の輩出をめざしていることから、専門性を高めると同時に、他者を思いやり、社会のために活躍できる使命感、倫理観を有する人材となることにも留意している。大学 4 年間の学びを支え、就職活動には不可欠である基礎学力の向上からキャリア形成までを視野に入れ、大学 4 年間の修学を終える卒業時点において有意な人材として社会からの評価が得られるレベルの能力・知識・スキルが獲得できることを目標としている。

上記の目標を達成するために、多様なことに挑戦し、段階的にできることを増やすことによって学生のやる気を引き出し、成功体験を積む機会を提供する環境づくりとして経営学部が令和元年度に取り組んできた特色ある授業科目等は以下のとおりである。

2. 大学基礎演習について

大学基礎演習Ⅰでは、「大学生としての基本を学ぶ」、大学基礎演習Ⅱは「大学生として学内外での学びを深める」をテーマに、学科専任教員の全員体制でクラス別授業、全体授業を効果的に行っている。授業の実施にあたって、学生に関する情報は学部会議やメール等を活用して教員間で共有しながら進めている。公共経営専攻、企業経営専攻の両専攻の学生が、進路に対する視野を広げ、積極的にコミュニケーションできる環境づくりに努めた。

大学基礎演習Ⅰは、大学生活の基礎を作るためのスキルを学ぶ講義形式の授業に加えて、本年度も早い時期での全体授業において「キャンパスツアー」や「友だちづくり」を実施し、各クラス内及び各クラス・専攻の枠を超えた交流の機会を設け、人間関係づくりにも力を入れた。また、個別面談を実施する際に、現代の日本と世界を総合的に理解し、学生一人ひとりの視野を広げられるようなランキングシートの作成とその後のふりかえり授業を組み合わせた効果的な学習を心掛け、レポートの書き方や PROG テストの結果理解など大学リテラシーの向上にも努めた。

さらに、学生のプレゼンテーション力を伸ばせるように、学生にとって身近な好きな音楽

や映像をテーマとして自己紹介をするミュージックポートレートの作成、発表、相互評価を実施した。

大学基礎演習Ⅱは、個別面談も実施し、クラス別授業と全体授業を織り交ぜて大学での学びが深められるよう体系的な学習を行った。また、低学年インターンシップという位置づけで、希望者限定で前述した大阪労働協会主催の就活イベント運営にも参画する機会を本年度も提供した。

また、経営学科が毎年実施しているビジネスプランコンテストの本格的導入にも取り組んだ。まず、アイデア発想、ビジネスプランづくり、事業計画の作成などの基礎知識を説明した上で、ビジネスプランの作成、発表、相互評価を各クラスで行って最優秀プランを決定後、全体クラスで発表、総合評価し、1年生の優秀ビジネスプランを決定した。これらのプランは、経営学科のビジネスプランコンテストの本選でも発表されて好成績を残している。

なお、大学基礎演習Ⅱのアンケート調査では、大学基礎演習だけでなく 1 年間の大学での学びについても総括しているが、アンケート調査結果を概観すると、「ビジネスプランづくりとプレゼンテーション」「先輩による就職活動体験談」「大阪労働協会の特別講座」「友だちづくり・キャンパスツアー」が自ら学生間の相互理解、キャリア意識向上、今後の就職活動への興味・関心につながったとする感想があった。この学びのふりかえり表には、学生目線での回答が記されており、アンケート調査結果同様、学部内で情報共有することで、学生の大学生活満足度が増すような改善につながるものと期待される。

3. 授業相互参観について

令和元年度は、冬学期、以下のとおり　授業参観計画を策定し、実施した。

学科選抜科目	概　　要	参観 日時・場所	合評会 日時・場所
① ビジネスモデル研究（天野）	外食のビジネスモデル	11 月 13 日 4 限　6-351	実施後、現場にて行う
② 経営学基礎Ⅱ（伊藤）	経営分析(SWOT 分析ほか)の解説、事例研究・発表	11 月 11 日(月) 3 限　5-302	実施後、現場にて行う
③ 国際ビジネス論（奥邨）	開発途上国の経済開発の状況を理解	11 月 8 日(金) 3 限　4-306	実施後、現場にて
④ビジネス法入門（霍）	企業の取引活動と商法について解説・検討	11 月 25 日 1 限　6－352	実施後、現場にて
⑤ 民法Ⅳ(契約法)（後藤）	民法の契約法に関する復習問題演習とその解説	11 月 8 日 1 限　6－212	実施後、教室内で
⑥ 西洋哲学・西洋思想 II （加藤）	社会人として持つべきものの考え方を身近な例で説明し考えさせる	11 月 12 日(月) 1 限 4-414	実施後、現場にて
⑦ ライセンスセミナー（金岡）	ビジネス系検定試験対策の解説、電話応対等の実践演習を実施	11 月 28 日 2 限　6-205	実施後、現場にて

⑧ 地域活性化演習Ⅱ（木村・隅田）	藤井寺市・羽曳野市の古墳など観光資源の理解を深めるための学外活動。	11 月 16 日(土) 13 時～16 時	実施後、現場にて
⑨ 公務員特別演習Ⅱ（常森）	公務員試験に向けて自分の資質を PR する作文練習	11 月 14 日 4 限　6－303	実施後、現場にて
⑩ ファイナンシャルプランニングⅠ（永川）	リスク管理について考え、該当商品について考察する	11 月 8 日(金) 1 限　2-205	実施後、現場にて
⑪ 簿記Ⅱ（原田）	本支店会計の貸借対照表作成の解説と問題演習	11 月 13 日 1 限　6-253	実施後、現場にて
⑫ 法と倫理（春名）	倫理道徳についてのグループディスカッション	11 月 8 日 1 限　6-303	実施後、現場にて
⑬ 原価計算（松脇）	「標準原価計算」の解説・問題解答	11 月 7 日 1 限　4－206	実施後、現場にて
⑭ コーポレート・ガバナンス論（梁）	株式会社制度に関する説明・国際比較	11 月 13 日 1 限 6－303	実施後、現場にて

① 学生に馴染みの深いファストフード、「マクドナルド」と「モスバーガー」について、経営者のプロフィール、経営哲学や商品戦略、広告や立地戦略の違い、近年の業績の変化とその理由について、ビジュアル教材や会社四季報を活用し比較分析した。

② 「経営学基礎Ⅱ」では、「経営学基礎Ⅰ」で学んだ企業の本質やマネジメント活動をさらに深く理解するために SWOT 分析を取り上げ、長所・短所の自己分析を先行し、さらに興味ある企業の事例研究による課題学習に取り組んだものである。

③ 日本のビジネス界と深い関係にあるアジアの開発途上国を取り上げ、政治・経済的な問題を中心に概観し、当該国がおかれた状況を学習した。

④ 企業活動の中で、なぜ商法が必要なのか、経済社会における商法の意義や役割について理解するとともに、具体的な経済事象を取り上げて法的に考察し、法制度や実社会との乖離について考える機会とした。

⑤ 民法の契約法分野に関して、基本的内容の穴埋問題を出すことにより、学生の知識の定着を図った。具体的には同時履行の抗弁権や解除に関することにつき、穴埋問題を提示し、基本的な用語の補充を行わせることで、第 1 回目から前回の授業までの内容の復習を行った。

⑥ 経営には直接関係がなくても、ものの考え方や生き方についての参考になるように、知識よりも考え方を重視して授業をした。参観当日は、教務課職員の参加があり、授業後意見交換をした。

⑦ 「ライセンスセミナー秘書・ビジネス実務Ⅱ/X」は、毎回の検定受験対策として合格に向けての指導と共に、ビジネス系の問題を解きながら実践的知識の習得にも力を入れて

いる。参観日当日は、2月の上級受験に向けての指導を中心に行った。

⑧ 「こよみ手帳」作成のための情報収集・確認に加えて、藤井寺市・羽曳野市内の観光資源の理解を深めるための学外活動を行った。藤井寺駅～野中寺～仁賢天皇埴生坂本領（通称ボケ山古墳）～藤井寺駅/古市駅までを散策し地域について理解を深める学外活動とし、様々なことを学ぶ機会とした。

⑨ 公務員試験で必要な作文の練習とともに、3月以降の出願を控えて、自分の経験や自己ＰＲを含むような実践的な課題をこなし、グループワークの練習においても、受講生相互に評価させるなど、本番を見据えた練習をすることによって、公務員試験合格に向けた実力をつける準備ができた。

⑩ 基礎的な「プランニングについて」社会人として生活をしていく上で、必要となる「お金」について学ぶ。本授業では「リスク管理」について学び、ＦＰ検定で頻出する問題について各自レポートを作成した。

⑪ 全経簿記能力検定2級の合格を目標に、相互授業参観当日は、本支店会計の貸借対照表の作成について、過去問題を教材として解答の手順の流れ、ポイントを説明した後、学生に演習を行わせ、そのうえで解説を実施した。

⑫ 公共交通機関内でのマナーをテーマに、倫理道徳の観点から、迷惑行為として自制するべき事項についてグループディスカッションおよび発表を行い、それを法的に規制する場合に含まれる問題点を確認することで、法と倫理の融合について考えるとともに、日常生活におけるマナーの実践を見直す機会とした。

⑬ 授業相互参観当日は「標準原価計算」を学ぶ初日であったため、前半で、「標準原価計算」とはどのようなものか、何故この計算方法が使用されるのか、これまで習った計算方法とどのような違いがあるのか、など基本的なことを説明した。後半では、「標準原価計算」の基本的な問題を数多く解答し、「標準原価計算」方法の理解を進めるとともに、さらに高度になる次回の講義における予習を行った。

⑭ 資本主義社会がグローバル化する中で、国による会社制度には大きな違いがあるので、株式会社制度を説明し、併せて各国の会社制度や経営システムを説明する。学生の就職先や日本企業はどのようなガバナンスを行っているのかなどを調べさせ発表を行った。

4. 学科独自の取り組みについて

(1) 特待生について

公共経営専攻および企業経営専攻では、学生の学習意欲を高め、将来の目標が達成できる経験を増やすために各専攻において、成績優秀者1学年12名（計24名）を特待生として、経営学部総合奨学金を支給している。1年次の特待生は一般入試前期日程（チャレンジ試験を含む）の成績によるが、2年次からの特待生の選考基準については、公共経営専攻は成績評価のＧＰＡに加えて公務員試験の模試の成績や学内ダブルスクールでの評価等を加算し、企業経営専攻はＧＰＡに加えて各種資格検定の合格や、学部で取り組むインターンシップ、地域連携活動、ビジネスプランコンテストなどの学内外で行っている経営学部の各種取り組みへの参加等を評価している。学生は特待生に選抜されるために、学業はもちろんのこと、

それ以外の活動にも積極的に参画しようとする姿勢が見られる。特待生に選抜された学生は、経営学部学生の模範として学部をリードする役割であることの自覚を育てる必要がある。

2 年次以降の特待生として選抜された学生の特徴として、一般入試の受験により入学してきた学生が増加していること、入学次の特待生は 2 年次において大きく入れ替わるが、2 年次から 4 年次の特待生は、ほとんど入れ替わりがないことがあげられる。

(2) キャリア演習Ⅰ・Ⅱ

概ね、以下に掲げる 4 つを目的とし、外部教育機関から協力を得て、「キャリア演習Ⅰ」および「キャリア演習Ⅱ」を令和元年度も 2 年生の必修科目として実施した。

ⅰ.就職試験で多くの企業が利用する SPI 試験（言語・非言語）への早期対策および早い段階から就職に対する自覚・認識を学生に促すこと。

ⅱ.大学の講義をより円滑に履修するための国語力を中心とする基礎学力の向上。

ⅲ.3・4 セメスター時の学生の退学率の増加、講義欠席率の増加、日常生活の乱れと講義中の態度の悪化、専門演習ゼミ選択時に備えた学生状況全般（講義態度、性格、日常生活など）についての把握。

ⅳ.教員（担任）と学生の円滑な関係の構築、face to face による学生指導の機会の確保。

① 公共経営専攻

公共経営専攻では、東京アカデミーによる一般教養(一般知能を中心とする内容)の講義を行っている。これは 1 年次の公務員講座の内容と、3 年次の実践的な講座の内容を架橋するもので、公務員を目指すうえでは重要なものである。また模試もキャリア演習Ⅰ・Ⅱの時間を使って実施しており、これも公務員試験合格のために実力を測る機会となっている。本年はキャリア演習Ⅱにおいて、部分的に別クラスを設けて、問題に関して教員に直接質問をする場を作り、学生の一般教養に関する学習をサポートする体制を強化した。

令和元年度も前年に引き続き公務員特別演習Ⅰ・Ⅱを実施し、公務員試験で必要な論作文、プレゼンテーション、グループワークを内容とする授業を実施した。作文は毎週添削して返却し、プレゼンテーション試験では、動画の形で提出させるなど、より効率的かつ個別の進路に適った授業内容を実施した。平成 31 年度冬学期には、ライセンスセミナー公務員を開始し公務員試験に関する計画的な学習及び出願をサポートする場とした。次年度は公務員特別演習が夏休みの集中講義に移動するため、前期の学習について、公務員講座の課題管理という形で対応する予定である。

② 企業経営専攻

各セメスターの初回授業と最終授業において、確認テスト（プレテスト・ファイナルテスト）を実施することによって学習成果を評価している。令和元年度は、夏学期に開講された言語分野（国語）では、プレテストとファイナルテストで成績は 23.4 点アップし、冬学期に開講された非言語分野(数学)では成績 29 点アップという成果が認められた。

本年度、効果的に学習を進めるための具体的な講義実践上の配慮は、下記の点である。

・講義開始時の小テストの実施により、遅刻や欠席の減少にもつながり、成績評価に「努力」

を効果的に反映させることができるようになった。各回で前回の学習内容の定着を図るための小テストを実施した。

・クラス編成の仕方を、授業前半ではプレテスト得点別、授業後半ではクラス別を中心に座席配列を変えた点である。受講態度や得点によって変わる可能性を敏感に感じ取り、特に後半途中で座席配列を変えた後は、全く私語がなく意欲的に受講していた。

・単調な授業とならないように、SPI 特有のテクニックや PPT のアニメーション、例え話しを用いるなど、これまでの授業と違う切り口とした。

・下位層に対応できるように、スライドを用いてゆっくりと説明し、上位層には実践問題を指示してインセンティブを与えて当事者感を与える配慮をした。

・スライドの視覚情報を増やし、授業から取り残される学生を少なくする配慮をした。

・欠席がちの学生について、家庭学習となる宿題箇所の重要性を示すことによって、意欲的に取り組むようになった。

令和 2 年度は、就活の対策として興味を持つ学生が増加傾向にあり、インターンシップや就活の選考の際の SPI に役立つ実践問題を意識した演習問題にも取り組み、さらに上位層を伸ばす指導をめざす。

(3) キャリア演習Ⅲ

この授業は、３年生で必修科目として実施するオールインターンシップに向けた事前学習として一昨年より２年生冬学期に開講し、ビジネスマナーと共に働くうえで必要な基本的な知識・判断力・実践力等を養う必修科目として開講している。学生一人ひとりの状況を把握しながら、きめ細かい指導を行う為、公共経営専攻１クラス、企業経営専攻３クラスの４クラス編成で授業を実施した。

① 公共経営専攻

公共経営専攻は、インターンシップが必修科目とでないため、授業では「公務員の仕事」をキーワードにビジネス社会で必要な情報の提供の場となる授業としている。授業では、仕事をするうえで必要となるビジネスの基本知識や一般常識であるマナーなどの学びの場となるよう、敬語の遣い方やビジネス文書の書き方、スケジュール管理、礼状の書き方、電話応対の実践も行い、学生一人ひとりがそれぞれの課題に真剣に取り組んだ。

また、公務員の仕事を理解するために、実際に公務員として勤務されている市役所の職員、国家公務員として働いている方を招聘する機会を作り、公務員としての仕事内容や市民との関わり方、仕事への取り組み方、公務員試験受験のために必要な情報提供を受ける機会を設けた。学生達も積極的に質問をすることで将来公務員として働くイメージが明確になったようである。

本授業では、ビジネス実務マナー検定試験対策も行うことによって、一般常識やビジネスマナーの大切さを理解する機会となった。検定試験に挑戦した学生はすべて合格した。

② 企業経営専攻

企業経営専攻は、3 年生の必修科目であるインターンシップ参加に向けての事前学習として基本的な事柄の習得を目指している。具体的には、毎回の授業で挨拶の仕方、遅刻・欠席

に関する指導の徹底や提出物の出し忘れや出し遅れへの指導による期日を守ることの大切さ、日々の生活の中で自己管理を怠らないようにすること等を徹底している。学生が就業体験の事前学習としてこの授業を履修し、３年生でスタートする「インターンシップⅠ」に向けて、それぞれの就業先で責任感と充実感を持って就業体験ができるように指導することを目的としている。

ビジネスの現場で必要なビジネスマナーの基本について学び、就業体験の心構えについても学ぶ大切な時間となるよう授業運営を行った。また、３年生の６月には授業で学んだビジネス実務の基本理解とその習得状況を確認するため、ビジネス実務マナー検定試験を全員が受験をするため、合格を目指し毎回の授業で受験対策も行っている。

インターンシップ先では、一人ひとりがそれぞれ積極的にコミュニケーションを取りながら、就業体験をする必要があるため、グループワーク等を積極的に取り組む時間やスピーチをする機会も作り、人前で話す訓練も行った。

インターンシップ前の事前研修を早い段階からしっかりと実施することで、学生に向けて社会のルールや仕事への取り組み姿勢に必要な基本知識を身に付けさせる良い機会となる。さらに授業を通して就業意欲が高まり、就業体験をすることがより身近に感じられる機会となっているようである。授業実施後の感想レポートでは、この授業を機に表現力向上に役にたったという前向きな意見が多かった。

(4) オールインターンシップ

オールインターンシップは、「キャリア演習Ⅲ」「インターンシップⅠ」「インターンシップⅡ」の必修３科目で、実際に就業体験を伴うキャリア科目の授業である。授業では、事前学習を行い、３年生夏季休暇中に就業体験を行うが、３科目を受講することで仕事理解と将来の就職活動に向けての企業経営専攻独自のプログラムとして、キャリア形成推進に向けての大切な位置づけとなっている。

これら３科目では、学生にビジネスマナーの習得や企業研究の指導を行ったうえで、授業内で各種提出書類を書くための実践的指導も行い、夏季休暇中に全員参加型のインターンシップを実施した。全員参加型の就業体験では、学生を４グループに分けて実施している。

３年生全員、夏季休暇中に就業体験での経験を積み、それぞれに充実した体験をする機会を得て、仕事理解、職場でのコミュニケーションの重要性等を学ぶことができた。特に優秀な学生は、１か所目での就業体験を終えた後、夏休み期間中異業種で２か所目、３か所目と積極的に就業体験に参加する学生もいる。また、当初就職に意欲的でなかった学生も、就業体験に参加したことで、就職をより身近に意識し積極的に仕事について学ぶ機会となったという事後報告をする学生もおり、多くの学生にとって就業体験の経験が将来の職業選択に向けて大きな役割を果たしていた。

令和元年度インターンシップを受講した学生の最終レポートの調査では、就業体験の成果として、昨年度同様以下の報告を受けている。

・働くことへの興味関心や視野が広がった
・言葉遣いとコミュニケーション力の重要性を痛感した
・仕事を円滑に進めるためには、人間関係の構築が重要であることを実感した

・就業体験先の情報は、事前に徹底的に調べることが大切であるということを学んだ
・他大学の学生との交流により、新たな気づきとともにモチベーションアップに繋がった
・公務員の仕事や試験内容に関する情報を得ることができ、興味関心が高まった

など、昨年度に引き続きインターンシップで就業体験をしたことは、学生にとって大きな収穫となったようである。オールインターンシップは、学部教員と担当者の協力体制が必要な大きなプロジェクトであり、学生が就業体験中に企業に迷惑をかけないようにしなければならない。

(5) 海外インターンシップ

一昨年、昨年度に引き続き３回目となる、オーストラリア・シドニーでの経営学科海外インターンシップは、春休みに 2 月 6 日〜3 月 7 日までの４週間の日程で実施した。経営学科特待生 11 名および自費参加の 2 名の計 13 名（女性 9 名、男性 4 名）が参加した。学生の希望や語学レベルにあったインターン先が運営会社マイステージ社より事前に紹介され、ホームステイをしながら、旅行会社、公立高校、保育園、プレスクール、カフェ、サッカースクール、ドッグサロン、書店等、様々な業界において、職業体験を行った。視察教員として天野が第 2 週目に現地に赴き、学生のインターン状況の調査と個別面談、インターン受入れ先への挨拶、受入機関マイステージとの打ち合わせを行った。

コロナウイルス禍については出発時には深刻化する前であり、また懸案されていたシドニー郊外の山火事については、出発後まもなく長雨で鎮火され、特に安全面で大きなトラブルもなく、全員無事にプログラムを終え帰国することができた。

経営学科企業経営専攻の特待生を対象に、参加費のうち 30 万円が支給されることから、特待生をめざす学生のインセンティブとなっている。ほとんどの学生が家族での短期旅行を除けば海外研修が初めてであり、語学力の向上のみならず、世界を知り視野を広げる事ができ、また、ホームステイを通じた国際交流や職業体験はとても楽しく、自分を変える貴重なきっかけになり、将来にプラスになったと好評であり、連携団体にも問題はなく、丁寧にご対応いただいたことから、来年以降も引き続き実施予定である。

語学レベルが低い場合は、インターン受け入れ先が限られてくるため、オンライン英会話（25 分×25 回）の受講を今年度より義務付けた。ほとんどの学生が設定した課題をこなすことができたが、一定期間の継続した語学力レベルの向上や、終了後のモチベーション持続も課題である。

(6) 公務員関連科目

① 行政職特別演習

公共経営専攻の 2 年次では、行政職を志望する学生を対象として、行政職特別演習（憲法、行政法、民法Ⅰ・Ⅱ、刑法、経済Ⅰ・Ⅱ）を開講している。国家公務員や地方上級を受験する際に必要なこれらの専門科目を、2 年次行政職特別演習では基礎、3 年次公務員講座では実践として長期にわたり段階的に学ぶことは公務員試験合格に向けて重要である。

当該科目は、専攻の専門教育科目としての位置づけであり、卒業単位として認定されることや、学生が出席しやすい時間に配置している。昨年に続いて事前対策として、期末試験で

は暗記で対応できる問題と本番を見据えた難易度の高い初見問題に分けて出題する方式を採用した。暗記対応型については特待生を中心とした勉強会を活用し、学生全体で課題を共有し、サポートし合える体制を構築したので概ね得点率も高かったが、初見問題では差が開いた。次年度は、上位層だけでなく、受講生全体の底上げを図るため、特待生を中心とした勉強会から、受講生全体に対し、定期試験の候補問題の解説作成を課す形にし、全体のレベルアップを目指す。

本講義は東京アカデミーの講師が担当し、経営学科の教員が科目を分担して、出欠管理や成績評価、その他講義運営のサポートを担当し、今年度は他の教員も授業の見学の実施をすることで、教員間のみならず東京アカデミーの講師との間でも学習の問題点などを共有することができた。

出席しやすい環境である反面、途中脱落やGPA低下の懸念の高い科目でもあるため、学生には出席を徹底するほか、理解度を高めるために、共通教育科目で開講されている法学や日本国憲法、経済学等の科目を、また、専門科目として開講されている憲法や民法等の科目を1年次の早い段階から履修するように促すことが肝要であり、脱落者の防止に取り組み、3年次講座へつなげることが今後の課題といえる。

将来的には法律や経済の入門的な授業とも連携することによって難しさを感じさせない内容にするとともに、少数であっても、専門科目を伴う国家公務員や地方上級の志望者を手厚くバックアップする体制を探っていきたい。

② 公安職特別演習

警察官や消防士をめざす学生のために、企業経営専攻の学生を主体にして授業が行なわれ、真面目で意識の高い学生もいる一方で、明確な目的意識を持っていない学生も少なくないことから意識の明確化を図らなければならない。令和 2 年度は配置する曜日や時限を工夫するとともに、公共経営専攻全体に履修を促すことによって、公務員志望の学生が早期に公務員試験に関する知識を習得する場としていきたい。

③ IBU公務員プログラム

● 1年生講座

令和元年度は、授業期間中は週2回、長期休暇中は集中講義の形で講座を実施した。元年度本年度から授業期間中の講座数を 1 回減らしたことで、授業登録数が多い 1 年生にとっての負担を軽減した。授業コマ数の減少は、脱落する学生を減らす一定の効果はあったものの、その効果は限定的であった。また長期休暇中には受講者数の減少するため、出席を促すなどの対策が必要となる。また公務員試験が近時人物重視の傾向があることから、1年次の講座数を減らし、特に休暇中に多様な経験ができるスケジュールとしたが、その効果は大きくなかった。今後、ボランティアイベントが体験できる機会を設けたい。

● 3年生講座

教養科目は全員受講を課しており、専門科目を含む全科目を受講する学生は国家公務員などをめざす学生が受講している。令和元年度は前年度と比べ、特に専門科目を受講している学生の積極的な学習態度が目立った。専門科目を受講している学生が必ずしも専門科目

を必要とする自治体を志望しているとは限らないが、志が広がることを想定し、多様な公務員試験を受ける準備のためにも、今後とも専門科目の受講を学生たちに積極的に進めていく必要がある。

令和 2 年度は、講座内で課題の管理などを依頼しており例年より講座の重要性が高まるが、東京アカデミーとの連携を強化して新 3 年生の学習の進展を見守る必要がある。また進路の変更に関しても即座に面談などの対応をとることができるように体制を整えている。

● 令和元年度卒業生の公務員試験合格者

学生が成果を出した公務員試験は下記のとおりであった。

国家公務員一般(2)、国税専門官、滋賀県、大阪府警(2)、兵庫県警、大阪市消防、
姫路市消防、大阪市（福祉職）、藤井寺市、大津市、大阪府学校事務(2)、

(7) 必修化している資格取得支援

① 簿記能力検定 3 級 1 年生全員受験（必須）のための支援

経営学科では、入学年度の 7 月実施の全経簿記能力検定試験 3 級の全員受験を実施しており、受験料は大学から全額支給している。今年度の経営学部全体の全経簿記能力検定試験 3 級合格者は 144 名受験中 86 名であり、6 割近くの合格率を維持している。これまで、資格に挑戦したことがない学生、何も資格を取得していなかった学生にとっては、この成功体験により自信を持つ良い機会となっている。

さらに、全経簿記能力検定試験 3 級に合格したことで自信を持ち、さらに上級の資格に挑戦しようとする学生も確実に増えており、今年度は全経簿記能力検定試験 2 級商業簿記に 35 名の合格者を輩出した。このようにしてモチベーションを高めた学生の能力をさらに一層伸ばす支援も考えていく必要がある。次年度は更なる成果（日商簿記検定に挑戦する学生の増加など）を出せるよう注力したい。例えば、全経簿記能力検定試験 2 級については、授業外でも個別指導としての対策講座も実施しており、可能な限りこうした機会を増やしていきたい。

② ビジネス実務マナー検定全員受験のための支援

本検定試験は、3 年生夏学期オールインターンシップの就業体験の実施に向けた「インターンシップⅠ」の授業の一環として、学生がビジネスマナーや社会人に必要な行動力、判断力、表現力を磨く為の知識習得を支援するために、平成 30 年度より、大学がビジネス実務マナー検定受験の受験料を全額負担して、3 年生全員に受験を課している。今年度の結果は、ビジネス実務マナー検定 3 級を 219 人受験、115 名合格、2 級を 11 名受験 6 名合格し、ともに 5 割以上の合格率を維持している。

なお、一斉受験の機会を逸した学生は 11 月以降受験に受験し、全員の受験を終えた。この検定試験を受験する目的は、就業体験前に少しでも社会人としての考え方や行動を理解することができるようにするためである。

(8) 企業との連携授業－実学マネジメント論Ⅰ・Ⅱ

実学マネジメント論は社会人のリアルを学ぶ本学部の特色ある授業のひとつである。本

科目は、第一線で活躍する社会人講師を招聘し、「働くとは」「仕事とは」「社会人になるために必要なことは」をテーマに社会人講師の職業をとおした「職業理解」を促進するとともに、様々な業界について第一線のビジネスパーソンや公務員から経験等を直接知り、将来の職業適性を発見することを目的としている。

前半には、学生自身の将来の方向性や適職を考えるためオリエンテ〜ションの後、昨年同様、学科教員独自ルートによる専門商社、税理士事務所、銀行、介護福祉、地域企業、税務署、さらに本学部の卒業生枠として警察本部を含む 4 社 3 団体による講義を実施した。後半には、本学のインターンシップで連携を行っている大阪労働協会の選定により、情報システム、建築、電機、部品製造、物流の 5 社による講義を実施した。それぞれの会社にインターンシップも受け入れていただいており、名刺をいただいて実際に訪問した学生もいた。

この授業は、毎年、前年度と違う企業を招聘し、Ⅰ・Ⅱの２度の履修が可能となっており、通して 20 社以上の企業の現状や経験を聞き、交流のきっかけ作りの場ともなっている。他学科履修も含めて合計 200 名以上の履修があった。「仕事の具体的なイメージができた」「社会人として仕事をしていく姿勢や心構えが理解できた」「知らない業界を知り、興味が広がった」「毎回の個性的な講師の話が楽しみだった」「企業の人事担当者とつながりを持てた」「仕事の厳しさと楽しさが理解できた」「学生時代の取り組みが重要であるとわかった」「インターンシップに行ってみようと思った」など、学生からも好評である。

(9) 「関西ジョブフェア」3 年生全員参加によるキャリア支援

平成 27 年度より経営学部全教員サポートの下、3 年生は、全員大阪労働協会が主催する就活準備のための業界研究イベント(「関西ジョブフェア」、平成 29 年まで「就活ソニック」)に参加している。令和元年度も、3 年生は就職活動のスタートに向けて業界研究とキャリア支援のため全員の参加を前提として令和 2 年 2 月 10 日（月）に梅田のハービスホールで実施された「関西ジョブフェア」に参加した。3 年生が業界研究をするうえで、128 社が集結した中小企業の業界研究は、今後本格的に就職活動を行ううえで大変有意義な経験となった。また、当日、昨年度同様低学年の希望者が運営スタッフとして参加した。

(10) 低学年インターンシップ

令和元年度は、2 月 10 日に大阪梅田のハービスホールで開催された、中小企業の業界研究会「関西ジョブフェア」、そして同時に開催された近畿で世界に誇れるオンリーワン、ナンバーワン企業が集結した「天下一合説」イベントに、経営学部企業経営専攻の 1 年生 12 名がスタッフとして参加した。当日出展した 128 社の運営に携わる「学生スタッフ」として、受付業務や会場への誘導、来場学生への対応を行うという経験は、業界研究に大変有意義な体験であった。毎年、低学年向けに企業側のイベントスタッフとして、イベントに参加する機会は、企業経営専攻で 3 年次に実施するオールインターンシップに向けて、社会人との関わり方や仕事について学ぶ良い機会となっている。

1 年生は、このイベントで事前研修の段階から大変熱心に取り組み、イベント当日学生は、主催者側（大阪労働協会）の担当者による直前研修も受け、「学生スタッフ」として充実し

た体験をして、午後にはグループワークも体験した。事後報告レポートでは、「コミュニケーションの大切さの勉強になった」「社会人との交流をすることで、年上の人と話すことの苦手意識が克服できた。」「これからもイベントに積極的に参加したい。」「企業目線で体験が出来て良い勉強になった。」等の声が寄せられた。

(11) ビジネスプランコンテストと起業支援

平成 26 年度から経営学科独自の取り組みとして、「IBU ビジネスプランコンテスト」を行っている。「出でよ！未来の起業家たち」をテーマに、新商品、新サービス、アプリケーション、そして公共サービスもテーマに加え、学生のビジネスプランを公募し、創造性を競うものである。

6 回目となる今年度は、関西ベンチャー学会との連携（特別賞の授与）を始めて行った。全学年を対象にプランを公募したところ、他学科生も含めてグループや個人から約 180 プランの応募があった。書類選考の第一次予選、教員による第二次選考を経て絞込選考を行い、休み明けの 1 月 14 日に優勝者を決定する最終のプレゼンテーション大会を実施した。入選の 11 チーム・個人がプレゼンテーションを行ない、経営学科教員全員と関係科目の非常勤講師が審査員となりアイデアの独創性、学生らしさや社会性、市場性、発表完成度、プレゼンテーションスキルの観点から採点した。

その結果、優勝は経営学科 3 年生男子チームによる「離島活性化ツアー」、準優勝は経営学科 2 年男子個人による「魅せマスク」、3 位には、日本学科 2 年生女子による「廃棄直前食品の宅配」、そして関西ベンチャー学会との連携による特別賞には、経営学科 3 年男子による「離島観光ツアー」がダブル受賞で選ばれた。

学部長から副賞とともに表彰を受けた学生からは、「仲間の事業計画にも刺激を受けた」、「起業を身近なものと感じた」、「事業計画の作成、財務や資金調達などもより実践的なものとして理解できた」、「イノベーションの重要性を感じた」、「実現に向けて準備を進めたい」と好評であり、来年度も引き続き行う予定である。

また、単なるコンテストに留まらず、創業を目指す学生についての個別の支援を行っており、1 位と特別賞を得た 3 年男子の「離島活性化ツアー」チームについては、関西ベンチャー学会のビジネスコンテストにおいて、同学会理事の推薦を受けて、学会の認証プロジェクトとして、コーディネーターの支援を受けながら具体化に向けた活動を行っている。

同種のコンテストは自治体、学会、新聞社、金融機関などを主催団体として行われているが、その入門編として多くの学生がチーム・個人で気軽に取り組めるようにしている。授業で学んできたマーケティングや財務、公共経営などの知識を実際に活用し、商品開発、ベンチャー創業、公共サービスについて知恵を絞って事業計画にまとめることで、起業家精神を涵養し、未来のマーケターや起業家、経営者、スーパー公務員を育成することを狙いとしている。在学中や卒業後の起業を支援するため、大学の枠を超えて起業に関心のある学生、メンター、先輩企業家、金融機関、VC など関係機関とのネットワークづくりに取り組んでおり、本学学生も参加させることで、学生起業家輩出、創業に結びつけることをめざす。

(12) プロジェクト活動

① 学生主体の地域連携活動

学生主体の下記の地域連携活動のサポートを継続的に行っている。

● 地域連携研究会 Glanz

経営学部 1 期生の有志学生たちから始まった地域との協働による研究会活動を学部横断的に発展させ組織化した学生主体の地域貢献活動を経営学部の教員で支援している。毎週水曜、昼休み時間に定例打合せを行い、地域貢献活動について検討し、地域からの依頼に対応している。令和元年度も藤井寺市商工会からの依頼で、藤井寺駅周辺のハートフル 91 商店街、藤井寺駅前北商店街、藤井寺一番街商店街および道明寺駅前の道明寺天神通り商店街の商店街 MAP、お祭りリーフレットの制作支援等を行った。加えて、地域課題解決研究奨励金により、道明寺天神通り商店街から依頼のインバウンド対応の英語版商店街 MAP に加えて古市古墳群を紹介するクリアフォルダー制作を行い、羽曳野市・藤井寺市の市役所や商工会、商店街等に配布し、感謝の声が届いている。Glanz メンバーは、地域との連携活動を通して、多様な人間関係を築き、社会性や地域との協働といった幅広い学びの下、学生一人ひとりが地域と共に成長するよう活動している。

● 地域連携 SA 制度導入

地域連携科目である「地域活性化概論」「地域連携インターンシップⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」「地域活性化演習Ⅰ・Ⅱ」の単位を習得し、地域貢献する優秀な学生は、これらの演習科目の SA（スチューデント・アシスタント）として、授業を履修する学生の学習支援を行っている。

● 「こよみ手帳」の制作

地域の取材活動および取材内容の編集を行い、地域の皆様に配布する地域情報冊子「こよみ手帳」の発行に大きく貢献している。毎年発行している「こよみ手帳」は地域の方々が発行を待たれるまでに浸透し、「こよみ手帳」第 8 号には、上記商店街についての詳細なお得情報カレンダーや連載の世界文化遺産の古墳の他、藤井寺市内の商店街 MAP、藤井寺・羽曳野地域の紹介、神社仏閣・竹内街道・道の駅・特産物・ワイン・スイーツなどを掲載している。

● 地域ブログ「ふじい de Lovers のデラ充日記（https://ibu.osakazine.net/）」への貢献

地域課題解決奨励金を活用し、昨年より学生が地域の歴史スポットや観光スポット、イベント、店舗等を取材し、地域ブログの作成に取り組んできたが、冬学期より、本学 OB の勤務するインターネット関連企業との連携により、「オオサカジン　街ブラ企画　藤井寺」へ学生が記事を投稿する形にリニューアルした。instagram や twitter(#fujiidelovers)も通じて広く一般に紹介するというもので、様々な現場に自ら赴き体験的に地域を知り、整理し、発信するというプロセスを通じた、PBL となっている。

● 地域イベント支援

この他、授業等を通じて勧誘した有志学生により、羽曳野・藤井寺・柏原を中心に、役所や商工会、寺社、まちづくり NPO 等の実施する様々なまちづくり・まちおこし活動にブース出展、あるいはボランティアスタッフとして参画した。現場でまちづくりや地域ビジネスを体験的に学ぶことで、将来の地域リーダーの育成をめざすものである。平成 31 年度・令和元年度に学生が教員とともに参加（ブース運営、模擬店舗、運営ボランティア）したものは、道明寺歴史まつり（5/4）、世界遺産登録記念まほら藤井寺（7/11）、道明寺天神祭(7/25)、

藤井寺ハロウィン（デラハロ）（10/26）、まちマルシェ羽曳野峰塚公園（11/23）、道明寺天満宮宮子屋（7/27・10/20・12/8）、全国ゆるキャラグランプリ彦根（10/19・20）、辛国神社ほしまつり（2/3）、である。本年度より、柏原市の古民家を再生した外国人向けゲストハウスを中心とした地域活性化プロジェクトにも学生が参画、また、本学の海外の連携校であるユタ大学、浙江工商大学の留学生を地域の古墳や寺社に案内したり、古代料理の作成など様々な体験を行ったりする「インターナショナル藤井寺ウォーク」を計 4 回開催したほか、藤井寺市長とのタウンミーティング（2/16）について、1 年生から 4 年生まで、本学学生 4 名が参加し市政について意見交換を行った。

● 地元企業等との産学連携

藤井寺市の地域店舗活性化プロジェクトである FRAP への参画やイベント支援、地域コラボ商品「大阪前田製菓　フジコの乳ボーロ」の本学の丸善売店での販売を行なった。また、イオン藤井寺店オープンに際してのデジタルサイネージへのメッセージと学生出演ならびにアルバイト人材募集への協力、さらに実学マネジメン論講義での招聘を行った。

② 公務員自主勉強会

1 年生については、勉強会は個別対応とし、質問を受け付けたり、学習に必要な自習用の参考書を勧めたりする等にとどまった。

2 年生については、恒例となっている、1 年生向公務員説明会、「警察、市、消防、府などの公務員を理解するイベント」を開催した。事前に挨拶に行き、当日の会場設営や誘導などは学生たちが役割を決めて遂行した。準備段階で実際に公務員の方と触れ合い、学習のモチベーションを高めるとともに、先輩と後輩との人間関係作りという点からも有意義なイベントとなった。勉強会として、本年度は行政職特別演習の試験対策も行った。さらに、地域理解を深めるために藤井寺市のハロウィンイベント(デラハロ)へ参加した。

3 年生については、夏休みには定期的に問題研究のための全体の勉強会を開いた。自習室形式の勉強会は毎日設け、教員が適宜質問を受け付け、一般教養科目も専門科目もサポートできる体制を取るなど、学生の希望に応じて、それぞれの教員が勉強会を毎日交代でサポートした。また春休み期間は毎週月曜日に専門科目の勉強会及び全体の勉強会を教員全員でサポートし、出願状況の確認やエントリーシートの添削等を行った。また、地域理解のためのイベント等へのボランティア参加を適宜呼びかけ、学生たちは自主的に参加した。

4 年生についても、公務員試験に関連して、必要に応じて、日々、教員が勉強会や面接練習に対応するとともに、エントリーシートの添削を積極的に行った。

看護学部

1. はじめに

看護学部は、2019 年度の重点施策として３項目を挙げているが、ここでは FD 委員会が中心となって活動を行った２項目について報告する。重点施策の一つは、教育、教養と専門性を高め、それらをもとに自ら課題を発見し、その解決に向けて探究できる人材の育成を目指し、①シミュレーション教育の推進、ならびに②それに必要な教員の能力向上であった。もう一つは、人々の健康維持・向上に寄与することを目指して、①人材育成、 ②キャリア開発支援 、③研究の促進を役割とした看護学部看護実践開発研究センターの設置であった。ここでは、FD 委員会が中心となって実施した①シミュレーションを用いた教育の実施、②シミュレーション教育の実施に必要な教員の能力向上に向けた研修について報告する。さらに看護実践開発研究センターにおける教育プログラムの実施についても報告する。

2. 学科独自の取り組み

1)シミュレーション教育の推進

本学部では、学生が看護の対象者の状況や病状、健康状態を適切に判断し、必要な看護ケアを安全に提供できる力を確実に修得できるように演習科目にはシミュレーション教育を導入している。シミュレーション教育は学習者主体の教育方法であり、看護実践のあらゆる状況、患者の状態を学習者の学習状況に合わせて再現した環境での体験学習である。シミュレーション教育を導入することで学習者の主体性を引き出し、自立して行動できる力を育てる教育を目指している。

（1）シミュレーションを用いた教育の実施

シミュレータを活用した早期の学習体験による学生の学習意欲の向上、およびシミュレーション教育導入に向けた教員の準備状況を強化することを目的に。看護学部新入生 84 名を対象としたシミュレーション勉強会を計 3 回開催した。

① 日時・( ) 内参加人数：5 月 24 日（31 名)、27 日（9 名)、31 日 36 名　合計 76 名

② テーマ：「コードブルーセミナー 一次救命処置～さわってみよう AED！～」

③ 内　容：レサシアン with QCPR®、レサシアンシミュレータ®、AED トレーナー2® を使用し、1 回 90 分（各回定員 30 名）の一次救命処置を体験

④ 終了後のアンケート結果：回答者は 59 名。

勉強会参加に対して 59 名（100%）が「今日のセミナーは楽しかった」「今日のセミナーは今後の役に立つと思う」「今日のセミナーは実践的な知識や技術を学ぶ動機づけになった」と回答した。また、今回一次救命処置を取り上げたが、「倒れている人を発見したら声をかけようと思う」はとてもそう思う 39 名（66.1%)、そう思う 20 名（33.9%)、「一次救命処置を実施する自信が持てた」

は、とてもそう思う 22 名（37.3%）、そう思う 36 名（61.0%）と肯定的な回答が得られた。また回答した 59 名全員が、「色々なシミュレータをもっと使ってみたい」「このようなセミナーがあれば次回も参加したい」と回答した。今回の勉強会の開催は肯定的な結果を得られたことから、シミュレータを活用した早期の学習体験は学生の学習意欲の向上に有用であり、学習意欲の維持・向上のためにもシミュレータを活用した実践的な勉強会の定期的な開催が望まれる。

（2）シミュレーション教育の実施に必要な教員の能力向上に向けた研修会

シミュレーション教育についての概論理解および次年度以降の授業計画に反映させることを目的に、看護学部教員を対象とした研修会を 4 回、専門家を講師として開催した。

日時・内容

5 月 20 日：シミュレーションセンター設置のシミュレータ機器の説明会
9 月 3 日：シミュレーション教育の展開方法
11 月 13 日、20 日：シナリオ作成の方法（シナリオ作成の実施）

本看護学部におけるシミュレーション教育の確立に向け、シミュレーション教育に携わる指導者に求められる能力、知識、技術の明確化、ならびにそれらの習得を進めている。

4 回の研修会を通して、2019 年度は、①シミュレーター機器操作方法の理解、②シュミュレータやモデル、模擬患者を適切に扱う能力、③シミュレーション教育の展開方法についての理解、④シミュレーション学習の素材を見つけ、教材化する能力、⑤シナリオのデザインと実践する能力（シナリオ作成の概論的な知識，学習者のレディネスやニーズを分析してシナリオをデザインする能力， 効果的な事前学習および学習目標の設定方法，学習者のシナリオセッションへの集中度を、感情・思考・行為などから把握し、的確に支援する技術，デブリーフィングで学習者の気づきやディスカッションを促す技術を達成する取り組みを行い、シミュレーション教育の展開方法の理解を深め、シナリオ作成に成果を反映させることができた。

次のステップとして、2020 年度以降は、シミュレーション教育に関する教員の能力向上を継続しつつ、教育の評価， シミュレーション教育を活用したアクティブラーニングを促進する能力の習得に向けた研修会等の企画を行っていく予定である。

2） 看護実践開発研究センターにおける教育プログラムの実施

本センターは看護職および高度実践看護師（CNS，NP 等）の看護実践能力ならびに研究能力開発を目的として設立している。修士課程修了者は実践能力を，博士後期課程修了者は研究能力を育成し、また大学院をめざしたい看護職ならびに現任教育としても看護職の

能力開発を行うことも目的とする。

今年度は精神障害者・慢性疾患患者へのセルフケアプログラム～PAS セルフケアセラピィ(PAS-SCT)に関する講義・演習・ロールプレイを、受講者の臨床能力と準備性に応じて実施した。参加者は看護師，看護管理者，精神看護 CNS，CNS 候補生，大学院生など様々であったが，CNS が最も多かった。7 コース 64 名が参加した。7 コースは、次のとおりである。

① セルフケアプログラム基礎編，
② セルフケアプログラム看護介入技法，
③ セルフケアプログラム事例研究法，
④ 組織・地域集団を動かすための理論と技法，
⑤ セルフケアプログラム看護介入演習，
⑥ セルフケアプログラム～PAS-SCT 事例研究法②，
⑦ リーダーシップと場のマネジメント・組織への介入方法

参加者からは，精神障害者および重複疾患や再入院・再燃を繰り返すケア困難事例に対する総合アセスメント、Case Formulation、看護介入技法がわかったとの感想が得られていた。どのような実践能力が詳細に改善されたのかについては追跡調査が必要だが当初の目的は概ね達成できた。

さらに昨年９月に四天王寺大学大学院看護学研究科が認可され、大学院の広報を目的とした「実践を豊かにする看護研究」を追加事業で実施した。実践のケアの質を向上させていくための研究について講義・演習を行った。四天王寺関連施設も含め 15 名を予定し，16 名の看護師や教員が参加した。今後，看護実践開発研究センターの目的達成のための事業・研究の開発がさらに重要であると考えている。

短期大学部 保育科

１．はじめに

当学科では今年度も「保育実践演習」の実施を中心に、科目間連携、教員間連携を進めながら、「質の高い保育者の育成」を目指す教育・研究活動を行った。以下、今年度の保育科の教育活動に関するFD活動の結果を報告する。

２．「保育実践演習」について

(1) 概要とシラバス

「保育実践演習」は、短期大学部保育科の初年次教育の授業にあたる「保育実践演習Ⅰ」を含む、「保育実践演習II」「保育実践演習III」「保育実践演習IV」と2年間に渡って続く授業である。異学年集団での学びあいも含み、保育科の核となる授業でもある。この授業は毎年の授業アンケートや学生のワークシートを参考に教員間で毎年評価を行い、次年度の計画及びシラバスを作成している。今年度の「保育実践演習」の概要及びシラバスは以下のとおりである。

受講者数　　1年生（保育実践演習ⅠおよびⅡ受講者）　114名
　　2年生（保育実践演習ⅢおよびⅣ受講者）　114名
担当教員　　保育科専任教員11名
基礎グループ　A～Hの8グループ（1グループあたり1，2年生合わせて約30名）
使用教室　　講堂701教室（メイン教室），講堂702教室及び703教室
　　音楽棟 多目的室2部屋及びリズム室，図工室，サブアリーナ, 小体育館
シラバス　　表1及び表2参照

表1「保育実践演習Ⅰ・Ⅲ」シラバス（夏学期）

		１年：保育実践演習Ⅰ	２年：保育実践演習III
1	4/8	オリエンテーション・自己紹介	オリエンテーション・自己紹介（春の運動会実行委員募集）
2	4/15	１年次の期待と目標／社会人としてのマナー講座	２年次の期待と目標／社会人としてのマナー講座
3	4/22	保育の学びに出会う（１）先輩から学ぶ／実習体験を聞く・名札作りを学ぶ	実習体験を後輩に語る・名札紹介
4	5/6	卒業生の講演	社会人になるにあたって 就職活動についての講演
5	5/13	春の運動会	春の運動会
6	5/20	模擬保育への参加Ⅰ	模擬保育の実践Ⅰ
7	5/27	模擬保育への参加Ⅱ	模擬保育の実践Ⅱ
8	6/3	自己表現：わたしを語る	（教育実習Ⅱ）
9	6/10	自己表現：わたしを表す（グループ内発表）	（教育実習Ⅱ）
10	6/17	自己表現：わたしを表す（優れた表現から学ぶ）	自己表現：自分を振り返る 傾聴力を学ぶ
11	6/24	講演「幼稚園の仕事」（幼稚園長から学ぶ）	講演「保育所の仕事」 （保育所所長から学ぶ）
12	7/1	幼稚園訪問オリエンテーション	保護者連携を意識した表現のあり方(1) 連絡帳作成の基礎
13	7/8	保育に出会う（２限開講＆１限と合同） 幼稚園で子どもたちと出会う	保護者連携を意識した表現のあり方(2) おたよりの基礎
14	7/15	幼稚園の振り返り	就職活動を考える「社会人になるにあたっての講演」

			／学び発表会に向けての班分け
15	7/22	２セメスターに向けて今までを振り返る （出前保育ビデオ鑑賞）	子育て支援体験の準備（２）
	7/29	まとめ「子ども・保育と出会う」について	子育て支援体験

表２「保育実践演習Ⅱ・Ⅳ」（冬学期）及び 保育・教職実践演習（幼稚園）シラバス

		２年：保育・教職実践演習（幼稚園）	２年：保育実践演習Ⅳ	１年：保育実践演習Ⅱ
1	9/24	出前保育のダンスを作る（１） 今までの学びを活かして	出前保育のダンスを作る（２） １・2年生合同でつくりあげる	出前保育のダンスを作る １・2年生合同でつくりあげる
2	10/1	出前保育のダンスを作る(3) 前回の反省から学ぶ	出前保育のダンス発表会	出前保育のダンス発表会
3	10/8	子育て支援で求められる保育実践力についての講演会	子育て支援体験の準備（２）	（教育実習I）
4	10/15		子育て支援体験の準備（２）	（教育実習I）
5	10/29		子育て支援体験	出前保育の準備
6	11/12	子育て支援体験	子育て支援体験	出前保育の準備
7	11/14	子育て支援反省会	学びの発表会	2限：学びの発表会を聞く
8	11/19	子育て支援体験	子育て支援体験	出前保育の準備・リハーサル１
9	11/26	子育て支援の反省会	出前保育リハーサル	出前保育のリハーサル2
10	12/3	運動会準備	運動会準備	地域に出るⅠ：出前保育
11	12/10	運動会準備	運動会準備	地域に出るⅡ：出前保育
12	12/17	運動会の準備	出前保育反省会を見る	出前保育反省会
13	12/24	運動会リハーサル	冬の運動会実施	冬の運動会参加
14	1/7	運動会の反省会	１年生に施設実習を語る	施設長の講演／１年生に施設実習を語る
15	1/14	休講→12.4（補講）学びの発表会	休講→12.4（補講）学びの発表会	休講→12.4（補講）学びの発表会
	1/21	卒園式	まとめ：２年間で培った保育実践力について振り返る	まとめ「子ども・保育を知る」について：保育科で学んだもの

(2) 地域の幼稚園・保育所などとの連携

保育に関するアクティブ・ラーニングに必要不可欠な地域の保育現場との連携について、今年度も以下の幼稚園・保育所・子育て支援施設にご協力をいただき、出前保育や子育て支援体験など、学外での学修を実施した。本学学生が各現場に出向いて見学するだけではなく、各実践の中で、協力していただいている保育現場の子どもたちや保護者にとっても有意義な機会となるように、それぞれの保育現場との計画、調整から実施後の反省まで、それぞれの施設の先生方と共有しながら活動に取り組んでいる。

① 幼稚園体験（1 年夏学期：7/8）

・羽曳野市立埴生南幼稚園，羽曳野市立羽曳が丘幼稚園，藤井寺市立道明寺南幼稚園

単なる見学会にとどまるのではなく、学生の自主的な活動が必要となるように、自由あそび及び絵本の読み聞かせや造形あそびへの参加など、各園の設定保育に学生の活動も最初から想定していただき、学生がいることで保育がより充実するように計画・実施していただいている。子どもの人的環境としての保育者を体感し、初めての学外実習に向けて具体的な課題をもつことができるように保育現場と連携しながら取り組んでいる。今年度も、幼児の少子化の影響もあるが、できるだけ 1 人ひとりの学生が幼児とかかわることができるよう、3 園で活動することとなった。昨年度同様、吉田先生や荒木先生を中心に事前指導も行い、

学生が保育者を志す者としての参加意識を高めたうえで学生は参加することができた。

② 出前保育（1 年冬学期：12/3 及び 12/10）
・学校法人久宝文化学院 白鳩羽曳野幼稚園
・学校法人谷口学園 文の里幼稚園
・学校法人志紀学園 志紀学園幼稚園
・社会福祉法人羽曳野市社会福祉協議会 ベビーハウス社協
・社会福祉法人四天王寺福祉事業団 四天王寺悲田院保育園
・社会福祉法人四天王寺福祉事業団 四天王寺夕陽丘保育園

ただ発表するだけではなく、協力してくださった園の園児とともに歌を歌い、さらにその歌に楽器隊のメンバーが即興で伴奏をつけるなど、子どもたちと共に楽しみながら成長しあう重要な機会となっている。

③ 子育て支援体験（2 年冬学期：10／29，11/12，11/19）
・羽曳野市子育て支援センターふるいち（大阪府羽曳野市）10/29,11/12
・藤井寺市カンガルー教室（大阪府藤井寺市）10/29，11/12）
・柏原市つどいの広場「ほっとステーション」（大阪府柏原市）10/29、11/12
・富田林市第 1 幼児教育センター（大阪府富田林市）10/29,11/12
・NPO 法人ネットワークすこやか　すこやかひろば・須賀（大阪府富田林市）10/29
・東羽衣子育て支援センター（大阪府高石市）10/29，11/12
・香芝市子育て交流センター「おうちのこうえん」（奈良県香芝市）10/29，11/12
・四天王寺悲田院子育て支援センター「ぼのぼ」（大阪府羽曳野市）10/29,11/12,11/19
・社会福祉法人南大阪福祉協会 ひかりこども園（大阪府藤井寺市）10/29,11/12

少人数でしか参加できないため、限られた教員数で複数園を巡回しながら実施している。
3 期間中に 1 回しかない貴重さを感じて参加できるよう、事前の子育て支援についての講演では、柏原市つどいの広場「ほっとステーション」の保育者から具体的に学生たちに話していただくことで、学生も緊張が少し解けた状態で子育て支援に参加できるように配慮した。また、事後の反省会での発表を 2 年生のみでの開催の後、今年度も 1 年生にも伝えることができるように「学びの発表会」で報告した。2 年生のみならず、1 年生にもよい機会となったと考えている。

(3) 外部講師による講演

今年度は以下の方々に外部講師としてご講演をいただいた。
① 卒業生の講演（1・2 年夏学期）
・久井 小蒔先生　大阪狭山市立子ども園教諭（本学科平成 29 年卒業生）
・枝　夏生先生　学校法人さつき学園　さつき幼稚園教諭（本学科平成 29 年卒業生）

② 幼稚園園長の講演（1 年夏学期）
・飴田 妙子先生　香芝市立認定こども園　下田幼稚園 園長

③ 保育所所長の講演（2 年夏学期）
・池邉 優子先生　南海福祉事業会幼保連携型子ども園 南海愛児園園長

④ 社会人になるにあたっての講演（2 年夏学期）
・小里 樹実氏　本学入試・広報課スタッフ（本学保育科卒業生）

⑤子育て支援についての講演（2 年冬学期）
四郎丸 和代先生　柏原市つどいの広場「ほっとステーション」

⑥児童養護施設に関する講演（1 年冬学期）
・中條 薫先生　社会福祉法人 児童養護施設　羽曳野荘　理事長・施設長

⑦IBU 保育科卒園式への学外来賓者（１・2 年冬学期）
・松本 千幸先生　社会福祉法人福文会 松の実保育園 園長 及び 本学非常勤講師
・内藤 真希先生　学校法人共立学園 新光明池幼稚園 園長 及び 本学非常勤講師

(4) 科目間連携と実施時期

今年度も、保育実践演習の 90 分では幼稚園体験の時間が十分確保できないことや、より学生の活動と学びが深まるように以下の科目と保育実践演習との科目間連携を行った。

①保育実践演習 IV と 保育・教職実践演習（幼稚園）（2 年冬学期）

文部科学省指定科目「保育・教職実践演習（幼稚園）」と当科独自の科目である「保育実践演習 IV」を連携させている。教育効果を上げることをねらって、両科目を時間割上連続して開講している。そのため、保育・教職実践演習（幼稚園）の授業内容として必要な、個人の教職に関する知識や技術についての課題の克服(出前保育での 1 年生へのアドバイス，行事経験を通しての役割分担等)、保護者連携についての学び（お便りや連絡帳についての学び等)、地域の保育現場及び子育て支援現場での実践的な活動（子育て支援体験に関する講演の聴取）を含み、2 年間の学びのまとめとなる授業内容で構成している。

②保育実践演習 I と幼児教育課程総論（1 年夏学期）

「幼稚園で子どもたちと出会う」では、地域の幼稚園に出向き、実際に幼稚園のようすを観察したり子どもとかかわったりするため、午前中に開講する必要がある。そこで、月曜日 4 限に行っている「保育実践演習 I」を 2 限に移動させ、1 限の「幼児教育課程総論」の理論で学んだ内容の実際を観察する内容として連携し、午前中を幼稚園での体験に充当した。なお、2 限の音楽 I 等の授業は 4 限に移動していただいた。

③保育実践演習 IV と保育内容・表現（総合）（2 年冬学期）

昨年度同様、科目「保育内容・表現（総合）」（2 年生対象授業）と連携して、「保育科卒園式」を「保育実践演習」の中で実施した。「保育科卒園式」は、保育施設における卒園式を「表現の場」と捉え自分たちの卒園式を自分たち自身で作り上げることで、そこでの保育者、子どもたち双方の表現を学ぶことを目的に 2 年前から取り組んでいる活動である。

今年度も保育実践演習内で行うことにより、1 年生全員が参加し、1 年生にとっても次年度の学びへの意識を高めることができたことがワークシートから確認できた。次年度での現 1 年生の頑張りを見守り、この良い流れがうまく学びへ繋がるよう、我々教員も引き続き努力するとともに、次年度も卒園式を保育実践演習内で保育科全員参加のもと実施する。

④その他

従来から行っている科目間連携として、模擬保育の実施にあたって教育実習指導 II との連携がある。1 年生の出前保育の練習の期間は、小児体育 II 及び音楽 IV と連携し、学生の表現力がよりいっそう習得できるよう授業内容を配慮している。

また、2 年生の子育て支援体験の前には保育相談支援・相談援助の授業内容と連携し、理論と実技を関連づけて習得しやすくするよう配慮している。今年度は、夏学期に少し保育実践演習でお便り作成などで触れることで、年間を通して子育て支援について学ぶように改編した。この改編については学科会議で協議し、次年度より学生のためになるよう配慮したいと考えている。

その他、模擬保育の実施時には本学科専任教員が自身の担当科目でそれぞれ解説を行うなど、多様な形で科目間連携が行われている。

(5) 2 年生による「学びの発表会」と新科目「保育探究演習」の実施

昨年度に引き続き、保育実践演習 IV 及び保育・教職実践演習(幼稚園)の授業内で「学びの発表会」を実施した。この「学びの発表会」は、保育科の自由選択科目である「保育表現技術（野外活動）」「多文化保育論」「音楽 V」、また「小児体育 II」でレクリエーション・インストラクター資格取得をめざした学生にとどまらず、ハルカス大祭に参加したグループ、保育科運動会実行委員、学生支援センターのピア・サポーターとして下級生を支えた学生などが、授業や活動での学びについて 1 年生に発表するものである。自由選択科目やさまざまな大学での活動に自主的に参加して学ぶ重要性を伝えるだけではなく、発表のために同じ学びを共有した学生同士が協力し、自らの学びを振り返ることで、自らの学びをより深めることができていた。

この「学びの発表会」は、韓先生担当の「多文化保育論」で学んだ学生が、大学主催のゼミコンテストでの発表を通して、自らの学びをまとめて振り返るだけではなく、発表を通して学びの重要性により深く気づき、大きな充実感を得ていたこと、さらに、より深く保育や多文化理解について学びたいという意欲が高まったことを踏まえて、より多くの保育科学生にこのような経験をさせることができないかという保育科教員全員の意見と、学生の学びの振り返りの時間の確保をめざして実施されている。なお、このように、学生が自らの保育の学びを振り返り、その意義や重要性、さらなる課題を再確認することは、文部科学省が

提示している教職実践演習の内容とも合致している。

今年度は、あべのハルカスのハルカス大学が主催する「ハルカス大祭」に参加した学生のグループが本学教務課主催のゼミコンテストに参加した。「多文化保育論」受講者卒業生たちの発表から学ぶことで、プレゼンテーション能力の育成と自らの自主的な学びの振り返りに特に大きな成果が見られた。ゼミコンテストに参加して優勝した「ハルカス大祭」のグループだけではなく、「保育内容技術・野外保育」や「音楽 V」「小児体育 II」をはじめ、全てのグループの発表が、昨年度よりプレゼンテーションに工夫を凝らしていた。また、1 年生のワークシートから、昨年度同様「私も積極的に何事にも取り組みたい」「〇〇の活動を私もしたいです」という意見が多く見られたことからも、自主的な学びの成果と楽しさも 1 年生に伝えることができたと思われる。

2 年連続して行ったこの「学びの発表会」とその成果をもとに、「保育探究演習」が次年度より始まる。「保育探究演習」は、6 つのテーマ（「多文化保育」「野外活動」「音楽アンサンブル」「造形アート」「子どもの自然科学」「特別支援保育」）から 1 つを学生が選択し、そのテーマに基づいて保育を自らの興味や関心に沿って深めることを目的としている。このテーマは、既に自由選択科目として科目化されていた「多文化保育論」や「保育内容技術・野外保育」や「音楽 V」をベースにテーマ化されたものと、今後の幼児教育で重視されるテーマとして挙げられているもののうち、「造形アート」「子どもの自然科学」「特別支援保育」を加えて構成した。

カリキュラム構成や教育方法は「多文化保育論」や「保育内容技術・野外保育」で実践されていた教育方法をモデル化し、6 つのテーマ全ての教育方法として採用する予定である。この教育方法モデルの特徴は、主に以下の 4 点である。

1）学外での学びを取り入れ、より実践的に保育を学ぶことができるようにする。

2）週 1 回 15 回の開講を時間割上設定しているが、その時間割にこだわらず、柔軟に開講時間を設定することで、学外での学びの成果が高まるようにする。

3）学生の自主的な学びが行われるよう、外部講師の講演を取り入れたり、少人数グループでより実践的に深く学ぶ内容を予習したり、学外の学びの現場においても保育者などの具体的な話を聞きながら学ぶことができるようにする。

4）各テーマごとに、学んだ内容を 15 回目で発表会を開催し、2 年生全員で学びを共有するとともに、「保育実践演習」における「学びの発表会」でも報告し、1 年生にその学びの成果と自主的に学ぶことの楽しさや保育・幼児教育のよさを伝えることができるようにする。

この成果をもとに、次年度より新科目「保育探究演習」を実施する予定である。

3．授業相互参観について

本年度の各教員の授業相互参観のための公開授業担当科目は以下のとおりである。

東	火 4	スポーツⅡ	伊達	月 1	保育内容・表現(総合)
荒木	金 1	音楽理論	原(祐)	火 3	音楽Ⅳ
内本	月 4	図画工作Ⅱ	韓	月 1	教育原理（教育制度的事項等を含む）
梅野	木 4	保育実習指導Ⅰ			
奥	金 1	音楽理論	松山(由)	木 4	保育内容・人間関係

奥野(孝)	火３	小児体育Ⅱ	吉田(郁)	水２	児童文化

４．学科独自の取組について

(1)公立受験対策勉強会の実施と「社会福祉特別講義Ⅰ」への保育科学生の受講

今年度も、公立受験対策として「公立受験対策勉強会」を２年生夏学期にかけて多様な形で行った。漢字を中心とした国語及び SPI 言語分野については原先生が、保育専門科目については韓先生が担当し、4 月 25 日から夏学期終講まで週 1 回(木曜 3 限)に 9 回行った。参加者は当初 11 名であったが、その後、漸次増減を繰り返しつつ常に 10 数名が粘り強く参加した。数学分野については、教育学部の原田三朗先生の「算数」の授業 15 回を実質的に公立受験対策の指導に充てていただいた。また、吉田先生が面接や集団討論の指導、荒木先生、奥先生がピアノ指導、松山先生が履歴書や作文指導など、学生のニーズに合わせて随時行った。

その結果、今年度は延べ 6 名(実質 5 名)の合格者を出すことができた。また、結果にかかわらず、受講した学生の学び及び就職へのモチベーションが高まり、今後につながる成果が出た。

さらに、今年度も 1 年生への公立受験対策として、人間福祉学科健康福祉専攻が東京アカデミーと協働して開講している夏学期の集中講義「社会福祉特別講義 I」（石田晋司先生担当）を引き続き保育科の 1 年次生も受講できる形にしていただき、合同開講にしていただくこととした。昨年度まで 2 年間の実績から見て、この科目を受講することが直接の合格率アップには結びつかないとしても、1 年次から将来の保育者としての自分の姿を意識することで、卒業までの学びに向き合う姿勢が大きく変わったと思われる。保育科からの今年度の履修登録者数は 24 名、合格点を頂いたのは 11 名であったが、この学生たちが他の保育科生を牽引し、次年度の公立受験の結果に繋がることが期待される。

(2)高大連携事業の実施

今年度も、3 月に 4 回にわたる高大連携ピアノ講座を保育科音楽教員複数名で担当する予定であったが、新型コロナウィルスの感染拡大により中止となった。今年は本学の連携高校が 30 校に増加したことを受け、受講希望者も 34 名と昨年度比 3 倍以上であったにもかかわらず、残念な結果となってしまった。本講座は高校 1･2 年生を対象としているため、次年度の受講を願うところである。

奈良県立桜井高校とは高大連携協定を締結したことを受けて、今年度も昨年度同様、保育科が同校普通科保育コースの授業のうち高大連携授業として 2 回同校で行った。1 回目は、6 月に吉田先生が保育について、乳幼児をとりまく文化を踏まえた保育や、保育者の役割、仕事内容について実技も入れながら講義を行った。2 回目は 11 月に、松山先生だけではなく、桜井高校出身の保育科学生 2 名を含む 2 年生 4 名、また卒業生で現在桜井市の公立保育所に勤める 1 名が授業に参加した。学生、特に卒業生や現在夢をかなえて就職している卒業生が高大連携事業の連携授業に参加した意義は大きく、桜井高校からも高い評価を得ることができたと考える。

今後も保育科で学んだ学生が母校でその学びを活かし、またそれが高校生にとっても有

意義でさらに保育科への志が高まるような高大連携授業を行っていく予定である。

(3) ルーブリック評価導入の具体的検討

評価する対象がピアノ演奏に限られている「音楽 I(器楽)」「音楽 III(器楽)」について、ルーブリック評価の導入を目指して、引き続き評価項目及び評価基準の検討が昨年度から進んでいる。ピアノ演奏能力という「パフォーマンス」を評価することが中心となるからだけではなく、個人レッスンをもとにした授業構成から非常勤講師も含む複数教員で担当していることから、評価基準の整備がかねてから必要であった経緯がある。そこで、音楽の本学科教員である奥先生を中心に取り組んでいる。IBU.net の電子ポートフォリオ作成にともない、情報メディアの職員の協力を得て、基本的な評価項目をポートフォリオに示すことができた。この評価を IBU.net で学生と共有することで、ルーブリック作成の負担を減らし、学生のパフォーマンスと教員の評価をつなぐことができるよう、次年度は運用しながら検討する。また、IBU.net の電子ポートフォリオ化によって、今まで難しかった造形分野の電子ポートフォリオの作成が可能になった。造形の本学科教員である内本先生の協力を得て、課題作品などの電子ポートフォリオを今年度は使用した。授業内での課題のアップロードについて、1 クラスが一斉に行うため停滞してしまうといった、Wi-Fi 等のインフラ面での課題はあるが、学生全員が活用している。次年度以降も、運用しながら、ポートフォリオとしての活用にとどまらず、ルーブリック評価につながる可能性があるか保育科で検討する予定である。

(4) 「保育実践演習」におけるシラバスについての再検討

今年度も「『保育実践演習』報告会」を開催せず、「保育実践演習」研究会によるシラバス検討会を開催し、今年度を含む今までのシラバスの再検討と教員の役割分担について課題を明らかにし、再検討した。その結果を次年度の「保育実践演習」のシラバスに反映させ、より学生にとって学びが充実したものになるよう授業内容を再構成した。特に、再検討の中では、先述した「学びの発表会」の時間が、大きな成果であったと考え、次年度はよりゆとりある学びの時間確保が課題として挙げられた。さらに、アクティブ・ラーニングに必要不可欠な、学外の保育現場等と連携して行う活動について、協力いただいた現場の先生からの学生への評価の本格的な導入も引き続き検討課題である。

(5) 「多文化保育論」を中心にした韓国・新丘大学との連携

・多文化体験学習を通しての日韓学生交流

令和元年度の保育科重点施策の事業計画の一つである「保育や子どもを取り巻く社会状況に対応できる保育者としての幅広い教養と専門性を深める」ことを目的として、「多文化保育論」科目を中心に、韓国新丘大学児童保育学科と学生研修交流を行った。具体的には、同科目の授業の中で、受講生 9 名は多文化保育に関する基礎的知識を学習した上、海外多文化体験研修の事前学習を行い、7 月 13 日から 15 日（2 泊 3 日）まで韓国新丘大学での学生交流、韓国保育文化の体験活動を行った。本活動方法としては、参加学生が主体的に活動を計画し、準備・実施するといった学生中心の主体的・協働的学習方法で行っており、本学習

で得られた学習結果を先述の「保育実践演習」授業内の「学びの発表会」で報告し、学びの共有を図った。

さらに、韓国新丘大学の保育科グローバルチャレンジチーム（4 名）の学生が 8 月 19 日から 8 月 21 日まで本学を訪問し、保育科学生との交流活動及び保育施設での観察実習（1 日 4 時間）を行った。このような日韓の保育科学生の異文化体験及び互いの保育文化を学び合う経験は、将来の保育者として多文化保育実践に生かせる基礎力となると考える。

この多文化体験活動は、本学の中長期実行計画の「大学のグローバル化」及び現代的保育課題である多文化保育に関する保育者としての専門性の育成に有意義な取り組みである。

・新丘大学との教員間研究交流

保育科の中長期実行計画の 2．研究「1．学内及び学外との研究連携の促進」の令和元年度の計画であった「韓国の保育者養成大学との教員間研究交流」において、2019 年 7 月 1 日には新丘大学の幼児教育科教員 6 名が本学を訪問され「意見交換会」が行われ、2020 年 1 月 15 日には児童保育科教員 4 名が本学を訪問され、‘今後さらに協力を進めることで質の高い保育者養成教育を行いたい’という共通目的のうえ、「日韓保育養成校教員研究交流会」を企画・開催した。両大学の保育者養成教育実践の取り組みについて互いに紹介し合いながら相互理解を深めるとともに、それぞれの教育課程がもつ課題について相互に共通認識及び協議を行い、より質の高い保育者養成の研究課題を具体化することができた。

今回の研究交流会で学んだ「保育者養成は、これから生まれてくる子どもたちの育ちを支える保育者を育てるという意味で、未来を創造する仕事である」ところの保育者養成教育を目指して、今後も両大学の教員間研究交流を持続的に推進していきたい。

５．まとめにかえて

本学保育科において、2 年生は、1 年生時の経験を通して修得した知識や気づき等を改めて振り返り、まとめて発表するという経験をもとに 1 年生に助言したり、リーダーシップを発揮したり、コミュニケーションの調整をしたりするなどの自分自身の成長から自信を得ていることが明らかになった。特に今年の 2 年生は、教員とともに保育実践演習をよりよくするためにそれぞれの活動で自らの意見を積極的に提案し、1 年生に学びを伝えようと頑張ってくれたと思われる。昨年度から始めた「学びの発表会」での上級生のプレゼンテーションから学び、自らの学びをより効果的にプレゼンテーションできたと学科会議でも確認された。

1 年生については、間近で毎時間 2 年生の姿を見ることで目標と課題を見つけて学習に励む姿勢が少しずつ育っている。特に、学びの発表会や卒園式で、2 年生の笑顔や涙を見ることで、自らの 1 年後を想像し、より頑張ろうという気持ちを持った学生が多くいたことが成果であったと思われる。

本授業での学びが、慈愛に満ちた保育者の資質として必要な能力、すなわち学生個々の知識・技術習得を通しての専門性、協同・協調的な学びを通して社会性や豊かな人間性を培うことを明記した 3 つのポリシーと関連づけながら、獲得すべき能力が習得できたと学生自身がより実感できる FD 活動をめざし、保育科におけるカリキュラムと評価の在り方を今

後も追求する。

特に、次年度は、保育科が 10 年以上にわたって実践してきた「保育実践演習」に続き、２つめの柱となる「保育探究演習」を実施することになる。個々の学生が自主的に自らの学びをより深め、慈愛に満ちた保育者に育ちあうような経験ができる保育科としての在り方を模索したい。そのためには、短期大学部保育科で受け継がれてきた歴史とさまざまな「つながり」を大切にしながら、これからの保育科の学生の学びを支え、充実したものになるようなカリキュラムについて、今後も検討・検証していかなければならないと考える。

生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻

１．はじめに

生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻は、2010 年（平成 22 年）4 月に最初の入学生を迎え、2019 年 4 月には、第 10 期生を迎えることができた。その間、フィールド・ユニット制の見直しや、ライフデザイン・スタジオの新設など様々な見直しや新規企画を導入し今日に至っている。しかしはフィールド・ユニット制というシステムについては 10 年間変わっておらず、学生自身が興味のある授業を選択できるこのシステムは、学生や受験生から一定の評価を得られていると言って良いだろう。2019 年度からは「ビジネス」「情報」「フード」「ファッション」「インテリア」「健康・ビューティ」「ブライダル」「観光」の 8 フィールドで授業体系が構成されている。

本専攻では専任教員により、一人ひとりの学生が納得のいく履修計画を立てられるように指導することを心掛けている。学生は、本来なら将来のキャリアプランを描きつつ履修計画を自ら立ることが望ましいが、実際には「なりたい自分」のイメージを描くことが困難な学生が多いため、教員による丁寧な指導が不可欠である。また短期大学部の学生には入学年度と卒業年度の２年間しかないので、特にキャリア教育に入学直後の早い時期から力を入れている。初年次教育とキャリア教育を車の両輪のように同時に進行させることで、出口としての就職に繋げることができるような指導をしている。そのため初年次教育として「ライフデザイン・ゼミナールⅠ・Ⅱ」を必修科目とし、就職支援として「ライフデザイン・ゼミナールⅢ・Ⅳ」を必修科目としている。その内容は学生の就職活動に即するように考慮しており、毎年検討し改善している。また SPI 試験対策として１年次に「キャリアの基礎Ⅰ・Ⅱ」を開講しており、就職活動時に必要となる国語力や計算力等の強化も合わせて行っている。

本専攻は実習・演習系の授業が多いため、大小さまざまな作品が製作される。平成 27 年に５号館２階にできたライフデザイン・スタジオには、授業等で製作された学生作品が展示されている。学生にとっても励みになるようで、学生同士がお互いの学びを理解し刺激し合えるような工夫を続けていきたいと考えている。またライフデザイン専攻に進学を希望する高校生に対しても、作品展示によってその魅力を発信したいと考えている。またポートフォリオも合わせて活用することで、学生が自身の記録に残るように指導している。

学生の学修意欲を高める対策として、本専攻では資格取得を勧めている。取得した資格は就職活動時には履歴書に記入し、自己アピールとして活用できる。また、本専攻の学生は成功達成経験が少ない傾向にあるので、資格取得のために学びを系統立てて準備し、自学自習する過程は貴重な経験になり、人間的な成長に結びつくと考えられる。その資格取得をサポートするために、各フィールドでの推奨資格を設定し、資格試験対策も授業の中で講じている。令和元年度からは情報処理特別演習を開講して Microsoft Office Specialist（PowerPoint）にチャレンジできるようにした。43 人が受験し 37 人が合格した

２．初年次教育科目（ライフデザイン・ゼミナールⅠ・Ⅱ）について

ライフデザイン専攻では、初年次教育科目として、ライフデザイン・ゼミナールⅠとⅡを開講している。キャリアセンタースタッフの協力を得、さらに外部講師を招聘し、２年次に

スタートする就職活動にうまく繋がるように連携を取っている。

(1) ライフデザイン・ゼミナールⅠ

ライフデザイン・ゼミナールⅠでは、働くという事や自己分析、仕事分析等を中心に学修する。授業内容は表１のとおりである。全 15 回中7回の授業で外部講師を招き、また学生が就職活動を具体的に感じることができるように配慮している。昨年の内容と比較すると、プログテストの結果を用いた個人面談（5 回目）や、ＳＰＩテストの模擬体験（14 回目）などが追加変更されている。なお例年行っていた学生授業アンケートを今期は実施していない。

表１．ライフデザイン・ゼミナールⅠ授業内容

1	ライフデザインの学びを理解する
2	建学の精神を学ぶ、適性テスト
3	就職活動の流れを知り、求められる社会人基礎力を学ぶ
4	ライフプランとキャリアプラン
5	レポートの書き方、プログテストフィードバック
6	働くとは
7	自分の理想のビジネスパーソン作り
8	自己分析（適性テスト*の結果から自分を再認識）
9	卒業生からまなぶ
10	自己分析（過去の振り返りと強み・弱み）
11	仕事分析（さまざまな仕事と適性について）
12	企業人講演（販売職・事務職）
13	自分と仕事について学んだこと
14	ＳＰＩテスト
15	振り返り　夏休みの過ごし方

(2) ライフデザイン・ゼミナールⅡ

ライフデザイン・ゼミナールⅡでは、履歴書の書き方を学習し、グループ面談や一般常識テストを体験した。授業内容は表２のとおりである。

履歴書の書き方では外部講師１名を招き、更に専攻の専任教員が加わることにより丁寧な指導ができるように努めた。その内容は、履歴書の目的・書き方，がんばってきたこと，自分の特徴，志望動機等である。自己アピールできる事柄は特殊な経験や体験と思っている学生が多いため、日常のちょっとしたことで自己アピールできることを気づかせる意義は大きい。

実践グループ面談は、専攻教員が３グループに分かれて実施した。各グループの学生数は 10 数名である。学生には大学指定スーツを着用させ、本番さながらの雰囲気で行った。自己紹介や質問に対する回答など、回を重ねる毎に受け答えが良くなっていくのが実感できる。なお本年はキャリアセンター長をはじめとするスタッフの方々にも協力していただき有意義な練習を行うことができた。

表２．ライフデザイン・ゼミナールⅡ授業内容

1	夏学期の振り返り、ライフデザインの学びを理解する
2	履歴書を書く（目的や書き方、ルール）
3	履歴書を書く（がんばってきたこと）
4	履歴書を書く（自分の特徴）
5	履歴書を書く（志望動機）
6	履歴書を完成させよう
7	履歴書を完成させよう
8	適職診断テスト・進路登録
9	面接対策（グループ面接）、実践に向けて
10	実践グループ面接　or　模擬試験対策テスト①
11	実践グループ面接　or　模擬試験対策テスト②
12	実践グループ面接　or　履歴書添削①
13	実践グループ面接　or　履歴書添削②
14	振り返り①　これまでを振り返り、その学びとこれからについてまとめる
15	振り返り②　春休み、2年生の過ごし方

授業アンケートを行った結果を表３に示す。全体的に見て、授業前に比べ授業後にはポイントが上がっているのが今年の特徴であろう。特に「仕事について興味をもち、情報を得ている」は0.6ポイント上がっている。一方で「自分の弱みを理解している」や「卒業後の自分の姿がイメージできる」では0.2ポイントの増加に留まっている。

表３．ゼミナールⅡ授業前後でのアンケート結果（5段階評価の平均値を記している）

質　問	事前評価値	事後評価値
自分から挨拶ができる	2.7	3.2
敬語（言葉づかい）ができる	2.5	3.0
社会で必要なビジネスマナーを理解している	2.7	3.0
大勢の人の前で発表（話す）ことができる	2.8	3.1
人の話を聞き、自分の意見を伝えられる	3.2	3.5
自分の強みを理解している	2.5	3.0
自分の弱みを理解している	2.6	2.8
短大で力を入れて取り組んでいることがある	3.0	3.4
目標を設定し、計画を立てることができる	2.9	3.2
社会に興味を持ち、情報を得ている	2.5	2.9
仕事について興味をもち、情報を得ている	2.6	3.2
卒業後の自分の姿がイメージできる	2.4	2.6
現在、考えている卒業後の進路がある	3.1	3.5

３．授業相互参観について

本年度は新任の前田明美先生のカラーコーディネート実習Ｂで、授業相互参観を行った（令和元年 11 月 15 日 4 限、5-203 教室）。授業後合評会を行い、以下のようなコメントが寄せられ好評だった。

・実習科目で、学生が一生懸命作業している様子が、大変良かった。
・学生が手を挙げて、授業に積極的に参加している様子がよかった
・学生のおしゃべりが授業内容になっていて、先生と学生の信頼関係が構築されている。
・学生の様子を見ながら授業しているのが良い。

４．学科独自の取り組みについて

(1) キャリアの基礎Ⅰ・Ⅱについて

ライフデザイン専攻では必修科目として、夏学期にＳＰＩ試験言語分野に対応した「キャリアの基礎Ⅰ」を開講し、冬学期にＳＰＩ試験非言語分野に対応した「キャリアの基礎ＩＩ」を開講している。どちらも就職試験で必要な基礎学力育成を目的としている。これらの授業では１回目の授業で試験（図中の「プレ」）を行ってクラス分けをし、最後の授業で再度試験（図中の「ファイナル」）を行っている。

キャリアの基礎Ⅰのプレ試験の平均点は 50.4 点、最高点は 78 点であった。またファイナル試験の平均点は 76.1 点、最高点は 98 点であった。授業によって平均点が約 25 点アップしている。四字熟語やことわざ・慣用句のような暗記ものは正答率が上がっているが、読解力や文法などは必ずしも良い結果に結び付いていないのは例年と同じである。

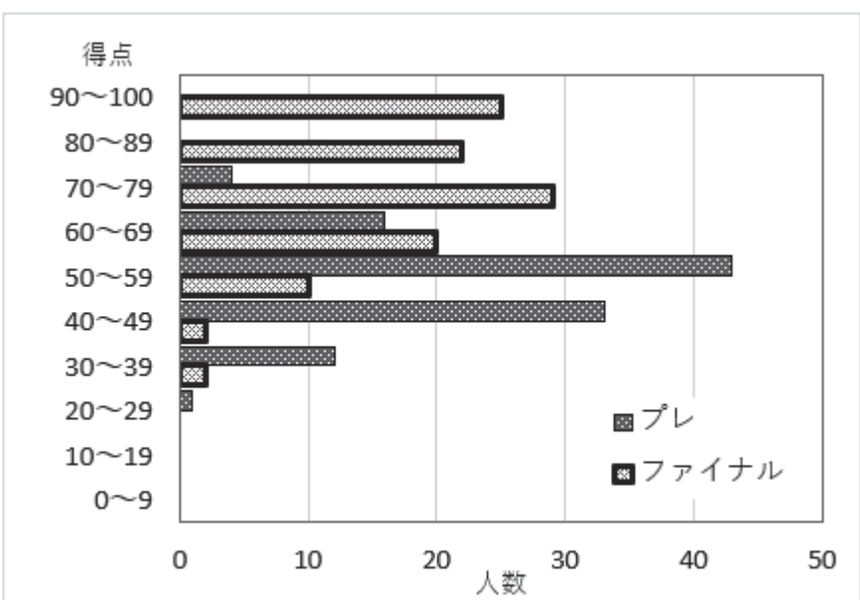


図４．キャリアの基礎Ⅰ試験結果

キャリアの基礎ＩＩのプレ試験の平均点は 29.9 点、最高点は 56 点であった。ファイナル試験の平均点は 66.1 点、最高点は 100 点であった。授業によって平均点が約 36 点アップしている。非言語分野の場合、日常的に問題を目にする機会が無いせいか、学生のほとんどが

忘れているようで、授業することによって得点が上がっている。一方で算数・数学関連科目に非常に苦手意識を持つ学生もいるため、よりきめ細やかな指導をするためには３クラスに分けるなどの方策が必要である。

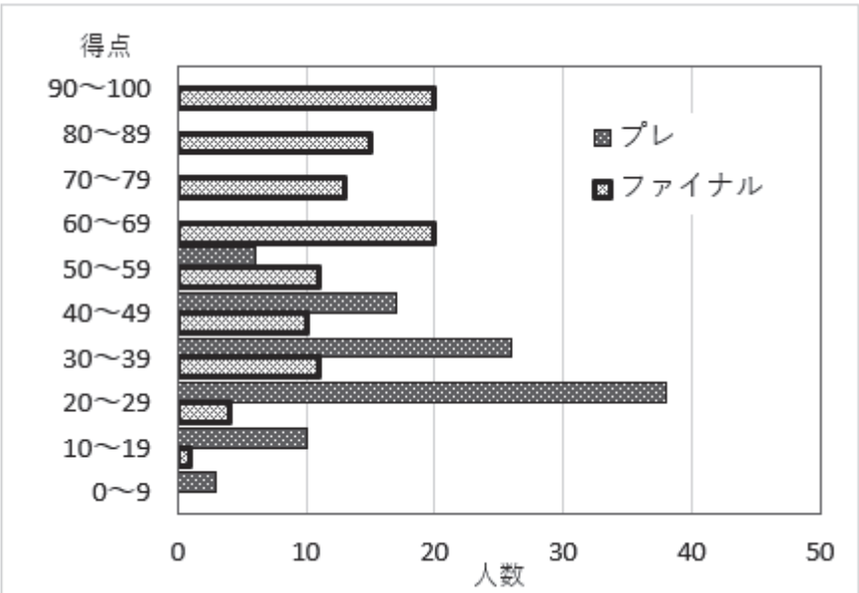


図５．キャリアの基礎ＩＩ試験結果

⑵ 資格取得について

ライフデザイン専攻では授業と資格がリンクしており、様々な資格にチャレンジすることができる。表６と７に学生の資格取得状況を示す。今年はMOS(PowerPoint)と日本ブライダル文化振興協会が認定しているアソシエイトブライダルコーディネーターが追加されている。特に後者は国家検定であるブライダルコーディネート技能検定への架け橋的な役割を担うため、ブライダル業界へのあこがれが強い本専攻の学生には魅力的な資格のようである。なお、MOS(PowerPoint)は授業内で受験するため、代わりに来年度からは情報処理士の認定がなくなる。

表６．認定資格

認定資格	人数
秘　書　士	17
情報処理士	17
上級秘書士	16
食空間コーディネーター3 級	8

表７．取得資格

検　定	級	合格者数	受験者数	合格率
秘書技能検定	2 級	7	16	44%
	3 級	2	2	100%
ビジネス実務マナー検定	2 級	3	3	100%
	3 級	55	77	71%
ビジネス文書技能検定	2 級	10	22	45%
	3 級	21	21	100%
簿記能力検定（全経）	3 級商業簿記	4	5	80%
医療秘書技能検定	3 級	10	30	33%
ドクターズクラーク		6	6	100%
MOS(WORD)		1	1	100%
MOS(EXCEL)		12	12	100%
MOS(PowerPoint)		37	43	86%
色彩検定	2 級	11	13	85%
	3 級	30	31	97%
ファッションビジネス能力検定	3 級	3	10	30%
ファッション販売能力検定	3 級	4	5	80%
食生活アドバイザー検定	3 級	8	8	100%
メイクアップ技術検定	2 級	19	20	95%
	3 級	21	21	100%
セルフメイク検定		1	1	100%
アソシエイトブライダルコーディネーター		20	24	83%
リビングスタイリスト	2 級	1	1	100%
TOEIC			1	

(3) 就職支援について

ライフデザイン・ゼミナールⅠ～Ⅳやキャリアの基礎Ⅰ・Ⅱをとおして就職支援を行っていることは前述したとおりであるが、ここではその結果としての就職内定者数の推移を以下に示す

令和 2 年 3 月 30 日現在における、卒業生の数は 96 人で、そのうち就職希望者数が 89 人、決定者数は 80 人であった（就職率 89.9%）。前年度は卒業生 124 人、就職希望者が 105 人、決定者が 104 人（就職率 99.0%）だったので、就職率は前年度に比べて約 10 ポイント低い。内定者数の推移は図８のとおりであるが、この図を見てわかるように、一年を通して前年に比べて就職者数の推移が低調である。特に 7 月以降の伸びが鈍い（7 月から 8 月にかけて内定者数が減少しているのは、内定辞退者がいたため）。文部科学省の令和 2 年 3 月 18 日の報道発表によると、2 月 1 日現在の短期大学卒業予定者の就職内定率が 89.3%（前年同期比

1.7 ポイント低下）なので、それよりも低い（図は各月末日の人数）。

原因の１つに平成 30 年度卒業生は、販売職を希望した学生が多かったが、令和元年度卒業生は、事務職を希望する学生が多かったことが考えられる。販売職は離職率も高いため求人数が多くなり、結果として内定を得やすい。それに対し事務職は選考過程が長く、筆記試験で落ちる学生が多く、それで挫折して内定に結び付かない、という例が多々見られた。次年度に向けては、学生のモチベーションを高め維持する工夫が必要である。

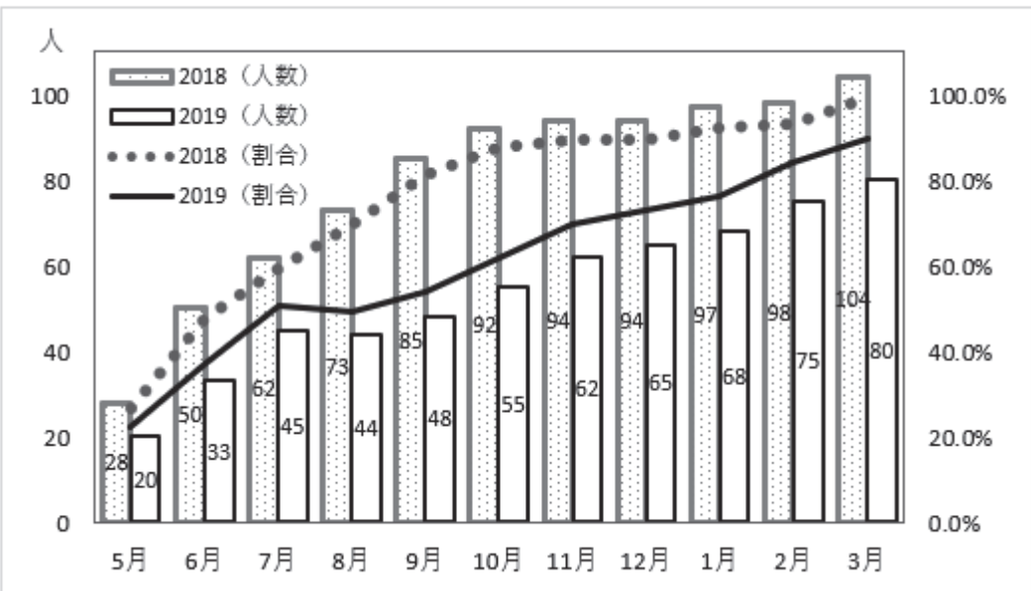


図８．就職内定（決定）者数の推移

５．その他

(1) コンテスト受賞報告

本専攻では、学びの意欲の向上や成功達成経験の場として、学外の各種コンテストへの応募を学生に推奨している。今年度は以下のコンテストで受賞した。

① 第 2 回『食べて応援・作って応援』レシピコンテスト

本コンテストは、ＪＡ大阪南と本学との産学連携の取り組みとして、地元農産物を使用した惣菜・スイーツのレシピ開発を目的としたものである。全部で 18 作品の応募があり、その内２次審査へは 6 作品が進出した。ライフデザイン専攻の学生による作品はその内の 4 作品で、残念ながら組合長賞は逃したが、1 作品が専務賞、3 作品があすかてくるで賞を受賞した。

② 第 10 回デコ＆リメイクチャレンジ展

リメイク部門で努力賞を受賞（4 名応募中 1 名が受賞）。

※ コンテスト以外で、一般社団法人日本反射材普及協会が主催する反射材エキシビション 2019 にライフデザイン専攻の学生が出展した。

(2) 令和元年度エクステンションセンター主催の公開講座について

平成 30 年度四天王寺大学短期大学部生涯学習事業として、公開講座「暮らしに優しい知

恵袋」を開催した。日時と担当者は以下の通りである。

第１回（10 月 26 日）：カラー「覚えています！？昭和～平成に流行った色とファッション～そして令和は…」（担当：前田 明美）

第２回（11 月 16 日）：ファッション「備蓄品に衣服は必要か？～災害時に必要な衣服について考える」（担当：谷 明日香）

第３回（11 月 30 日）：健康・ビューティ「鏡のわたしと仲良く元気に」（担当：葭矢 峰世）

第４回（12 月 14 日）：フード「もったいない！～食品廃棄を減らすには～」（担当：谷口 美佳）

本年度は土曜日に開催したせいもあり、受講者が少なめで延べ 23 名の参加者であったが、好評のうちに終えることができた。

また、たいし塾においては、以下の 2 講座を開催した。

① 6 月 8 日：平成の「食生活」を考える ― 世界無形文化遺産「和食」から見えるもの ―（担当：谷口 美佳）

② 10 月 19 日：平成の「住まい」を考える ― 平成の時代・人々は住まいに何を求めたのか ―（担当：富家 大器）

⑶ 地域交流活動について

羽曳野市立埴生南幼稚園と本専攻学生との地域交流活動として、衣服のリサイクル活動を実施した（全 2 回：2019 年 10 月 25 日，2020 年 1 月 10 日）。学生は、園児の作品をデジタル化して布にプリントアウトし、回収した古着や新素材で装飾することで、ロゼットにアップリサイクルした。その結果、環境問題への関心はあっても、生活の中で衣服のリサイクル方法を実践する意欲の低かった保護者や学生が、リサイクルの意義やその手段を実践的に体験する機会となり、満足度は保護者で「非常に満足」（88.2%）、学生で「非常に満足」（81.3%）と高評価を得た。（地域課題解決研究奨励－第 5 号）

⑷ 地域創生事業の推進について

児童養護施設高鷲学園との料理教室を４回実施した（第１回：6 月 15 日、第２回：7 月 27 日、第３回：10 月 26 日、第４回：令和 2 年 1 月 25 日）。昨年度より施設側、本専攻側とも参加人数が多くなり、充実した料理教室を開催できた。このことは、学園の子ども達の課外活動の質を高める一助になった。また専攻学生は、教室での子ども達への調理指導だけでなく、ゼミで行った料理教室の準備などを通し、課題を発見し解決する力やコミュニケーション力を身につけることができた。

生活ナビゲーション学科ライフケア専攻

1. はじめに

本専攻は、「質の高い介護福祉サービスを提供できる介護福祉士の養成を基本とし、理論と実践のバランスが取れた実社会で求められる社会人基礎力を育み、何事にも主体的に取り組むことのできる人材の養成」を目的としている。それは、「専門的知識及び技術をもって、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき心身の状況に応じた介護を行い、並びにその者及びその介護者に対して介護に関する指導を行う」という介護福祉士の定義、及び本専攻のデイプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに基づいている。

上記の目的に加えさらなる課題は、コミュニケーション力といった社会人基礎力を高めつつ、専門的知識と技術の融合を目指していくことである。また、介護福祉士養成施設の卒業生に、国家試験の受験が段階的に義務付けられたことを鑑み、過去に実施してきた卒業時共通試験対策から国家試験対策へ円滑に移行し、その内容を充実していくことが必須となっている。

さらに、入学して間もない学生が新しい環境のなかで介護福祉士を目指す動機づけを行うための初年次教育「ライフケア演習Ⅰ・Ⅱ」が平成27年度からスタートし、次年度は「ライフケア演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」が開講され、国家試験対策の実施によって合格者を多数輩出するに至っている。

本年度のＦＳＤ活動は、初年次教育「ライフケア演習Ⅰ」「ライフケア演習Ⅱ」に継続して「ライフケア演習Ⅲ」「ライフケア演習Ⅳ」、授業相互参観、学科独自の取り組みとして「高齢者のメイクアップ学習会」、「羽曳野市認知症サポーター」、「当事者との交流学習会」「介護予防通所相当サービス」、「介護福祉士国家試験受験対策」、「ハル大祭–介護予防（体力測定・脳トレーニング）–」について報告する。

2. 初年次教育等について

(1)「ライフケア演習Ⅰ」

【概要】

本学の建学精神の理解を基礎とし、短期大学における学習と学生生活が円滑に始められるようにする。
また、介護福祉士となるうえでのモチベーションを高める。

授業形態は、講義、演習、学外実習、グループ発表等を取り入れ、社会人基礎力における「前に踏み出す力」（主体的に学ぶ力、はたらきかける力、実行する力）を身につける。

【到達目標】

① 本学で学ぶことの意義を理解することができる。
② 将来、介護等対人援助職に就く学生として必要な知識、技能、基本的態度を習得する。
③ 介護福祉士等、自己の将来について展望し、社会人になるための問題意識をもつことができる。
④ 教員やクラスメイトとのコミュニケーションを円滑にし、より良い人間関係をつくることができる。

【授業計画および受講生アンケート結果】

授業計画とアンケート結果は以下のとおりである。アンケート結果は、受講生19名の実数を表記した。
５段階で理解度を含め、受講した成果が得られたかどうかを尋ねた。
５：かなり良い　４：良い　３：どちらとも言えない　２：あまり良くなかった　１：良くなかった

月日	テーマ	授業内容と到達目標	アンケート結果				
			5	4	3	2	1
4月4日	オリエンテーション	建学の精神・履修登録	15	3	0	0	0
4月11日	交流会の打ち合わせ	1・2回生合同で交流会に向けたメニューをグループ内で検討する	12	3	3	0	0
4月18日	交流会（2コマ）	調理を通して先輩と交流し、先輩に学生生活などについて聞き今後について考える	12	5	1	0	0
4月20日	バリアフリー2019見学（2コマ）	最新の福祉・介護機器を目にし、のぞましい環境整備について関心をもって調べる	13	4	1	0	0

4月 25日	実習報告会 （2コマ）	先輩からの実習報告を通し、介護現場や介護職の果たす役割について理解を深める 今後の学習目標を考える	12	4	2	0	0
5月 9日	バリアフリー2019の振り返り	バリアフリー2019での学びについて各自が発表を行い、福祉機器等のついての理解を深める	10	5	3	1	0
5月 16日	先輩の話を聴く	編入生及び福祉職に就いた先輩の話を聴き、また質疑応答を通して、自身の進路選択について考える	15	3	0	0	0
5月 23日	先輩の話を聞いての振り返り	先輩の話を聴いて自身の今後の目標を定め、そのための行動目標を発表する	10	5	3	0	0
6月 6日	認知症サポーター講習	認知症に対する基礎知識を身に付ける 「認知症サポーター」の活動の一環として、家族に認知症のことを伝える	11	5	2	0	0
6月 13日	認知症サポーター講習の振り返り	認知症サポーター講習を受け、認知症のある人に対する誤解や偏見を改め、今後どのように活動していくかについて発表する	9	5	4	0	0
7月 11日	実習報告会 （2コマ）	コミュニケーション体験を振り返る 先輩からの実習報告を通し、介護現場や介護職の果たす役割について理解を深める	11	5	2	0	0
7月 18日	振り返り	介護福祉士等、自己の将来について展望し、そのためにどのような取り組みを行うかについて考える	9	4	4	1	0
5月 ～ 7月	健康トレーニング（授業の一環だが、コマ数にカウントせず）	☆血圧測定などを通して、参加された高齢者とコミュニケーション体験をする ☆介護予防の取り組みを体験する ☆自己の運動不足解消と健康について考えを深める	13	3	2	0	0

受講生はライフケア専攻入学生19名。しかし、1名は一度も講義に出席することなく退学してしまった。それ以外の学生の出席率は高かった。

短大生活や介護に関する専門的な学習に早く慣れてもらうため、早期に上級生との交流の機会を意図的に設定した。上級生に対するイメージは「優しい」「親切」という好意的なものが多かった。おおむね意図した目標は達成できていたように感じた。その結果「来年は自分たちが後輩に同じように接していく」と上級生としてのイメージを持った意見もアンケートには見られた。

また、アンケート結果では「先輩の話を聞く」も好評であった。専攻卒業生という親しみと自身の進路（編入希望者も複数いる）に会った話を聴くことができ、また、先輩も伝え方に工夫が見られ、相互に学びのある機会となった。

「認知症サポーター」では、外部講師による話のため適度な緊張感のもと、介護を学び始めた学生向けの内容であったため、介護の対象者をイメージするのにふさわしい題材であったと言える。

「書く力」「表現する力」を養うため、レポート並びに発表の機会を多く設けたが、学生にとっては負担が大きかったように感じる。教員の教授法の工夫やもっと身近な題材を取り入れるなどの工夫が必要であった。

⑵「ライフケア演習Ⅱ」

【目的】

短期大学における学修と学生生活を円滑に進められるように、また、介護福祉士や援助職となるうえでのモチベーションを高めることを目的とする。地域で生活されている利用者とのかかわり、介護福祉に関係する又は関心をもつ人々との交流を通して介護者としての役割を考える。

【到達目標】

①介護・対人援助職に必要とされる基本的態度・知識・技能を身につけることができる。
②人とかかわる「介護福祉士」等の自分の将来について考える契機とし、社会人となるにあたり問題意識をもつことができる。
③自己の介護者としての進路について考えることができる。
【授業計画】

コマ数	実施日	曜日	時限	授業内容	教室
1	9/19	木	4	冬学期オリエンテーション　キャリアセンター適性検査	6-211
2	10/3	木	4	ボランティア活動報告１	6-211
3	10/10	木	4	ボランティア活動報告２	6-211
4	10/17	木	4	ボランティア活動報告３　まとめ	6-211
5	10/24	木	4	1.2 年生交流　　介護実習レベルⅠを臨むにあたって	6-211
6	10/31	木	4	『いのち』について考える１　発達の躓きと社会問題	6-211
7	11/28	木	4	社会福祉のまなび　キャリアデザイン	6-211
8	12/7	土	2	人間福祉学科健康福祉専攻社会福祉現場実習報告会希望者参加	5-303
9	12/12	木	4	介護福祉実習報告会　発表１　２年生と合同	6-211
10	12/12	木	5	介護福祉実習報告会　発表２	6-211
11	12/19	木	4	『いのち』について考える２　居場所・拠り所	6-211
12	12/26	木	3	２年生の事例研究発表会　参加１	6-159
13	1/9	木	3	２年生の事例研究発表会　参加２	6-159
14	1/16	木	4	まとめ・アンケート評価・課題の提出	6-211

履修者は 18 名であった。授業は、介護福祉士として求められる知識・技術の必要性の理解、介護実習報告会・事例研究発表会参加による介護福祉士の実習の学びについてなど多岐にわたる。前半実施したボランティア活動報告会では、学生が主体となって高齢者～障害者まで社会福祉の領域から選択して申し込み、夏休みの活動体験について資料を用いて多数の学生が発表することができた。しかし、ボランティア活動を行わない、発表しない学生も数名いた。発表した学生は目的意識をもって情報収集に努め、積極的に取り組み学生は達成感と自信にあふれていた。

授業の最後にいちばん印象に残った内容について記述してもらったところ、命について考える 12/19 の授業であった。これは、高齢の元保護司が地域の居場所のない子供達を支援する内容で、学生からは、高齢者は支えられる立場だけでなく、愛情に飢える子供らの居場所づくりと、心が通い合う交流を通して、お互い必要とされることの大切さについて学びを深めることができた等の感想が多数寄せられた。

(3)「ライフケア演習Ⅲ」

本授業は、初年次教育の「ライフケア演習Ⅰ・Ⅱ」に引き続き、ライフケア専攻独自の演習科目として設定されている。

【到達目標】

① 介護職に求められる基本的態度、知識、技能を身につけることができる。
② 人とかかわる介護福祉士等の自分の将来について考える契機とし社会人となるにあたり問題意識をもつことができる。
③ 介護の現状を把握し必要とされる介護実践力について理解することができる。

【授業計画】

目標を達成するために、具体的に取り組んだことは以下の３点である。

①　１回生との交流及び実習成果の共有
４月：おやつ作り
　　レベルⅠ後半介護実習報告会
７月：レベルⅡ介護実習報告会
②「介護予防」の視点からの高齢者理解

４月：ハル大祭での高齢者体力測定（有志）
７月：高齢者のボランテァグループの活動報告
11 月：大学祭での高齢者体力測定（有志）
12 月：ゼミコンテスト発表
③　地域連携
５月～７月、９月～1 月悲田院デイサービス「介護予防通所相当サービス」に１回生と一緒に参加。
本年度は、１回生 18 名、２回生９名と１回生の人数が多く心配したが、おやつ作りの場面では２回生もそれなりにリーダーシップをとり交流を持つことが出来た。しかし、実習報告会の場面では、１・２回生共に、挙手をして質問をするという積極的な行動が取れず、質疑応答で報告会が盛り上がるということがなかったことは残念であり指導上の課題となった。
高齢者のボランテァ活動の報告は、学生にとって、高齢者＝介護を必要とする利用者というイメージを払拭するだけでなく多様な高齢者の存在が大きな刺激となった。また、高齢者の体力測定を通じ幅広く高齢者理解に繋がった。また、それらをまとめてゼミコンテストに臨むことが出来た。残念ながら学生全員で発表することはできなかったが、クラス全員で共有することができた。
悲田院デイサービスでの活動は、昨年に比べ参加利用者が激減したが、継続されている利用者ばかりなので、2 回生学生の、名前、出身地等しっかり記憶されており馴染みの関係が成立しており、参加されている利用者が学生との関わりを楽しみにされて良好なコミュニケーションが取れている。そのような２回生の後ろ姿を見て、１回生もリラックスしてコミュニケーションをとる体験の場になっていることは大きな成果である。

⑷「ライフケア演習Ⅳ」
【目的】本授業は選択科目であり、介護福祉士資格取得を目指す学生のみの授業であることから、専門職としての自覚および介護福祉士資格取得に必要な「国家試験合格」を目指すことと、介護実習報告会における後輩への支援ができることである。
在学生 12 名中９名が履修した（3 名は介護福祉士受験資格の辞退者）。
【到達目標】　以下の５つ掲げて取り組んだ。
①介護・対人援助職に求められる知識・技術・態度を身につけることができる（具体例として、国家試験の合格を目指す）。
②後輩（１回生）の実習に対して、適切なアドバイスができるようになる。
【授業計画】

9 月 19 日	木	4	オリエンテーション、第１回中央法規模試の復習・確認　6-159
10 月　3 日	木	4	第１回中央法規模試の復習・確認　6-159
10 月 10 日	木	4	第１回中央法規模試の復習・確認　6-159
10 月 17 日	木	3	ライフケア演習Ⅱ・Ⅳ　1.2 年生合同授業「介護実習直前交流」6-159
10 月 24 日	木	4	介護福祉士過去問の模擬試験 2018 年　午前の部　6-159
10 月 31 日	木	4	介護福祉士過去問の模擬試験 2018 年　午後の部　6-159
11 月　7 日	木	4	介護福祉士国家試験過去問午前の部の復習・確認　6-159
11 月 21 日	木	4	介護福祉士国家試験過去問午後の部の復習・確認　6-159
11 月 28 日	木	4	介護福祉士国家予想問題　6-159
12 月　5 日	木	3.4	第２回中央法規模試　6-159
12 月 12 日	木	4	第２回中央法規模試の復習・確認　6-159
12 月 19 日	木	3	ライフケア演習Ⅱ・Ⅳ　1.2 年生合同授業介護実習報告会　6-159
12 月 19 日	木	4	ライフケア演習Ⅱ・Ⅳ　1.2 年生合同授業介護実習報告会　6-159

【授業の振り返り】
前年度の課題として、集中して国家試験対策に取り組むために窓のない 6-159 に教室を変更して行われた。
下級生に対して少人数であり、その中で互いに教えあう習慣をつくるため、学生が模試や過去問について正答したり、調べたりしたことを発表するという形式をとり、知識の定着に努めた。しかし、人まえで話すことに抵抗のある学生がおり、クラス一丸となった取り組みができたのは「ライフケア演習Ⅳ」を終え、放課後

の自主学習に取り組んだ12月・１月になってしまった。

3. 授業相互参観について　濵田

令和元年度冬学期のライフケア専攻の相互授業参観の公開授業一覧は以下のとおりで、合評会は授業後の実施、参観者は専攻教員のみであった。

	教員名	月日	曜日	時限	公開授業科目	教室
1	能田　茂代	11月19日	火	5	こころとからだのしくみ	6-211
2	濵田　佐知子	12月12日	木	4	ライフケア演習Ⅱ	6-211
3	大西　敏浩	12月12日	木	5	ライフケア演習Ⅳ	6-159
4	武田　盛夫	12月8日	木	3	介護実習指導Ⅱ	6-159

12/8の「実習指導Ⅱ」では、２セメスター生が介護実習レベルⅠ前半に臨み、約３週間の実習期間の中間地点で帰校日を設定し学内授業を行った。授業担当教員より全体を通して連絡確認事項があった後、巡回指導教員ごとに学生も分かれ、教員と共に前半実習の振り返りや中間カンファレンスの打ち合わせ、記録の指導、達成課題の進捗状況の確認などを行った。合評会の実施は、後日の専攻会議内で、授業進行についての確認や担当学生の実習状況についての情報交換と共有を図った。

また、12/12のライフケア演習Ⅱ・Ⅳは、2・4セメスター生合同の授業形式で、介護実習報告会を実施した。2セメスター生は、介護実習レベルⅠ前半の課題とその達成状況及びコミュニケーション過程の取り組みについて資料を作成して発表に臨んだ。4セメスター生は既に介護実習を終えている段階であり、2セメスター生に質問や今後のよりよい支援に結びつくような助言ができるように、言葉を選びながら行っていた。参観者は専攻教員のみであったため、後日の専攻会議内で、合同授業の進行と内容についての確認や担当学生の実習後の情報交換と共有を図った。

4. 学科独自の取り組みについて

(1)「高齢者のメイクアップ学習会」

７月２日（水）３･４限「アクティビティケア」の授業内容として実施した。

「COCOROEプロジェクト」としての取り組みとして、今年も隣接する四天王寺悲田院特別養護老人ホームに出向く形で９名全員が参加して行った。

授業の目的は「介護福祉士を目指す学生が高齢者の生活の潤いをもたらすアクティビティとしての身支度・装いについて学ぶ」ことである。

３限は、デイケアセンター、その他の福祉施設にて化粧療法のボランティア活動経験のある外部講師を招き、メイクアップ法の基礎を学内で講義いただいた。

４限は、四天王寺悲田院特別養護老人ホームに赴き、利用者様に対して、外部講師の手ほどきのもと、介護福祉を学ぶ学生により身支度・装いの介護としてメイクアップを施した。要介護状態にある利用者様と和やかにコミュニケーションを図りながらのメイクにより、心身ともに明るく変貌を遂げていく過程を目の当たりにした。年齢や要介護に限らない、コミュニケーションやメイクの効用について体験的に学習できた。

また入試・広報部からの要請を受け、マスコミ取材用に再度セッテイングした。

11月14日（木）３・４限を使い「ライフケア演習Ⅳ」の一環として実施した（ただし授業回数には含めていない）。7名の学生が参加し、マスコミ３社からの取材を受けた。７月に一度実践していることもあり、手つきも良く、スムースに準備・実施することができた。また、コミュニケーションについても慣れており、和やかな雰囲気で取り組むことができた。メイク完了後に記念撮影をしたがあふれんばかりの笑顔であった。

取材内容は、11月18日に大阪日日新聞、翌年１月25日に毎日新聞に掲載された。顔写真やインタビュー内容が名前とともに載った学生もおり、利用者の喜びの声を改めて紙面で確認し、充実感を得ることができた。

(2)「羽曳野市認知症サポーター」

６月６日（木）４限に「ライフケア演習Ⅰ」の授業の１コマとして実施した。

授業での到達目標は「認知症に対する基礎知識を身につける」と「“認知症サポーター”となって活動する」とした。

羽曳野市地域包括支援課に講師依頼をし、キャラバンメイトという形で社会福祉協議会や特別養護老人ホーム河原城苑の職員の方々にお越しいただき「認知症サポーター養成講座」として講義いただいた。

認知症サポーターキャラバンは、認知症の人と家族への応援者である「認知症サポーター」を全国で多数養成し、認知症になっても安心して暮らせるまちを目指している。

「認知症サポーター」としては、

1. 認知症に対して正しく理解し、偏見をもたない。
2. 認知症の人や家族に対して温かい目で見守る。
3. 近隣の認知症の人や家族に対して、自分なりにできる簡単なことから実践する。
4. 地域でできることを探し、相互扶助・協力・連携、ネットワークをつくる。
5. まちづくりを担う地域のリーダーとして活躍する。

となっている。

認知症の基礎理解について講義および演習等で学び「認知症サポーター」となった学生には、その証としてのオレンジリングが手渡された。本学でも、認知症への理解を呼びかけるため、例えば大学祭などに参加する際はオレンジリングを着用するなどし、広報活動を行った。

(3) 当事者との交流

①「身体障害者グループとの交流会」

今年も、社会福祉法人あいえる協会内の外部講演を事業としてされている「ピアエンジン」（大阪市住吉区）に講師派遣依頼をした。

当日は「ケアの本質」という授業のなかで、重度障害のある当事者３名とスタッフ５名で来ていただき講演していただいた。当事者はいずれも社会福祉法人あいえる協会のグループホームや生活介護の利用者であり、かつ、当事者が組織的に講演活動を行う「ピアエンジン」のスタッフでもある。今年は主となって活動されてきた方が体調不良となり、メンバーも初めての方が多く、事前の打ち合わせを行って臨んだ。

まずは、グループホームや公営住宅（バリアフリー設計）で、ヘルパーの手を借りながら一人暮らしの夢の実現をされている方の話を伺った。軽い知的障害により、青年期は入所施設での生活を余儀なくされ、やはり自分の力で地域生活したいという心からの願いについて訴えられた。

また、高次脳機能障害により生活が一変してしまった中途障害の方の話も聞いた。健常である私たちも、いつ「障害者」になるかわからないという当たり前の現実と、だからこそ福祉施策の充実が安心感につながるし人々の人権の保障にもなるということを学んだ。

交流の前に言語障害を伴う利用者が発している言葉を当てましょうというゲームがなされた。あえてわかりにくい発音を聞かせることにより「わからなければその方にわかるまで聞く」ということから「分かろうとする努力」やその姿勢が大事であるということへの理解を促す目的があった。

グループにわかれ、学生からインタビューする形での交流が行われ「休みの日はどうしていますか？」とか「いま、困っていることは何ですか？」などの質問が飛んでいた。

後日の「振り返り」では、関わる中で重度の障害者と自分とは同じ人間であるということが実感できたようである。また、かなり重度の障害者が一人暮らしをされている陰には多くのサービスや人が関わっていることなども知ることができた。それとともに「自分たちの生活を見つめなおす機会ともなった」とのコメントが寄せられた。

②「地域の介護施設高齢者との交流会」

１セメスターの「社会福祉援助技術総論」の 4/22 授業で、「年を重ねても『よりよく生きる』ことを学ぶ」をテーマに、介護を必要とする人の理解や尊厳について考え、学びを深める機会があった。大学の近くにある特別養護老人ホームで生活をされている、90 代の女性利用者２名と生活相談員２名をお招きした。相談員の一人は本専攻の卒業生である。この取り組みは毎年恒例となっており、その醍醐味は、毎年違う要介護状態の高齢者に来

学して講師となっていただき、学生によりよく生きることの意味を考える契機になっていることである。今年も学生全員が感想を寄せ、心温まる高齢者の実話に勇気づけられた。また、その感想文は後日生活相談員が当事者に伝えていただき大変喜ばれたとの報告をくださった。

(4)「介護予防通所相当サービス」

介護保険制度のサービスの一つとして、要支援利用者の介護予防を目的として、毎週土曜日の午後 1 時〜3 時に悲田院デイサービスの一角で実施されている。利用されている高齢者は、従来の「健康トレーニング」の頃から継続されている方々で、若い学生の参加を心待ちにしておられる。また、2 回生の学生の名前と顔はほぼ記憶されており、馴染みの関係が成立しスムーズにコミュニケーションがとれている状況である。そこで学生が支援する内容は、開始前・後のバイタルチェック（体温・血圧）測定、トレーニング機械（各利用者のレベルに合わせた）設定、トレーニング終了後のストレッチ体操に一緒に参加することである。

一般的なデイサービスとは異なり、運動機能維持・向上の目的で実施されているが、デイサーイスでの行事やイベントが開催時には参加されるので、学生も一緒に参加させて頂き移動介助等若干の介助をさせて頂く。そして、1 回生には、2 回生を介して高齢者とのコミュニケーションを取るトレーニングの場となっている。また、1・2 回生が少人数で参加することで、学内とは違う雰囲気で学生間の交流の機会にもなっている。

(5) 介護福祉士国家試験受験対策

第 32 回介護福祉士国家試験は令和 2 年 1 月 26 日（日）が試験日であり、出題数は試験科目 11 科目から 125 問、問題の総得点の 60%程度を基準としていることから、学生一人ひとりが合格に向けて目標を立てて受験対策に臨んだ。

主に「ライフケア演習Ⅳ」の授業のなかで取り組んだ。8 月に中央法規出版主催の全国統一模擬試験 1 回目受験を皮切りに、その試験問題の「解説」を夏季休暇の課題として冬学期の「ライフケア演習Ⅳ」に臨んだ。9 月からは授業のあとの放課後も教室を借り上げ、自主学習（教員が在室し質問に答えた）を行った。10 月には、木曜日以外に月曜日と水曜日にも希望者があれば放課後学習を行った。

12 月には第２回目の中央法規模試（中央法規全国模試は全２回）を行った。自己採点し、間違った問題について自分たちで解説を加える形の自主学習と図書館予算で購入した予想問題集をコピーしたものに取り組んだ。

１月になると学生にも真剣さが強く感じられるようになり、自分で問題集を購入したり、教員に対して問題を出してほしいと要請が多くあるようになってきた。

学生たちの努力により、幸いにも国家試験には全員が合格できた。

昨年の課題を踏まえ、中央法規出版の『国試ナビ 2020』をテキストとして絶対購入とさせ、折にふれ同書を用いて解説した。本書をよく読み込みアンダーラインやふせん等がたくさん加えられ「自分のお守り」のようになったことは、次年度にも活かしていくものになると考える。

今後の課題として、大人数となるので、クラス一丸となるのに時間がかかることが予想される。本年度においても 11 月頃は「中だるみ」があり、放課後学習は誰も来ないということが頻回あった。いかに早期から危機感をもって取り組ませることができるのかが課題である。今年度はカウントダウンカレンダーを購入し、一枚一枚めくることで試験日までの残り日数を視覚化したが、却って「まだまだ日がある」というような気持にさせたのかも知れない。「今月はここまで」という具体的な数値目標などを設定することも一つの方法であるかと思う。

(6) ハル大祭

日時：2019 年 4 月 21 日（日）10 時 30 分〜16 時 30

場所：あべのハルカス 17 階ロビー

内容：体力測定、脳トレーニング

専任教員 4 名、学生 7 名で、来場者 30 名（内子ども 1 名）に対し上記の体験をしていただき、アンケートに答えていただく（回収 29 名分）。

アンケート結果は、以下のとおりである。

1．何を体験しましたか？ ・体力測定（9 人）　・脳トレーニング（2 人）　・どちらも（18 人）

2．体験の理由をお聞かせください
・通りすがりに声をかけられたから（10 人）　・興味があったから（18 人）
・その他（1 人）　・NA（0 人）
3．体験してみていかがでしたか
・よかった（28 人）　・普通（1 人）　・よくなかった（0 人）
・その他（意外にできなかった）
4．またこのような機会があれば、体験してみたいですか？
・はい（29 人）　・いいえ（0 人）　・その他（0 人）
・NA（1 人）
5．何かご意見があればお聞かせください
・もう少し体を動かす運動を。ただ、握力を測るところはないので良かった。握力は大切。
・楽しかったので、こういう機会があればまた体験したい。
・日頃の訓練が大切だと思った。
・パズルって難しい。すばらしい介護福祉士になってください。
・ゆっくりとしたスペースでよかった。スタッフの方が親切だったので良かった。
・想定外の幼児と思いますが、快く対応いただきありがとうございました。
・若い皆さんの頑張りに期待します。
・高齢になると自分ではしないので良い機会でした。
・クイズやゲーム形式の記念品の提供によるイベント
6．四天王寺短期大学部のライフケア専攻で介護福祉士の養成をしていることはご存知でしたか？
・知っていた（7 人）　・知らなかった（22 人）
7．年代
・10～20 代（1 人）　・30～40 代（7 人）　・50～60 代（6 人）　・70 代以上（15 人）
8．性別
・男（10 人）　・女（19 人）

今回の実施に際し、岡崎センター長並びにハル大祭事務局の川上様と十分な打ち合わせを行うとともに、昨年のアンケート結果から高齢者の来場が多いため、運動器の状態のチェックや認知症予防に内容を変更して実施した。結果は好評であり、また学生の対応もよい評価を受けた。次回以降も来場者の傾向をとらえて実施していきたい。

(7)その他

高大連携事業と学生の交流学習会（実施していない）

長吉高校において 2017 年 10 月 3 日に健康福祉専攻と共に福祉体験授業を行ったが、その後、日程調整の問題や担当者の変更等のため事業が滞っていた。専攻会議において再開を望む声もあり、エクステンションセンター長の源先生の承諾のもと高校に伺い草野教頭先生と面談し、2020 年 4 月以降に詳細について打ち合わせを行うこととなる。

第５章　本学における仏教教育について

Ⅰ　基礎教育科目「和の精神」について

１．カリキュラム上の位置づけとその課題

本学における「基礎教育科目」は、本学の建学の精神である聖徳太子の仏教精神を実践的に学ぶ「和の精神Ⅰ・Ⅱ」（１年次）、仏教的学識の基礎の修得と宗教的情操の体得をめざす「仏教概説」（１年次）を柱とし、これに人間存在のかけがえのなさを考える「現代社会と人権」を加えた、都合４科目６単位が必修科目となっている（ちなみに、30 年度の入学生以前の旧カリキュラムでは、基礎教育科目は「仏教Ⅰ（瞑想）・Ⅱ（写経）」「仏教概説」「現代社会と人権」の４科目６単位が必修）。とりわけ「和の精神Ⅰ・Ⅱ」（計２単位）は、大学・短大の１年次の全学生 1100 名以上が礼服（オフィシャルスーツ）を着用し、学長を始めとして全教員とともに大講堂に会し、読経・瞑想・聞法（講話）・写経（後期のみ）・聖歌斉唱といった実践的な授業を行っている。これは規模的にも内容的にも、本学における特色ある科目の一つである。各学科専攻で行う専門的な学修を果実とすれば、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」のめざす人格の涵養はその根柢といえる。

24 年度から仏教文化研究所が設立され、学長のもと、主任研究員を中心に、数名の研究員が本学の仏教教育の方針や内容を策定し、宗教委員会の議を経て、企画立案・実施・点検を行う体制が整い、31 年度末で８年目を迎えた。下記に示す「和の精神授業規律」「講話内容」「アンケート」等はすべてその体制のもとで整えられたものである。

もっとも、本科目は 1100 名を超える超大人数授業であるため、実施する上での課題（資料の提示方法、音響、空調、出席・成績管理、個別指導のあり方など）も少なくない。そのため運営・管理には教育職員・事務職員の全学的な協力が必要であり、とりわけ授業実践の「道場」である大講堂内では各学科専攻の教育職員の積極的な取り組みが不可欠となっている。

２．大講堂内における指導体制

25 年度の後期から、これまで明確とはいえなかった大講堂内における教員の指導の役割を検討し、下記のとおり明確化して、毎学期の宗教委員会・合同研修会などで周知徹底を図り、現在に至っている。

(1) 責任担当　学長

学長は、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の教育内容・運営の全体の監督、教育内容・方法および運営の総責任者である。教育内容・方法および運営については、学長が仏教文化研究所に指導方針案の策定を指示し、宗教委員会の検討を経て決定するものとする。

(2) 全体担当　仏教文化研究所研究員

仏教文化研究所研究員は、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の教育内容の進行・運営について、所定の指導方針に沿って主導的な立場で従事し、出席や授業態度にもとづいて最終的な成績評価を行う。

(3) 学科担当　(1)(2) 以外の全教員

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業は、全教員の指導によって行うものである。各学科担当の教員は、学科専攻学生に身近な教員として、主に堂内における私語・中座など授業態度の改善や静謐な環境の保持の面において、所定の方針および学科の取り決めに従い、注意喚起や個別指導に当たる。

(4) 宗教委員

宗教委員は宗教委員会に学科専攻の状況を伝えるとともに、委員会での決定事項を学科

専攻に伝え、学科長とともに学科専攻での指導の在り方を取り決める。

31 年度についてみれば、昨年度に引き続き、総じて静謐な環境で授業が行うことができており、かつてのような学生同士の私語に関する不満は格段に減少し、学生の満足度も相応に高い状況を維持できている。客観的な数値による詳細は後述のアンケート結果を参照されたい。

３.「和の精神Ⅰ・Ⅱ」授業中における授業規律について

仏教文化研究所において 24 年度に「『仏教』の授業規律」を策定し(24 年度末・30 年度末に一部改定)、25 年度からは、毎年『履修要覧』『学生便覧』に掲載している（下記参照)。

以後、各学科専攻のオリエンテーションで学科ごとに指導の姿勢を示してもらうよう要請し、かつ学期初めに「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業の冒頭に改めて教務部副部長（礼拝担当）より「和の精神授業規律」を示し、学生に規律の自主的な遵守を求めてきた。

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」は自他を尊重し、思慮深く、安定した人格を養うことが主眼であり、強制によって規律を守らせるのが本意ではなく、授業の主旨として、学生が主体的に自覚して上記の規律の遵守を心がけることの重要性を強調している。

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」授業規律(2019. 4. 1一部改訂実施)

１．単位の認定は、全授業回数のうち 3 分の 2 以上の出席を必要条件とする。

（写経の場合、写経用紙の提出も必要条件とする。）なお、以下の２・３・４の項目に違反する場合は出席をみとめない。

２．出席時の服装は、指定された服装を端正に着用する。

(学生便覧「指定スーツ着用基準」参照)

・男子：指定スーツ、白のカッターシャツ、黒色短靴（スニーカー不可)、ネクタイ(本学指定のもの)。

・女子：指定スーツ、白のブラウス（夏服時に襟なしシャツ着用の場合、指定スーツの上着を着用)、黒色短靴（スニーカー不可)。

・衣替えの時期は授業時に連絡する。

３．入堂時には『聖典聖歌集』を所持していることを示す。

４．授業は午前 10 時 55 開始である。5 分開始前には入堂し着座しておく。
（授業開始時刻は、平成２８年度より、１１時から１０時５５分に変更）

・授業開始時に手洗いなどに在る者は、学生証を預かり階段当番のリストに記録する。

・遅刻は駅で発行する電車の延着証明書があり、やむを得ない遅刻と判断される場合にのみ認める。

・延着証明書は１人１枚を必要とする。複数人で１枚しかない場合は入堂を認めない。

・遅刻の認められた学生は、指示に従って静かに着席する。

５．授業中は姿勢を正し、静寂を守り、実践に集中する。

６．授業中の私語・通信機器の使用は禁止する。

・注意されたら、すぐに改める。

・再三の注意にかかわらず改めない者については、授業妨害と見なし、授業担当者が呼び出し警告し、改善の意思を問い、反省文の提出を求める。それでもなお改善のない場合は、欠席扱いとし、保護者にも教務部より状況を伝える。

７．授業中の中座は原則として禁止する。

・やむを得ず手洗い等を利用する者は、学生証を階段前の教員に提出する。

・頻繁な利用については、授業妨害とみなし、個別に注意し、なお改まらない場合は、私語と同様の対応をとる。

８．心身の疾患など、やむを得ない中座の理由の有る者は、診断書などの証明書をもって教務部（礼拝担当）に申し出る。座席変更などの配慮を行う。

９．私語・通信機器等の使用・中座等について、全く改善の意思がない場合は、「授業妨害」「建学の精神に反する行為」と見なし、その学期の「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の履修登録を抹消する。

４．和の精神Ⅰ・Ⅱにおける改善

24 年度から、これまで２年間にわたって履修した「仏教Ⅰ～Ⅳ」が１年次の「仏教Ⅰ・Ⅱ」のみとなり、時間的には短縮化された。しかし、そのことによって教育内容が希薄とならないよう、これまでと同様に、その点に留意した授業計画を組んで「和の精神Ⅰ・Ⅱ」に継承している。「和の精神Ⅰ・Ⅱ」各科目の留意点、講話一覧は以下の通りである。

① 和の精神Ⅰ

和の精神Ⅰでは，基本的には、これまでの通り、「礼拝（瞑想）・講話・仏教聖歌の斉唱」を基本として、授業を行っている。

講話については、第２回目の授業での学長による「本学の建学の精神及び全体的な仏教精神に関する講話」を受けて、研究員による一貫性のある講話を基調に据えながら、仏像や雅楽・舞楽などの文化的な内容も加え、各回の講話の充実を図っている。また、４月当初は、本山四天王寺において開催される「授戒会」のオリエンテーションも行い、参加に向けての心構え等も指導している。

さらに、入学当初の学生がスムーズに学生生活が送れるよう、大学生活の心得や大学生活の支援の一環としてのピアサポートについての告知なども行った。その中で、例年どおり、今年度も学外講師として、弁護士の成田由岐子先生を招聘し、今年度は「学生生活とリスク社会について～犯罪に巻き込まれない、起こさないために～」と題する講話をしていただいた。薬物乱用防止等の身近な犯罪の防止等に関する内容なども盛り込み、隣り合わせにある犯罪の危険に学生も認識を新たにしたはずである。

さらに、和の精神の学修上の意義について学生への周知・理解をはかるために、杉中康平教授からの講話も IR 戦略統合課と連携して行っていただいた。

また、関係教員にも協力をお願いし、学生が主体となる講話も実施した。先輩学生による海外留学・語学研修や海外ボランティアの体験談等の発表を聞くことにより、受講者は、上級生の講話にも親しみをもって耳を傾けてくれ、また講話を担当する上級生も多くの聴衆の前での講話を貴重な機会と受け取ってくれた。また、その他の諸連絡として、学生運営委員会やボランティア系クラブ団体からの告知が行われるなど、１年生全員が一堂に会する機会に、四天王寺大学の一員としての自覚と意欲を高める時間として、この和の精神の時間を活用している。

また、5 月には「防災及び避難訓練」を行い、学生達に対して、震災等の大規模災害に備えた「防災意識」の啓発を行った。

和の精神Ｉで行われた講話は次の通りである。（敬称略。☆は仏教文化研究所構成メンバー。）

尚、毎回の歌唱指導は原祐子教授、伴奏は奥智恵子准教授が担当している。

No	日程	担当者	講話／聖歌
1	4/ 4	上續宏道☆ 坂本光徳☆	受講こころえ―授業規律に関して 礼拝説明 聖歌＜聖徳太子讃仰歌＞（練習）
2	4/11	岩尾洋学長☆ 坂本光徳☆ 原祐子	建学の精神―「こころえ手帳」に寄せて 授戒会オリエンテーション 授戒会のための聖歌練習＜聖徳太子讃仰歌、四恩の歌、精進＞
3	4/18	坂本光徳☆ 伊達由実 藤谷厚生☆	瞑想―心を整える楽しみ― 大学生活の心得 「ウパーヤ」第 14 号について／「聖徳太子讃仰会」について 聖歌＜精進＞
4	4/25	杉中康平☆ 石田智大 IR・戦略統合課員	「和の精神」を学ぶ意義 「学修ポートフォリオの記録について」 聖歌＜父母の歌＞
5	5/9	坂本光徳☆ 避難訓練	「瞑想―心を整える楽しみ―　」 聖歌＜み仏の言の葉の海＞

6	5/16	藤谷厚生☆	「四天王寺学園、建学の歴史」 聖歌＜新聖徳太子讃仰歌＞
7	5/23	成田由岐子弁護士	「学生生活とリスク社会について～犯罪に巻き込まれない、起こさないために～」 聖歌＜常不軽菩薩＞
8	5/30	石田陽子☆ 辻荘一・学生有志	「仏教聖歌―なぜ、聖歌を歌うのか―」 グローバル教育研修（1）－アメリカ編 聖歌＜新聖徳太子讃仰歌＞
9	6/ 6	坂本暁美 李美子☆・学生有志 仲谷和記	「学園歌－作詞家と作曲家からのメッセージ－」 グローバル教育研修（2）－中国編 団体献血について 聖歌＜池＞
10	6/13	源健一郎☆	「学園訓－利他行について－」 聖歌＜学園歌＞
11	6/20	矢羽野隆男☆	「学園訓－誠実について－」 聖歌＜みめぐみの＞
12	6/27	南谷美保☆	仏像を知ろう－仏様に会いに行くとは？－ 聖歌＜内なる仏＞
13	7/ 4	中田貴眞☆	「学園訓－礼儀について－」 聖歌＜芬陀利華＞
14	7/11	高橋麻紀子学生支援課員	「性感染症、望まない妊娠を防ぐために」 聖歌＜父母の歌＞
15	7/18	高橋麻紀子学生支援課員 上續宏道☆	「薬物乱用と薬物依存を防ぐために」 夏学期を終えるに当たって 聖歌＜聖徳太子讃仰歌＞

②和の精神Ⅱ

「和の精神Ⅱ」は「和の精神Ⅰ」の「礼拝（瞑想）・講話・仏教聖歌の斉唱」に写経を加え、より実践的に仏教について学べるようにしている。これは、24 年度から 2 年間の「仏教Ⅰ～Ⅳ」が 1 年間の「仏教Ⅰ・Ⅱ」に短縮されたのを受け、従来、「仏教Ⅲ・Ⅳ」ではもっぱら写経だけを行っていたものを、写経だけでなく、講話等も行うことにし、「和の精神Ⅱ」に継承されたものである。ただ講話の時間が写経の時間を圧迫しないように配慮する必要から、写経の時間を最低 20 分は確保すべく、講話は 10 分～15 分ほどに短縮することとしている。しかし、実際には、講師によっては講話に熱がこもり、やや延長する場合があり、その時には写経の時間の確保が難しい場合もあり、アンケートで「写経の時間は必ず確保してほしい」といった不満の声が一部に出ているのも事実である。今年度は、できるだけ、時間内に講話を済ませること改善すべき事項に掲げ、改善されている。

写経に取り組むに当たって、第 2 回に、写経を行う姿勢や筆の持ち方、筆先の使い方な

ど写経の技術・作法を教えてもらうために、本学非常勤講師で「書道」関連科目をご担当の書家・福光由布先生に講話を依頼した。手元を書画カメラでスクリーンに投影したため、学生には筆遣いを目の当たりにでき、好評であった。

学生による講話についても、夏セメスターの「和の精神Ⅰ」に続き、学生が参画する機会を多くすべく、海外インターンシップ参加学生、留学経験者による発表、ゼミコンテスト上位入賞者による発表、「留学生の日本体験－異なる視点で見る日常－」など、関係教員に協力をお願いして、多数、実施した。また、その他の諸連絡として、学生運営委員会からの告知等、１年生全員が一堂に会する機会に、四天王寺大学の一員としての自覚と意欲を高める時間として、この和の精神の時間を活用している。

今年度は、国際化する現代社会の中で学生に四天王寺大学の一員としての自覚をより一層高めるという意味で、大学で長年教鞭をとっておられるベテランの教員による講話や、すでに本学を退職しているが実社会で宗教的活躍を行っている元教員に講話をしていただくこととした。本年度は、本学教員として、山本あい子教授、外部講師として、本学仏教文化研究所客員研究員でもある桃尾幸順氏にお願いした。

「和の精神Ⅱ」で行った講話は次の通りである（敬称略。☆は仏教文化研究所構成メンバー）。

Ｎｏ	日程	担当者	講 話／聖歌
1	9／19	学長：岩尾洋☆ 藤谷厚生　☆ 上續宏道　☆	「写経」の効果について ウパーヤ第 15 号について オリエンテーション 『聖徳太子讃仰歌』
2	10／3	福光由布	写経の仕方・作法 『父母の歌』
3	10／10	坂本光徳☆	写経について 『精進』
4	10／17	南谷美保☆	写経と「経供養」 『希有なるわれら』
5	10／24	李美子☆	不肯去観音について 『常不軽菩薩』
6	10／31	海外留学学生有志	経営学部海外インターンシップ報告と参加のすすめ 留学のすすめ－New Zealand 留学を通して得たもの－ 『聖徳太子讃仰歌』
7	11／ 7	山本あい子	「日本人と呼ばれる外国人だった時の話」 『父母の歌』

8	11／21	源健一郎☆	無常-今を生きる私たちが学ぶこと-古典文学の世界を通じて 『四天王寺学園学園歌』
9	11／28	桃尾光順客員研究員☆	「利他の精神」について 『新聖徳太子讃仰歌』
10	12／5	常森裕介	「子どもの人権を考える一親による権利侵害と親子の対話」 『陽はわれに』
11	12／12	杉中康平☆ 石田智大 IR・戦略統合課員	「学園訓の実践」エピソード入力について 『父母の歌』
12	12／19	教務部／ゼミコンテスト上位入賞ゼミ学生	ゼミコンテスト発表 『聖夜』
13	12／26	原祐子	「今日も生きる」 『みめぐみの』
14	1／9	矢羽野隆男　☆ ＆浙江工商大学大学院からの交換留学生	留学生の日本体験-異なる視点で見る日常- 『聖徳太子讃仰歌』
15	1／16	上續宏道☆	本年度の授業まとめ 『父母の歌』

５．アンケートの実施

①アンケート実施授業

31 年度も、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の両科目のアンケートを実施した。内容は各学期全体についての質問である。

質問項目	令和	大学				短大			
		Ⅰ	Ⅱ	ⅠⅡ比較		Ⅰ	Ⅱ	ⅠⅡ比較	
a 総合的に判断して、この授業を受講して良かったと思いましたか。	1	3.58	3.78	0.2	↑	3.54	3.87	0.33	↑
b この授業を意欲的に受けてきたと思いますか。	1	3.78	3.90	0.12	↑	3.74	4.10	0.36	↑
c 先生は学生	1	3.91	4.03	0.12	↑	4.00	4.14	0.14	↑

に、丁寧に対応してくれていますか。									
d 授業の方法が工夫されていますか。	1	3.69	3.83	0.14	↑	3.85	4.02	0.17	↑
e 授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれましたか。	1	3.86	4.01	0.15	↑	3.87	4.13	0.26	↑
f 授業中、私語等をするなどして他の学生に迷惑をかけていませんか。	1	3.95	4.05	0.10	↑	4.13	4.40	0.27	↑

② アンケート結果の分析

アンケートの回答は、各質問項目について、5「そう思う」、4「少しそう思う」、3「どちらともいえない」、2「あまりそう思わない」、1「そう思わない」のうちから一つ選ぶ形で行った。数値はその平均値をとり、3が中間的な評価、5に近いほど高い評価を示すことになる。

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の結果を主な項目について比較すると、次の通りであった。

大学・短大共に、全体的に各項目の評価とも、夏学期から冬学期にかけての上昇が見られた。

例年、学生の「受講意欲」は、冬学期になると夏学期よりも評価が上昇し、「態度面」では、やや低下する傾向にあるが、それも今年度は、数値そのものは、上昇値を示している。

ただ、現状に満足は出来ないので、今後も更によい授業になるよう緊張感をもって運営を進めたい。

③ アンケート自由記述欄

アンケートの「自由記述欄」は、学生が自由に、授業環境や内容への感想を記すことができるものであり、ここには上記のマーク方式の回答からはわからない学生の考え感想をうかがうことができる。今年度もⅠ・Ⅱについてアンケートの自由記述欄から〈所属学科〉〈記述内容〉を仏教文化研究所で通覧したのち、宗教委員会で各学科専攻の宗教委員に伝えた。

今年度は、和の精神Ⅰ・Ⅱとも、以下のような感想があった。

（1）〈内容〉に関するもの

瞑想という落ち着いた時間があってよかった。
写経をしている間に自らの精神を集中できました。
仏教について親しみやすい話をして欲しい。
レポートを書く時間が短すぎるのでもう少し時間がほしい。
講話のパワーポイントの字が小さくて後ろの席で見えにくい。
スライドの切り替えが早くてレポートを書ききれない時がある。
写経の時間を授業内にもう少し多く取って欲しかった。

（2）〈指導・管理〉に関するもの

礼服の着用のチェックや持ち物のチェックが甘い。
本を読まれていたり、寝ている先生が視界に入るので集中力が途切れます。
私語をしている人への指導を徹底してほしい。（うるさい子は出せばいい）
携帯を触っている人を注意してほしい。
入り口でコートとマフラーを取るのが大変です。中ではコートとマフラーは脱ぎます。

（3）〈設備〉に関するもの

夏暑く、冬寒い。（空調に関する苦情）。

これらのうち、改善できるものは改善を図っている。

Ⅱ　共通教育科目「仏教実践演習」について

1.「仏教実践演習」の目的と授業展開

この科目は旧カリキュラムの基礎教育科目「仏教Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（卒業必修科目）が、24 年度からの新カリキュラムでは「仏教Ⅰ・Ⅱ」（同上）に圧縮されるのに伴い、旧Ⅲ・Ⅳで行っていた内容を行いたいという学生や、さらに深い学びを希望する学生のために、共通教育科目における選択科目（3 セメスター以上配当）として設けた科目である。仏教実践の背景にある仏教の思想についても考えながら、瞑想・写経の意義や実践の方法を説明し、Ⅰ・Ⅱで学んだ実践行をさらに深めてゆくものである。

夏学期の水曜２限に１コマ、講堂において、聖徳太子像の掛け軸を掛け、読経・瞑想・講話・写経などを行い、聖歌斉唱を行わないほかは「仏教Ⅰ・Ⅱ」と同様の形式で実践的な授業を展開している。

2. 授業内容

講話内容は、仏の智慧をめざす修養方法である六波羅蜜に関するものを中心に、日常生活での実践に有用と考えられる仏教の教えに関する講話を行っている。また四天王寺大学

の立地する羽曳野・藤井寺地域の歴史的・文化的な特色を紹介して学外実習（野中寺座禅会）につなげる講話や「お遍路さん」といった具体的な仏教実践行についての講話も行った。

以下のその詳細を掲げる。

講話一覧

回数	講話担当者	講話題目
1	藤谷厚生	仏教実践とは
2	藤谷厚生	六波羅蜜について
3	西岡秀爾	布施波羅蜜－慈悲を施すこと－
4	藤谷厚生	持戒波羅蜜－戒律を守ること－
5	西岡秀爾	忍辱波羅蜜－苦難を忍ぶこと－
6	西岡秀爾	精進波羅蜜－努力を重ねること－
7	西岡秀爾	禅定波羅蜜－精神を調えること－
8	矢羽野隆男	羽曳野・藤井寺の歴史・文化について
9	藤谷厚生	般若波羅蜜－仏教実践と智慧－
10	杉中康平	私の仏教実践行①－仏教と私の出会い－
11	杉中康平	私の仏教実践行②－お遍路さんとしての私－
12	西岡秀爾	聖徳太子の教え
13	西岡秀爾	般若心経の教え
14	藤谷厚生	菩薩と和の精神
15	藤谷厚生	仏教実践演習を振り返って

３．学外実習

実践の深化と仏教文化への理解のため、課外活動として実際の寺院に赴いての体験学習も取り入れている。平成 31 年（令和元年）度は、６月１日（土）の午前に約２時間半、大学に近い聖徳太子ゆかりの寺院「中ノ太子・野中寺（やちゅうじ）」において参禅会を実施した。

野中寺は聖徳太子の創建とされて本学とも縁のある名刹で、かつご住職が学行兼修の篤実な僧侶でもあることから、授業の一環としての活動には申し分のない環境での有意義な実習となった。

座禅会の終了後には、竹内街道を通って羽曳野地域の古墳や寺社を巡る巡検も行い、大学周辺の歴史的・文化的な特色を実感する機会とした。

ただ、残念なことに、学外実習は土曜日に行う変則的な活動であるため、例年、学生の参加者が非常に少なかった。そこで、今年度は、実施日を早目に周知し、水無月祭の準備にかからない日を設定するなど、希望者が参加しやすい条件を作るなどの工夫をした結果、参加者が大幅に増加し、例年以上の総勢47名の多数の参加となった。（本学の学生、教員のほかに、海外からの研修で滞在中のユタ大学生の10名も参加した。）

参加者の声を一部紹介すると以下のとおりである。

＊参加者の感想より

・慣れていない場所で、不安も大きかったが、時間があっという間に過ぎて、頭がすっきりし、心の整理もできたのではないかと思います。
・以前から、「座禅」には興味はありましたが、実際にやってみると、とても不思議な時間でした。鈴の音と共に風も吹いてきて、暑い日なのに、一瞬涼しく感じました。
・昔は、お寺には、病院や、身寄りの無い人の施設、学校と多くの役割があって、とても賢い仕組みが作られていたと言うことも知ることができた。
・野中寺はとても歴史あるお寺で、お坊さんの学校にもなっていた施設を特別にみせてもらった。
・今三回生で、就職のことや今後どんな検定をとるか自分は何をしたいか迷っていたので、自分を見つめる時間ができてよかったです。
・留学生の方々が、私たち以上に熱心に座禅を組んでいたので、どんな気持ちなのか聞いてみたいと思った。

４．アンケートの実施

本年度も、本授業のアンケートを実施した。

質問項目	平均
１授業時間以外に１週間にこの授業の予習や復習を学内・学外含めてどの程度しましたか。	後述
２授業の開始時刻は守られていますか。	4.67
３総合的に判断して、この授業を受講して良かったと思いますか。	4.36
４この授業を意欲的に受けてきたと思いますか。	4.38
５この授業の授業概要（シラバス）をよく読んだ上で受講しましたか。	4.31
６シラバス達成のために努力してきたと思いますか。	4.38
７この授業の履修要覧（科目表に示されている「身につけるべき能力」をよく読んだ上で受講しましたか。	4.08
８先生は学生に、丁寧に対応してくれますか。	4.38
９授業方法は工夫されていますか。	4.10
10 授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれましたか。	4.48
11 授業中、私語等をするなどして他の学生に迷惑をかけていませんか。	4.62

アンケート結果の分析

回答総数が、全授業者 124 名の半数ほどであった。授業等では、極力アンケートに答えるように呼びかけはしているが、今年度から、回答紙による回答からウエブでの回答となり、手軽にスマホ等で回答できる反面、授業中に全学生一斉に回答用紙に記入させ、回収することができないため、なかなか、回答してもらえないという実態がある。

なお、質問１は、授業時間外の予習復習の時間を示している。有効回答数 61 名中、以下の回答があった。（　）内は人数を表わしている。

①３時間以上（3）　②２時間（1）　③１時間（10）　④30 分（12）　⑤５分以下（35）

本授業が実践行を中心にした授業であるという性格上、予習復習といった座学の時間が少なくなる傾向があるのはいたしかたないが、日常生活において、本授業で学んだことを実践することも、予習や復習の自学の時間に含めるならば、実際には、もう少し、各学生の回答は違ったものになるのではないかと考える。これは、アンケート実施の際に、どのように説明するかという、アンケートを実施するこちら側の課題でもあると考える。また、今年度は、宿題等、授業以外に受講生が取り組める課題を出さなかったために、授業以外の学習時間が少なかったということが考えられる。今後は、授業以外の学習時間を増やす手立てを考えていきたい。

アンケートの回答は、各質問項目について、５「そう思う」、４「少しそう思う」、３「どちらともいえない」、２「あまりそう思わない」、１「そう思わない」のうちから一つ選ぶ形で行った。数値はその平均値をとり、３が中間的な評価、５に近いほど高い評価を示すことになる。

どの項目においても、評価の平均が４以上という高評価であった。

ただ、現状に満足は出来ないので、今後も更によい授業になるよう緊張感をもって運営を進めたい。

Ⅲ　仏教教育に関するその他の取り組み

１．仏教文化研究所の活動

平成２４年度から、当時の西岡研究所所長（学長）の下、主任研究員（矢羽野）および研究員（上續・兼子・藤谷・源・桃尾・南谷恵敬）が任命された。研究所内には仏教教育センターが設けられ、研究所の主任研究員・研究員がセンターの構成員を兼務し、本学における仏教教育の内容・方法を検討し実施してゆく体制が作られている。２８年度からは、新学長の岩尾洋研究所長のもと、坂本光徳、杉中康平、奥羽充規の三氏が研究員に加わり、あらたな一歩となった。さらに２９年度は、中田貴眞、南谷美保の２名が加わった。また、30 年度からは石田陽子、令和元年度からは李美子も加わり、現在は主任研究員（藤谷）の他 10 名の研究員（専任教員）により、さらなる研究の充実を目指し、積極的に活動している。

研究所の具体的な活動としては、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」授業計画の策定、堂内の全体指導および指導体制の検討、提出された写経の点検評価、仏教教育広報誌「ウパーヤ」の編集発行等である。広報誌「ウパーヤ」は、本学の建学の精神や仏教の教学を身近に感じ、理解を深めてもらうことを目的に年に二回発行し、大短在学生・学園教職員および保護者へ配布するもので、令和元年度には 14 号・15 号を発行することができた。１年次の学生には、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」における初回授業に配布し、和の精神（仏教教育）の涵養に役立てている。また、令和 4 年(2022)は四天王寺学園創立 100 周年を迎える節目に当たり、建学の理念である「和の精神」や学園訓の理解と実践を薦めるため、なお一層の紙面の充実を目指して取り組んでいる。

特に「ウパーヤ」のトピックである「聖徳太子のゆかりの地めぐり」のコーナーでは、26 年度から学生編員を募集して取材・執筆を依頼している。14 号・15 号でも引き続き

学生編集員がウパーヤ誌上、研究所ＨＰに学生ならではの観点で記事を執筆してくれた。今後も仏教に対する学生の興味関心を深める活動として継続していきたい。

２．今後の取り組み

建学の精神を学部・学科・専攻の学修のなかに具体化し、理想とする学生を世に輩出していくことは、私学の最も重要な目的であり、また社会的な使命でもある。本学でも「アドミッションポリシー」「カリキュラムポリシー」「ディプロマポリシー」の三つのポリシーにおいて、聖徳太子の仏教精神を各専門教育の根幹に据えた教育を展開していることを明記し内外に公表している。

これまでにも、各学期初めのオリエンテーションや大学１年次の「大学基礎演習」においては、建学の精神に関わる内容を組み込むことを各学科に要請してきた。また基礎教育科目「和の精神Ⅰ・Ⅱ」においても、今年度は、国際化する現代社会の中で学生に四天王寺大学の一員としての自覚をより一層高めるという意味で、大学で長年教鞭をとっておられるベテランの教員による講話や、すでに本学を退職しているが実社会で宗教的活躍を行っている元教員に講話をしていただくこととした。本年度は、本学教員として、山本あい子教授、外部講師として、本学仏教文化研究所客員研究員でもある桃尾幸順氏にお願いした。

特に今年度からは、「学園訓」を体現し、実践できる人材を育成することを目指して、これまでの「仏教Ⅰ・Ⅱ」の授業科目名を「和の精神Ⅰ・Ⅱ」と改め、その内容の充実と建学の精神の涵養を図るよう取り組んでいるところである。

今後も「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業では、仏教文化研究所メンバーによる仏教関係の講話を主軸にし、その本質の部分を大切にしながら、聖徳太子が帰依された仏教に基づく「和の精神」を核として学べるよう、さらなる授業の充実と工夫に努めていきたい。

第６章　学修支援体制について

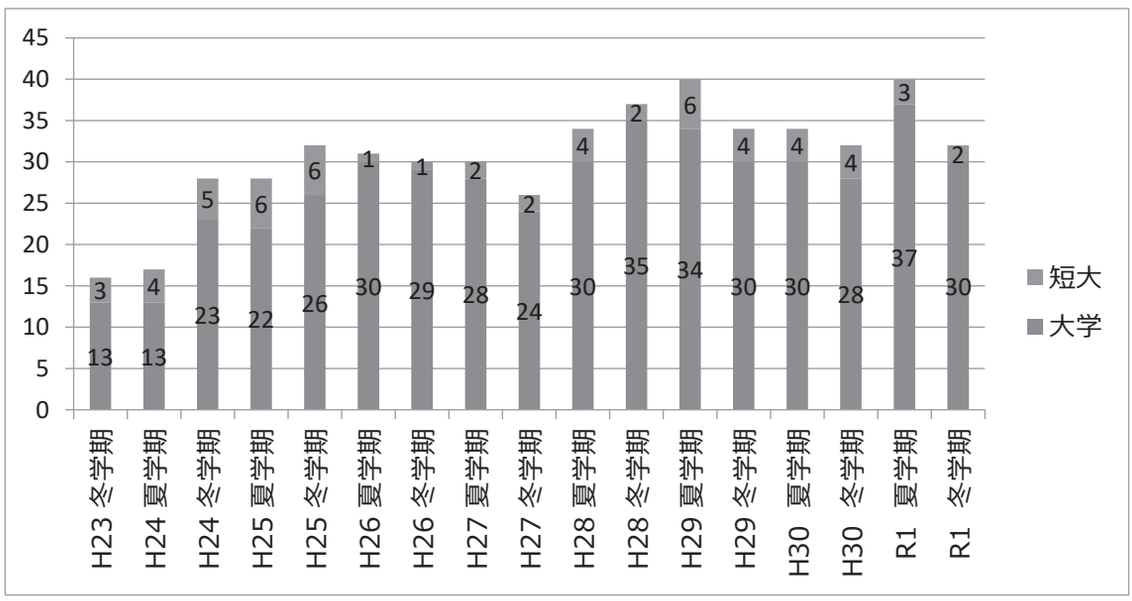
学生支援センターが取り組む学修支援について

（１）障害学生への「授業配慮申請システム」について

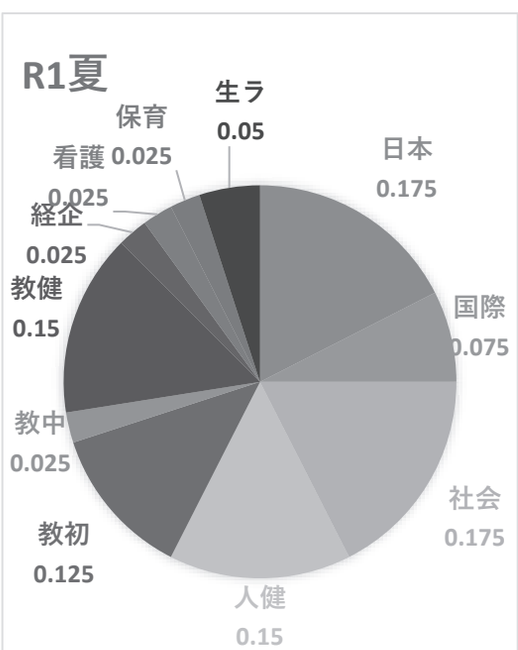
①本年度の概要

本年度も引き続き、教育への機会均等、環境保障を基本とした「授業配慮申請システム」による修学支援を行った。本年度の配慮者数、障がいの内容、配慮申請学科については以下の図、表の通りである。

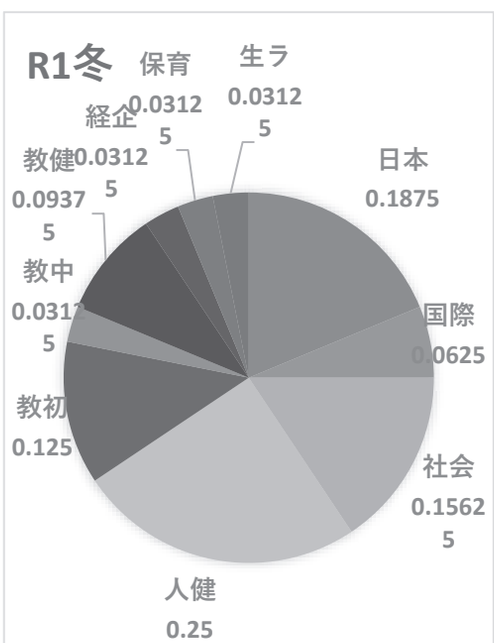
＜図-1 授業配慮申請システム申請者数経年変化＞



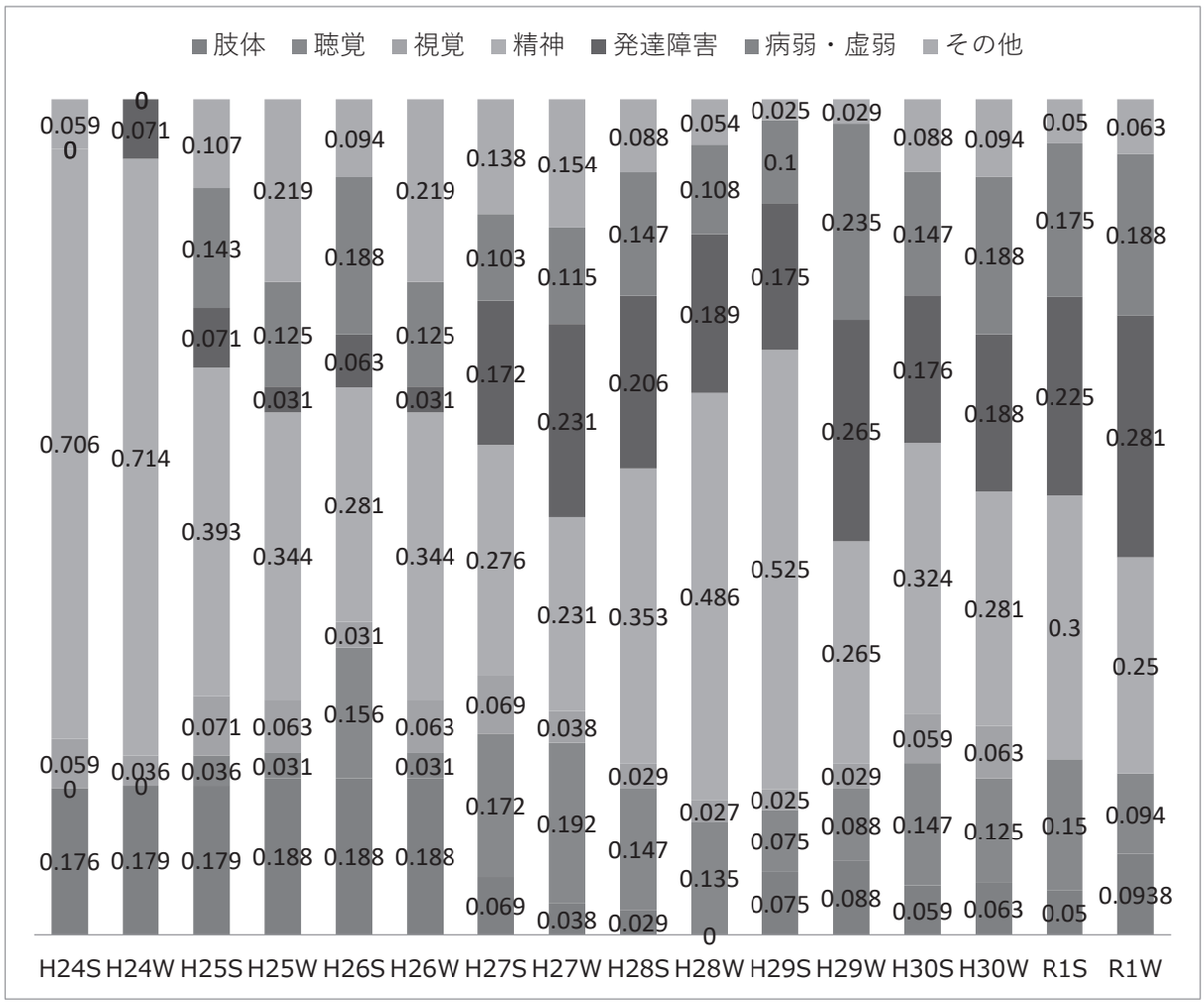
＜図 2 令和 1 年度夏学期配慮申請の学科別数＞



＜図 3 令和 1 年度冬学期配慮申請の学科別数＞



＜図 4 授業配慮申請システム障害種別割合の経年変化＞



②課題

本年度は新たな試みとして UD トークを導入し、視覚障がい学生の授業補助として活用した。学生の授業理解に一定の効果はあったものの、専門用語の多い大学講義では誤変換も頻発し、今後、誤変換を修正したり、データベースへの用語登録などのための人員配置など、より充実した支援のために検討が必要な状況である。

上記以外は例年同様、精神障がい、発達障害を持った学生の申請は年々増加傾向にある。今後は単に環境的配慮を超えて、ティーチング･アシスタント（TA）など、人的な配置が必要な状況が増加するものと考えられる。

（2）ピアサポーター・リメディアル教員による学習支援

「COCOROE ピアサポート」は所属メンバーが 70 名を超えるなど本学の学生支援の一分野として定着した。本年度も学生の主体的・能動的な学びを促すものとして、学習支援、生活支援の上で役割をも果たした。以下に本年度の取り組みの状況を示す。

①新学期「履修相談会」

主に新入生を対象に時間割作成などの内容で履修相談を行った。夏学期は比較的多くの利用者があったが、冬学期には極端に利用者が減少するという傾向は今年も同様で、冬学期に実施については今後検討を要する。

＜表１　令和１（平成 31）年度夏学期「履修相談会」実施概要と利用者数＞

日時:	4月3日(水)　オリエンテーション　12:30～　、相談会　15:30～17:00				
	4月4日(木)　相談会　10:00～18:00				
	4月11日(木)　相談会　12:30～18:00				

	人文				教育						経営		看護	大学合計	短大			短大合計	合計
	日本	国際	社会	人健	教初	教小	教幼	教中	教英	教健	経公	経企			保育	生ラ	生ケ		
4/2(火)	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	**3**
4/3(水) オリエンテーション ＆相談会	5	33	54	22	0	8	16	0	6	5	8	26	0	183	8	0	0	8	**191**
4/4(木) 相談会	5	2	5	1	2	4	0	0	0	0	0	0	0	19	0	2	0	2	**21**
4/5(金)	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	**2**
4/9(火)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	0	**2**
4/11(木) 相談会	5	4	8	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	18	0	0	0	0	**18**
4/12(金)	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	4	0	0	0	0	**4**
6日間計	16	40	68	23	3	12	16	0	6	7	9	27	0	227	8	2	0	10	**237**

＜表３　令和１（平成 31）年度冬学期「履修相談会」実施概要と利用者数＞

ピアサポーター待機:　2019年9月30日(月)、10月1日(火)　(2日間)　ラーニング・コモンズPIATA待機		
案　内:	和の精神(9/19)でサポーターが案内　及びIBU net. で1年生に案内配信	
	その他掲示板(食堂入口・3号館1階エレベーター横・ラーニングコモンズ内)にて掲示案内	

	日本	国際	社会	人健	教初	教中	教健	経公	経企	大学合計	保育	生ラ	生ケ	短大合計	合計
9/30(月)集計	2	0	0	0	0	0	0	0	0	**2**	0	0	0	**0**	**2**
10/1(火)集計	0	0	2	0	0	0	0	0	0	**2**	0	0	0	**0**	**2**
2日間計	2	0	2	0	0	0	0	0	0	**4**	0	0	0	**0**	**4**

②ハルカス出張相談会

本年度も令和 2 年度新入生を対象に指定スーツ販売期間を利用した出張相談会を計画したが、新型コロナウイルス感染症の影響で 3 月の相談会は中止となった。実施状況は以下のとおり（新型コロナウイルス感染症の影響で資料集計が十分できていないことをお断りする）。

実 施 日：令和２年　5 月 13 日 2 月 16 日、17 日、18 日、19 日、20 日、21 日、22 日
3 月 7 日、14 日、15 日の 10 日間（各日共 10 時～17 時、ただし 3 月については前日中止）

実施場所：ハルカスＩＢＵキャンパス、近鉄百貨店制服売り場
参加学生：64 名（延べ）
引率教員：4 名（協力教員：丹羽先生、上野先生、四方先生）、学生支援センター長

＜相談者人数＞

区分	2月16日日	2月17日月	2月18日火	2月19日水	2月20日木	2月21日金	2月22日土	合計
新入生	64	12	11	12	25	13	32	169
保護者	64	9	10	11	24	12	28	158
合計	128	21	21	23	49	25	60	327

③リメディアル教員による学習支援

ｉ）日本学科連携ピアサポート学習支援

日本学科と連携し、授業での課題をピアサポーター、リメディアル教員に相談できるシステムを実施している。実施状況は以下のとおり。

＜夏学期＞

日時：SA 待機[5 月 14 日～]、その他予約対応

金曜 13～18 時リメディアル国語中村先生 "

内容：「古典Ｉ」(模擬授業)

「古典Ｉ」(古典単語テスト)

「日本語表現演習Ｉ」(前半：敬語テスト)

(後半：『心に残る表現』小論文・スピーチ)

「大学基礎演習Ｉ」(前半：漢字・語彙テスト)

(後半：『私の勧める一冊』スピーチ)

「講読Ⅲ(古典文学)」 (落窪物語 研究発表)

テスト対策

＜冬学期＞

日時： 冬学期 SA 待機[9 月 27 日～平成 31 年 1 月 21 日]

その他予約対応 、 金曜 13～18 時リメディアル国語 中村先生待機対応 "

内容：" 「古典Ⅱ」(中国) 模擬授業 単語テスト

「日本語表現演習Ⅱ」(敬語テスト) (『1 分間自己 PR』スピーチ)

「大学基礎演習Ⅱ」(漢字テスト)(『ブックトーク』スピーチ) (四天王寺ツアー)

「日本文学論Ⅱ」 百人一首 解説

テスト対策

待機日時：9/25,26 ピアサポート履修相談 SA 待機

9/27～1/21 月曜～金曜 昼休み 12：30～13：00

1/15～21 定期試験前 SA 待機勉強会(月～金昼休み、金曜 3 限 SA 待機)

ⅱ）英語リメディアル教員による学習支援

・ 経営学部 海外インターン事前研修 10/17~(木 4 限)

以上

第７章　ＳＤ活動の取り組み

1. 事務局全体研修会の実施について

［趣　旨］　令和２年６月の「パワーハラスメント防止法」の施行をひかえ、“何がハラスメントにあたるのか”、パワハラに陥らない判断・行動ができるように理解を深めるため

［日　程］　２月 12 日（水）14：00〜16：00

［対　象］　事務職員全員 90 名（教育職員２名を含む）

［内　容］　金子雅臣先生（一般社団法人職場のハラスメント研究所代表理事）を招聘し、『パワーハラスメント最新事情』－なぜ起きる、どう対処する－の講演。何がパワハラなのかを明らかにする中で、管理監督者の責任、私たちの心構え、パワハラ解決手法等を説明し理解を促した。

［総　括］　豊富で具体的な最新事例から、ハラスメントの全体像や核心部分を理解することができた。特に、パワハラに陥らない判断ポイントは、日頃の活動の中での指針となった。

四天王寺大学・四天王寺大学大学院・四天王寺大学短期大学部
ファカルティ・ディベロップメント委員会規程

第１条　この規程は、四天王寺大学、四天王寺大学大学院および四天王寺大学短期大学部（以下「本学」という。）ファカルティ・ディベロップメントの企画立案事項の審議・推進を図ることを目的として、ファカルティ・ディベロップメント委員会（以下「委員会」という。）を設ける。

第２条　委員会は、第１条の目的を達成するために、次の事項について企画立案し、ＦＤ活動の推進にあたる。

（１）授業内容、方法および、評価に関する事項

（２）授業の改善に関する事項

（３）その他、ＦＤの目的達成のために必要な事項

第３条　委員会の委員長を教務部長とし、他の委員を次のように構成する。

（１）教務副部長（委員長を補佐し、委員長に事故ある場合は、その業務を代行する）

（２）学科長が学科・専攻所属の専任教職員就業規則に規定された教育職員、特別任用教員および有期・無期職員就業規則に規定された特別任用教員と協議の上、選任した委員

（３）教務課長

（４）その他必要に応じて委員長が任命する委員

第４条　委員は、学部学科等の代表として委員会に参画し、全学的見地ならびに学部学科等の特性に応じて、委員会で審議された結果を学部教授会で報告する。また、必要に応じて学部の意見を集約したものを委員会で報告・審議する。

第５条　委員の任期は１年とする。ただし再任を妨げない。

第６条　委員会は委員長がこれを招集して、その議長となる。

第７条　委員長が必要と認めた場合は、委員以外の本学教職員に委員会への出席を求め、その意見を聴くことができる。

第８条　この規程の事務は、教務部が所管する。

附　則

１　「学生アンケート委員会規程」は平成１８年４月１日から施行する。

２　「学生アンケート委員会規程」は平成１９年３月３１日をもって廃止し、「ファカルティ・ディベロップメント委員会規程」を平成１９年４月１日より施行する。

３　この規程は、平成２０年４月１日から一部改正し施行する。

４　この規程は、平成２２年４月１日から一部改正し施行する。

５　この規程は、平成２５年４月１日から一部改正し施行する。

６　この規程は、平成２７年４月１日から一部改正し施行する。

７　この規程は、平成３０年４月１日から一部改正し施行する。

８　この規程は、平成３１年４月１日から一部改正し施行する。

スタッフ・ディベロップメント委員会規程

（目　的）
第 1 条　この規程は、四天王寺大学大学院、四天王寺大学および四天王寺大学短期大学部職員としての資質の向上を図り、もって大学経営および大学改革を推進することを目的として設置されるスタッフ・ディベロップメント（以下「ＳＤ」という。）委員会（以下「委員会」という。）の運営等に関し必要な事項を定めるものとする。
（組　織）
第 2 条　委員会は、次に掲げる者をもって組織する。
（１）事務局長
（２）総務課長
（３）人事課長
（４）教務課長
（５）就職課長
（６）学生支援課長
（７）その他事務局長が必要と認める者
２　副学長は、必要に応じてＳＤ委員会に出席する。
（委員の委嘱）
第 3 条　前条に定める委員は事務局長が任命する。
（委員長）
第 4 条　委員長は、事務局長がこれにあたる。
２　委員長は、委員会の会議を召集し、その議長となる。
３　委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名する委員がその職務を代理する。
（委員の任期）
第 5 条　委員の任期は１年とする。ただし、再任を妨げない。
（審議事項）
第 6 条　委員会は、次に掲げる事項について審議する。
（１）ＳＤの企画立案に関する事項
（２）ＳＤの推進計画に関すること
（３）ＳＤの実施に関すること
（４）その他ＳＤ推進に必要な事項
（委員以外の出席）
第 7 条　委員長が必要と認めた場合は、委員以外の者の委員会出席を求め、その意見を聞くことができる。
（所掌事務）
第 8 条　この規程に関する事務は、人事課が所管する。

附　則
この規程は、平成２７年４月１日から施行する。

令和元年度
四天王寺大学ＦＳＤ報告書

編集・発行　四天王寺大学
ファカルティ・ディベロップメント（ＦＤ）委員会
スタッフ・ディベロップメント委員会
住　所　大阪府羽曳野市学園前３丁目２－１
ＴＥＬ　０７２－９５６－９９５２
ＦＡＸ　０７２－９５６－３８９１
E-mail　kyomu@shitennoji.ac.jp